間海外に遊學し先進文明諸國の化學工業を研究し、我が國の化學工業界に貢獻する所多し。

嚴父は關東酸曹株式會社の柱石たる石川卯一郎氏にして大正八年長逝さるゝと共に氏は家督を相續し而して關東酸曹株式會社に入つて嚴父の位置を承け繼ぐ可き場合となり大正九年一月、帝大助教授の職を辭して一轉實業界に入り、爾來同社の支配人として社運の發展に努力す、龜に關東酸曹株式會社は、大日本人造肥料株式會社と合併して事業を一層擴張するや、氏は同社の取締役兼工務部長に擧げられ多年專攻の應用化學、製藥工業方面の才能を注ぎ、王子工場は益々面目を一新し其製品たる工業藥品、人造肥料其の他の最新工藝資料の產額は倍々增加せり、尙ほ氏は現に日本硫肥株式會社の常務取締役、化學鹽業株式會社の專務取締役、及び日本硫黃、臺灣肥料、高山耕山、硫酸販賣、化學陶器の各株式會社取締役に擧げられ、又關西硫酸販賣株式會社監査役等諸會社の重役として實業界の重鎭たり。

所得調査委員　石井孫治郎氏

（王子町豐島二三六二番地　電話二〇二番）

北豐島郡會議長、王子町長等に歷任し功成り名遂け積善積德の士たる石井孫治郎氏は慶應三年八月十五日を以て王子町豐島の素封家石井家に生る。明治七年四月南足立郡西新井小學校第十番分校に入り、同十一年三月卒業、進で鴻儒平田氏に就て國漢學を修む。同十八年頃より家業の醬油釀造の業に從ふ。大正二年王子町會議員となり、翌三年五月營業稅調査委員に擧げられ、翌四年九月北豐島郡會議員に當選、更に郡會議長に推さる、同九年六月王子町長に當選大に町政諸般の整理改革に當り、多年の懸案たりし道路の擴張、警察署廳舍の新築、郵便局舍の新興、堀內小學校の獨立增築、全町各小學校の增改築、敎育後援部の設置、義勇消防の新設、靑年團の組織等スピード的に解決し、治績の跡絕大なるものあり、此間所得調査委員として引續き當選して營業者所得者の爲に健鬪せり。殊に昭和五年の改選に際しては僅か一日半の選擧戰線に於て見事當選せるを見ても氏の人望偉大なるを思ふ可く、多年の功績に對しては官公廳を始め各公共團體より褒賞感狀等積で山をなすと、又以て公人の龜鑑とすべき德操の人と謂ふべし。

尾久町家屋稅調査員　石井彌吉氏

（尾久町上尾久一四二五番地　電話下谷三〇六七番）

土木建築界の巨擘たる石井彌吉氏は、明治十八年五月を以て上尾久の現住地に生る。夙に父君の業たる土木建築の業を繼承し今日の隆々たる業運を築く。江戸川上水町村組合、尾久花藏院、各地浴場等、都下各方面に手廣く活躍して業界一方の驍將たるの聲望を博す。氏は又居町尾久の自治公共に勞を惜まず、大正六年少壯既に輿望を以て村會議員に當選し、引續き町會議員に擧げらるゝこと三期に及び、昭和五年家屋稅調査委員選擧に際しては、其專門的識見と才幹とに信賴されて其調査委員に擧げられ貢獻する所多大なり。此間氏が土地の開發に、土木事業の獻策遂行に寄與する所は實に枚擧に遑なし。性來沈勇剛毅にして而かも身を持する謹嚴、斯界に儀表として仰がるゝ人材なり。

前三河島町會議員　石井友次郎氏

（三河島町三河島四〇七番地）

父子相繼ぎ社會公共の爲に犧牲的奉仕をなし、三河島町の郡會化に與て功勞偉大なる石井友次郎氏は明治六年十一月十日を以て父君紋次郎氏の長男に生る、父君は町村制施行當時より村會議員、學務委員、衛生委員等となり、又名譽助役として令名を馳す。友次郎氏亦資性溫厚謙讓、居住者の福祉を圖る爲には率先私財を投じて惜まず、鋭意公共自治に盡瘁して倦むことを知らず、大正六年五月興望を擔ふて町會議員に擧げられ爾來選擧毎に再選せられて四期の久しきに亘り、各種の常設委員を兼ね、社會公共の爲に東奔西走して寧日なく、有德積善の人望家たり。昭和四年には實弟文三郎氏を町議に起たしめ、氏は今や令息諸氏の大成に專心し餘生を擧げて公共奉仕に竭しつゝあり。令息亦氏の心血を享け一般より其將來を囑望せらる。

王子町會議員　石井幸三郎氏

（王子町堀の內七九番地）

王子電車梶原停留所附近に精白米並に雜貨店を經營し、多年土地開發の爲に努力貢獻しつゝある石井幸三郎氏は、明治卅年一月一日を以て王子町堀の內九三番地の舊家たる平次郎氏の三男として生る。氏は幼少既に沈着にして儕輩を凌ぎ、俠骨稜々の靑年たりき。夙くより商業に志し、曾ては質業をも營むことあり、大正六年徵兵として麻布第三聯隊に入營し、同八年除隊となる。大正十年の頃までは氏の現住地たる梶原停留所附近は、人家僅かに八戶の寥々たる土地なりしが、分家して此に移り、爾來熱心に土地開發に腐心し、大正十一年には梶原町會を組織して其會長に擧げられ道路交通の完備、衛生警備の充實に努力せる結果、今や同方面は千五百餘戶の來住者を有するに至り、界隈の繁華街を招來するの元動者たり。昭和三年には衆望を負ふて王子町會議員に擧げられ、火防委員、王子町東京府兩方面委員等の要職を兼ねて不斷の努力を捧げつゝあり。令夫人との間に一男を儲け、頗る圓滿の家庭なり。

石井樂局主東京藥學士　石井小兵衞氏

（王子町榎町六一番地　電話王子四五七番）

驥毛は千里の外に驥足を伸べ英才は自ら囊裡の錐の如しと。頭角を儕輩に拔き有爲の材と認められ年齡而立ならざるに海外大病院の藥劑長となり、更に歸來家業を創めては隆々たる家運を築ける人に吾が石井小兵衞氏あり。同氏は東京府南足立郡花畑村嘉兵衞新田に明治二十六年一月十四日を以て生る。花畑小學校を出で、東京中學を經て直に東京藥學專門學校に進み、優等を以て卒業するや更に藥學の蘊奧を究めんとし、東京帝國大學病院に於て研鑽を重ねつゝある時藥學界の泰斗藥學博士丹波敬三敎授並に出身校の先輩より熱誠なる推擧を受け、前外務大臣內田康哉氏を會長とせる同仁會支那漢口病院の藥劑長に擧げらる。是れ氏が僅に二十八歲の時なりき。卽ち氏は新設中の同病院完成に努力し、其準備のみにても一ヶ年有半

を要し諸外國に比し些の遜色なき理想的大藥局の完成をなす。爾來昭和二年父君の計に接する迄孜々營々として奮勵し、就中居留民の爲には卒先之れが保健衛生に努力し、氏一流の果斷と才腕とを以て衛生行政の是正に盡さる。其去るに臨み居留民より骨肉の如く惜別されたりと。而して昭和四年現地に堂々たる藥局を開き一般の健康相談となり、永き經驗と深き研究とを以て調劑に當り、懇切叮嚀を以て顧客に接せらるゝより店頭客を以て埋まるの盛況にあり。氏は又非常なる雄辯家にして學校時代雄辯會の牛耳を執り、各地に舌戰を試み常に人氣を博せり。たゞ子夫人との間に喜一郎、又郎の二令息あり琴瑟相和し家庭頗る圓滿なり。

石井自動車商會主　石井信德氏

（王子町王子四六一番地　電話王子三六四番）

人口八萬の大工場地帶たる王子町に於て自動車客車用の開祖として知らるゝ石井信德氏は明治廿一年十月三十日を以て王子町の元老石井孫治郎氏の分家啓次郎氏の嫡男として豐島二五七七番地に生る。同家は代々薪炭商として氏の實姉にて七代に亘り經營せるより氏も野砲兵第十六聯隊除隊後も之れに從事せしが、今より十八年前廢業し現在の自動車業に志し、實地に研究體驗して震災直後石井自動車商會を起し客用車を開始し今日に至る。開業頭初は七臺なりしも今は高級車十數臺を常備し、專ら顧客本位を以て交通文化に奉仕するより信用極めて深く、町内官公署は勿論會社工場其他王子瀧野川兩町知名の士より乗用の殺到する現況たり。氏は資性極めて圓滿酒脫、人望高く現に東京自動車組合幹事、王子自動車組合幹事等に擧げられ、常に旅行を唯一の趣味とす。

文武館長王子町會議員　石山源助氏

（王子町下十條一八四三番地　電話王子一〇二〇番）

石山氏は明治十九年王子町下十條の現在地に生る。少時より武道を好み十七歳より二十四歳まで板橋町修道館に於て古流柔道を修練して免許皆傳を受く、嘉納治五郎氏の講道館に於ては三段の免許を授けらる、明治四十一年氏の劍道師範たる故木村少佐の經營せる文武館を承繼し柔道教授に從事して今日に至る、氏が技倆は優に講道館五段を凌駕するの定評あり、其の養成する門弟前後二千名以上に及べり。又氏が接骨施術に至つては解剖組織病理生理の諸學と相俟つて多年の熟練は如何なる重症も全治せしむる手腕を有す、尙ほ氏の仁俠義氣は常なるも彼の大震災當時の如きは堀船豐川の兩小學校に出張所を設け多數の門生と共に負傷者を救療す、其の費す所の繃帶用木綿は一日二十反以上に及べり、其の獻身的義擧に對し、警視總監は表彰狀を贈つて激賞せり。氏が一たび王子町會議員となるや、土道の本領に則り能く公人の職責を盡し早くも重鎭を以て目さるゝに至り、常議委員、豐島病院町村組合會議員、火防委員の要職に擧げらるゝの外王子信用組合理事を兼ぬる等實に同町の重要人物である。又王子町青年團長として千數百名の指導となり、模範的青年團と稱揚さるゝに至る。更に擧げられて北豐島郡聯合青年團の設立に盡して頭初の副團長となり現在は團長として體育奬勵の上に多大の貢獻をなせり。

瀧野川正交會長　石山太郎吉氏

（瀧野川町瀧野川一三〇三番地）

如何なる選擧にも一方の闘士となり、自ら推擧せる候補者は必ず當選せしむると云ふ、選擧界の生字引を以て聞ゆる石山太郎吉氏は、明治廿三年を以て現住地に生る。夙に公共方面に能く働らき能く勵み、大正十年七月には、宮本正交會の創立に卒先盡力して第二期會長に擧けられ現に第九期會長たり。大正十年五月町消防委員に擧けられ震災當時大活躍をなし、先に第二小學校保護者會役員、現に第六小學校のために盡力しつゝあり。氏は曩に正交會長たりし名倉安子太郎氏を瀧野川町名譽助役に推擧して大に斡旋努力し、又氏を町長に昇進するに與て力あり。而も自らは更に功名射利に走らず其士節的氣魄推服すべきなり。

三河島峡田第二小學校長　石山謙一郎氏

（石神井村下石神井一一二八番地）

教育家として府市の各小學校訓導に歷任し、次代國民の育成に當り、而かも天才的美術の技能に秀でたる人として斯界に知られ、今や小學校長たる榮職に在る人に吾が石山謙一郎氏あり。

氏は茨城縣の人、明治二十四年四月十四日を以て稻敷郡大宮村大字大德三六八番地に生る。夙に育英家たらんと志し大正二年三月三十日豐島師範學校本科第一部を卒業し直ちに東京市立櫟川尋常高等小學校訓導に任ぜられ、勤續多年、大正十一年五月十二日市立眞砂尋常小學校訓導に轉じ、同年九月十二日茨城縣立商業學校教諭となり美術講座を擔任す。同十三年十月二日再び上京し東京市金富尋常小學校訓導となり、同十五年四月二十八日小石川窯司ヶ谷尋常小學校に轉じ、更に昭和二年一月二十二日には郡部に進出、王子町豐川尋常小學校訓導に轉じ、同四年三月五日現任の三河島町立峡田第三尋常小學校長に拔擢せられて今日に至り熱心なる教育家として令名高し。

巣鴨食品市場頭取　石山彌吉氏

（瀧野川町瀧野川二〇〇一番地　電話板橋一一〇〇三番）

食品市場創設の恩人として民間經濟の調節に功勞多き石山彌吉氏は、明治十六年八月六日を以て先代彌吉氏の長男として現住地に生る。石山家は土地の舊門にして當主は其七代目に當り前名を六三郎と稱へ、大正十三年家督相續と共に彌吉を襲名せるなり。農業を以て家業とせしが今より約三十年前青果、食料品、荒物等の販賣を始め今日に及ぶ。氏は同町の芳林學校を卒業し、巣鴨の速成學校等に學び長じて家業に勵みて信望厚く今や業界一方の重鎭たり。曩に北豐島、豐多摩、南足立三郡より成る市場聯合會組織せられんとするや、氏は其創立委員に推され、又巣鴨食品市場の創立に奔走努力し其頭取の要職に擧げられ、今日の隆運を開拓す。此他氏は町内自治の進展に努め大成會の創立に盡瘁して會長に推され大に公共に奉仕するの他、常に神社佛閣崇仰に心を致し積善の人として知らる。千代子夫人との間に三男五女の子福者なり。

石橋政太郎氏

日本畜産工業株式會社取締役

（南千住町一丁目三六番地　電話淺草八九五番八九六番）

石橋氏は千葉縣の産、明治十六年を以て生る。長ずるや將來文化の發達と共に畜産事業の有望なるを看取して、南千住町に居を卜し同町一丁目三六番地に於て豚肉問屋を經營し爾來拮据奮鬪遂に供給能力に於て都下第一の地歩を占むるに至る、其の町納稅額が年額巨萬たるに見ても其隆昌なるを知る可し。

大正十四年五月の町會議員に擧られ衞生委員を兼ね、三ノ輪方面の衞生土木事業は殆んど之れを一身に負ひ其改善に力を致せり。尙ほ町内自治のために獻身努力し久しく三ノ輪町會の會長として貢獻する所が頗る多い。又實業方面に於ては日本畜産工業株式會社取締役を始め、日本家畜市場株式會社取締役、大五運送株式會社々長、寺島屠場株式會社取締役として斯界に聲名を馳せ、又商工省の囑託を以て中央卸賣市場肉取引調査委員たるの重任を荷ひ專ら斯業の改善發達の爲めに努力されてゐる。而も氏の手を染むる事業は一として大成せぬものなきは大聖日蓮の大人格と義民宗吾の義氣とを兼ねたる、一大信念を以て勇往邁進した結果なりと云ふ。

石神與八氏

（王子町船方一七一番地　電話王子一四番）

清和源氏の後裔として由緒正しき名門たる石神與八氏は、明治六年二月を以て現住地に生る。石神家は、宗祖遠く清和天皇に出で、貞能親王以來六孫王經基、滿仲、賴信、顯清、仲宗を經て義國彦太郎の嗣子國俊彦二郎、文明三年に船方莊司石神土佐守信秀の養子となり、諱を改めて石神左衞門重國と稱し一子を擧ぐ、卽ち石神因幡守重俊なり其れより藏人、左衞門信義、久兵衞信義を經て、勘兵衞、久兵衞に至り代々連綿として家督を承け、船方の鄕主を以て任ぜり當主は先代與八氏の長男にして幼少堀之内の齋藤學校に學び、祖業の農事に從ひ益々家産を興し石神姓宗家の磐石を築く、氏は養に町土木委員、堀船小學校後援會常務理事、村社船方神社氏子總代、延命寺檀家總代等に擧げられ、更に幾多公共事業に貢獻して功勞多く名門積德の當主として推重敬仰せらる。

石神萬次郎氏

前王子町名譽助役

（王子町船方一三三番地）

遠祖を清和天皇に戴き、連綿として今日に及ぶ名家石神家の分門、當主石神萬次郎氏は明治四年二月廿二日を以て船方の邸に生る。同家は寛永五年宗家石神與八氏の家より安左衞門氏の分家に始まり、寛保元年二代目久平氏より、明和元年三代惣左衞門氏、寛政元年四代安左衞門氏、文政八年五代惣左衞門氏を經て氏の嚴父惣左衞門氏に及ぶ、嚴父は前名を平治郎と呼び農事の傍ら質業を營み、老中松平周防守の御用達を勤め、明治初年には有栖川宮家御用達を命ぜられし家柄なり、又安政二年より維新迄十四年間村年寄役を勤め、氏子總代、檀家總代に擧げられ、明治元年より同六年十一月まで組頭役、同月より第九大區船方村副戸長、同七年三月等外四等に准ぜられ、同十年三月第四中學區取締兼務、同廿二年村會議員となり同四十四年三月七日まで町議として公職に在ること實に五十年間の功勞者たり。當主は齊藤學校に學びたる健實の士にして大正二年王子町會議員に擧げられ、同十三年三月まで三期間共職に在りし他、學務委員土木委員を兼ね、同九年七月名譽助役に推され同十二年七月町長代理となり、大震災當時石井孫次郎、高木靜馬、江口義一氏等三代の町長を佐けて功積偉大なるものあり、同十四年十二月感謝狀に銀盃及び金一千圓を贈られて表彰さる。現に所得調査補欽員たるの他町學務委員、東京府方面委員、船方町會々長たり。

石塚彌兵衞氏

尾久幼稚園主

（尾久町上尾久一三四三番地）

幼年子女の教養擁護を創設し尾久町の兒童教育に貢獻しつゝある石塚彌兵衞氏は明治十七年十二月十四日を以て同町の素封たる石塚家に生る。祖父新之助氏は町村制施行以來四期に亘り村會議員に擧げられ、此間名譽助役に推さるゝこと一期、克く村治に盡して新興尾久の基礎を拓かる。令孫たる氏も亦公共の念厚く仁俠に富み社會の爲には私財を投じて惜まず。義に尾久幼稚園を開設して子女育英のために熱心傾倒し、優秀なる保姆を聘して百名に垂んとする園兒の教養に當らしめ、常に良好なる成積を收めて父兄の信賴頗る厚きものあり。又農村時代には村農會委員に擧げられ農事の改良に盡し、在鄕軍人分會組織に奔走して第一次分會長に擧げられ、又大正十年以來學務委員に推されて今日に及ぶ。

石塚榮一氏

三河島町會議長

（三河島町三河島二八四五番地）

石塚氏は明治廿四年六月廿六日を以て、愛知縣西尾町に嚴父幸次郎氏の長男に生る。祖父金之亟氏は西尾城主松平和泉守に任へ藩中に知られし文武兩道の達人にして、嚴父亦維新前まで藩士として令名あり、後商業を營むに至る。氏は十三歲の時上京、淺草區光月町に酒類商を營む叔父林口重太氏に身を寄せ、商事に從ふこと數年、後叔父の局長たりし淺草區新谷町郵便局に局長代理たること約三年、廿一歲獨立して下谷區龍泉寺町に酒舖を開き、大正八年六月現地に移轉と共に多數の小住宅を建設し下級生活者救濟の目的を以て至廉の賃貸料を以て提供し附近一帶を今日の如き殷賑街となすに至る。昭和四年五月輿望を擔ふて町會議員に當選し土木委員を兼ね、町會一方の重鎭として推重され、同五年末の町會に於ては町會議長の榮職に擧げらるゝに至る。氏は多趣味にして殊に讀書修養に耽り、淸元、端唄、將棋にも湛能なりと、光子夫人との間に一男一女を儲く。

伊藤保雄氏

西ヶ原互親會々計

（瀧野川町西ヶ原一〇三一番地　電話王子九七七番）

瀧野川町將來の柱石の材を以て囑目せらるゝ伊藤保雄氏は故保次郎氏の次男に明治廿九年三月廿日を以て現住地に生る。嚴父保次郎氏は瀧野川町會議員たること實に十有八年、西ヶ原互親會第二期會長等として公共自治に功積多き人なりき。保雄氏は鄕黌を卒へて聖

學院中學に學び大正三年同校を卒業と同時に明治大學商科に進み、同九年優秀の學積を以て卒業の商學士たり。氏は義に互親會副會長、村社七社神社氏子總代等に擧げられ現に西ケ原互親會々計の重職に在り。氏は隱忍滿を持して放たざるも其識見と才能とは町民の等しく仰ぐ所、必ずや近く嚴父の衣鉢を繼で勇躍せずんば措かざる可し。家庭には賢妻米子刀自、令閨德子夫人との間に二令孃あり。

伊藤豐吉氏

（三河島町三河島三二二九番地）

武勳赫々帝國の模範軍人たる名譽の人、伊藤豐吉氏は明治十二年二月を以て三河島町の舊門伊藤家に生る。嚴父を伊之助氏と稱し農を以て業とす。氏は其長男にして明治三十二年十二月兵に徵され第七師團第廿六聯隊第一大隊特業擔荷卒たり同三十五年十月除隊後幾許もなく日露の風雲急を告げ同三十七年八月召集せられ、第三軍中村少將指揮の下に清國青泥窪に上陸、松樹山、二〇三高地、赤坂山、楊樹溝方面の大激戰に參加して殊功を現はし、勳八等功七級に叙せられ金鵄勳章を授けらる。氏は明治三十九年三月廿六日歸鄉まで軍隊生活前後六ヶ年に及び此間克く義勇奉公の至誠を致し、歸鄉後の氏は專ら社會公共の爲に盡瘁し、在鄉軍人分會理事、町內團體宮地會々長、三河島町衛生委員等に歷任し、貢獻する所頗る多大なる人格者たり。

輓近地主對借地人間の紛議漸く多からんとする時、氏は良地主模範地主と仰がれ曾て不評を耳にせず、以て氏の人格德望を窺ふべし。

三河島町消防組頭

伊藤富五郎氏

（三河島町三河島九四八番地）

伊藤氏は故谷藏氏の長男として明治五年現住地に生る。家は農業並に造園を業とし氏が十九歲の時嚴父病沒と共に其遺業を繼ぎ明治三十年頃より專ら造園の事のみを業とせるが其風韻雅致は市內外の大家名門に認められて頗る信用あり。

又氏が消防組員の第一步は、明治二十七年にて三河島村に消防組の創設されると同時に組員に加はり、爾來累進して大正十二年十二月には現職たる消防組頭に推され、實に三十五年間一日の如く其職に盡瘁せる功勞者なり。大正十四年三月東京府消防協會組頭會議に於て、同協會南千住署副支部長に推擧せられ、鋭意委員の待遇改善に努力し、一昨年八月三河島警察署新設と共に三河島署副支部長に擧げらる。尙大正十四年六月三河島町會の指名選擧に依て町警備委員に當選し、又義に俾睦會設立さるゝや副會長となり、現會長其の他法界寺檀家總代の要職に推さる、是等幾多の公職を擔ひ獻身努力を捧ぐ、而も其の趣味は茶道にあつて悠々たる心境は以て人格を語るに足る。

三河島町前助役

伊藤三吉氏

（三河島町三河島三四六番地）

大正二年以來町民の選良として町政に參與すること四期の長きに亘り、更に名譽助役として令名高き伊藤三吉氏は明治二年二月一日を以て三河島の舊門伊藤三五郎氏の長男に生る。氏は十二歲の頃より父君の業とせし書畫筆の製造に從ひ、廿九歲の春には淺草區永久町に文房具教科書の店舗を開きしが七ヶ年の後、自邸に歸り專ら書畫揮毫用高等毛筆の製造に從ひ多數の徒弟を指揮し其製品たる毛筆は、專門大家の間に好評噴々として著はれ氏の名は斯界の名匠權威を以て迎へらる。氏は國粹毛筆の勸奬に努むる外極めて社會公共の念厚く、道路交通の整備、衛生警備の完成に努力し、其任俠義氣は町民の崇仰となり十有五年間町議並に名譽助役に擧げられ、町政上に貢獻する所多大なりしが昨秋十一月滿期退職せり。氏は資性溫厚にして而かも意思極めて固く所信を遂行せずんば已まざるの慨を有す。居常自然の風物を愛し商業の餘暇植木盆栽を趣味とす、以て氏の雅懷と人格とを知る可し。

東京齒科醫學士

伊藤俊夫氏

（尾久町上尾久二三三番地）

伊藤氏は長野縣の人、明治二十八年諏訪郡宮川村に生る、家は土地の素封にして嚴父善之助氏は醫を以て名あり又祖父藤助氏は勤王愛國を以て名あり。其家に生れたる氏は大正四年長野縣立諏訪中學校を卒業し齒科醫を志して東上同十年東京齒科醫學專門學校を優秀の成績を以て卒業し實地研究數年の後同十三年現住所に齒科醫院を開業し今日に至る、其の熱心と練達の技とは最も世人の賞嘆する所なり、加ふるに氏は隱れたる政治家にして一朝演壇に立つや侃諤の辯人をして襟を正さしむるの慨あり。

前王子町町會議員

伊藤光次郎氏

（王子町王子五〇五番地　電話王子五〇五番）

資性剛直、實行主義の人たる伊藤光次郎氏は、明治八年三月廿三日を以て生れ、夙に王子町の銀座通りたる梶町王電軌道に直面せる所に白米店『伊勢甚』の店舗を經營し、商勢全町に鳴るの盛況を極む。自治公共に熱心なる氏は大正六年五月衆望を擔ふて王子町會議員に擧げられ、同十三年には再び町議に當選して警備委員を兼ね、王子町消防組第四部長、王子小學校後援會委員、梶町總代、衞生組合委員、王子町教育會委員等の公職を經て現に王子町方面員たり又王子町信用組合監事、東京白米商同業組合評議員並に同王子町部長等をも勤め堅實なる實業家として町民の信頼頗る厚し。

日暮里町會議員

伊藤菊次郎氏

（日暮里町旭町一ノ八七番地）

慨世憂國、志士の氣節を以て居常し、曾ては衆議院議員候補に立ち、府議戰に出馬し、腐敗惰落せる政界革新の急先鋒として健鬪せる俠骨に吾が伊藤菊次郎氏存す。

氏は土木建築請負を業とし常に自治の發達は憲政進步の階梯なりとし、公共の事に奔走し又青年の士氣を皷舞して自治精神の振作に勉むる等、其活躍は町民の等しく認むる所なりき。昭和四年五月同業有志並に旭町會旭青年團有志より推擧せられて町議に當選し、現

に衛生委員を兼ぬ。

氏は日暮里町の大久保彦左衛門と稱せられ、性來氣骨稜々義俠に富み、弱きを扶け强きを挫く任俠を以て鳴る。曾て代議士候補に立ち、鹿を中原に爭はんとする際俄然眼疾を患ひ已むなく斷念したることあり、又府議戰に立候補する等其意氣の壯と津涯なき磊落不羈の性格は以て當代青年の學ぶべきもの多しと爲す。

前尾久町會議員　**伊奈葉安五郎氏**

（尾久町下尾久五四三番地）

尾久町今日の發展殷賑を招徠せしめたる先覺の偉勳者、伊奈葉安五郎氏は慶應元年三月を以て尾久町鈴木勝五郎氏の次男に生る。明治十八年伊奈葉家に入つて養嗣子となり其姓を襲ふ、氏は家業たる農事に從ふの傍ら不斷の努力を土地の開發に致し一寒農村より新興尾久の建設に努め、明治三十七年五月三十一日衆望を負ふて尾久村會議員に當選せる以來、大正十四年五月まで引續き町會議員の職に在りしと共に幾多の常設委員をも兼ね、町治に獻策盡瘁すること實に二十有餘年、功績實に著大、今や靜かに閑日月を送りつゝあるも、猶ほ公共の事を忘れず、常に公正無私自治の完成に努め、又尾久信用組合監事として克く庶民金融機關の實績を擧げし人なり。

瀧野川濟美會長　**岩田金藏氏**

（瀧野川町瀧野川一八三六番地）

岩田金藏氏は明治八年八月廿五日を以て本郡志村の豪農早川彌右衛門氏の三男に生る。幼少志村小學校を出でゝ生家の業たる農事に精勵すること數年、廿一歳にして迎へられて、瀧野川町瀧野川の種苗問屋岩田太七氏の養嗣子となる。氏は資性極めて溫良恭謙、實業に熱心にして需要家の信賴厚く、種苗の改良農界の發達に貢獻せる所多大なり。又大正十年より引續き瀧野川町土木委員に擧げられて道路下水の完備に努め、現に町內團體たる濟美會々長に推擧せられて公共に盡瘁し、積善の家として一門益々繁榮せり。

瀧野川大成會々長　**岩田嘉七氏**

（瀧野川町瀧野川二〇〇一番地）

志操堅忍、一度び信ずれば終始一貫して節義に殉ずる高風欽慕の紳商に吾が岩田嘉七氏を有す。氏は明治十一年六月瀧野川町瀧野川一九九五番地與四郎氏の長男に生る。

岩田家は代々農を以て業とせし素封の家にして、氏も幼時附近に在りし當時の小學校芳林學校に入り更に巢鴨速成學校に學び祖業の補佐をなせしが、後父君の內外肥料商を創業するや氏は之を繼承す、時に氏の二十五歳の時なりき。爾來本郡西部農村に販路を擴張し其質實と懇切なる取引に信用年と共に加はり堅實なる基礎を築きて今日の隆盛を招くに至れるなり。又町內自治の爲には公德會創立のために全幅の努力を致して役員に擧げられ、後大成會の創立に斡旋して其會長に選擧せられ、瀧野川聯合會幹事を兼ぬる外、學事に熱心にして第二小學校保護者會役員、前町學務委員等を勤め八幡神社氏子總代としては敬神の念篤く、家庭にはさわ子夫人との間に二男一女あり長男金次郎氏は慶應義塾出身の英才なり。

茲に特筆すべきは氏が守操堅固の一例にして、氏は淺賀元代議士の爲に終始一貫選擧毎に多大の犧牲を拂ひ、淺賀氏の純理論と清淨無垢なる點に信據して聲援せる高潔の眞情は識者の常に敬服する所なり。

醬油醸造販賣業　**岩田友次郎氏**

（瀧野川町瀧野川三九二番地　電話王子一三〇四番）

瀧野川町唯一の醬油醸造家として知らるゝ岩田家は、土地の素封にして又代々村治に貢獻せる名門たり。當主は王子町上十條の富門舊家たる高木靜馬氏の令弟にして、明治三十二年一月廿七日を以て上十條一二四五の邸に生れ、荒川小學校より早稻田中學に進み、更に大正十二年明治大學商科を卒業し同年一月先代友次郎氏の養嗣子に迎へらる。氏は前名を康範と呼び先代の長逝と共に家督を相續襲名せるなり。義祖父喜右衛門氏は明治二十四年三月瀧野川村助役に擧げられ、同三十四年五月には村會議員に當選して村治に盡せる功勞者にして、先代友次郎氏は明治八年十一月に生れ、熱心なる愛町家にして德望高く同四十三年五月村會議に擧げられ、大正四年九月より同六年九月まで町收入役に就任して功績あり、同十年五月町會議員に再選し、同十二年六月常務委員の要職を兼ね文化の瀧野川建設に寄與する所多大なりき。當主亦公共事に盡され現に大原睦會幹事、第三小學校保護者會評議員に擧げらる。家庭は長子夫人との間に喜美世、辰三、ひろ子の三子を擧ぐ。春秋に富むの氏は一般より其將來を期待せられつゝあり。

長崎町會議員　**岩崎萬吉氏**

（長崎町五郎窪四二〇五番地　電話大塚一四四七番）

長崎町會議員たること二十有五年、土地の素封舊門として聲望府下に洽ねき岩崎萬吉氏は慶應三年十一月を以て故又吉氏の次男に生れ、令兄の早逝により家督を相續す。嚴父又吉氏の代に至り安政年間より農事の傍ら肥料の販賣を始め『福本屋』と稱せしが、氏は之を繼承し『岩崎商店』と改稱し營業種目を擴張し同方面農家の便益を圖ること多大なりき、嚴父は夙に郡會議員、村會議員等に擧げられて功績著しく、氏も亦町會議員、學務委員たること既に二十有餘年現に町會議員、土木委員に在つて貢獻到らざる所なし。襲には名譽助役たること一期、此間郡會議員に當選せるも助役と兼任を許されざるより之を辭退せり。尙ほ町內會互親會々長、赤十字社有功社員、水難救濟會有功會員に擧げられ、常に社會公共の爲に率先盡瘁し表彰せられたる事幾回なるを知らず。又實業方面には堅固たる信望を有し現に東京共立土地建物株式會社、共同商事株式會社取締役を兼ね保險會社代理店をも經營し優良の成績を收めつゝあり。家庭には竹子夫人との間に令息賢吉氏外二令孃あり。

長崎町會議員　**岩崎新太郎氏**

（長崎町五郎窪四一六二番地）

氏は長崎町の舊門にして素封たる三五郎氏の長男として明治十四

年八月廿四日を以て生る。同家は正德年間新左衛門氏に起り、當主は八代目にして由緒ある門流たり。氏は明治卅四年野砲兵第十三聯隊に入り、翌年上等兵に進み、同卅七年四月十一日露の役に第二軍に從ひて出征、同年十一月伍長に昇進、翌年九月軍曹に進出、此間九連城を初め遼陽奉天等の激戰に參加して殊勳あり、三十九年四月勳七等功七級に叙せられ金鵄勳章を授けらる。凱旋後在鄕軍人分會設立に盡力して分會長に擧げられ、現に同會顧問たる他、町會議員、警備委員、青年團、青年訓練所顧問、小學校保護者會理事、五郎窪町會長、郡聯合青年團評議員等を兼ね、又昭和四年五月全町會一致を以て名譽助役に推擧されたるが氏の健康之を許さず月餘にして辭せしは町民の等しく惜む處、名實共に町の重鎭にして敬仰さる。くめ子夫人に五男二女あり。長男保雄氏は俊秀の青年たり。

長崎町會議員　岩崎茂喜次郎氏

（長崎町五郎窪四一五八番地）

本郡に於ける製茶業の鼻祖として夙に聲價遠近に洽ねく、又公共の人として令名高き岩崎茂喜次郎氏は、明治十一年十一月十四日を以て先代熊次郎氏の長男に生る。同家は土地の名門小島家より發し先代熊次郎氏が岩崎家を繼ぎて一家を興せしに始まり。先代熊次郎氏は、製茶業に頗る精通し夙に製茶師として、各名家へ出入して之を傳授し、其品質改善に貢獻せる所多かりし功勞者なりき。氏も亦早くより斯業に精通すると共に町公共に努力し、大正十四年五月村會議員に擧げられ昭和四年再選の榮を擔ひ、土木委員を兼ね町內會

五郎窪町會副會長として奔走す。てい子夫人との間に三男二女を擧げ長男正治氏は日本大學、二男喜一氏は東洋商業、三男[illegible]氏は東北商業に在學中なり。

王子町會議員　岩崎直吉氏

（王子町王子一三二〇番地　電話王子五四〇番）

昭和三年三月二十七日執行の王子町普選第一次町會議員選擧に當り、徹底的理想選擧を標榜して同町榎町親睦會長豐田菊次郎氏を初め、江口多七、直井精三、坂本米吉氏等多數の有志に擁立せられ、理想候補として當選の榮冠を荷へる吾が岩崎直吉氏は、國學の大家にして又土木方面に造詣深き人材なり。

氏は中學校を卒業してより國學院大學に學び、一時は教壇の人として令名あり、後東京市土木局に職を奉じて其才能を認められ、勤續多年大に道路下水の實際問題を檢討し、土木事業に對する抱負經綸亦一家の見あり。郊外町村の如き發展地にありては、最も急務とする施設は教育及び土木事業にして、氏の如く此の兩方面に卓越せる識見と手腕ある人材を有する王子町は着々道路下水の大計劃成り町民一般の福利增進に邁進しつゝあり。氏は公共に熱心忠實にして曩に學務委員に擧げられ、王子尋常高等小學校同窓會長として多年母校の爲めに後援盡瘁す。今や町會議員に兼ぬるに土木委員を以てし、其多年の研鑽と經驗とを實際に應用し町政に貢獻する所多大なり。

聞く、王子町が最近唯一の文獻として世に誇る所の『王子町誌』編纂に當り氏の寄與亦多大にして一般の感謝する所なりと。

豐國電線製造所主　岩間惠氏

（瀧野川町田端一九九番地　電話小石川二七七一番）

一國の文化を啓發助長すべき電線事業界の權威者、岩間惠氏は茨城縣の人、明治十七年三月十五日を以て鄕里に生る。夙に電線製造の業を志し獨特の技と特異の才能とを以て斯業界に起ち、大正四年五月田端の現在所に豐國電線製造所を設けて獨力之れが經營に當る。其製品はゴム被覆線、アスベスト被覆線、電燈コード各種、裸撚銅線、軍用線、特種電線各種、並に飛行機、自動車用電線各種にして其販路は諸會社、電氣機具商を始め遠く支那南滿洲に及び、斯業者中にあつて異數なる聲價と信用を博す、氏今日の一大成功は實に氏の奮鬪努力の結晶と謂ふべし。公事奉仕の念篤き氏は田端榮町會の創立に盡瘁して會長に擧げられ現に同顧問たるの外、瀧野川町衛生委員として町民保健衛生に貢獻しつゝあり。

日暮里町會議員　岩間質郎氏

（日暮里町日暮里一五番地　電話下谷六四四七番）

資性豪宕不羈、而かも熱情鬼神を泣かしむるの慨ある大丈夫の士に吾が岩間質郎氏あり。

氏は明治二十二年五月十日茨城縣鹿島郡諏訪村、岩間惠氏の次弟に生れ夙に大志を懷いて出京、工業界に雄飛し、岩間電線製造所を經營して嶄然業界の重鎭となる。其製品の優秀堅實なると幾多の特

色を兼備する點に於て、聲價忽ち揚がり、今や年產額實に壹百萬圓を突破するの商勢を招徠せり。其販路の如きも東京電燈、東京市電の如き大量需用を顧客とし、全國各地の電燈電力會社に擴張せられ、實に旭日昇天の隆盛を見つゝあり。

昭和四年の町會議員選擧に同業有志の推擧に依り、町政革新を標榜して起ち當選し現に常議委員、下水道議員を兼ぬ。氏の政治的手腕の發揮は蓋し將來の事に屬すべく、町議の如きを以て滿足せざるや必せり。而かも氏は自治政に熱誠奔走し、家に在つては國家國益のため健鬪し動かざる實力と地歩とを建設しつゝあり。氏の抱負活志知るべきのみ。

瀧野川町家屋稅調査委員　岩井龜太郎氏

（瀧野川町上中里三六三番地）

昭和五年度より家屋稅調査委員制度は實施せられ、是れが選擧は同年四月擧行せらる。而して瀧野川町上中里より其候補者に推擧せられ、多數の得票を以て當選の榮を擔へる人を岩井龜太郎氏となす。

氏は明治十八年九月四日を以て東都日本橋に呱々の聲をあげたる生粹の江戸ッ兒たり。夙に建築業界に志を伸べて大成し今や市內專門の建築請負業者として信望厚く業界に覇をなす。瀧野川町には大震災前より來住し既に在住十有一年に及ぶ。資性頗る圓滿にして衆望あり、瀧野川第五小學校後援會幹事に擧げられ、又上中里町會第六部長を勤め、鎭守平塚神社世話人等に推されて克く公共に竭せるを以て、同上中里町會は一致を以て同氏を家調委員に推擧して當選するに至れるなり。山來家屋の賃貸價格調査の如きは、其建築樣式

用材、設計、構造等に關する智識と實際の經驗とを有し土地の狀況に精通する者にして初めて完璧を期すべく、氏の如き好適の調査員と謂ふべし。

飯島彌十郎氏

上板橋村長
豐島病院組合管理者
（上板橋村四四三五番地　電話板橋一一五番）

溫容玉の如く、純潔雪よりも清く、自治公共人の典型として崇敬の的となる人格者、是れを吾が飯島彌十郎氏とす。

氏は明治十五年四月二十七日を以て上板橋の名門にして素封家たる先代飯島彌十郎氏の次男に生る。前名を賢一と稱せしも明治三十四年二月家督を相續し同年六月十五日襲名す。家は代々農業の傍ら先々代より醬油醸造業を創め斯界に名聲を博したるが、昭和二年此歴史ある事業を廢す。氏は夙に輿望を擔ふて北豐島郡會議員に擧けられ、郡制廢止迄三期に及び又村會議員たること十年、大正九年一月二十一日推されて上板橋村長の重職に就き以て現在に至る、殊に昭和五年七月五日には全郡組合議員の一致推擧により豐島病院管理者の要職に就く。此の他氏は北豐島郡農會幹事、同教育會幹事、上板橋村農會長、同消防組頭、上板橋耕地整理組合長、同小學校後援會長、共和倶樂部幹事長等に擧げられ、又農村振興の爲に設立せし巣鴨關東市場（資本金五萬圓）の社長たり。令閨故鈴子夫人は巣鴨町の舊門たりし石井小兵衛氏の三女にして、長女澄江子は落合町の醫師橋本彌一氏に嫁す、橋本氏は帝大產婦人科に研究中なり。次女八千代子は府立第二高女を卒業し、長男壽雄氏は立教大學通學中なり。氏は將棋に堪能にして十年前より初段格を有す。

飯島好邦氏

日暮里町會議員
（日暮里町金杉一九〇七番地　電話下谷二七九六番）

剛邁不屈、一度び信ずれば波瀾重疊の難關も敢て辭せず、必ずや初志を貫くの慨ある人に吾が飯島好邦氏のあるなり。以て當代兩樓人物の儀範とすべきなり。氏は明治十二年三月十八日を以て、山梨縣東山梨郡平等村に生れ、同二十二年氏の十一歳の時父君に伴はれて上京、爾來刻苦精勵家業に從ひて奮鬪し、世に所謂「裸一貫」の身上より努力主義によりて家礎を築き、綿糸業、電氣木具製造業として斯界に覇業を成すに至れり。殊に氏の性格と才能とは公私の認むる所となり、復興局第六十三地區の區劃整理委員に擧げられ能く官民の間を斡旋し業績大に擧がり、時の內務大臣鈴木喜三郎氏は、其の祝賀會に閣議を差繰りて臨席し君に讃辭を呈したるなど、三町十六名の委員中異彩を放てるもの、亦君の人格手腕の表現と謂ふべし。昭和四年五月普選第一次の町議戰に出馬して當選し、現に下水道議員を兼ねて令名嘖々たり。町內會東部町會に盡瘁し其相談役に推され一般の信賴極めて厚し。

板橋覺太郎氏

日暮里町會議員
（日暮里町旭町三ノ一九四番地　電話下谷三八一六。三九一六番　千住二九九四。川口六三九番）

毛織物原料商として板橋兄弟商會の名は、遠く滿鮮に鳴り響き、其取引高多きは七十萬圓を突破し、少きも四十萬圓を下らざる商勢を張る主人公を吾が板橋覺太郎氏とす。

氏は本郡志村の人、明治二十一年六月十五日を以て生る。夙に向學の志抑へ難く、鄕校を出づるや如何にもして中學に學ばんとし、卽ち父君の家業たる八百屋の手助けをなす傍ら、氏の十五歳の時當時島貫氏の經營せる小石川區駕籠町の力行協會中學に入り、文字通り苦學行力靈雪の効を積みて卒業し、二十一歳の時氏は現在の事業が將來益々有望なるを看取し、輙ち兄弟相携へて現地に開業す。爾來財界の好況時に嶄然業界に覇を成し、今や板橋兄弟商會の名內外に普く悉知せられ、立志傳中の一人として稱揚さる。曩に大正十年五月三十二歳の青年を以て町會議員に擧げられ、現に三期在職中にして警備委員を兼ぬ。同町議中の智謀にして頭腦明敏、金杉の楠を以て稱され其各種の選擧戰に臨むや、奇効を奏し敵の心膽を寒からしむるの慨あり。豐島病院新築問題には反對の急先鋒として肉迫し大捷を博して鄂々の聲名を馳す。

波山燒陶器創始者　板谷波山氏

（瀧野川町田端五一二番地　電話小石川五二五四番）

板谷氏は明治五年三月茨城縣眞壁郡下館町嚴君善吉氏の嫡子に生る、嚴君は頗る多趣味の人にして農閑常に生花、茶の湯、繪畫等に親しみ何れも堂に入つた藝術趣味の人であつたと言ふ。

氏も此の風流高雅の性を其儘に傳統し、幼にして繪畫彫刻の趣味頗る深く、明治二十一年十六歳の時上京翌年東京美術學校彫刻科に入り同廿七年優秀の成績を以て卒業するや、直に母校の豫備科に教鞭を執ること二ヶ年、同廿九年聘せられて石川縣金澤市の縣立工業學校に教授として職を奉じ、在職實に八ヶ年に亘り貢獻甚だ多し其の任地たるや九谷燒の本場たりしため陶器製作に就て自ら發明する所あり、同三十六年現地に居を卜し令室と共に窯を築いて熱心研究製作に從事されるより道灌山の夫婦燒と稱さるゝに至る氏の號波山は筑波山下に呱々の聲を揚げたるに由る而も作品は波山燒と稱さるゝに至れり。

爾來波山燒の獨特性は、益々聲價を博し工藝界の白眉を以て推重され其の名は全國は勿論海外美術界にまで賞美せらる。

此の間氏の工藝美術的手腕は各種の方面に認められ、曾ては東京高等工業學校の囑託となつて熱心其使命を果し、自家に開窯してよりは一心作品に精進して斯界の權威とせられ工藝濟々會々員、日本美術協會々員等に推薦せられて獨特の逸品を示し、又一昨年文部省の帝國美術展覽會が工藝部を新設すると共に擧げられて審査員となり現在に至れり、其高潔なる人格の獨創的貢獻とは以て社會の儀表とすべきなり。

稻垣金夫氏

瀧野川第五尋常小學校訓導
（西巣鴨町池袋二三三一番地）

稻垣金夫氏は本郡の出身にして、多年王子町、巣鴨町に教鞭を執りて良教育家の評高き人、新進氣鋭の才能を以て努力し前途を囑望せられつゝあり。

卽ち氏は北豐島郡岩淵町大字下四〇六番地に於て明治三十年五月十日を以て生る。夙に教育家たるを志し、明治四十五年四月一日東

京府青山師範學校に入學し大正六年三月二十八日同校を卒業し、同月三十一日王子町豐川尋常小學校に奉職す。翌七年四月二十九日には王子町第三補習學校の訓導となり、同九年六月三十日迄兼任す。同十一年三月三十一日同町堀船尋常小學校訓導に轉じ、更に大正十三年四月三十日巣鴨町仰高西尋常小學校訓導となり、昭和三年二月二十九日巣鴨町立巣鴨青年訓練所指導員に囑託せられ、次で同三年九月十二日には瀧野川第五尋常小學校訓導に榮轉し、現に主席訓導として令名嘖々父兄の信頼益々加はりつゝあり。

池田鶴治氏

時習尋常高等小學校校長

（西巣鴨町巣鴨二七五七番地）

池田氏は明治六年宇都宮藩士池田照利氏の四男として生る、同二十一年栃木縣立中學より同栃木縣師範學校に轉じ、同廿七年卒業し直ちに同縣安蘇郡葛生尋常高等小學校に赴任し更らに同年十二月には同郡田沼町の第三尋常小學校に一躍校長として聘せらる、後同町の高等小學校訓導に擧げられ在職二年二十九年八月同郡常盤尋常小學校長に轉じ、在職六ヶ年に及ぶ、再び田沼高等小學校長に榮轉し同地の教育に一新紀元を劃し縣下の教育界を風靡するに至る。日露戰役當時は軍國の青年士氣を鼓舞して大に貢獻し、其筋より屢々表彰さる。同四十三年、大に期する所あつて同縣教育界の痛惜と父兄の切なる留任運動とを斥けて上京、同年七月西巣鴨町時習尋常高等小學校訓導兼校長に就任し二十年間の永き年月を一日の如く終始して熱誠育英に盡し今日に及ぶ。大正十四年多年の功績により勳八等に敍せられ、又一昨年奏任官を以て待遇せらるゝの榮擧を擔はる。

日蓮信仰家

今井瀧次郎氏

（瀧野川町西ヶ原一二六二番地）

法華經の行者日蓮の大人格、大精神は金鐵をも鎔かさんとし忠君愛國の至誠は四個の格言と化し、不自惜身命の宣戰は千歳不朽の處世活訓として凡夫を奮起せしむ。吾が今井瀧次郎氏は實に大聖日蓮の眞信者として、日夕南無妙法蓮華經七字の題目を唱へ、國民生活に安心立命を與ふる唯一の信仰として日々業務に精勵せらる。氏は明治十年七月六日を以て巣鴨町三丁目に生れ青年時代は波瀾曲折多き境涯に浮沈せりと云ふ。然かも一度信仰の途に入るや、忽ち靈氣全身を清淨にし、大日蓮の氣魄は自ら勇躍し、遂に今日の如き幸福なる新生涯を開拓するに至る。福子夫人との間に一男四女あり、擧家悉く日蓮上人を渴仰し題目の聲一家に漲る。思想混沌たる時代氏の家庭の如き洵に欣慕すべきなり。

巣鴨町々會議員

市橋光治氏

（巣鴨町平松一三六〇番地　電話大塚一三三二番）

市橋氏は現町會議員にして土木、下水道各委員を兼ね模範町巣鴨の構成の一員として名あり、町内にあつては宮本親和會幹事として衆望あり、又土地の開發は花柳界よりするの見地より大正十二年大塚二業組合建設に盡力し遂に之れを成し更に翌年三業組合を完成し其の常務取締役たる外、東京二業聯合組合大塚支部幹事、大塚待合組合長を兼任して公私共に努力至らざるなし。氏の生國は岐阜縣本巣郡北方町にして明治十一年の生れ、家は有名なる數代の酒造家たるも之れに頼らず上京して同三十六年神田中學校に入り後岩倉鐵道學校に轉ず、卒業するや九州鐵道、關西鐵道等の經理課員となる、此間關西大學法科に學び同四十一年卒業、而して鐵道局經理課書記を拜命し續いて各驛檢簿係りとして數理的頭腦と才幹とを以て一過失なく職責を盡せり、大正十一年辭職して前記の如く一意公共事に力を致して今日の信望を得たるものなり。

巣鴨町會議員

石田文吉氏

（巣鴨町上駒込八八二番地）

氏は新潟縣の人、元治元年三月二十一日を以て中頸城郡直江津新町に生る。生家は二百有餘代連綿たる舊門にして祖先は名主村役人を勤め土地進展の爲に功勞多き家柄なり。嚴父を惣平と云ひ自治公共に盡さる。氏は二十歳の時法律家を志して上京、明治法學院に學び、後下谷區御徒町に洋傘製造工場を設け、發展と共に小石川區に移り鮮支方面に輸出するの好況に赴く、然るに日清日露役の打擊を蒙りしより氏は一轉して書畫骨董商となり、大正十二年震災直後現住地に來住し、土地の發展に努力し現に町内團體染井下正交會長たる外、昭和四年五月衆望を負ふて町會議員に擧げられ、學務委員、下水道部委員となり財務用地委員として努力しつゝあり。又仰高小學校保護會常任幹事、巣鴨第四消防組評議員、染井稲荷神社參事等を勤め同社昇格に盡力せり。

瀧野川濟美會々計茶商

岩田磯右衛門氏

（瀧野川東三軒家一八三六番地　電話小石川一八四五番）

氏は明治十三年十一月岩田鈴吉氏の長男として現地に生る。同家は土地の舊家素封にして茶商は嘉永元年先々代の創業せるものにして、着實に良品を精撰して顧客を迎ふるより信用益々高く今日の盛榮を見るに至る。大正三年家督を相續し、先代同樣公共事に盡瘁され、現に町内會濟美會の會計たる要職に擧げられ熱心奔走せり。同會は創立古き模範町會にして悉く同地の名望家を網羅せるもの、氏の經理上の手腕に俟つ所亦大なり、家庭には夕カ子夫人に子なく養嗣子省吾氏に令妹米子を配し、令孫金吉郎、萬藏の兩君あり。

醬油醸造業

石渡仁平治氏

（岩淵町本宿八五〇番地　電話赤羽一一七番）

岩淵町西光寺の開基石渡民部少輔保親（六百二十三年前辛去）廿三代の後裔たる石渡仁平治氏は、明治廿三年仁十郎氏の嫡男に生れ、早稲田中學卒業後祖業を繼ぐ、同家醬油醸造は百五十年前の創業にて代々岩本屋仁右衛門と通稱し夙に好評を博せしも、氏は更に改善を圖り野田銚子と拮抗する良品を醸さんと自ら千葉埼玉及び府下一流の醸造家に住込みて研鑽多年、遂に關東隨一の銘品を産し府市は勿論東北一帯に販路を擴張するに至る。しけ子夫人との間に仁右衛門、國治兩氏と長女照子孃あり。醸出の『岩淵一』『山二印ひしほ』は赤羽驛の名物たり。

は之部

豐島病院組合助役　花井源兵衛氏

（板橋町元瀧野川二五〇〇番地）
（電話大塚七二八番）

元東京府會議長、郡會議員、板橋町長等に擧げられ、一代の風雲を叱咤して明治、大正、昭和の六十有餘年間國家社會の爲に奮戰力闘せし老將軍に吾が花井源兵衛翁を矜有す。

氏は嘉永元年五月十四日本郡板橋町上宿根村の農家に生れ明治五年用水組合下板橋宿田持總代に擧げられしを公生涯の第一歩とし、爾來地租改正係、下板橋宿學校改修常務委員長、同百姓總代、水論臨時談判委員、公選板橋戸長、北豐島郡戸長例會長、東京府教育談話會幹事、所得稅調査委員、北豐島郡徴兵參事員、東京府會議員、北豐島郡會議員、荒川改修速成委員、東京埼玉聯合治水會常任幹事明治神宮鎮座祭東京奉祝委員長、平和博覽會委員、特別市制調査委員、帝都復興局評議員等、氏の公職は一々擧て數ふ可らず、此間府郡町當局より功勞を表彰せられし事廿數回に及び、尚ほ昭和五年七月まで板橋町長として市電の延長、千川上水の埋築、府立第九中學の設置、新國道の完成。第四小學校增設等に全精力を傾倒して勇退するや同月十日豐島病院組合助役として全會一致選擧され以て現在に至る。氏は性來豪毅沈勇、一雖加はる毎に勇氣百倍、縱横に才腕を揮つて快刀亂麻を斷つの慨を示し、彼の府會議長として現はれし當時敵味方とも畏敬推重せり翁の地方自治、憲政濟美に貢獻せる所偉大といふべし。

板橋町長　花井現造氏

（板橋町下板橋八一八番地）
（電話板橋二八番）

花井氏は明治九年九月十三日板橋町の花井家に生る、年少夙に商業に志し神田佐久間町の米穀問屋新倉商店に入り、商取引の實際を習得すること實に十有餘年、明治三十四年生家に歸り、現在地に米穀商の店舗を開き、年一年と擴張伸展して今や同町唯一の取引高を示す。此間擧げられて東京白米商同業組合北豐島評議員たること十數年に及び同業界の重鎭たり、更に公人としては、明治四十三年以來昭和三年の改選期迄引續き選ばれて板橋町會議員に擧げられ、此間學務、土木、警備等の常設委員並に常議委員、出納檢査委員の要職を兼ね又、彼の大震災直後の大正十二年九月四日に同町々長に就任し、郡衙の所在地として郡の中樞として救護警備の事務頗る多端を極め、更に其復興事業に直面して果斷克く敏腕を揮ひ、同十四年五月二十日其職を辭するまで、幾多の懸案を解決して其功勞顯著なるものあり、卽ち同町第二小學校の新築、耕地整理、道路の擴築、上水道の企劃、千川用水路の暗渠計劃悉く氏在職中の產績なり、現に板橋町選出荒玉水道議員として元老格たり。

東京府會議員　林連氏

（南千住町八丁目三七番地）
（電話淺草八七七番）

曾て官界に在つては模範的警察官の名を恣にし、又法曹界に入り

ては模範的辯護士の名を收め、更に政治家としては清廉剛直にして一躍帝都に其聲望を博せる人に吾が東京府會議員林連氏の巨然として存するを見る。

氏は明治十四年を以て福岡縣に生れ、福岡縣立中學校を卒へて上京、明治大學法科に入て專心學業を勵み、卒業後警視廳に奉職、警部補より警部に昇進す、此間具さに實社會の表裡に立つて體驗大に得る所あり、大正四年官界を退きて辯護士を開業す、爾來人權擁護に努めて民衆敬仰の的となる。大正十年南千住町會議員に擧げられ町政刷新のため建策貢獻せる所實に多大にして同十三年には全町一致氏を東京府會議員に推して當選し更に昭和三年再び當選するや郡部會副議長の榮職に擧げられ昭和四年七月迄其重任を全す。此間府參事會員として府政の樞機に參し、補償審査委員、警務委員理事に擧げられ現に兼任す。又曾ては南千住町長の職に就きて町政を常軌に復興し、或は府議として府道の擴築延長下水の完成等本郡東部町村民の福利增進の爲に健闘しつゝあるは一般周知の事實たり、氏も府會の饒將を以て甘ぜず必ずや中原に羈を成すの偉材たるは衆目の待望する所たり。

神田製鋲所代表者　**林榮治郎氏**

（瀧野川町田端八八三番地　電話下谷七三四番）

海軍省指定工場として軍艦、水雷艇等に使用する螺旋を主とし各種製鋲を業として異數の業績を擧げつゝある合名會社神田製鋲所は資本金一萬數千圓、大正七年十二月の創立にして、其代表社員たる林榮次郎氏は明治六年四月廿四日を以て南葛飾郡隅田町向島に嚴父喜八氏の次男に生る。嚴父は明治十七年以來神田區岩井町に製鋲工場を經營し、當初より海軍省の御用品製作に從事せるを以て氏も亦其業に從ひ、大正八年業務の擴張と共に現在地に移轉し益々隆運を招來するに至る。尙ほ氏は町內公共に盡瘁し現に田端南部町和會々長として功勞多大なり。

日暮里町會議員　**長谷川春太郎氏**

（日暮里町旭町二ノ一〇一番地）

玲瓏玉の如き資性、純潔雪の如き襟度を持する人に、吾が長谷川春太郎氏を有す。

氏は明治十九年二月二十八日を以て千葉縣安房郡北三原村に生る。北三原は境井彈正の三原城の在りし地にして、長谷川家の一族一門は土地の舊族にして戶長、村長たりし家柄なり。而かも薄幸なりし氏は二歲の時父君に死別し、又五歲の時慈母を喪ふ。明治二十九年十一歲の時上京、孤獨の身を各區の鑄屋、鐵葉業、金屬雜貨製作所等に奉公し或は夜學に通ひ、或は講義錄により勉學を怠らざりしが同三十九年には徵兵として野砲兵第十四聯隊に入營し、更に選拔せられて陸軍射擊學校に入り同四十二年十一月除隊し、深川區の文房具製造工場水島方に勤務すること八ヶ年、大正六年五月現在所に移り同八年五月工場を創設して現在に至る。其製造に係る金屬文房具は市內外に聲價高し。昭和四年五月町會議員に當選警備委員東三下水道組合會議員を兼ぬ。此間國勢調査委員、軍人分會第四班長たること三期、奉仕會幹事、交和會常任幹事として信望厚く將來を矚目さる。

瀧野川第七小學校々醫　長谷川醫院主　**長谷川文三氏**

（瀧野川町田端三〇番地　電話小石川七〇四六番）

內科診療の權威として知らる、長谷川文三國手は、明治廿四年一月十九日を以て島根縣能義郡廣瀨町に嚴父廣吉氏の次男に生る。生家は農を業とせるも氏は夙に仁術に志し、明治四十一年十八歲を以て上京、東京醫會本部の講習所に入り斯學を研鑽し翌四十二年內務省の檢定試驗に應じて前期の免狀を得、同四十四年後期試驗に登第せり。時に氏の二十二歲の春なりき。大正元年帝大醫科に內科を專攻の傍ら三浦內科の介補として實地に攻究すること約一年半、同三年精神病學敎室の介補を囑託せらるゝと共に府立巢鴨病院醫員たること數年、小峰博士の王子腦病院に於て精神病腦神經等を研究、同九年十一月現在所に開院今日に至る。公共の念厚く現に上田端青年團々長として青年の指導啓發に努む。まさ子夫人との間に一令息二令孃あり。

王子町役場兵事課長　**長谷川與一氏**

（王子町下十條一五七九番地）

氏は神奈川縣の人、明治二十七年七月一日を以て津久井郡串川村菊花の名所たる根小屋二六二六番地に生る。

氏は鄕里の高等小學校卒業後、烏屋村役場書記として奉職し大正三年徵兵として騎兵第十五聯隊に入隊、同九年十二月一日本鄕聯隊區司令部附を命ぜられ、四十四年三月五日騎兵特務曹長に任ぜられ騎兵第十五聯隊附となり、同年八月一日退役と同時に王子町役場書記に任命せられ現在に至れるなり。此間氏は勳八等に叙せられ、模範下士として令名あり、克く王子町兵事々務を擔任して裁斷流るゝが如く、一般町民の信賴厚し。家庭には養父母と、そで子夫人あり乘馬を趣味とす。

瀧野川第七尋常小學校長　**萩澤信良氏**

（瀧野川町西ヶ原一〇〇八番地）

志氣高邁、學殖該博、少壯にして一校の長となり、克く第二國民の陶冶に努力し、校風の美異彩を放たしめたる吾が萩澤信良氏の如きは模範敎育家の隨一に推すべき人材たり。

氏は明治二十五年八月十三日を以て福島縣東白川郡近澤村大字寺山字鶴生三一番地に生る。明治四十一年四月一日福島縣師範學校に入學し、四十五年三月三十日優秀の學績を以て卒業し直に福島縣西白川郡釜子尋常高等小學校訓導に任ぜられ、大正元年十二月十八日同郡釜子實業講習學校訓導を兼任す。大正五年西白川郡白河第一尋常高等小學校訓導に轉じ勤續四年、大正九年三月十三日東京府に出向を命ぜられ、同月十九日本郡日暮里町第一日暮里尋常高等小學校訓導に榮轉し、更に同年七月三十一日瀧野川尋常高等小學校訓導に轉任、同十四年三月三十一日瀧野川第五小學校首席訓導となり、熱心に奮勵して父兄の信望を一身に鍾む。後瀧野川第七尋常小學校の新設なるや、氏は拔擢せられ昭和三年八月十五日を以て校長兼訓導に榮進し以て今日に至る。

氏は胸宇豁物たる進取向上の氣抑へ難く、調導たるの傍ら、大正十四年四月一日日本大學高等師範部に入學、修身、法制經濟科を專攻し同十三年三月三十一日卒業し中等教員有資格者たり。

三河島前町會議長

萩原市太郎氏

（三河島町町屋二九一番地）

氏は明治十三年七月嚴父榮三郎氏の長男として現住地に生る。生家は町屋大盡として素封舊門にして嚴父は村會議員、學務委員等に擧けられ町治に盡し町制施行に際し自治功勞者として厚く表彰された人なり。氏も亦其精神を享け廿一歳第一師團騎兵第十六聯隊に入營、特業喇叭手となり、明治三十七年十二月豫備役と共に征露の役に召集され、奥大將の第二軍に從ひ、沙河の激戰、本溪湖の戰鬪に參加し、靈溝臺、奉天攻擊等轉戰數度に亘りて功を樹て同四十一年四月一日勳八等功七級金鵄勳章を授けらる。歸鄉後氏は只管公共事業に奔命寧日なく、同四十三年五月町會議員に當選し、後又大正六年補缺選擧に推擧され現在引續き町議に列す、此間初代町會議長となり、學務委員を兼任し町會一方の重鎭として信望厚く、町屋町會顧問、同體育會後援會長、町立第四小學校後援會長等に在りし外義には在鄉軍人分會副長等として本部より表彰を受く。家庭には時子夫人との間に利應、幸應、政應、重應の四男を擧ぐ。

瀧野川第八尋常小學校長

芳賀儀一郎氏

（瀧野川町西ケ原七七九番地）

周到の用意と溢發する才氣とを以て能く人心を收攬し、圓滿無碍に自己の抱負を實現する手腕と自信とを有する芳賀儀一郎氏は、將來の進境大に期待すべき材幹たり。

氏は秋田縣の人、明治二十一年四月十七日を以て平鹿郡十文字町大字佐賀會字新山道添九番地に生る。明治四十年九月二十七日同縣南秋田郡船越尋常高等小學校准訓導を振出しに、翌四十一年三月三十一日同郡大平尋常高等小學校准訓導として轉任後氏は秋田縣師範學校に入學し大正二年三月二十二日同校本科第一部を卒業すると同時に南秋田郡船越尋常高第小學校訓導に任ぜられ、同時に實業補習學校訓導を兼務す。大正五年三月三十一日鹿角郡小坂尋常高等小學校訓導に轉じ、同年四月二十一日實業補習學校訓導を兼ね、後大正八年四月十九日瀧野川第三尋常小學校代用教員として進出し同十年五月十九日同校訓導に任ぜられ、爾來引續き同校に至りて首席訓導に累進、昭和三年四月十一日瀧野川第四尋常小學校長に拔擢せられ更に昭和五年三月三十一日瀧野川第八尋常小學校新設と共に同校訓導兼校長に榮轉し現在に至る。此間氏は大正十二年三月三十一日文部省實業教員養成所を卒業せり。

巢鴨町助役

服部民彌氏

（西巢鴨町堀之内一九九番地）

模範町巢鴨の出現は、其出現したる時に生れたるに非ずして必ずや其裡面に之れが建設に心血を灑ける苦心と努力との存することを忘る可らず。然り而して吾が服部民彌氏は實に名町長桑澤氏を輔けて斯の美しき自治を生める母なりと謂ふ可し。

氏は新潟縣の產、明治七年十月四日越後三島郡大河津村の舊家に生る。夙に新潟中學校に學び學業を卒るや新潟電信學校に學びて專門の技能を修め、直に新潟電信局に職を奉じて官界に第一歩を入る同三十七年推されて同縣三島郡大河津村會議員に擧げられ爾來村治のために盡瘁して自治政の上に多大の抱負を持し、大正四年東都に雄飛を試むべく上京、八年巢鴨町役場に入り幾何もなく累進して庶務課長に昇進し、熱心に同町政の圓滿なる進展に勉む。氏が就職の當時は吏員僅に九名に過ぎざる閑町たりしも、震災直後より急激に膨脹發展し之に伴ふ諸般の施設は日を逐ふて多端となり、町當局の苦心一方ならざるものあり、氏は此間に處して縱横に才腕を揮ひ信望亦一層加はり、昭和三年二月巢鴨町助役に推擧せらる。此間氏は仰高東、西、北の三小學校の新設、巢鴨郵便局の設置問題、汚物掃除の直營、役場廳舍の新築、瓦斯値下、荒玉水道完成並に最近の大下水計劃等其功績多大にして現に其要職に在り。令閨ハル子氏は東京府の人、内田清次郎氏の姉にして、其の間に民義、同妻靜香、小平太、晋一、武雄、ハク子、雪子氏等あり。氏は讀書を最も好み、園碁、和歌、俳句を嗜む。

扇屋料理店主

早船彦三氏

（王子町飛鳥山下王子四五番地電小石川八〇三番王子一四五番）

畏くも　明治大帝、昭憲皇太后の兩陛下玉駕を駐めさせられ、又雄新前後天下の名士文人墨客を止めたる王子の旗亭扇屋は恐らく全國に知らざる者なき程有名なる料亭にして、錦繪講談本にも其名著はる。當主は早船彦三氏にして先代高太郎氏の長男として後繼す。前には飛鳥山を控へ後は石神井川の奔流に瀕み、四季の風光言はん方なく、現在國道に架せる音無川橋の偉觀は現代的の名勝と云ふべく、四季の眺めに惠まれたる善美の座敷は、十八室二百疊に餘る。創業は慶安元年にして爾來風流雅客節を絶たず、維新後も貴顯紳士の遊ぶもの常に相踵ぎ、名士の筆跡客室に光彩を放つ、明治廿年兩陛下行幸の途次及び赤羽大演習の際並に大正天皇東宮に在らせ玉ひし當時同店に御休息遊ばされしと、其光榮永久に傳ふ可し。祖父彌左衛門氏は王子製紙抄紙部新設に盡力して土地發展に努力し、嚴父高太郎氏も幾多公職に就きて自治公共に盡さる當主彦三氏は溫厚の紳士にして町内總代、町方面委員並に東京府方面委員に擧げられ、まさ子夫人に正彦氏を擧ぐ。又令弟彌壽次氏は洋食部を設け一流料亭として頗る繁榮を極む。

土木建築請負業

塙三郎氏

（三河島町二七八五番地電話下谷五三一四番）

塙氏は明治二十五年千葉縣海上郡海上村に生る、中學卒業後上京し土木建築業界に身を投じ研究努力實技の修練に力め、十九歳にして上田組の工事を擔當して大家を凌ぐの技を示せり、大正六年獨立して南千住に事務所を構へ業界に馳驅す、十二年現地に移轉して業務を擴張し諸官衙の大工事を請負ふに至る、一青年にして俄に富と信用とを博するは業界稀れに見る所なり、畢竟氏の責任感念と其の技と相俟つて此の大成を爲すに外ならず。今氏が手に由つて工を成す一片を擧ぐれば、東京市電氣局、遞信省、鐵道省、東東市役所等の指定を受け諸工事を爲し、又居住地にては江戸川水道組合三河島

出張所を始め三河島警察、大井町役場其他町村役場等の建設完成枚擧に遑あらず、又以て壯とす可きなり。

濱野鑄物工場主　濱野芳造氏

（三河島町三河島一四六四番地）

鑛鑄砲金の鑄物家として名高き濱野芳造氏は埼玉縣の人、明治十八年十月三日を以て北足立郡草加町に生る。父君平藏氏は同町に染物業を營み、氏は其次男たり。氏は初め商業に志して上京したるも時利あらず戀阿數年、後大正四年現在地王子電車三河島停留所に鑄物工場を起し、鑛鑄砲金の鑄造を始め熱心奮勵の結果年一年と取引先は擴張され、其製作品の優良確實を以て好評を博し益々業績を擧ぐるに至れり。新興帝都の鑛鑄砲金を需要することは將來愈多きを加ふるを以て同工場の前途は實に洋々として多望なり。氏は資性磊落頗る快濶、任俠義氣の人と謂ふ可し。

原田醫院主　原田俊吾氏

（瀧野川町御代の臺一三八五番地）

瀧野川町御代の臺澄の草分けの刀圭家とも云ふ可き原田醫院主原田俊吾氏は、明治廿五年九月を以て福岡市鍛冶町に生る。同家は代々黑田侯に奉仕せる御殿醫として知らる。氏は鄕里の修獻館中學校を出でゝ上京、東京醫學專門學校に學び、大正九年三月卒業後は專門諸大家に就て實地の研究を重ね、同十一年十一月現地たる市電御代の臺停留所傍に開院し今日に至る。氏は內外科共に獨特の治術を有するも就中產科婦人科小兒科を得意中の得意とす、猶ほ氏は不斷の學究を怠らず、叮嚀懇切を極むるより一般患家の信賴厚く診を乞ふもの相踵くの有樣なり。

瀧野川町會議員　橋本三右衛門氏

（瀧野川町上中里三五二番地　電話王子八五〇番）

大正十四年五月瀧野川町會議員に當選以來一回の缺勤なく町會に出席し、更に昭和四年五月再び町議に當選し、資性其儘に卒直恬淡所信に邁進して已まざる橋本三右衛門氏は、明治廿三年九月十日を以て嚴父房次郎氏の長男に生る。氏は瀧野川小學校を卒へ進んで京北中學校に學び、祖業の農事に從事したるも隣接町村の急激なる進展に伴ひ早くも斯業を廢して良地主良家主として土地發展に努め、且つ社會公共の爲に卒先盡力して其熱心人の敬服する所たり。現に町會議員たるの外土木委員、消防委員、道路下水改良調査委員、農工統計委員等の重職を兼ね、又上中里町會々長、鄕社平塚神社氏子總代、第五小學校後援會副會長等をも勤め貢獻する所多大屢々表彰を受く。撞球、野球、圍碁、將棋等多趣味の一人たり。

前瀧野川町學務委員　橋本常太郎氏

（瀧野川町上中里三三七番地）

敬神崇祖積善の家として世の信望厚き橋本常太郎氏は慶應元年五月廿九日を以て故市太郎氏の長男に生る。幼少城宮寺及び澤田塾に就て螢雪の苦を積み長ずるや家業の農事に從ふ、嚴父は村會議員に擧げられ一期間村治に努めて令名ありき。大正十三年家督を相續し鄕社平塚神社氏子總代たること多年、前學務委員、第五小學校後援會幹事等に擧げられて克く學事公共の事に盡力し、溫厚篤實の積德家として信望特に厚し、氏は神佛の諂拜を唯一の樂みとし專ら世道人心の爲に餘生を捧げつゝあり。

瀧野川第三尋常小學校訓導　馬場駿三氏

（瀧野川町西ヶ原七二番地）

馬場駿三氏は農學の出身、農は天地間の自然物を利用厚生するに學理と實際とを以てす。乃ち千古を包羅し萬物を鑄冶育生して人類生活に卽せしむ、一本の草卉に美花を開かせ實を結ばしむるも、兒童を育成する其愛共丹精其至誠豈に秋毫の差なしと云ふ可きなり。

氏は長野縣の人、明治二十九年三月十三日上伊那郡伊那町九三九番地に生る。大正二年三月二十七日長野縣立上伊那甲種農業學校を卒業し、更に同六年三月二十六日長野縣立師範學校本科第二部を卒業す。同年同月長野縣埴科郡坂城尋常小學校訓導となり、同七年三月十日同縣上伊那郡飯島尋常高等小學校訓導に轉じ同九年三月三十一日同縣上伊那郡中箕輪尋常高等小學校訓導となり、同年十二月三十一日には長野尋常高等小學校訓導に進出し、令名縣下に洽く大正十二年四月二十六日瀧野川第三尋常小學校訓導に榮轉して首席に累進現在に至る。

瀧野川消防第四部長　橋本權四郎氏

（瀧野川町上中里七六番地）

瀧野川町の公共人として最も明るく、最も正しく活動し、將來有爲の士として囑望せられつゝある權本權四郎氏は、明治二十三年六月五日を以て瀧野川町上中里の舊家橋本喜代次郎氏の二男として現住所に生る。橋本一家一門は何れも上中里の名門にして氏の家は鄕社平塚神社の社頭史跡攻め坂の上にある由緒正しき門流なり。夙に瀧野川小學校を出で家職の農に精勵して父君を佐けたりしが、現時土地の發展と共に地主として部落開發のために盡しつゝあり。爰には上中里高臺町會の組織に盡力し現に其の幹事として會計の要職に在るの外土木衛生幹事をも兼任して住民の爲めに寢食を忘れて奔走し、又瀧野川常設委員たる土木委員に擧げられ更に町消防組第四部長に推擧せられて同方面の警備機關の充實を圖り消防機具改善、火の見望樓の新設等に努力して之を實現し、部下の信賴頗る厚く常に優良の實績を擧げつゝあり。家庭には母堂婦舞氏とち忍子夫人との間に長男泰一氏が擧げらる。

瀧野川町家屋稅調査員　橋本茂三郎氏

（瀧野川町上中里一七四番地）

前瀧野川町學務委員として、人格高潔、至誠愛町の人として信望厚き橋本茂三郎氏は、明治九年八月二十三日を以て土地の素封家橋

本紋治郎氏の長男に生る。夙に鄉黨を辛へて家職の農事に精勵し、現在は郊外發展と共に之を廢し大地主として部落の繁榮に努力しつゝあり。氏は教育方面に理解を有し小學兒童の勸奬に力を致すこと多大、曩には町學務委員に擧げられ、又町内自治會たる上中里高臺町會々長に推されて能く居住者の便益を圖り、土木衛生警備祭事等苟も公共團體に附隨せる事業は悉く整備して模範町會の稱あるに至らしむ。昭和五年最初の家屋税調査員選擧には其候補に擧げられて當選し、公私共に精勵しつゝあり。家庭には母堂乃婦子氏健在、ノブ子夫人は昭和二年十月長逝され、今は夫人との間に儲けられたる次男鍵一氏と次女八重子孃とあり。氏は敬神の念深く常に鄉社平塚神社の氏子總代として其興隆に力めつゝあり。

東京株式取引所一般取引員

林　莊　治氏

（瀧野川中里三三四番地　電話小石川三五五六番）

東都取引業界の驍髦、立志成功傳中の一人者たる林藏治氏は、栃木縣安蘇郡三好村の人林周吉氏の二男に生れ、夙に實業界に雄飛せんとし、織物仲買に從事し、進んで海外に鵬翼を展べんとし明治四十一年瓜哇島に渡航し木綿縮其他の織物貿易に從ひ、頗る順調に商勢を張りしが中途病を得て歸朝の已むなきに至る。大正二年足利町に現物商を開始し業況益々好望なるより同五年日本橋區坂本町に移りて現物仲買業を開き、縱横の機略を以て常に商機を過たず、歩一歩と業績を擧げ同十三年には定期仲買をも始め今や牢固たる基礎と拔く可らざる信用とを把持し今日の隆昌を見るに至る。此の間現物取引所委員、同商議員等に推され、斯界に貢獻する所多大、居町中里に在つては又公共自治の爲に辛先私財を投じ、又邸内に同町消防組第五部の貯水池をも設置せる等住民より感謝せられつゝあり。資性恬淡斯界稀に見る人格者たり。

尙氏の經營せらるゝ株式店は坂本町一九番地にして、店頭市をなすの繁忙を極め、信用斯界第一位たり。電話は茅場町三四八一番より同三四八五番迄及び三二八番なり。

巢鴨町役場主事

早坂竹之助氏

（市外洗足富士見臺十一號）

陸軍將校にして教育家となり、又縣屬にして警視廳警部をも歷任し行く所として錚々の名を馳せざるなき吾が早坂竹之助氏は、山形縣の人、明治十九年八月を以て南前山郡上山町の工業家源助氏の長男として鄉里に生る。明治三十八年三月米澤工業學校を優等の學績を以て卒業し翌年適齡となるや一年志願兵として山形歩兵第三十二聯隊に入營し累進歩兵少尉に任ぜられ正八位に敍せらる。爾來鄉里の小學校に代用教員となり、又郡書記を勤め更に山形縣屬等を經て大正十一年八月上京し、直ちに警視廳屬兼警部に任ぜられて大に敏腕を揮ひて令名高く、功績著大なりき。

氏は昭和四年十月恩給に達し多年の官界生活を退きて自由の天地に練達の才腕を振はんとす。卽ち同五年一月聘せられて、巢鴨町役場に職を奉じ、同町の大事業たる下水道部庶務課長に擧げられ、更に町役場主事兼庶務課長の要職に就き以て今日に至る。

氏は風雅に富み書畫骨董を愛翫して氣品を高む、家庭には賢婦の名高きとよ子夫人あり。一家洗足池畔の田園都市に優雅の居を卜し大に英氣を養ふ。

王子製紙會社十條工場長

西　濟氏

（王子製紙會社十條社宅　電話王子一七三番）

製紙技術の權威として製紙王國たる王子製紙の十條工場長たる重職に在り、五百の從業員を自然に感動し、薫蒸し激勵するの人格識見を以て、日將月就の製紙科學を研鑽し、幾度か歐米を視察して國產洋紙の改善發達に貢獻する人、是れを吾が西濟氏となす。

氏は長崎縣の人、明治十七年十月十八日平戸島の平戸藩士西美波氏の長男に生る。鄉黨を辛へて上京學階を經て、明治三十九年東京藏前の高等工業學校機械科を優秀の成績を以て卒業し、間もなく王子製紙會社本社に職を奉じ、後同社王子工場に轉じ十年一日の如く精勵恪勤其專門の技術を以て精進し幹部の信頼愈よ加り、大正五年五月印刷局抄紙部十條工場の王子製紙に歸屬するや、氏は同工場に轉じて工場長に榮進す。氏は恭謙遜讓更に驕慢の風なく從業員に對しては骨肉の如く愛撫するを以て、全從業員亦慈父の如く敬慕し和衷協同克く忠勤努力し、此工場に限ては絶對に爭議等の忌はしき片影だも無きは全く氏の至誠を以て力行さるゝ結果なりとす。氏は大正十四年三月製紙業視察のため歐米に在ること十ケ月、更に昭和三年再び渡米して翌四年二月歸朝し、斯業の改良生產能率の向上に努力しつゝあり。家庭にはフレンド女學校出身のすみ子夫人との間に一男五女あり、長女初子孃は跡見高等女學校卒業、次女安子孃は同校に通學中三女未子孃はフレンド女學校に他は小學校に通學中にて樂しき團欒なり。

巢鴨町名譽助役

西山金藏氏

（巢鴨町池袋五二〇番地）

積善の家に餘慶ありと、吾が西巢鴨町名譽助役として令名嘖々たる西山金藏氏は、池袋の素封家にして舊門たり。

氏は明治七年十一月十五日を以て本郡西巢鴨町池袋五二〇番地農常次郎氏の長男に生る。氏は父祖の氣象を享け公共心熾烈、夙に西巢鴨町青年團の組織に盡力し同第十分團長に擧げられ、又二十歳の時より家主若衆睦を組織し約二十ヶ年間土地の爲に貢獻し、後大正十年には西山會を創立して之に代る。更に巢鴨第二小學校の小學會に在つては副會長、會計等に再選されて兒童の保護奬勵に盡す。生平氏は敬神の念篤く富士講先達たる事十有五ヶ年に及び、又鎭守氷川神社氏子總代として父君常次郎氏は四十ヶ年繼續し、氏も其後を享けて現在總代たり。

氏は町政に參與すること三期興望を以て昭和五年二月十七日同町名譽助役に推薦せらる。此他池袋ビルデング（株式會社）重役、西巢鴨信用組合理事の要職を兼ぬ。ひで子夫人との間に二男四女あり、長男竹松氏は慶應大學理財科を卒業して蓬萊生命に勤務し、四女夏江子は實踐女學校に在學し他の三人は悉く豐島師範の出身なり。家庭には父君常次郎氏八十四歳を以て健在し三夫婦八人家族にて頗る圓滿の家庭なり。

同町は全國中第二位の大人口を抱容する大町にして舊冬町議改選後の町政は益々公共事務の改善進展を促しつゝあり切に氏の自愛健在を祈る。

西山紙店主　西山貞次郎氏

（瀧野川町瀧野川九二番地）

飛鳥山前の大道路に直面し豐富なる材料を店舗に備へ、常に誠實と廉價とを以て各官公衙學校並に一般家庭に和洋紙類を提供しつゝある西山紙店々主西山貞次郎氏は同町々政の元老西山晋五郎氏の嫡男たり。

氏は明治二十九年九月を以て瀧野川アスカ山前の現住所に生る。嚴父晋五郎氏は明治三十三年七月收入役に擧げられ同三十七年七月滿期退職、三十九年三月村會議員となり同年九月再び收入役に推され同四十三年滿期まで勤續、大正二年再び町會議員に當選し、同十一年十二月十四日易簀せらるゝまで實に二十三年間公職に在て公共自治の爲めに盡瘁し功績多大なりき。同家は代々紙商を營み氏も亦祖業を繼承して今日に及ぶ、營業課目は機用材料、和洋紙一式にして界隈の好評嘖々たり。家庭は母堂つね子刀自、鉉子夫人とあり、旅行、釣、將棋を趣味とし頗る圓滿の資質なり。

板橋土木出張所長　二瓶文助氏

（市外大崎町桐ヶ谷一八三番地）

東京府土木行政の實際家たる二瓶文助氏は山形縣の人なり。明治十三年十月一日を以て羽前東置賜郡和田村に生る。明治四十三年十一月東京府工手を拜命し、爾後引續き土木部に終始一貫勤續して今日に至る。即ち大正十一年五月出張所長として西多摩郡青梅町に赴任し、彼の大震災直後特に小松川出張所長に命ぜられ昭和二年六月まで復興事業に努力し、後北多摩郡府中出張所長を經て昭和四年十月には、前板橋所長增田八郎氏の後任として就任し隣接郊外の土木事業完成に奮勵しつゝあり。

此間氏が最も腐心活躍せし難事業三つあり。即ち小松川所長として着任の際は、大震災のため前所長は家族共全滅の悲慘事の後を引受けし事とて、關係書類は皆無となり、而も管内各木橋は燒失し交通杜絶の慘狀にて軍隊の應援により辛じて應急工事を完成したる事、遡つては明治四十三年の大洪水及び大正六年十月一日關東の大海嘯の際は南葛飾砂町葛西方面は死者百四十餘名に達し、其復舊事業に全力を注ぐ等所謂三大難關を突破せし事なり。氏は植木、動物等を趣味として好愛す。

西巢鴨町會議員　西山茂幹氏

（西巢鴨町池袋一三二六）

西山氏は明治三十三年土佐に生る、縣立中學校を經て出京し明治大學に入る、卒業するや辯護士試驗に合格し横山勝太郎氏の法律事務所に事務を見習ひ、同氏が憲政會幹事長時代は秘書として活躍す、斯る歷史を有つのみならず現濱口總理大臣とは從兄の姻戚關係あるを以て氏が當町に居を卜するや既に町民の認むる所となり、何時の選擧にも氏の蹶起を期待しつゝありし、然るに果然昭和五年町會議員選擧に會するや、政界進出の第一歩として、町政の改革を叫び猛然として起ち遂に榮冠をかち得たるは其の人格、閲歷、手腕に於て

當然の歸結と云ふ可し、千里を飛ぶ其の驥足は他日の勇躍を期待されつゝある。

前東京市水道各種工事主任　二瓶穰氏

（瀧野川町西ヶ原一二八番地　電話王子四三八番）

氏は福島縣の人、明治八年三月十六日を以て會津若松市の釀造業家に生る。同家の祖先は山緒最も正しく清和源氏六孫王經基の後裔にして、氏は蒲生の家臣たり。祖父は國學無双の大勸進にして令名洽ねかりき。氏は會津中學第一期生として優秀の學績を以て卒業せるが現に鐵道省建設局長たる黑河内氏の如きは中學時代の後輩たる人なりと、大正二年一月東京市役所技手に就任、月給廿四圓を振出しにサラリーマンとなり、漸次累進して水道各種工事主任に擧げられ監督の任に當りて名聲高く、同十五年迄勤續して大に竭す所ありき又氏が現住地に來住せるは大正二年十一月にて當時は全くの寒村たりしが氏は土地開發に努力し尙ほ十年の歷史を有する『共樂會』は氏が昭和三年十二月會計兼總務として就任以來一層基礎を固め日掛貯金毎日四十圓一ヶ月壹千二百圓を取扱ひ毎年末廿日に總決算を行ふ規約なるが、其配當日迄は殆ど氏の獨專的に委せるが如き如何に信賴厚きかを窺ふに足る。又家庭には瀧野川町產婆會の會長として斯界の元老二瓶竹の女史があり、女史又姙產婦診斷に神技妙腕あり取扱懇切にして好評嘖々多數の助手と共に繁忙を極めつゝあり。第二國民の優生保健の聲漸く高き時、母性敎育、胎兒衛生に寄與せらるゝ女史の功勞亦大なるものあり。

日本フエルト株式會社

（王子町豐島九七〇番地　電話小石川三二二番三五〇四番　王子四番五九番）

日本フエルト株式會社は、大正六年の創立にして、資本金二百萬圓拂込額百二十五萬圓を以て同八年六月工場完成と同時に始業せり。同社の敷地は約壹萬坪の尨大なる土地にして、工場建坪は三千三百五十一坪四合餘に達し、其原動力の如きも三十九臺を備へて二百五十馬力を使用せり。而して現在の從業員は事務員五十三名、職工男一三一人、女一七四人、計三〇五人に上り現今の世界的不況時代にも拘らず、本工場のみは社運隆々として堅實なるコースを前進しつゝあり。

同社の製品は、羊毛を原料とするものにして、抄紙用フエルト並に家庭用毛布の製造販賣を業とし、抄紙用フエルトの如きは、全國の各製紙會社に販路を有し、年產額實に一百三十萬圓以上に達するといふ。玆に特筆すべきは同社の經營が從業員を家族的に優遇し、共存共榮主義を以て一致團結せる點にして、首腦者の時代に先驅する經綸に基くものと言ふべし。而して娯樂機關としてはピンポン倶樂部、テニス、野球等好むに委せ從業員の希望により花見、旅行等を企てゝ慰安會を催す。

同社は、宮川敬三氏が先輩多數の翼賛の下に創立し、爾來重役兼支配人として活躍今日の業績を收むるに至る。氏の嚴父は一ッ橋女子職業學校の創立者として功績甚大、藍綬褒章を授けられし人、氏は東京高等商業の出身、東京瓦斯東京製絨に奉職後、斯業を創始せしなり。同社の消防施設は公設も及ばざる完全の備へありと。

保坂金三郎氏

家屋税調査員
谷田川治水同盟會長

（瀧野川町中里二六六番地）

瀧野川町の南部、西ヶ原、中里、田端を貫流する谷田川は雨季兩岸に氾濫して慘害を與へ居住民の困苦名狀すべからざるものあるを見、奮然起つて之れが治水に努力しつゝある熱心家之れを保坂金三郎氏となす。

氏は慶應三年五月を以て瀧野川町中里の現住地に生る。土地の舊家にして富門、代々農を營み、嚴父友次郎氏は多年村會議員として功勞ありき。氏は曾て消防委員、瀧野川町消防第五部長を勤め、郡農會實行委員たりしことあり、鄕社平塚神社氏子總代たること四期に亘り大正十五年五月郡神職會は氏の功勞を表彰したり。又中里青年團の顧問として多年青年の指導啓發に盡力し、町內會中里火防組合長として防火警備に盡し大震災當時非常の活躍をなす。又無量寺檀徒總代たること多年克く寺門の興隆に寄與し、昭和五年四月には、家屋税調査委員に當選して其任に在り。前記谷田川治水會には不斷熱誠此大事業の達成を期す。一般より中里の元老として推服さる。

保坂己三治氏

前瀧野川町會議員

（瀧野川町西ヶ原二八三番地
電話小石川五三八三番）

三百有餘年十一代の歴史ある名門、保坂己三治氏は、明治三年六月廿九日を以て嚴父己之吉氏の長男に生る。保坂家の遠祖は、保坂治良左衛門と稱しその逝去が天和六年なるを以て假りに是れより起算するも、同家は三百有餘年を閱せる舊門にして當主は實に其第十一代目に當る此門閥にして素封家たる同家は代々農を營みしが、今や郊外發展と共に大地主、大家主として知らる。嚴父己之吉氏は明治廿二年町村制施行以來の村會議員として同三十七年五月まで十五年間引續き村治に盡し功勞多き德望家なりしが。大正十一年四月九十一歳の高齡を以て永眠せらる。己三治氏は明治四十三年推されて瀧野川町收入役に就任し、同四十五年六日辭任して翌大正二年五月衆望を負ふて町會議員に當選し爾來引續き昭和四年五月まで其職に在つて熱誠町の發展に貢獻せり。氏は人格高潔溫良至誠常に名利を度外にして心より町の圓滿平和に努め町民の眞の福利增進に不言實行の努力を續けらる。家庭は磯子夫人との間に四男三女あり、長息己之太郎氏は京北中學出身の俊才にして此名門の前途を飾るべき青年紳士たり。

保坂鏸太郎氏

前瀧野川町會議員

（瀧野川町中里二七四番地
電話小石川七、一一五番）

模範町會中里町會長として又瀧野川前町會議員として一方の重鎭たる保坂鏸太郎氏は、明治二十年二月十八日を以て嚴父故鐵太郎氏の長男に生る。同家は土地の舊門素封にして農を業とせしが、郊外發展と共に之を廢し夙に千代田火災、千代田生命並に日本徵兵の三大保險會社瀧野川代理店を經營し異數なる好成績を收めつゝあり。

氏は同町青年會團中一頭地を拔く先覺者として、大正十年五月輿望を擔ふて町會議員に當選し常議員其他の公職を兼ね大に町政の爲に活躍し其手腕を認めらる。又町内團體中里協和會の設立に盡力して其最高幹部となり、大正十四年中里町會と改稱以來會長の重任に在り。氏は又瀧野川町第二區劃整理組合長たるの要職に在つて克く之を完成し、町將來の發展に新生面を拓くの外土木委員、荒玉水道組合議員、瀧野川小學校保護者會幹事、武藏野高等女學校後援會幹事として常に公事に幹旋努力しつゝあり。

瀧野川町土木委員

保坂元次郎氏

（瀧野川町中里二六七番地　電話小石川七八九二番）

明治生命、東京海上火災、國華微兵等の各保險會社瀧野川代理店長として他の追隨を許さゞる實績を擧げ、其劇務の傍町公共自治に奮闘する人を保坂元次郎氏となす。

氏は明治二十五年十一月を以て瀧野川町中里の豪農源次郎氏の長男に生る。同家は代々農を業とせしも、土地發展と共に地主家主として富を累ね、中里町稀に見る邸宅を新築して各保險會社代理店を營む。嚴父源次郎氏は六十五歳にて健在石神井川用水組合總代たること多年、富士講廿三夜講世話人惣代たること亦多年、又赤坂豐川稲荷世話人、元鄕社平塚神社氏子總代等務めたる敬神家たり。氏は現中里下町會副會長、谷田川治水期成同盟會常任幹事、瀧野川第七小學校保護者會幹事、瀧野川公民倶樂部常任幹事等として公事に奔走し、立憲民政黨員として選擧毎に活躍せり。前記明治生命は二百萬圓全額拂込本邦最古の會社にて代理店として十週年となり、東京海上火災は三千萬圓全額拂込にて代理者として九年となり何れも信用厚く良成績を擧ぐ。家庭はすみ子夫人とに一男一女あり。

瀧野川町消防組小頭

保坂新藏氏

（瀧野川町中里二六六番地　電話小石川二、三三一番）

瀧野川町中里に於ける舊門素封の家として知らるゝ保坂新藏氏は、明治廿四年六月一日を以て嚴父故政五郎氏の長男に生る同家は農を以て業とせしより氏も亦瀧野川小學校卒業後は農事に從事したるが、市隣接町村の發展と共に之を廢し今や大地主として知らる。氏は毎回國勢調査の任に當り、日獨戰役當時は在鄕軍人會第七班長として活躍し功勞尠からず、中里青年團創立以來の役員として大震災當時は私財を投じて埼玉縣より白米を買取り避難民救濟に當る等任俠義氣の人なり、又火防組合の設立に盡力し、中里下町會と改稱後も副會長に擧げられ、第七尋常小學校保護者會幹事、平塚神社世話人等の公務に在るの外頗る消防に熱心にして町消防第八部小頭としし活動しつゝあり資性溫厚恬淡能く調和の美德あり友情に厚き德望家たり。

瀧野川消防第五部長

保坂鉎之助氏

（瀧野川町中里二六六番地）

保坂家は中里の名門にして文化の瀧野川建設に當り、父祖相繼ぎ幾多の功績を積む。鉎之助氏は其富門に入となり、祖先の精神を享けて公共の念極めて厚く、卒先自治の爲に盡瘁せり。

氏は明治三十年十一月八日を以て瀧野川町中里二六六保坂金三郎氏の長男に生る。祖父友次郎氏は明治三十四年十月より同四十三年八月まで瀧野川村會議員として貢獻し、父君金三郎氏亦公共事業に努力し町消防委員、瀧野川消防第五部長、鄕社平塚神社總代、中里青年團顧問、中里火防組合長、無量寺檀徒總代等を歷任し又現在に至る。氏も亦瀧野川尋常高等小學校卒業後父祖の業たる農を繼ぎしも幾何もなく土地發展し、地主家主として立つに至る。公務として夙に瀧野川在鄕軍人分會役員、前中里下町會々計、第二回及び第三回國勢調査委員等を勤め、現に瀧野川消防第五部長として令名嘖々たり。とよ子夫人との間に二男一女を擧げ、家庭常に春風靄靄たり。山岳踏破を趣味としキャンプ生活及寫眞を愛好す。

保坂鐵工場主

保坂傳次郎氏

（瀧野川町西ヶ原一二六〇番地）

切齒車專門の製作を以て知られたる保坂鐵工場は保坂傳次郎氏の獨力經營せる所、其優秀無比なる製品の聲價は斯界を壓する概あり。現に同工場に使用のホッビングマシンの如き氏の發明するもの時價一萬圓と稱せられ、又時價七千圓のミルシングマシンも氏の考案自製したる獨特のものにて如何に氏が天才的發明力に富むかを窺ふ可し。氏は明治八年三月三日國太郎氏の長男に同町中里に生る。十六歳の時機械製作に志を立て東京製銃株式會社修繕部見習工となり後砲兵工廠に入り研究四年、更に銃砲製造所の旋盤工となり王子機械製作所其他數ヶ所に於て實地に練磨し、大正元年秋現所に鐵工所を創立するに至る。令息禮二氏亦父君を佐け從業員と伍して益々優秀の製品に努めつゝありて信用愈よ厚し。氏は公共の念厚く御殿下町會役員として貢獻を怠らず、しの子夫人亦内助の効多き賢夫人たり。

王子町名譽助役

堀江勇右衛門氏

（王子町堀の内九三八番地　電話小石川八八七番王子五四番）

王子町の舊門素封として近鄕に聞ゆる堀江勇右衛門氏は、明治十八年九月八日を以て現邸に生る。夙に質業を營むを以て知られ、氏の怠らざる修養と名門の出たる人格美とは鄕黨の敬仰措かざる所にして、大正六年五月には早くも王子町會議員に擧げられ、爾來引續き町議に當選して町政に參與し、昭和五年中村助役の後を享けて名譽助役に推され江口町長の女房役として高遠の理想實現に當らる。又大正八年在鄕軍人分會長に擧げられ本郡軍人分會中第一位の好績を擧げ現に其職に在るの外、王子町消防組頭の要職をも兼ねて同町消防警備の任を完ふし、今や同町の柱石として德望を一身に鍾む。尙ほ氏は敬神の念深く堀の内白山神社總代として功勞多く大正十四年北豐島郡神職會より表彰さる。此他堀船衛生組合長、王子質屋組合長等にも擧げられ寸暇なき貢獻を續けつゝあり。

王子町會議員

堀江松五郎氏

（王子町堀の内九四三番地　電話小石川四六七〇番王子二八番）

堀江松五郎氏は明治十五年十月十一日を以て嚴父萬吉氏の長男に

生る。土地の素封にして祖父松五郎氏は町村制施行當時より四期に亘り村議として同町政に貢獻し、嚴父萬吉氏も亦村議たること三期自治公共に盡せる功勞頗る多かりき。明治四十四年氏は家督を相續し今日に至る。幼少瀧野川小學校を卒業し築地工手學校に採鑛科を專攻せしが嚴父の業を繼ぐに及び一時副業的たりし味噌釀造の業を復興し今日の一大盛況を見るに至る。其非凡なる經營の才と熱心とは一般の驚異とする所なり。氏は大正九年選ばれて王子町會議員に擧げられ、爾來引續き町議たるの外昭和五年家屋稅調査委員に當選又幾多の公職を兼務して町治に稗獻する所多大、信望益々加はる。氏は味噌釀造の外精白米商をも經營し商勢隆々たるものあり。常に不言實行主義を以て社會公共に奉仕する所は人の嘆賞措かざる點たり。家庭には關子夫人との間に三男二女あり一家和氣靄々として人の羨望する所なり。

前瀧野川町會議員

堀江鐘作氏

（瀧野川町西ヶ原九五四番地　電話王子一一三番）

今は瀧野川町の元老を以て敬仰せらるゝ堀江鐘作氏は、明治三年十一月四日を以て瀧野川町上中里の巨豪橋本與左衛門氏の四男に生る。年少澤田學校に學び長じて王子町の素封家堀江傳三郎氏長女かね子氏と婚約成り入つて同家養嗣子となる。明治三十六年四月現在地たる西ヶ原二本榎に邸宅を新築し、白米商並に質店を開業し土地の開發に資したが後白米店は閉鎖し、專ら庶民金融のため質業を經營して今日に至る。大正六年衆望を擔ふて町會議員に當選し爾來二期に亘りて町政に參與し、當時模範町と稱せられし平和と文化の町を建設するに努力せり。町内自治のためには龔に西ヶ原青年會副會長、郡聯合青年團幹事、西ヶ原互親會々長、第三小學校保護者會幹事等として盡瘁し又質商組合副會長にも擧げられて力を各方面に致しつゝあり。多年日暮里町長として令名高かりし岡田鎌市氏は氏の實弟にして、嫡嗣子鐵之助氏は明治三十一年の生れ、名門の出たる貫錄を具へ前途ある青年として一般より待望せらる。

前王子町會議員

堀江巷四郎氏

（王子町王子一三一九番地　電話王子一一五番）

功成り名を遂げて、今や一切の公職を後進に讓りて勇退し單だ畢生の心血を注ぎて經營の重責に在る大日本人造肥料會社に要職を帶ぶの紳士、是れを吾が堀江巷四郎氏となす。

氏は明治三年十月十七日を以て王子町下十條の榎本家に生る。明治三十四年堀江彌三郎氏の息女君子氏と華燭の典を擧げ入つて其養嗣子となり堀江姓を襲へるなり。氏は現在の大日本人造肥料株式會社王子工場の前身關東酸曹株式會社が、宮内省御料局の手に在りし時代より同所に奉職し、明治二十八年陸軍省に引繼ぎ更に二十九年十月拂下げて九萬五千圓の關東酸曹合資會社を設け爾來同社を株式會社とし五十萬圓の資本より漸次五百萬圓に增資し大正十二年二千二百四十萬圓の大日本人造肥料株式會社となる迄實に四十ヶ年間始終一貫此所に勤續して其發展に努力し現に同社の營業部長たる要職に在り。又氏は大正二年五月衆望を負ふて王子町會議員に當選以來、同六年、同九年、同十三年の改選毎に當選同町會の重鎭たりしが昭和三年滿期退職後は後進に讓り、專ら社務に鞅掌して東洋一たる同社の隆運に努力せらる。家庭に君子夫人との間に一男一女あり、令息眞一氏は帝大農科卒業後同社の小松川工場に勤務し、令孃靜香氏は正力勉氏に嫁す。

和洋錠前製作所主

細島丑松氏

（日暮里町元金杉一九〇三番地）

細島丑松氏は明治十一年五月を以て本所區向島洲崎町に生る。父君米吉氏は夙に眼鏡樣の製作を業とせしが、同十七年より和洋錠前の製作を開始し、氏も亦父君に從て其業を勵むと共に熱心に研究を續けて改善に改善を加へ、遂に獨創的完全無比の錠前を作出するに至り『細島錠前』の名は斯界に嶄然頭角を現はし、金物業界に氏の名を知らざるもの無きに至れり。同四十四年現地に移轉して工場を擴張し業況隆昌を極めつゝある際大震火災のため工場住宅共に烏有に歸せしも、氏は更に屈せず復興に努め多數從業員を指揮して再び今日の隆盛を招來するに至る。氏は日蓮の大人格を信仰し常に精神修養を怠らず、社會公共に盡すの念亦厚く現に正庭會理事部長として居住者の爲に貢獻せり。

瀧野川町消防組第五部小頭

保坂民次郎氏

（瀧野川町中里二五二番地）

溫厚篤實、不言實行を信條として社會公共事に努力しつゝある保坂民次郎氏は、明治二十一年七月八日を以て瀧野川町中里屈指の富門、保坂與吉氏の長男に生る。祖父故啓次郎氏は天保七年生れ明治廿八年五月村會議員に擧げられ以來村治に盡せし功勞者にして、嚴父は慶應元年十月生れ夙に篤農家を以て聞え、鄕社平塚神社氏子總代、國勢調査委員等を勤め常に慈善事業に心を寄せ積善積德の人として仰がる、氏は中里町會役員たりし外多年消防に奉仕し現に中里第五部消防副部長の重職に擧げられ又中里町會土木部長を兼ね能く奔走努力せり。

東京高等蠶糸學校長
從三位勳二等農學博士

本多岩次郎氏

（瀧野川町西ヶ原高蠶校勤務　小石川區駕籠町一二八番地）

氏は大分縣の人、慶應二年二月九日を以て舊杵築藩士工藤常英氏の二男に生れ、明治七年先代正久氏の養子となり、同卅四年家督を相續す、同廿七年駒場東京農林學校農學科本科を卒業し直に農商務省に入り同廿五年技手、同廿九年蠶業講習所創設と共に技師に任ぜられ、同卅六年同所長となりてより現在に至る迄三十五年間終始一貫同校の主宰として貢獻せらる。大正二年同所は文部省に移管東京蠶糸學校と改稱、更に專門學校令に依り高等蠶糸學校となり引續き校長たる榮職に在り、此間歐米に出張すること三回に及び同二年農學博士の學位を授けられ又蠶業界の權威として大日本蠶糸會副會頭に擧げられ渾身の心血を我が國蠶糸界に貢獻しつゝあり。眞に氏の如きは國家的功勞者として全國農民の崇敬の的たり。壽夫人との間に正雄氏あり既に一家を成し令孫多く、長女豐子、次女秋子氏亦他家に嫁す。

田端眼科專門療院長

別當有方氏

（瀧野川町田端四五二番地）

眼科專門の權威として最も信望厚き別當有方國手は、岡山縣二宮郡の人慶應二年六月を以て鄕里に生る。十六歳の時上京日本醫學專門學校の前身たる本鄕區お茶の水濟生學舍に學び卒業後當時眼科の泰斗として知られたる、故甲里醫學博士に就て專攻し、明治三十六年高崎市四谷町に眼科專門醫院を開き令名縣下に洽ねかりき。大正十年其分院を現地の田端停車場上に設置したるに始まる。氏の精達せる技術と嶄新完備の醫療設備とは一般患家の非常に滿足する所となり、門前常に市を成すの繁忙を極む。氏は閑暇を以て第一の趣味となし忙中繰に閑を得て勞を慰すと。

無盡業

平和無盡株式會社

（三河島町三河島二五〇〇番地　電話下谷六五五番）

資金の調達に最も便利にして近道であり、又勤儉貯蓄の美風助長となり、資産造成の端緒たる『無盡』は古來より庶民階級唯一の金融機關として利用されしものなるが、我が『平和無盡株式會社』は大正十一年八月大藏大臣免許の下に開業せる無盡會社中の無盡會社として、東洋唯一の堅實を誇り、最も安全、最も有利の組織にして、掛金は少く、而かも長期に亘り低利を以て利用し得るの特長あるがため信用頗る厚く、現に本社は勿論本鄕、四谷、赤羽、王子、板橋、小松川に會場を特設して加入者の便を圖り、且つ其給付方法も簡易にして利廻り良く加盟者日に月に增加しつゝあり。殊に同社は財界不況時代の打開策として斬新なる無盡會を考案し、事業資金調達のより好き協力者として活躍しつゝあると同時に、同社重役には有力なる一流實業家を網羅し實務には長き經驗を有する手腕家を配して理想的經營をなしつゝあり。而して昭和六年一月の總會に於て、專務取締役に實業界一方の重鎭矢部甚三郎氏を、常務取締役に信用手腕兼備の野澤信治氏を、取締役に溫厚の紳士牛久保淸四郎氏、及び監査役に飯塚半藏、石田寅藏の各實業家を擧げ更に同會社今日の基礎を築き上ぐるに絶大の功勞ありし前專務渡邊米三郎氏を顧問として着々業績を擧げ、今や不拔の信用を以て當局並に社會一般の推賞する所となれり。

平和無盡株式會社顧問

渡邊米三郎氏

（三河島町三河島二六八六番地）

氏は岐阜縣の人、明治十八年三月を以て鄕里に生れ、拾四歳の時上京、淺草區の某唐木問屋に勤務すること拾年、世路の辛酸を體驗し、廿五歳の時南千住驛に石炭卸商を營むに至りしが、時利あらず蹉跌し後東京共立無盡會社に入りて勤續すること實に十有二年間、同社の向上發展に努力すると共に無盡經營の實際的手腕を磨き、玆に氏は時代の要求に應じ中產階級以下の小商工業者の金融機關たる『平和無盡株式會社』の創立を企劃して開業爾來專務取締役として多年其發展に努力し今日あるに至らしむ。

瀧野川町名譽助役

戸枝錦太郎氏

（瀧野川町田端八〇番地
電話小石川三六二六番）

瀧野川町政一方の重鎮として其頭腦の明晰と俊敏の手腕とを以て鳴る戸枝錦太郎氏は、又田端の名門富豪として知らる。氏は明治二十年十月十七日儀助氏の長男に生る。祖父半兵衛氏は天保六年を以て生れ、維新當時田端村組頭を勤め、町村制施行に當り村會議員に擧げられて村治に盡し、嚴父儀助氏は文久元年九月の生れにて、大正二年擧げられて町會議員となりて公共に奉ずる所多く、更に同六年には當主たる錦太郎氏町會議員に當選して以來引續き既に三期に至り町議に列して町治に貢獻し常議委員、荒玉水道組合會議員、其他幾多の公職を兼務し絶倫の精力を以て活躍せり。氏は同四十二年より質舗の開業をなし又浴場の經營、砂利採收業等理財の才に長じ昭和五年現在の宏莊なる邸宅を新築し父祖の家名を彌が上に顯揚す。現に上田端町會長、第七小學校保護者會長として熱心努力し又本年一月廿七日名譽助役に大多數を以て當選町政打開に奮勵せり。

瀧野川町學務委員

遠山信太郎氏

（瀧野川町田端二六番地）

瀧野川町田端の德望家を以て知らるゝ遠山信太郎氏は、明治十三年二月十七日を以て嚴父力五郎氏の長男として日本橋區新葭町に生る。祖父佐吉氏は武州川越の人、瀧野川田端三九番地に來住す。力五郎氏は其長男として天保十年十月を以て生れ明治六年の交、日本橋區傳馬町に出で青物商を營み後新葭町に移る。越えて同十九年田端の現住地に歸來して農業を營み、八幡神社氏子總代、大龍寺檀家惣代、村友會理事等を勤め、同四十三年瀧野川村會議員に擧げられて村治に盡し、大正六年七十九歳を以て長逝せらる。當主信太郎氏は農業の傍ら植木業を勵めるも、今は地主として又日本共立生命保險の田端代理店として異數の好成績を擧げつゝあり。常に公共事業に盡力し殊には町土木委員現に學務委員たるの外上田端町會最高幹部、第七小學校保護者會會計其他の要職に在り家庭に艶子夫人との間に二男一女あり、長男泰司氏は早稲田實業を出で近衛步兵三聯隊に入營除隊後は父君を補佐しつゝある前途有爲の青年紳士なり。

王子町學務委員
北豊島協同組合專務理事

遠山隆三氏

（王子町大門町一二四一番地
電話王子三〇六番）

熱血的志操の人にして自治及政黨を刷新廓清すべく多年壇上に獅子吼して令名遠近に洽ねき青年有志、是れを吾が遠山隆三氏となす。

氏は埼玉縣の產、明治三十年六月二十四日を以て北足立郡横曾根村に生る。一家と共に現地に來住、初め水車業を經營白墨製造販賣を業とす。大正十一年三月日本大學法科を卒業し爾來社會公共の爲に奮闘して殆んど寧日なき活躍をなす。明治四十三年王子小學校同窓會を組織し、大正九年には王子町青年團を創立して評議員となる。現に王子町學務委員の要職に在るの外、王子町教育會幹事、王子小學校後援部第一部委員、王子町聯合町內會幹事、大門町會庶務係、

同消防部長、王子町青年團警救隊第二分隊長、昭和青年同志會理事長等に擧げらる。

氏は庶民生活の改善向上を圖らんとし、北豐島協同購買組合（滝野川三六〇所在）の專務理事たる重職に擧げられ、新進の識見抱負を以て熱心日用品販賣の協同店經營に當り、消費組合精神を徹底的に達成し、優良の實績を收めつゝあり。氏の如きは眞に前途有爲の好紳士と謂ふべし。

王子宮本町會長
メリヤス問屋
鳥生清吉氏
（王子町王子一三二八番地）
（電話小石川六二七一王子九七六番）

一身を農より起し、一轉して印刷局の雇員となり、更に一轉途に覇をメリヤス業界に稱へて旭日昇天の成功をなせる立志傳中の人、是れを鳥生清吉氏となす。

氏は四國伊豫の產、明治十五年一月三十日愛媛縣越智郡波止濱町の農家鳥生長藏氏の六男に生る。農を以て祖業とせる舊家にして氏も亦鄕學を出るや、直ちに農業に從事したるが、性來覇氣に富むの氏は碌々たる農民を以て滿足する所にあらず、機を見て躍躍せんとする折柄、適ま明治三十七八年戰役勃發し氏も亦徵されて軍に從ひ、滿洲の野に奮戰して諸所に殊勳を奏し、勳八等に敍せらる。同四十年素志を伸べんとして上京、先づ東京府下王子町內閣印刷局抄紙部雇となり、爰に精勵すること實に八ヶ年、氏は一片のサラリーマンとして終始するを快とせず、斷然職を退くや、將來メリヤス製造業の有望なるに着眼し、豫ての貯財を擧げて獨立獨歩遂に現地に莫大小製造所を設け、全力を擧げて之に努力するや、其製品の聲價忽ち市場に高まり、年と共に隆昌に向ひ茲に氏は業界の一角に堅壘を築くに至れり。而かも時代の趨勢を看取するに敏なる氏は、其製造を一般下請に任せて專ら仕入販賣の問屋として現在の繁榮を致せり。氏は亦公共方面に盡力すること厚く一般の信望を擔ふて今や宮本町會長に擧げられ、更に王子町方面委員並に東京府方面委員として民業唯一の味方たる外東京莫大小商同業組合代議員兼副部長たり。

先夫人との間に清一郎、次郎との兩氏あり、店員四五名は常に寸暇なき活動を續けつゝあり。

上練馬尋常高等小學校長
豐田春陽氏
（石神井村一七六三番地）

本郡生え拔きの育英家として又教育界稀に見る人格者として令名高き吾が豐田春陽氏は、明治十七年四月二日を以て石神井村に生る。同三十五年三月廿八日東京府師範學校を出で、大正二年二月廿二日石神井尋常小學校訓導に任ぜられ、勤續十年の後同十二年二月三十日豐溪尋常小學校々長に榮進し更に同十三年三月三十一日尾久町の西小學校長に榮轉し、昭和二年上練馬小學校訓導兼校長に轉じ今日に及ぶ。氏は國民教育上一家の見を持し。常に人材の育成に努め同校學務委員、青年訓練所主等として熱心教育の任に當り、父兄の信賴最も深し。尙ほ豐田氏は、身を以て後進の指導啓發に當る眞の育英家にして、爰には石神井驛際に武德館の建設に努力し、青年のため修養講話會を開催し、又武士道の皷吹柔劍道の鍛練を奬勵して質實剛健の氣風を涵ひ、現代青年の思想善導に竭す所多大、現任地練馬校今回の大改築にも亦與て力ありき。

王子荒川尋常小學校長
栃木淺吉氏
（王子町下十條九五二番地）

王子町に教鞭を執ること廿有餘年、熱心なる教育家として令名ある栃木淺吉氏は明治十六年十月十六日を以て王子町下十條に生る。同三十四年十二月東京府師範第二種講習科を卒業し同卅七年七月廿二日栃木縣河內郡塙德尋常小學校准訓導となり同三十八年七月廿五日同郡大澤尋常小學校訓導に進み、同三十九年三月三十一日栃木縣師範學校講習科入學のため退職、同四十七年七月十八日同郡富屋尋常高等小學校訓導となり、同四十一年五月二十二日訓導に昇進、同四十三年十月王子町に歸來し、王子尋常高等小學校代用教員を命ぜられ同四十四年十月十日同校訓導となり大正五年九月一日王子第一尋常小學校訓導に轉じ、同十三年三月三十一日同町荒川尋常小學校長に榮轉し以て今日に及ぶ。

公認建築代願
東京建築代願人組合
事務所（瀧野川西ヶ原九〇六番地）
（電話小石川三二三六番）

昭和五年八月二十日より實施の警視廳令第二七號中の第十九條に基き、市隣接町村の建築代願人の理想的大團結を以て『東京建築代願人組合』は設立され而かも其組合長として建築設計業界の權威龍谷長次郎氏の統帥せらるゝは斯界のため大に悅ぶ可きなり。

當組合は昭和三年四月三十日僅かに八名の同業者相倚り、東京北都設計同業組合を組織したるに濫觴し、翌年には之を東京設計同業組合と改稱し、東京府會議員有馬淺雄、丸山秀天氏を顧問に推戴して專ら不正業者の反省と業界の改善刷新に努めつゝありしが更に昭和五年八月二十二日より東京建築代願人組合と改稱して東京市內は勿論、帝都郊外の建築物法施行地域全體內に業務所及び出張所を有する者を打つて一丸とし、組合員とし、同日滝野川町西ヶ原クラブに總會を開き役員選擧を行ひし結果、會長に滝野川町西ヶ原九〇六番地龍谷長次郎氏、又副會長に喜多川一郎氏重任して今日に及び、現在會員は二百餘名に達す。同組合が卒先廳令に依り統制あり權威ある理想的團結を成し警視廳公認の下に惡風一掃に貢献しつゝあるは、一般依賴者の感謝する所なり。

文華高等女學校長
戸野みちゑ氏
（巢鴨町巢鴨一一〇四番地）
（電話大塚三〇〇番）

女流教育家の權威として斯界に重きをなす戸野みちゑ子女史は、夫君周次郎氏と共に明治大正に於ける教權の大家として錚々たる聲名を帝都教育界に馳す。夙に東京女子高等師範學校を卒業し、多年子女教育に身を委ね今や『文華高等女學校』の校長として信賴最も篤し。同校は大正十一十二月十五日十文字こと子、斯波安子氏と共に設立許可を得て其校長となり學風學績共に大に揚がる。現に十文字女史は自彈術を斯波安子女史は修身を擔任し同校の特色たる體育に留意せり。尙ほ同校は修業年限五ヶ年にて職員は何れも一流の專門大家學科を擔任し、成績頗る良く一般より入學希望者先を爭ふの有樣なり。交通の便も亦良く大塚巢鴨兩驛より約三丁に在り。

前岩淵町會議員　沼野縫之助氏

（岩淵町赤羽五〇二番地
電話赤羽一一一番）

沼野氏は元治元年十月岩淵町赤羽の杉浦紋四郎氏の次男に生る。明治十三年十七歳にて沼野家の養嗣子となり、二十歳の時家督を相續す、卅五歳の時町會議員に擧げられ、爾來改選毎に當選して約三十ヶ年間町政に參與して大正十四年の任期滿了迄終始せり。此間常設委員たる學務委員、土木委員及教育會評議員、兵事議會委員、第一回國勢調査委員等の公職に擧げられ、同町の長老として敬仰の的となる、また同地方の通信事務の整備完成に功績多かりし赤羽郵便局長の要職に大正六年より同十二年に至るまで勤續さる。

氏は敬神の念殊に深く、村社赤羽八幡神社氏子總代に擧げらるゝこと三十有餘年、建築委員の任に當り再建改築大いに盡す。更に御大典記念事業として同八幡神社々殿改築を實現せんと活動さるゝなど稀に見る篤行家なり、又祖先崇拜の念厚く同地寶幢院檀家總代たること二十有五年、本堂の再建、庫裡の修繕、敷石の改修等私財を喜捨して大に斡旋し盡力を怠らず、故に感謝狀賞盃山の如し。

長男沼野佐次郎氏は、嚴父の公職を去ると同時に大正十四年擧町民の信望を擔つて町會議員に推され、且つ岩淵青年團長として熱心青年の修養體育に努め傍ら父君を佐け今や町長として令名あり。

岩淵町長　沼野佐次郎氏

（岩淵町赤羽五〇二番地
電話赤羽一一三番）

敬神崇祖忠孝道義の範を一世に垂れ、父祖相繼で公共自治に貢獻し德望郡下に洽ねき家、是れを赤羽の沼野家となす。

沼野佐次郎氏は實に町政に三十ヶ年間終始し功績偉大なりし沼野縫之助氏の長男たり。嚴父は元治元年に赤羽の杉浦家に生れ十七歳の時沼野家に入り二十歳家督を相續し卅五歳の時町會議員となり爾來大正十四年迄約三十ヶ年間社會公共に盡し、又赤羽郵便局長として功勞多大なる人なり。氏は明治十九年十月二十四日岩淵町赤羽の沼野家に生れ、同三十九年三月早稻田中學三學年を修了して家事に鞅掌し、大正三年十二月赤羽郵便局長代理となり同八年十月迄勤續し同十二年十月岩淵町消防組第三部小頭に進み、同十四年五月町會議員に擧げられ、昭和四年五月再選し、同年八月一日には輿望を負ふて岩淵町長たるの榮冠を擔ひ以て今日に至る。此間氏は大正十四年六月學務委員に推され、昭和二年十月岩淵町青年團長に擧げられ、同四年二月同消防組第三部長に進み、同年三月荒玉水道組合會議員、同八月豐島病院組合會議員等に歷任して令名噴々たるものあり。又父君の意思を繼承して敬神崇祖の念熾なり。もと子夫人との間に六男あり、長男佐一郎君は目白中學卒業後高等工業へ、二男正二氏は同中學五年に、三男俊之助氏は早稻田實業に其他小學在學中なり。

大木金兵衛氏

東京府會議員

（練馬町三一一番地）

大木氏は明治五年五月下練馬の素封家に生る。幼にして學を好み長ずるや青山學院前身英語學校に學び進んで明治大學法科に入つて法律を專攻す、後家業を見る傍ら嚴父の後を承けて村會議員に擧げられ、更に同村長に推され爾來廿有餘年一日の如く村治に盡し治績頗る大なり、此間氏の才學は郡民の認むる所となり明治四十四年一躍東京府會議員に當選、當時氏は西多摩郡選出の木崎平六氏と共に府會に於ける最年少府議として一異彩を放つ。公職は村會議員、郡會議員、郡參事會員、郡農會評議員、郡教育會副會長、府會議員、府參事會員、府會副議長、本郡町村長會長、北豐島町村組合病院管理等の公職を歴任し、又現府會議員たるの外練馬町長、北豐島郡聯合青年團長、郡農會々長を兼ね熱心に本郡内の保健衛生事業を始め、數萬の北豐健兒の父として常に修養訓練、體育自治精神の涵養に力め或は講演會講習會を開き、或は聯合體育競技會を催す等青年の向上に努力し、又郡農會長としては農村の農産物改良發達に資すべく時々各町村に品評會を催して之を奬勵し、教育に衛生に將た勤業に席の温まるを知らず。氏は一人で名譽慾を以て能事とする者にあらず『農村の人は農事を安んじて精勵させたい、自分は代理となつて働くのだ』と語る、至言といふ可し。

氏は府政の樞機に參ずること廿五ヶ年本郡政友派の元老として名聲郡下に洽し。

大野五三郎氏

耕牧舍牧場主

（日暮里町谷中本六三番地）
（電話下谷五三一〇番）

大野氏は我國財界の巨人澁澤青淵子と鄕里を同じくし、子爵の寵遇厚かりし人である、明治元年八月埼玉縣大里郡八基村松村淺次郎氏の二男に生れ幼時大野姓を繼ぐ、長ずるや上京して今の商科大學前身たる高等商業に入り中途學を廢し、澁澤子の深川邸に仕ること六年半、更に淺野セメント株式會社、横濱サミユル商會等に就職し、大川平三郎氏經營の製材製紙事業に轉ず、氏が二十八歳の時、下谷上根岸に於て實父松村淺次郎氏が當時澁澤子、益田孝氏等の共營に成る牧場の一部を繼承して經營しつゝありしを補佐する事となり大川氏の製紙事業を去つて、牧場經營者となる。爾來苦心奮鬪し、同三十五年六月現地に移轉開業耕牧舍の盛名と信用を得たのである。耕牧舍は下總の御料牧場を、明治十年頃三井系の手に拂下け、澁澤子爵、益田男爵等の經營せるもので其沿革歴史最も古し、今や其業績は都下第一位を占めて居る、氏は公共に熱心に大正十年日暮里町會議員衛生委員に擧げられ、東京牛乳畜産組合評議員、同城北支部長、町友會長等に歴任す。

大野鶴松氏

志村々會議員

（志村大字志一九六番地）

篤農家として各博覽會、各共進會より賞牌を受け、又牧畜家とし

て牛乳調節に努力し表彰せられたる熱心家是を大野鶴松氏となす。

氏は明治十三年十月七日本郡志村の現住所に故父君熊次郎氏の長男に生る。同家は現志村々長大野作次郎氏の分家にして素封の門地たり。郷校を出でゝ家業の農事に精勵し其農事改良に貢獻したる所頗る多く、大正博覽會に蕗蔔を出品して銅牌を受領し、大正五年一月稲の抜穂共進會に特等賞を、大正三年七月の東京共進會に茄子を出品し宮内省御買上の榮を擔ひ、富山縣主催一府十縣共進會にては銀牌を受くる等其農産物の優秀なるを證すべし。

氏は大正十一年牧場大養舎を營み搾乳業を創む。昭和四年三月牛乳畜産組合北部製酪所委員として都下牛乳調節に努力し功勞多く感謝狀を贈らる、又現に東京牛乳畜産組合豊島支部長の要職を帶ぶ。公共に熱心なる氏は村民の信望頗る厚く昭和四年五月村會議員に當選し土木委員を兼ぬ。いの子夫人との間に三男三女あり、長男壽太郎氏は現に志村在郷軍人分會の評議員、さわ子氏は豊島高等女學校出身のオ媛なり。

大野寅藏氏

（瀧野川町中里三七四番地）

瀧野川町家屋税調査委員

氏は埼玉縣の人明治十一年十月十日故德之亟氏の三男として埼玉縣北足立郡美谷木村に生る厳父は大工棟梁たりしが長兄が農業に從ひしより氏は建築の業を繼ぎ、廿二歳市外落合町石井建築工務所に入り技を磨くこと三年、後遠藤組の下請となり小石川高等師範學校建築工事を初め、更に鈴木組の下請として各所の工事を完成す。後廿六歳獨立して淺草區田原町に建築請負業を始め、渡邊組下請として奮闘すること三年、郊外發展地の瀧野川町へは大正二年出張所を設け、同八年本店及住宅を新築して來住、今や業界一方の頭目となり税額八百餘圓に及ぶの大成をなす。此間氏は同三十七八年戰役當時砲車製造に犠牲的奉仕をなし陸軍當局より功勞を褒賞せられしことあり。又古代建造物の研究を思ひ立ち大正三年四月東海道より京阪方面奈良伊勢等に神社佛閣を實地に研究して大に得る所あり。其後鄕社平塚神社舞樂殿を造營せり。氏は中里町會、同町會青年團役員、平塚神社氏子總代の外昭和五年家屋調査委員に當選し公共自治に盡瘁す。瀧子夫人との間に英次郎氏あり神田工手學校を出で斯業の研究深く亦棟梁の材幹たり。

大野虎雄氏

（三河島町三八番地）

三河島町屋體育演武場主

大野氏は慶應二年二月二日新潟縣南蒲原郡大崎村に生る、夙に文武兩道に志し明治十五年鄕里大崎村小學校教員となり、同十七年武道の奥義を究めんとして皇都に出で、正三位子爵山岡鐵太郎の門に入り專心劍道を修業し大に自得する所あり、更に各地を遊歴し知名の士と試合して體驗工夫し、同三十一年歸國と共に三條町米北中學擊劍教師に聘せらる、明治三十五年再び全國を武者修業として漫遊し、警察署、中學校及び各縣の武德會を訪問し知名の武道家と試合つて驍勇を轟かし、山梨縣鹽山に道場を開きて土地の青年子弟に教授し、更らに足尾銅山の有志懇請に依り同地に道場を設置して教授の傍ら、同地警察署囑託となる。氏が武道家として特筆すべきは、御前試合と外國皇族の御臺覽である、即ち明治二十八年上野公園摺鉢山下に於て畏くも　明治大帝陛下の天覽の榮を賜はり大に聲譽を揚げ、越えて同三十六年日光へ獨逸皇族ババリヤ洲皇族リフレート殿下御遊覽の際、金谷ホテルに於て殿下の御召しを蒙り擊劍並に諸流の型を臺覽に供し非常なお褒めの詞を賜はる、又同四十一年の全國武道大會には全國の大家知名中の選手として大に玄奥の妙技を揮ひ、見事優等賞に入りて名刀一振を賞授せらるゝ等實に全國的に名譽を博せられたる一人者たり。

大橋春藏氏

（三河島町三河島三六番）

前土地區劃整理委員

遠く祖は宇多源氏に出で由緒正しき系圖を有し成功傳中の一人者たる大橋春藏氏は明治元年二月を以て岐阜縣不破郡栗原村川瀬德右衛門氏の二男に生る。川瀬家の祖は宇多源氏に出で佐々木姓を名乘り、江南佐々木六角の十七代の後胤兵庫介源政知が戰功に依り近江大上郡北川瀬南川瀬二ケ庄を所領し姓を川瀬と改む。後小右衛門宗清外三名が四ケ鄕に領るゝに及び、氏の祖先は栗原村に住し連綿厳父に至れるなり。氏は十六歳京都に出で、後東上明治廿七年戸田式部官の算盤師匠たりし大橋重譯氏の養嗣子となり大橋姓を襲ふ。同三十七年より大正四年まで深川區靈岸町に燐寸製造東榮社を經營、頗る隆盛を極めしが之を他に讓渡して現地に移り、家主たる外信州名産の味噌を販賣せり氏は町内公共事に厚く、居住民其德を慕ふ。大正十三年以來第六十三區土地區劃整理委員となり同地將來の爲め獻策し功勞著大なりき。

尚ほ發賣の信州味噌は特に一般家庭に賞美され注文殺到せり。

太田新氏

（王子町王子警察署上電話王子二二三番）

太田療院主

外科專門殊に花柳病科の權威として知らるゝ太田新氏は茨城縣の人、明治十二年四月十九日新治郡土浦町に生る。夙に醫業の社會民人を救ふ唯一の天職なるを思ひて之に志し、大正元年一月二日醫術開業の免狀を得て翌二年三月二十二日王子町に現療院を開き花柳病專門を標榜して今日の信望と大成をなすに至る、大正十二年王子警察署上に高莊の洋館を新築し益々醫務に精勵さる、殊に氏が常に患者に同情深く貧困者には自ら進んで施療をなし更に階級差別なく懇切に患家に接するより頗る好評を博しつゝあり。令閨は產婆看護婦の免許を有しつゝも專ら夫君を助け院務を補佐しつゝあり。

大畑吉一氏

（瀧野川町瀧野川三二六番地電話小石川三七五九番）

大畑伸銅所長

伸銅事業界の巨株、合資會社大畑伸銅所長大畑吉一氏は厳父榮次郎氏が明治四十五年四月現地に敷地三千餘坪、總建坪二千餘坪の工場を新設し年額六十餘萬圓を突破し斯界屈指の大工場として知られ優秀なる製品市場を壓しつゝあるが、大正十四年厳父永眠と共に氏は之を繼承自ら經營の任に當らる。氏は崎玉縣北足郡膝折村に生れ築地工手學校を卒業し多くは本邸たる膝折に在り、同工場には創業以來の忠勤者辻谷嘉一郎氏支配人として萬端を鞅掌しつゝあり、辻

谷氏は鳥取縣の出身、能く百餘名の從業員を指導し、全國に聲價を揚ぐるの手腕家たり。

巣鴨町收入役

大倉博太氏

（巣鴨町上駒込八四七番地）

明敏なる頭腦、周到なる用意を以て大町村の出納事務に當り裁斷流るゝが如き手腕を發揮しつゝある吾が大倉博太氏の如きは、また模範的巣鴨の建設に與れる一偉材たり。

氏は明治二十七年五月九日を以て岡山縣邑久郡玉津村に生れ、夙に岡山縣立第一商業學校を卒へ、東都に出で早稲田大學に入り大正九年大學部商科を出でたる商學士なり。海の王國日本郵船は氏を會計係に聘せしも、幾許もなく横濱船渠株式會社は氏を會計係主任に聘するに至る。以て氏の俊敏なる才腕を知る可し。後大正十一年七月巣鴨町信用組合町金庫創立事務に聘せられ、其力量と人格とに厚き信頼を受け、遂に大正十三年七月巣鴨町收入役に推擧せられ、再選二期在職中たり。氏が就任前迄は町一般經濟も順調靜穩なりしが、大震災直後の事として俄然町財政の膨脹を來し、幾多新施設に伴ふ豫算の運用上難局に處して按排宜しき得、小學校の新設、役場廳舍の完成、大下水計劃の實現等氏の財務整備に獨特の手腕あるを證して餘りあり。

現に氏は東京演藝株式會社相談役、大井川電力株式會社囑託、和洋女子職業學校顧問等に推され、綽々たる餘力を盡し、更にスポーツマンとしては水泳に湛能にして神傳流師範たり、其他謠曲、釣魚、撞球、寫眞、讀書觀劇等多趣味にして、夫人を美津子と呼び同町の名門木橋喜右衛門氏の女、其の間に惠美子孃を儲く、美津子夫人は貞淑の聞え高く家庭和氣藹々たり。

日暮里町會副議長

大熊三郎氏

（日暮里町金杉六六七番地　電話下谷五七七番）

希望は我が勢力なり。又希望は難事を知らずと。正義と信ずれば一歩も退かず、勇往邁進遠大の希望を達成しつゝある人是れを大熊三郎氏となす。

氏は埼玉縣の人、明治三十年一月十八日南埼玉郡菖蒲町に生れ、夙に實業界に雄飛せんと志し、同四十四年十五歳にして上京、日本橋の日本アルミニューム製品販賣所に入り實地に輕銀工業を研究し、大正六年には早くも獨立して日暮里の現住地に工場を設け、職工十五六名を使役するに至る。同工場のアルミニューム釜は頗る好評にして近時文化生活の必需品と化し產額五萬餘圓に達せり。此の間氏が工場經營の奮闘振りは以て青年の教訓とすべき點多々あり、從て勞働階級に理解と同情とを有し襲には町立職業紹介所設立を主唱して完成したり。

大正十四年の町議改選に睦會より推され最年少を以て當選し昭和四年五月普選町議戦には五十二名の立候補者中第七位再選の榮冠を荷ふ、又以て氏の衆望熱烈なるを知る可し、氏は初期より常議委員となり現に議長代理にして衛生委員を兼ね、又西部睦會顧問、埼玉縣人會副會長アルミニューム同業組合副會長產業調査委員、其他大小の公共團體に役員たり。氏の大志と男性的天資は鑾て中央政界に雄飛すべく、現に同町民政派の重鎭として嶄然頭角を現せり。

瀧野川町土木委員

大山金藏氏

（瀧野川町小原八七二番地）

設計製圖の造詣深く多年建築の實際に當りて經驗最も深く現に建築請負を業とする大山金藏氏は、公共心の熾んなる有志の一人たり。

氏は栃木縣の人、明治十二年十一月一日を以て下野に生る。夙に上京して建築業界に入り而かも曾て京都府下より出馬衆議院議員として令名めりたる土木建築請負業の清水仁三郎氏と共に提携し、大正四年には大正建築株式會社を創立し、世界戰亂後の好況時代を受けて社運隆々たりし同社の取締役となり、約五ヶ年間も勤續して大に活躍せり。本町に來住してよりは常に自治公共の事に熱心盡瘁して一般の信望厚く、現在瀧野川町土木委員の要職に擧げらるゝの外、瀧野川町小原會副會長、瀧野川第二小學校保護者會幹事、瀧野川町聯合會幹事等に推擧せられて忠實に奔走せらる。氏は又麴町區有樂町日比谷倶樂部の賣店を經營する外、自宅にありては大成火災保險株式會社代理店をも經營して活動しつゝあり。

日暮里町役場主事

大竹幸松氏

（日暮里町旭町二丁目一四四番地）

氏は福島縣の人、明治廿三年十二月二十日を以て河沼郡廣瀬村八郎氏の四男に生る。明治四十年三月郷里の私立坂下講學堂を卒業、同年十二月試驗檢定にて福島縣管内に於て尋常小學校本科正教員の免狀を得、大正三年研數學館中學科を同四年正則英語學校初等科を修了。明治四十一年十二月福島縣耶麻郡堂島小學校訓導、翌四十二年同郡相川小學校に轉じ四十三年七月退職と同時に仙臺稅務監督局坂下稅務署に奉職、大正二年四月退職して同四年十二月現日暮里町役場臨時雇日給五十錢を振出に翌三年雇を經て同七年三月書記に進み、同九年稅務主任、同十一年課長となり、田宮町長就任と同時に主事制を置き氏は稅務課長兼主事に任命され、町政事務の統一整備に當り。著々面目を一新しつゝある精勵家たり。

瀧野川第八小學校訓導

大石紫郎氏

（瀧野川町西ヶ原五四三番地）

十七歳にして小學校教員となり、爾來二十年間一日の如く國民教育の天職に在つて、令名ある大石紫郎氏は日本大學商科をも卒業したる力行努力主義の人なり。

氏は靜岡縣の人、明治二十七年十一月二十八日を以て志太郡青島町下青島八二番地に生る。明治四十三年四月一日靜岡縣志太郡笹間尋常小學校准訓導となり、教育家たる第一歩を投じ、同四十四年四月八日同郡小川尋常高等小學校准訓導に轉じ、大正三年十一月二十九日靜岡縣安部郡尋常小學校教員養成所に於て所定の學科を修了し、同年十二月十四日志太郡六合尋常高等小學校に奉職、同四年三月十二日訓導に任ぜられ越えて同七年十二月十八日郡合により退職し、同八年七月二十六日瀧野川第三尋常小學校訓導として來任、引續き勤務して大にその手腕を認められ、昭和五年三月三十一日芳賀校長の榮轉と共に同校首席訓導として就任現在に至る。氏は此間大

正十二年三月三十一日日本大學專門部に於て商科を卒業したる精勵家たり。

三河島幼稚園第四小學校長

大城戸平四郎氏

（上板橋村小竹二三五二番地）

教育界に在ること實に三十ヶ年、人生の大半を人材の陶冶練成に當り、而かも校長として二十年間の久しきに亘りて教育行政に貢獻し令名府下に洽ねき育英家に大城戸平四郎氏あり。

氏は荏原郡の人、明治十三年三月十八日を以て現在の荏原町たる平塚村下蛇窪二二一番地に生る。明治三十五年三月二十八日試驗檢定を以て本科正教員となり、同年三月三十一日荏原郡大井町大井尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同三十七年九月二十一日同郡目黑村目黑尋常小學校訓導に轉じ勤續九ヶ年大に其力量を認められ、大正元年十月十五日抜擢されて同郡六郷尋常小學校訓導兼校長に榮轉し、後大正四年三月三十一日を以て平塚村（荏原町）杜松尋常小學校訓導兼校長並に同杜松農業補習學校訓導兼校長に榮轉し前後十ヶ年間一日の如く精勵して幾多の功績を遺し、同十四年九月七日同町第二荏原尋常小學校訓導兼校長となり、同年十二月一日世田ヶ谷第二尋常小學校訓導兼校長に轉じ、昭和二年三月本郡三河島町第四峡田尋常小學校訓導兼校長に榮轉し、同三月三日同町立青年訓練所主事を兼務し父兄並に青年子弟間の信頼頗る厚し。

向春堂醫院長醫學士

折本勝治氏

（瀧野川町西ヶ原九二八番地　電話王子二六三番）

折本氏は福井縣の產、瀧野川聖學院中學を辛へ刀圭家を志して、東北帝國大學に醫科を專攻し、大正六年卒業と共に、同大學附屬病院加藤內科に實地研究を遂け、翌年七月神田駿河臺の杏雲堂病院に勤務して、一般內科は勿論特に心臟腎臟病に關する病理の研究を重ね同九年七月西ヶ原の現地に醫院を開業して今日に至る。氏は內外科往くとして可ならざるなきも、特に多年專門的に研究された心臟病、腎臟病の治療に至つては最も得意とする所。公職としては第二校々醫として多年盡瘁され今猶瀧野川町醫、東京府立瀧野川商工學校々醫、瀧野川町中里の聖學院中學校々醫を兼ね常に熱心第二國民の保健衛生の爲に努力せられて居る。

前南千住町長

岡崎直大氏

（南千住町五丁目二五番地　電話淺草九三三番）

本郡內の古參町長として常に公平無私の態度を以て公事に臨み、二十ヶ町村長中の敏才、智囊として推重せらるゝ岡崎直大氏は、新潟縣の人、明治九年五月を以て鄕里に生れ、夙に上京明治大學を卒業す、後南千住町に來住して薪炭問屋を開き自ら經營今日の信用を博するに至る。夙に町會議員に推されて町政に參與すること多年、大正四年十月には名譽助役に當選し更に同六年六月町長に擧げられ、同十四年まで二期八ヶ年其重職に在つて町政各般の面目を一新し、引續き町議たりしが、昭和四年八月三度び町長に擧げられ、豐島病院組合議員を初め、江戸川上水道組合議員兼常設委員となり、町教育會顧問等として公務多端席の溫まる時なき活躍をなし、又多年懸案の塵芥處分に一新名案を策して町衛生方面に貢獻し、町內會親友會々長として克く同方面の共存共榮に盡し令名嘖々たり。

瀧野川第二尋常小學校長

岡崎彦右馬氏

（瀧野川西ヶ原五三一番地）

土佐四萬十川の畔に生れ、今や瀧野川に於ける敎學の權を執り、居る事既に二十年、功勞多大なる人に岡崎彦右馬氏の如き間然する處なき校長あるを斯道の矜とす。

氏は高知縣の人、明治十八年五月十七日幡多郡中村町大字中村九七〇番地に生る。明治三十六年三月二十六日高知縣師範學校講習科修了、同年三月三十一日同縣幡多郡山奈尋常高等小學校訓導となり、同四十一年九月十八日病氣の故を以て退職し靜養の後、明治四十三年十二月三十一日瀧野川第一尋常小學校訓導に任ぜられ、大正三年二月十八日瀧野川尋常高等小學校訓導に轉じ、又大正六年三月二十七日には靑山師範學校第二種講習科を修業し、更に大正七年一月二十八日瀧野川第三尋常小學校訓導となり、越えて大正九年八月十八日瀧野川第四小學校訓導兼校長に榮轉し大に兒童の訓育に奮闘し父兄の信頼厚きものあり、昭和三年四月十一日には第二小學校訓導兼校長に榮轉し現在に至る。氏は頭腦明晰、數理の才に長じ溫厚至誠部下の敬仰を享く。

所得調査委員
日暮里町家屋調査員

岡本正太郎氏

（日暮里町旭町一ノ三四番地　電話下谷六五五四番）

製紙原料商の巨頭にして而かも公共事業に熱心なる岡本正太郎氏は、また家屋稅調査委員として郡部に於ける全國一の最高點を以て當選したる人望家なり。

氏は明治二十四年十二月二日を以て東京市下谷區坂本町一ノ一番地に生る。父祖傳來の家業たる製紙原料商を繼ぎ、明治四十年共工場を日暮里町に設け商勢隆々たるものあり、大正七年岡本合名會社を設立して其代表社員となり益々業務の擴張を圖る。曩に氏は坂本町會を設立して副會長、會長等に擧げられ現に相談役たるの外、大正十二年坂本一二會を創立して會長に推され現に顧問たり。又同業界の信望厚く大正四年には二十五歲の靑年を以て東京製紙原料商同業組合副組長に擧げられ、昭和二年には關東屑物商組合副組長となり、同四年組合長に推され又日暮里紙料同志會々長たり。大正十五年現住所に來住してよりは一般の信頼一層厚く、昭和五年四月最高點を以て家屋稅調査委員に當選し更に又昨夏の所得調査委員選擧には、前記諸團體並に有力者の熱烈なる推擧により最高位を以て當選する等實に氏の輿望隆々たるものあり、氏將來の大成は郡民一般の囑目する所たり。

前日暮里町長
濟美信用組合會長

岡田鎌市氏

（日暮里町金杉一五四番地　電話下谷四四五番）

岡田氏は瀧野川町上中里の素封家橋本與左衞門氏の五男にして、二十五歲の時、日暮里町の門閥家岡田己之助氏の養嗣子となり、明治四十三年町議に擧げられ、大正二年より六年まで名譽助役に推され、同年十一月名譽町長に擧げらる、大震災の年には町民擧つて氏を府會議員に推せるも、震災の爲め選擧は延期となり更に同町は首

壯として氏の手腕に俟たざる可らざる大事業のある爲め三度氏を煩はせしも、昭和四年一月家事上の都合を以て勇退さる。氏は元軍人出身で曾て日清、日露の兩役に參加して殊勳を奏し勳七等功七級に叙せられた勇士なり。

江戸川上水道組合議員常設委員、日暮里町青年團長、日暮里町教育會長其他の要職を帶び熱心盡瘁されたるも近時一切の公職を辭し藤井熊太郎氏の組合長たりし三河島町の濟美建築信用購買利用組合長として力を致しつゝあり。

『日暮里町』も十年前迄は尙ほ農村の面影を存し谷中薑、三河島菜の產地として知られ氏が初めて町議に擧げられし四十三年には人口僅に九千九百人に過ぎざりしが、昨五年には實に七萬一千餘に達せり、此間氏が社會公共事に盡せる勞や寔に思ふべきなり。

日暮里町會議員

老沼秀雄氏

（日暮里谷中本二八六番地　電話下谷三四三〇番）

才氣縱橫、志操剛健、克く處世の祕術を體得し、青年の身を以て一躍製藥業界の覇者となり又衆望を擔ふて町名譽職に列す洵に得難きの人材、是れを老沼秀雄氏となす。

氏は明治三十一年一月二十一日を以て山梨縣北都留郡富濱村に生る。夙に明治藥學專門校を出て更に製藥の實地研鑽を遂け、大正十五年現住地に藥局を設け傍ら應用醫化學合名會社を創立して製藥の事業を興す。已來着々製劑に精進し今や其種類三十餘に及び、全國の醫家並に家庭に家庭に迎へられて好評嘖々たり。之れ氏自ら監製の任に當り、最新の學術により生るゝもの、從て營業の堅實なる他に見ざる所とす。氏は東京府藥劑師會の役員に擧げらるゝこと數回信望頗る厚く昭和四年五月普選第一次の町議戰には、日暮里藥劑師會、同美容術組合、平和會等より推擧せられ最年少を以て高點當選の桑を擔ふ、現に前記各團體の役員たる外、町議としては衛生委員第三隔離組合會議員に擧げられ產業調査委員をも兼ぬ。

及川小兒科醫院長

及川慶三氏

（板橋町元瀧野川二四〇四番地）

小兒科醫の權威として知られ本郡は勿論千葉埼玉群馬方面より雜治の病兒の治療を乞ふもの相踵ぐの信望ある及川小兒科醫院は、實に院主及川慶三氏の獨特なる手腕と深き專門的研究の結果と斷すべし。

及川院主は明治十三年四月を以て嚴父源之助氏の長男として小石川區宮下町に生る。夙に仁術家たらんと志し、日本醫學專門學校を卒業すると共に、小兒科醫の泰斗瀨川醫學博士の門に入り、博士に從つて小兒科を專攻すること約四ヶ年、大に其蘊奧を極め大正四年、小石川區宮下町に開院して多年研鑽の手腕を振ふと共に、現在地に板橋分院を設けて熱心努力し後分院を本院に更め、氏も亦板橋に來住して今日に至る。氏の專門的手腕は忽ち一般患家の信望を博して門前常に市をなすの盛況を呈し醫院狹隘を告げしより、大正十四年七月大改築を施し二階建洋館となし、更に昭和元年十月には本郡西部町村有志の熱心なる歡迎により赤塚村成增驛前に四百餘坪の敷地を相し、一人一室病室の完全なる設備とし百三十餘坪の分院を開設せしが、令名埼玉縣下に喧傳され益々醫務繁忙を極む。氏は一日と雖も學究を怠らず又後進者の養成誘掖を唯一の樂とし中學、齒科醫專等に通學するもの產婆看護婦として合格せる者摟指に遑なき多數に上ると。前本郡醫師會理事として貢獻する所多く、家庭には滿壽子夫人あり。令甥竹雄氏も金澤醫專を出で慶大病理細菌教室に在り。

前瀧野川町會議員

小野澤鷹之助氏

（瀧野川町西ヶ原三五〇番地　電話小石川六九六一番）

小野澤氏は瀧野川町西ヶ原の名門小野澤甕太郎氏の長男として明治七年十月を以て生る、長ずるや農事改良に、專心努力しつゝ、公共事には犧牲的精神を以て奉仕され町民の信望頓みに厚く、大正十年擧げられて町會議員となるや、常議委員、學務委員の要職を兼ね、同十四年五月再び町議に當選して常議委員、衛生委員を兼ぬる外、瀧野川町道路下水調査委員、同小學校臨時建築委員等の町重要事業遂行に與らざると云ふ事なし、氏は曩に西ヶ原青年會々長、瀧野川尋常高等小學校保護者會副會長に推されて克く第二國民教養の實を擧け、實業方面に於ては中央土地株式會社取締役として財界有數の士と交り其堅實なる地歩を占めらる。資性溫厚謙和、接するに些の橫壁を設けず一言一句至誠より溢る。

斯の如き高潔なる氣品は當町の元老株として仰がるゝ所以で更に町政自治の爲に盡されんことを期待す。

牧子夫人との間に一男二女あり、令息正治氏は家に在て父君を佐け長女久子氏は千葉縣の素封家松崎朋來氏と結婚せり、氏は安田銀行に在勤せり。

瀧野川町會議員

小野澤八百太郎氏

（瀧野川町西ヶ原三五一番地　電話小石川三七六二番）

町議たること二期町民代表として深き期待を擔はるゝ小野澤八百太郎氏は明治十五年九月二十五日を以て西ヶ原の富門三郎左衛門氏の長男に生る、大正十四年五月輿望を負ふて町議に當選更に昭和四年五月再選せられ、土木委員、消防委員、道路下水改良調査委員等の要職にも擧げられ、常に穩健公正なる實行主義を以て終始し、又第八小學校新設に當り其委員となり現に同校保護者會長として兒童教育のため盡瘁しつゝあり。町內會中和會の前會長として居住者の福利を進め、又大地主として善く土地の進展向上に犧牲を拂はる。家庭には芳子夫人との間に二男二女を擧げらる。

瀧野川町會議員

小野澤中藏氏

（瀧野川町西ヶ原四一二番地）

瀧野川町議中の硬骨純潔の士として令名噴々たる小野澤中藏氏は明治二十六年二月一日を以て嚴父玉吉氏の長男として西ヶ原の素封家に生る。父君は瀧野川町會議員として町發展に努力せる人、農業の傍ら盆栽を業とし其聲價都下に喧傳せらる。氏は瀧野川尋常高等小學校卒業後は父君を佐けて盆栽作出に勵みしが、其技術は天禀的にして一小器中大自然を縮圖する一大藝術には內外人を驚嘆せしむるものあり、當時顧客は三井王國を始め各名門に出入し、國技館の

如き氏の創作品を展觀せりと。而も大正十年頃より此業を廢し今や專ら公共自治に盡し、町内會中和會の創立に盡して現に相談役たるの外學務委員に擧げられ、昭和四年五月衆望を負ふて町會議員に當選し道路下水改良調査委員、財源調査委員の要職を兼ね、常に町民本位に終始して健闘しつゝあり。

家屋稅調査委員（藥劑師）

小野澤春吉氏

（瀧野川町西ヶ原八八六番地 電話小石川三七五二番）

土地の富門、舊家に人と爲り夙に藥學の研究に志して一家を成し、着々として堅固なる地歩を築き、所謂土地つ子の僚輩より一頭地を抜いて其進境著しき人物に、吾が小野澤春吉氏あるを知るべし。

氏は瀧野川町の人、明治二十二年二月十三日を以て西ヶ原三五一の小野澤邸に生る。同家は西ヶ原の舊家にして素封たり。氏は鄕校を出で明治四十一年東京商業學校に入學、同四十四年三月卒業し引續き研鑽を怠らず大正二年には、豐多摩郡立病院の調劑員となり、更に大日本紡績株式會社醫局調劑局員となる、大正四年六月には藥劑師試驗に合格し、現在地に藥局を開き藥種化粧品舖として現在の繁盛を招致するに至る。氏は町議小野澤八百太郎氏の令弟にして、昭和五年家屋稅調査委員に擧げられ現職に在るの外、町内會正和會々長現に相談役として公共に盡す。きみ子夫人との間に長男正彦、次男博之兩君あり。

氏の發賣に係るオイバラルはブレパラート動物標本製作者に必須なる最新最良の封鎖劑なり。

志村々會議員

小川美明氏

（志村 志二番地）

人格識見共に備はり、德望一世に高き小川美明氏は、明治十六年四月三日を以て厳父故權左衛門氏の長男に生る。小川家は土地の富門にして又由緒正しき舊家たり。父君は戸長を勤め町村制施行後は村會議員に擧げられ、村治に盡瘁せる功勞者たりき。氏は鄕黌を出で京華中學に學び、早稲田大學高等科に進み更に同大學文科に哲學を專攻せる學識深き俊才たり。大正六年五月村會議員に擧げられてより再選に再選を重ね現に其職にありて公共自治に貢獻す。其間大正十一年五月十二日氏は名譽助役に推薦せられ更に翌六月十九日名譽村長に選擧せられ、同十二年三月十六日まで在職能く村政を平和に導き自治の本領を發揮せしむ。又氏は國家の進運は青年の修養訓練に俟つべきものなりとて、志村青年團の組織に盡瘁し、爾來熱心に其一致團結と向上發達に努力し大正十年五月十七日團長に擧げられ、更に北豐島聯合青年團副團長に推擧せられ功績多大なりき。斯く青年の指導啓發を唯一の樂とせる氏は、現に瀧野川町土木委員久喜辨藏氏の實兄己之助氏の學績優良にして將來有爲の人材たるべしと見込み、極力上級學校へ入學を促して後援し現に陸軍一等主計たる志村第一の成功者を出せる等氏の青年啓導の一實例とすべし。久子夫人は浦和高女出身にして一男四女を擧げ長女美子孃は浦和高女に、次女節子孃は文華高女に學ばれし才媛なり。同村には未だ新刊圖書の發賣店一戸も無きを慨し昭和五年七月雜誌圖書販賣店を設けらる。

辯護士岩淵町會議員

小川紋太郎氏

（岩淵町稲付四九三番地 電話赤羽七一番）

小川氏は明治十五年八月十一日府下岩淵町稲村の舊家に生る。同三十年十六歳の時土地の小學校を卒業するや、赤羽被服廠の傭人となる、二十九歳の時翻然として學に志し勤勞の餘暇中央大學に學び克苦精勵大正三年卒業す、其の間日曜祭日と雖ども空費せず、商店會社應用簿記を修め、更に明治簿記學校を卒業す、而して大正十二年十二月辯護士免許を得たり。

氏は自治公共に熱心にして現に岩淵町々會議員、豐島病院組合會議員、稲付上宿町會々長、同村社氏子總代等に擧げられ活躍しつゝあり。

西巢鴨町會議員

小野淳氏

（西巢鴨町宮仲二五九六番地）

小野氏は明治十六年神奈川縣潮田町の舊家に生る。長ずるや明治大學に經濟科を專攻し、大正三年染色工場を開いて斯業に精進す、大正九年現住地に於て業務を擴張し現在に至る、公共事に對し盡す所少なからず嘗ては第五區長として重望を負ひ私財を投じて熱心公衆の爲めに盡せり、昭和五年町會議員の改選に當るや區民多數の勸說に動かされて出馬し豫想以上の得票にて當選す、而して町政に携はるや、直情の性行と仁俠の氣格を以て大いに奮闘努力しつゝあり。尙ほ氏は西巢鴨民政倶樂部の支部長として黨の爲に鋭意盡瘁す。

東洋ランル會社代表社員

小川福二氏

（王子町王子三一一番地 電話小石川一二五五番王子五番一五五番）

國益事業中の國益、國産事業中の國産として國家社會を稗益すること絶大、殊に其事業が新時代要求の先驅として歡迎せられ、今や事業界の成功兒として聲價内外に高き『東洋ランル合資會社』及び『王子製瓦株式會社』は共に當代成功傳中の第一人者小川福二氏の主宰經營する所たり。氏は愛知縣の人、明治十六年十月三日を以て渥美郡赤羽村の豪農嚴父直三氏の三男に生る。十二歳の時靜岡縣藤枝町小川覺平氏の店舖に入り、製紙原料、屑物に關する智識と商業の實際を修得して上京、明治四十五年五月現在地に東洋ランル合資會社を設立し、越て大正十一年四月其姉妹會社たる王子製瓦株式會社を設立して當面の經營者として今日の隆運を招來するに至る。東洋ランルは資本五萬圓なるに法定積立金數十萬圓を擁し、製紙原料、毛織原料、屑物の賣買を業とし、王子製紙、富士製紙、三菱製紙、東京毛織等と取引し、彼の世界大戰當時染料輸入の杜絶に際し木綿屑物より染料藍の還元事業を起して日本染料界に貢獻する所多大なりき。戰後之を廢して王子製瓦會社を資本三十萬圓を以て設立せしなり。同社は文化的建築材料たる、セメント瓦、石綿スレート、歩道用ブロック、製瓦機械、タイル等を製作販賣せるが、製品は多く專賣特許權を有し陸海軍兩省文部省を初め諸官衙學校、東京市役所等に販賣せられ頗る好評を博しつゝあり。去昭和三年には恰も氏が

同社創立滿二十週年に相當せしを以て之が記念のため、故後藤新平伯を初め各知名の士より詩歌俳文寫眞等を贈られ之を輯纂して記念品と共に各關係者に頒てり。氏は社員從業者を優遇愛撫すること骨肉の如く、又社會公共方面に卒先盡瘁し、信望頗る厚く榎町會、王子尋常高等小學校後援部、東京セメント瓦組合等の各會計に擧げられ、北豐島工業協會、同經濟調査會の常任理事たり。家庭には松子夫人との間に一男三女を擧げらる。

岩淵町會議員酒類雜貨商

小野澤次郎吉氏

（岩淵町大字下二三九番地　電話赤羽四五八番）

小野澤氏は土地の有力者にして現時酒類及雜貨を營み且つ公共事に盡しつゝあり。氏は大正十年衆望を荷ひ町會議員に擧げられ土木委員を兼ねて二期に及び、又同八年以降宮居町々會顧問として現在に至るまで斡旋努力して會の進展向上を圖り貢献する所多し。特種事業に於ては大正九年以降東京共益肥料株式取締役並に赤羽商事株式會社監査役として共に職責を全うして重きを置からるゝ外同地西蓮寺の檀家總代たる事既に四期に及ぶ堅實直行の人格者たり。趣味は盆栽、演劇、相撲等なり。家庭は妻女むめ子夫人との間に一男七女の子福者にして長男倉太郎氏は妻女そめ子氏の仲に二男あつて平和常に春の如きを保てり。

志村々長

大野作次郎氏

（志村志二二三番地）

溫厚篤實、愛鄕の一念を以て村政の首班となり、平和の村を建設しつゝある、志村長大野作次郎氏は、明治九年四月二十九日を以て現住地に生る。同家は代々農を以て業とし氏も亦家職に從事して精農家の譽あり、農事改良の功勞者として表彰せられたること屢々なりき。同村に於ける大野家は何れも舊家素封にして同氏も亦大野家の頭目たり、曩に擧げられて村會議員となり、至誠を以て村治の向上に努めて村民の信望極めて深く、また同村助役に擧げられ、更に村長に推されて引續き其職に在ること二期に亘り、新興志村の將來に對し、着々村是の確立實現に邁進しつゝあり。而して現に村會議員たるの外、豐島病院組合會議員たるは勿論又志村消防組頭として消防警備の采配を揮ひ、村農會、村教育會其他公私の職に忠實奔走せり。同村役場には多年郡書記として自治制に精通せる星政男氏助役として大野氏を補佐し、又十年一日の如く財政樊理の衝に當れる收入役内田彌男吉氏あり斯くして平和の村建設は氏の双肩に懸る。

瀧野川町會議員

大島貞吉氏

（瀧野川西ヶ原七四番地　電話小石川七六五四番）

天才的文藝家として、日本の新聞界の先達として民衆文化に寄與せること多大なる瀧野川町會議員大島貞吉氏は、明治十三年を以て京橋區南小田原町に生れたる生粹の江戸つ兒たり。氏は實に多能多才の天禀を有し、號を寶水、又は三蝶と稱し、小說、和歌俳句は勿論劇作家として一家を成し著書亦多し、曾ては讀賣新聞の幹部として殆んど前半生を新聞界に竭し功績尠からず、退社後は氏が二十數年間も在住せる現地西ヶ原に印刷業三光社を興し、多年の體驗を以て擴張に次ぐに擴張を以てし、遂に今日の大を爲すに至れり。資性恬淡、才氣横溢、能く部落人士と交遊して土地發展に盡し先には中村繼男氏の會長たりし西ヶ原町正會の會長たること二期、現に其相談役たり。昭和四年五月には町正會一致の推擧により大多數を以て瀧野川町會議員に當選し、町政最高諮問機關たる常議委員を兼ね常に公正の軌道を逸せず、町治のために精勵しつゝあり。

貴族院議員

大川平三郎氏

（瀧野川町中里三七一番地　電話小石川七三三番）

日本財界の巨頭にして、有力なる大會社銀行の社長、頭取重役として全く肯綮ひ切れぬ程多數の會社に干與し、二世澁澤翁の稱ある大川平三郎氏は、舊川越藩士大川脩三氏二男として文久元年十月を以て生れ、先代榮助の養子となり、明治十八年三月家督を相續して今日に至れるなり。而して子爵澁澤榮一氏は伯父に當り、又田中榮八郎氏の令兄たり。夙に實業界の重鎭となり、今や富士製紙、上毛電鐵、北電興業、上毛電力、熊本電氣軌道、八代製紙、鴨綠江製紙、大島製綱、城東電氣軌道、東海鋼業、朝鮮鐵道、樺太工業、樺太汽船、靜岡電氣鐵道、日本鋼管の各株式會社長たる外武州銀行頭取を初め數十の會社銀行に專務又は取締役等として優秀の成績を擧げ我が國經濟界の振興に稗献する所多大、昭和三年四月貴族院議員に勅選せられ、資源審議會委員たり。此間氏は歐米を視察すること前後七回に及ぶ。曩に氏は瀧野川尋常高等小學校保護者會々長に擧げられ現に同校の爲めに盡瘁せり。

樺太工業營業部長

大川義雄氏

（瀧野川町中里三七一番地　電話小石川六六三六番）

氏は貴族院議員として財界の巨頭たる大川平三郎氏の長男にして、明治三十三年七月二十二日を以て東京市本所區の大川邸に生る。曩に東京高等師範學校附屬中學校を經て、慶應義塾大學に學び幾許もなく退學し、大川田中事務所に入り、後轉じて現在の樺太工業株式會社に移り、常務取締役代理として營業部長を兼ねて優越の業績を擧げ、又樺太汽船株式會社取締役並に大川合名會社々長等として實業界に活躍しつゝあり。氏は春秋に富むの青年紳士にして澁澤、大川兩王國の御曹子として前途多望有爲洋々として春の海の如く、一般實業界より囑目せられつゝあり。趣味は音樂、庭球、讀書に在りて家庭には時子夫人との間に長女光子孃が儲けらる。

板橋町乘蓮寺住職

小川大昇氏

（板橋町下板橋二〇九一番地　電話板橋一五七番）

大昇師は明治二十二年千葉縣東葛飾郡年賀村に生る、夙に板橋町の古刹乘蓮寺に入り先住小川德乘師の法弟として佛教一般の學を研究す、大正四年德乘師の遷化と共に其の後董となる、此の新人の躍動は佛教婦人救護會板橋支部の創設に力を盡し、又佛教少年會を起して思想善導に惠念せり、是くの如くして嗜眠に均しき舊佛教を呼び覺ます事は此の新人にして此の覺醒あるものにして檀徒の歸依益々加はり寺門の隆興日に盛んなるに至る、師や春秋に富めり宗教界の爲めに不撓の精神を以て精進せられん事を冀ふ。

王子町助役　**渡邊正氏**
（小石川區丸山町一七番地）

土木建築技術の權威として府市は勿論、長く臺灣總督府に在勤して多大の功績を遺し、更に王子町土木課長より、一躍同助役となりたる渡邊正氏は、明治八年十月を以て豐多摩郡淀橋町柏木三五一番地に生る。夙に土木建築學を修め、同二十九年三月埼玉縣工手雇として日給二十五錢を振出しに俸給生活に入り、翌年十二月臨時海軍建築部技手となり同三十二年五月東京市役所に轉じ同卅四年二月臺灣基隆建築局雇に榮轉、引續き吐鳳山廳技手、總督府鐵道部技手等を歴任大正四年三月には四級俸に進み、依願退職後、彰南鐵道、鹽水港製糖會社等に勤務、大正九年十一月歸來、豐多摩郡役所土木技手となり、同十二年四月王子町土木課に奉職、翌年六月土木課長に掃除監督を兼ね、昭和三年三月には技師に昇進して同町の道路下水計劃に全力を擧げつゝありしが、同五年八月十六日の町會に於て全會一致を以て王子町助役に推擧承認せられ以て今日に至る。又以て氏の手腕、德望を窺ふべし。

西巣鴨町職業紹介所長　**渡邊棄藏氏**
（府下杉並町成宗三五四番地　電話大塚二三五三番）

凡そ社會事業に携るものは名利を度外に附し、常に經世濟民の至純至誠を以て終始する人格者たらざる可らず。殊に直接社會人に接觸し、其職を失へる氣の毒なる境遇に在る人々の裡に介在して、之れに光明を與へ、之れに生命を復活せしむる職業紹介の事務を掌るものにありては最も然りとす。

西巣鴨町職業紹介所長たる吾が渡邊棄藏氏の如きは、實に適材適所の人と謂ふべし。卽ち氏は、吾が國職業紹介事業の創始者とも謂ふべき閲歴を有すると同時に、元來教育家にして國家の將來を附託する人材を育英するを以て天職とせられたる永き經驗と研究とを有せらるればなり。

氏は茨城縣の人、明治六年七月十二日を以て同縣猿島郡長田村に生る。夙に教育家たることを志し、縣立水戸師範學校に學びて業を卒るや、小學校教員として職を奉ずること多年、後同縣の商業學校教諭として恪勤多年大正九年七月芝區財團法人協調會に入り、內務省より委囑せられたる職業紹介事業の聯絡統一の事務に從事して大に斯業の調査研究を遂げらる。後大正十二年職業紹介事務局の新設を見るに至り、事務移管と共に內務省に轉じ、爾來全國の職業紹介事業に對し熱心その指導奬勵の任に當り、氏の功績甚大なるものあり き。昭和三年西巣鴨町に職業紹介所の設けらるゝや、氏は拔擢せられて其所長たることに決し、官を辭して現職に就任せり。同紹介所が府下に於ける町村立職業紹介所として嶄然頭角を顯はし、成績優秀なるは、亦氏の經營宜しきに依るや言を俟たざる所なり。

渡邊運送店主　**渡邊濱次郎氏**
（王子町王子驛前　電話小石川六二三二番）

鐵道省公認運送店として又土木建築請負業として名聲高き渡邊濱次郎氏は明治二十六年十月を以て先代故鋼次郎氏の長男として王子町に生る。先代は名古屋市清水の人、夙に上京、二十一歳王子町に來住し工場地帶たる同町の將來に着目して王子驛前に運送店を開きしは二十七歳の時なりしと。爾來益々業況發展したるも大正八年不幸長逝するに至り氏は先代の業を繼承、鋭意奮闘の結果、明治運送會社、帝國運輸會社の加盟店として信用高きは勿論、川砂利、砂、玉石、割栗石、大岡石、白河石、花崗石、庭園石等の販賣をも兼營し更に土木建築請負業として非常なる聲望を博せり。現に王子管内運送公認取扱組合評議員に擧げられ、陸海軍々事品取扱、諸官衙公署各大工場等の御用達として異數の盛況を收めつゝあり。

琴古流尺八師範　**若林太門氏**

（王子町王子一三二二番地）

琴古流の尺八の名手として、曾ては風流艦長八代大將の寵遇を享け、門弟壹千名に餘るの師たる吾が竹道若林太門氏は、眞に天才的吹簫家と謂ふ可し。

氏は新潟縣の人、明治二十二年二月二十四日西蒲原郡横田村の精農太右衛門氏の四男に生る。七歳にして同村小學校に入り卒へて、寺泊高等小學校に學び更に縣立三條中學に入りしも、明治三十九年海軍を志願し舞鶴軍港海兵團に入り大正六年退く。氏は夙に尺八を愛好し天才的樂律の妙手たりしが、在艦當時、時の肥前艦長故八代風流大將（當時第一艦隊司令官）の非常なる激勵に依り斯界の泰斗山口四郎氏に師事して專ら尺八の研究に親み遂に其蘊奥を究めて其名錚々たり。退職後居を王子町大門の現地に移し、斯道の普及に勤め演奏會を開催すること數十回、門弟千人を越え昭和六年を以て滿十五週年に及ぶ。現在竹盟社審査員として聲名竹韻界を壓す。和歌子夫人との間に進、宏躬の二男と由貴子の一女あり。

若松洋服店主　**若松留吉氏**

（三河島町三河島三八四番地）

洋裁縫の權威として斯界に知られ、公共心の熱烈なる愛町の士として聞ゆる人に吾が若松留吉氏あり。

氏は福井縣の人、明治十五年十月十五日福井市農喜三郎氏の長男に生る。十四歳の時より鄕里の洋服巨商に於て微兵檢査まで修業、第九師團第七聯隊に輪卒として入營、三ヶ月にして除隊となるや、直に上京し芝區に於て獨立洋服商を開業せるも徵兵關係にて一應歸鄕の止むなきに至る。明治三十九年九月靜岡縣小山町の富士瓦斯紡績會社分工場地に開業して同工場の御用商となり、一手引受けの信用を得ること十五年餘、大正六年上京三河島町三河島木ノ下に開業し、後現在地の環狀道路に直面せる好位置に轉じ、今日の繁盛を極むるに至る。氏は曾て小山町在住の際滯納者多數なるを聞き納稅組合を卒先組織して町稅收入を良好ならしめ感謝狀に金蒔繪硯箱を贈られ、又三河島町にても町内發展に努力し夜店許可に斡旋し現に殷盛を極む。曾て二回町議に立候補せしも理想選擧のため惜敗す、園碁を愛し氣骨稜々たる人材たり。

氏尙ほ春秋に富む、將來同町自治助成のため自重して町政に參與し大に健闘を望む。

修身齊家奉公の人倫常道を實踐し、遂に富と名とを兼ね備ふる成功立志傳中の人、是れを若島繁松氏となす。

氏は明治二十一年一月三日を以て富山縣下新川郡小摺戸村に生る。十九歳の時上京し親戚にして浴場を營むもの四軒に就て實際を研究し、適齡を以て麻布三聯隊に入營至誠奉公善行證を得て除隊す。二十四歳の時既に獨立し本所區梅森町に浴場を經營するに至る。爾來孜々營々財を積みて大正十二年現住所に移轉開業し、不斷の努力と奮闘を以て益々蓄財し現に瀧野川の大盛湯、高圓寺の若松湯、三河島の金時湯等を經營し、日暮里浴場組合長、東京浴場組合東部評議員等に推されて業界に盡す所多大なり。氏は常に言ふ、自らを治め得ざる者、何ぞ町を治むる資格あらんやと、修身齊家治國平天下は此の言行一致の人にして始めて言ふを得べし。昭和四年氏は之より自治公共に盡すべき時到れりとなし、則ち推されて町議に當選、以來衛生委員に擧げられ塵芥燒却爐增設委員として活躍す。令閨はる子氏との間に三男一女あり、氏の產を爲すも亦はる子夫人内助の効與て力ありきと、家庭の圓滿知るべきなり。

日暮里町會議員　**若島繁松氏**

（日暮里町谷中本九四九番地）

◆　◆　◆

◆　◆

二十年一日の如く帝都二百萬市民の自治機關たる東京市役所に下水道課主事として精勵、名聲嘖々、更に又本郡二十萬町民の文化生活の基礎を確立する東部下水道町村組合に懇請せられ、其主事として明晰非凡なる頭腦を以て複雜繁鎖なる事務を快刀亂麻の概を以て處理しつゝある、吾が片岡義雄磨氏は、茨城縣の人、明治廿年九月廿日を以て鹿島郡巴村下富田十三番地に生る。夙に上京、專修大學專門部經濟科を優秀の成績を以て卒業せし實力の材能たり。明治四十四年東京市下水道課に奉職し、精勵恪勤を以て聞え累進して大正十三年六月には同課主事となり、昭和四年七月東京市を退職すると同時に聘せられて當下水道町村組合に奉職、庶務係長主事たるの要職に擧げられ現在に至る。本事業の遂行は、數ヶ年の日子と數百萬圓の巨資を要する難事業にして其事務を主宰すべき氏の手腕こそは實に財政經濟上至大の關係を有し、經費の節約、人事行政、制度の運用等高梨管理者の女房役として全幅の努力を傾倒しつゝあり、洵に適材適所と云ふべし。氏は亦町内公共事に熱心にして現に第一峽田小學校後援會副會長、三河島町驛前通町榮會副會長、三河島町宮地會相談役等に擧げられて盡瘁す。又書道に堪能にして霞峰と號し一家を成す。

東部下水道町付組合主事　**片岡義雄磨氏**

（三河島町三河島三三九二番地）

瀧野川町會議員

加藤金之助氏

（瀧野川町田端一五二番地
電話小石川五五〇八番）

加藤氏は明治六年七月瀧野川町田端の素封家たる加藤佐太郎氏の嫡男に生る。嚴父素より名望高く多くの公職にあつて自治に貢獻す、氏も亦其の衣鉢を承け、土地の向上發展に對し衷心より犧牲奉仕の任に當る。明治四十三年五月町會議員に推され、同四十五年六月收入役に擧げらる。大正四年八月家事上の都合を以て退職す。此の間瀧野川町は、硬骨剛毅の名町長野木隆歡氏が保坂平三郎氏の後を享けて町政の樊理に任じ、大崎隆一氏が有給助役時代にして、後の有馬助役等と共に大正二年十月一日町制を施行して、瀧野川町の面目に一新紀元を劃す、敎育方面には、第一第二小學校の增築と第三尋常小學校の獨立等町財政上頗る多端の際、氏は能く之を按排し町民の期待に副ひ、聲譽を加へ來るの外、越えて大正六年氏は再び擧げられて町會議員に當選し、同十年五月三度び推されて當選を重ね、二期八年間其任を竭して功績太だ多く、同十四年五月滿期勇退、昭和二年全町の輿望を擔ふて土地賃貸價格調査委員の重職に上げられ、新制度の稅制の爲に公平嚴正の使命を竭し、更に農林商工統計調査委員として勸業方面にも努力さる、又移住者の爲め土地賃貸料を極めて低率に貸與する等稀れに見る仁慈篤行の士なり。

令息龜一郎氏は流石に此名門の出たる風格貫祿を具へ、模範青年と仰がれて一般の信望厚く現に沿革古く優良町會と稱さるゝ中田竭早和會の副會長として盡力せられ將來を囑望されつゝあり。

瀧野川町中里
ことぶき店主

加藤藤太郎氏

（瀧野川町中里二四〇番地
電話小石川五五三番王子六五八番）

瀧野川町役場を初め同地所在の官衙學校及び一般家庭より御用を承る有名な料亭「ことぶき」は瀧野川名物の一つと稱さるゝに至る。其經營主は卽ち加藤藤太郎氏にして明治九年四月本郷區本郷五丁目に嚴父彦太郎氏の長男として生る。現地に來住の初めは煙管製造の業を營みしが不圖せる動機より當時新橋煉瓦地に全盛を極めし料理店「ことぶき」を其儘に讓り受け、中里は梅の湯の隣り大川邸門前に江戸前の庖丁と着實一天張りを以て賣り出し漸次好評を博して今日の繁昌を招來するに至れるなり。曩に瀟洒風流の新築をなし大小の宴會より、名物の蒲燒、壽司、天ぷら、辨當まで仕出しの註文に應じ、又番號分け均一値段の組合せ料理は非常な好評を以て迎へられ、四季共に千客萬來の盛況で從つて板前も腕利き、酒も芳醇、待遇も百パーセントを以て接客しつゝあり。養嗣子一郎氏初子夫人との間に二子を擧げ日夜家業に精勵し、一般の信望亦厚し。

板橋町會議員

加藤省三氏

（板橋町下板橋二〇六六番地）

天下の奇橋、甲州猿橋の名門に生れ、弱冠にして獨立、立志傳中の一人に吾が加藤省三氏あり。

氏は山梨縣の人、明治十九年十月を以て北都留郡大原村猿橋の農

家宗治郎氏の四男に生る。明治四十一年二月勃々たる向上の志を抱て上京、麴町區平河町牧野鬱材木店に入りて勤務し昇進遂に支配人となり、次で三鱗合資會社より明治運送株式會社神田支店に職を奉じ、到着主任に進む。後大正七年同志と共に中央運輸株式會社を設立して其支配人に就任し、大に敏腕を振ふ。又大正十一年七月板橋町に製材工場の設立を見るや氏は招聘せられて其支配人に擧げらる精力絶倫の氏は激務の傍能く自治公共に盡し、昭和四年五月板橋町會議員に大多數を以て當選し、臨時出納檢査委員を兼ね、更に昭和五年十月には豐島病院組合會會議員に當選し聲名頓に揚がる。園藝を趣味とし、家庭には長男太郎氏は明治四十四年生れ現に巢鴨高等商業學校二年に長女光子嬢は大正四年に生れ川村女學院四年に他の二男三女共に中小學校に通學中なり。

金子銀次郎氏

（瀧野川町上中里二五〇番地）

瀧野川町有志（地主）

瀧野川町屈指の富門として知らるゝ金子銀次郎氏は、明治五年六月を以て先代銀次郎氏の長男として現地に生る。前名を熊次郎氏と呼び、明治二十三年家督を相續して襲名す。夙に澤田學校に學び家業の農事を勵みつつありしが、郊外發展と共に之を廢し、今や大地主として町民の敬慕する所たり。氏は公共の念厚く能く土地の開發向上に努め第一回國勢調査の際は其委員に擧げられ、常に敬神崇祖の念深く今や家政萬端は令息治右衛門氏に委して悠々閑地に就き各地の神社佛閣に參するを以て唯一の樂とせり。氏は子福者にして先夫人との間に五男三女あり。

金子治右衛門氏

（瀧野川町上中里二五〇番地）

上中里町會副會長

金子治右衛門氏は明治二十九年四月十三日を以て嚴父銀次郎氏の長男として金子家に生る。氏の家は近郊に譬く大地主たるに拘らず、氏は其舊門富豪たる權閥に淫せず、温厚篤實能く社會公共の事に力を致し近人の信望頗る高きものあり、現に氏は町内團體たる上中里町會の副會長に擧げられ、能く自治の向上と居住民の爲めに貢獻せるの他在鄕軍人分會評議員並に上中里第八班役員、瀧野川第五小學校後援會幹事等の公職に擧げられ又國勢調査委員として其職責を全うする等春秋に富むの氏として一般より將來を期待されつつあり。

金子丑五郎氏

（瀧野川町上中里二五一番地）

上中里郵便局長

瀧野川町上中里の王子電事梶原停留所附近一帶は、近年長足の進展を遂け人家年と共に增加し、商工實業家も亦櫛比するに至れるが、更に同所は十二間の幅員を有する環狀線道路完成し且つ耕地整理も全く完了を告げたれば將來同方面の繁榮は想像以上たるへく、從て通信に、爲替に貯金に益々郵便事務は輻輳すべく、之を見越し一般居住者の利便の爲にせんと奔走の結果遂に上中里郵便局新設は昭和四年七月六日認可せらる。是れが殊勳者を即ち同局長金子丑五郎氏となす。

氏は明治三十四年を以て木郡瀧野川町上中里の素封家金子幾三郎氏の嫡男に生れ、昭和四年二十九歳、瀧野川町八局中最年少を以て局長に就任せる青年紳士たり、金子家は土地の名門にして祖父音五郎氏は町村制施行以來十有五年間も村治に貢獻し、又嚴父幾三郎氏も町會議員たること二期に及び第五小學校後援會長等として學事に盡力し功勞多大なる家柄にして、父子共温厚篤實、信望厚き一家門なり。

金子福治郎氏

（日暮里町旭町一ノ三番地 電話下谷四四七〇番）

日暮里町會議員

平淡なる海洋は能き水夫を生まず、と吾が金子福治郎氏は若き時より苦節を重ね、實際に世情の辛酸を體驗して今日の地位を獲得せし成功者と云ふ可し。

氏は明治十六年十月一日を以て埼玉縣北足立郡膝折村に生れ夙に實業に志して出京、日暮里町に獨立して荒物雜貨商を開きしは實に君が二十六歳の青年なりき。當時同町は尙農村にして何等文化的施設なく頗る不便なりしが、氏は土地の開發進展に努力し年と共に、移住者の加はると共に大曲睦會を組織して共存共榮の策を樹て大に居住民の福利增進を圖りたるに、彼の日暮里町の大火は、多年苦心經營せし血と膏の結晶を灰燼に歸し再び起つ能はざらしめしも、氏は奮然起つて現在の地に轉じて店舗を再興し、奮鬪努力の結果今日の如き一大成功を見るに至る。現に荒物雜貨化粧品問屋として又カネコ石鹼本舗として業界に鄙々の名聲を馳す。

昭和四年五月町内會交友會に推されて町議に當選し、町衛生委員、警備委員の要職を兼ぬる外、業界にありては、小間物化粧品卸商同盟會北豐島郡東部々長、城北荒物化粧品卸商親交會々長等に擧げられ信望頗る厚し。

金内善吉氏

（南千住町五ノ七七番地）

南千住町議

南千住町議中の論客として法律家として聞ゆる金内善吉氏は山形縣の人、明治二十七年飽海郡荒瀨村字古港に嚴父新吉氏の長男に生る。小學を出るや堀丑太郎氏に師事して中等程度の學を修め、單身北海道小樽に赴き物産商を開きしも時利あらず、上京して明治大學に法律を專攻し大正三年七月卒業、同五年五月盛岡地方裁判所に於て裁判所書記登用試驗に合格し、同七年二月警察官講習所を卒業す、此間明治四十五年より大正十一年まで警視廳に奉職し、南千住警察署に警部補として司法主任たりしを名殘りとして官界を退き、社會民人の爲に『平民局』を開設して人事法律相談、祕密探偵、民刑非訴事件等を取扱ひ多年警察界に在て練熟せる手腕と社會的抱負を振ひつゝあり。大正十四年氏は民衆の味方として町議に擧げられ、昭和四年再び當選して町會一方の驍將を以て推され其他南千住民政黨同志會々長、東部下水道組合會議員、警備委員として活躍さる。

川野土太郎氏

（日暮里町金杉一七九六番地 電話下谷五二五六番）

日暮里町會議員

人は只一個張猛の精神と、一個正經の目的とを以てせば何事か成

就し得べけんや、と吾が川野土太郎氏の如きは實に此のアレーの言と一致せる自主自立の權を自己の力に依て開拓確立せし人材と謂ふべし。

氏は明治十四年十二月三十一日を以て長崎縣東彼杵郡上波佐見村の素封家に生る。鄕校を出で、僅か十七歳の時、獨立の意思を固めて鄕關を出で佐世保海軍工廠に就職し精勵恪勤、氏の奮勵は忽ち上司に認められて累進遂に職長に任ぜられ、更に日露の風雲急なるや氏は擢でられて吳工廠に榮轉し、二十三歳にして職工二三百名を指導するの地位に進む。之れ全く氏が正經を履み歩一歩自己の技倆を礪き、初一念を貫く爲に至誠其任務の完璧を期したるが爲なり。大正五年世界平和と共に職を辭して愈よ最後の新生涯に立つべく、同七年上京、日暮里町に移り多年の經驗を基礎として製作工業に着手し、自轉車用フリーホイルの製造を創む。而かも其製品の獨特優秀なる忽ち內外に聲價を博し全國は勿論、支那南洋に販路を擴め、年産額二十四萬圓に達し職工七十餘名を擁するに至る。溫厚篤實にして高潔なる人格は町民の信望頗る厚く昭和四年町議に推擧されて當選土木委員を兼ね、頭腦の精緻を以て聞ゆ。氏の長男嘉文氏は年齡二十八歳、帝大建築科を卒へて目下大藏省營繕管財局に職を奉ず。

王子町會議員　**河野誠一氏**
（王子町新道一二七〇番地　電話王子一三番）

婦人科、產科、內外科の名國手として盛名を馳する河野誠一氏は現に王子町立第二小學校々醫たる外、北豐島郡並に王子町兩產婆會顧問、神戸樓橋株式會社、ホーカー液工場囑託醫として繁忙を極めつゝあり。氏は明治二十九年山梨縣立中學校卒業後上京醫學に志せしが、日露役起るや陸軍看護隊附として同三十九年まで在鮮、功に依り勳七等に叙せられ、凱旋後王子町の現住地に來住し同四十五年日本醫學專門學校を出でゝ大正五年より河野醫院を開業今日に至る。氏は特に社會公共の念に厚く現に王子教育會評議員、王子青年團役員、王子衛生組合副組合長、王子信用組合理事、王子山梨縣人會々長、北豐島郡醫師會理事、日本醫專同窓會幹事等に擧げられ、更に昭和三年衆望を負ふて王子町會議員に當選衛生委員を兼ね町政の重鎭として活躍しつゝあり。家庭には信子夫人との間に令息正義氏を擧ぐ。

前瀧野川消防第五部長　**川口洗太郎氏**
（瀧野川町中里　二九九番地）

川口洗太郎氏は明治十九年十一月十一日を以て瀧野川町中里の豪農故平五郎氏の三男に生る。小學校卒業後は家業の農事に從事したるが、大正三年父君の長逝に遭ひて家督を相續し家政を鞅る、氏は是より先き兵に徵されて鴻の臺砲兵聯隊に入り、歸鄕後は在鄕軍人分會の評議員として盡力し、又中里火防組合幹事に擧げられ現に中里下町會第三區長として熱心に公共に盡し、中里青年團相談役としては善く青年の修養體育實務に啓導し、義には瀧野川町消防組第五部長として機具改善を完成し功勞多大なり、又鄕社平塚神社世話人、中臺寺檀徒總代等をも勤む。家庭に筆子夫人との間に一男二女を擧げらる。

春秋に富む氏は今後公共の爲に活動されむ事を望むや切なり。

瀧野川町家屋稅調査員　**川村藤市氏**
（瀧野川町田端一三五二番地　電話下谷五五一八番）

日進月歩の印刷業界に、優秀無比の印刷用インキを提供して聲價夙に業界を壓する川村インキ製造所主川村藤市氏は、又公共自治の念に燃ゆる前途有爲の材幹たり。

氏は栃木縣の人、明治二十三年十月五日を以て足利郡吾妻村に生る。明治四十二年三月栃木縣立佐野中學校を卒業するや直ちに上京、本所區石原町（現在本所區北二葉町四〇）の印刷用インキ製造販賣業界の巨頭川村喜十郎商店に勤務すること約十五ヶ年大に斯業の研究をなし大正十四年六月現住所に獨立開業して現在に至れるなり。

多忙なる業務の傍ら氏は常に土地發展の爲に貢獻せられ、昭和三年には同地の下田端町會副會長に擧げられ、瀧野川第四尋常小學校保護者會幹事となり、又同地の消防後援會役員に推されて盡瘁し衆望頓に加はり昭和五年四月には家屋稅調査員の重職に當選して現在に至る。家庭にはとよ子夫人との間に二男一女あり長男榮次君は八歳、次男誠一君は二歳、長女愛子孃は九歳なり。圍碁を好み、神道を信仰す。

瀧野川町會議員　**河端作兵衞氏**
（瀧野川町谷津一〇五一番地　電話王子二五七番）

瀧野川町議たること既に二期、一方の闘將として地方政界に重きをなす河端作兵衞氏は明治二十年十月を以て埼玉縣北足立郡桶川町の酒造家米吉氏の次男に生る十六歳帝都に遊學し、明治卅八年日比谷中學を卒業、進んで慶應大學法科に學び、大正六年同大學を卒業せる慶應法學士たり資性豪放磊落、覇氣に富むの氏は其學歷に囚れず、福澤翁の『獨立自尊』を以て處世の要諦とし先づパン製造を創めて砲兵工廠其他に販賣し、後納豆製造販賣業を起し今日の成功を收むるに至る、氏は常に今日の學生が仕官奉職に汲々とし更に獨立自尊の新天地を開拓せざるを慨し自ら菜葉服を着して大學生に納豆賣を勸め苦學力行の才能を養成しつゝあり。氏は大正十四年町會議員に當選し土木委員となり彼の賃取橋問題解決に努力し昭和四年再選して最高常設委員たる常議員に擧げられ、熱烈なる主張を以て會議に獅子吼し論壇の雄として嶄然頭角を現はせり。

王子町家屋稅調査員　**河根末作氏**
（王子町堀ノ內　三四九番地）

王子電車梶原停留所を中心として商家軒を並べ、民家を連ねて一小都會の觀を呈するに至り、町政に交渉を有つこと亦重要の地區となる。於是、同地在住有志は町稅負擔の公平均衡を所期し家屋稅調査委員を選出せんとし、其候補の白羽の矢を河根末作氏に立て、當選の榮冠を擔はしむ。河根氏の信望想ふ可きなり。

氏は明治二十年を以て三河國渥美半島に生る。大正九年商業を志して上京、近親なる下谷區入谷町の伊勢元酒店に身を寄せて王子町の現在所に酒店を開き今や同地屈指の店舗となり繁榮を極むるに至

る。常に町内自治に盡す事厚く、現に梶原町會副會長、王子飲食店組合相談役等に推擧せられ熱心に活動しつゝあり。資性恬淡虚飾なき實業家と言ふべし。

山岳家、貿商

冠松次郎氏

（瀧野川町中里一〇七番地）

黒部の溪谷發見者として、天下にその溪谷美を紹介し、一躍錚々の聲名を山岳界に轟かし斯界の啓拓に貢獻する人、是れを吾が冠松次郎氏となす。

氏は帝都の人、明治十六年二月四日を以て本郷區四丁目六番地に生る。生家は富門にして質業を營み『よろづ屋』と稱す。氏は小學卒業後十九歳頃まで家に在つて家業を見習ふ、その後中學の課程を卒へて一年志願兵として入營し、病を得て軍曹の階級にて歸郷す。後は家業の傍ら常に勉學修養に志す。殊に氏は山岳踏破を唯一の趣味とし今や斯界の大家たるが、此の間氏は職業と、學問と、趣味との調和につき現實的にも精神的にも少からざる苦闘を續けられしと。

氏は過去二十五ヶ年有餘、所謂日本アルプス地方を中心として遍く山谷を探險し、彼の黒部溪谷を初めて跋渉し、その廊下の壯觀、壁や屏風の神秀、未踏の處女溪谷を踏破し文部省囑託として或は映畫に文獻に其神秘境を紹介せり。現に日本山岳會幹事として雜誌『山岳』の編輯に從事し傍ら最近著書、黒部溪谷、立山群峰、劍岳、双六谷、黒部等を出版す。山岳熱最高潮の時、氏の著書は疾風迅雷の勢を以て登山家に競ひ讀破さる。氏は亦公共の念厚く永く中里東部町會長たるの外町衛生委員、瀧野川第七小學校保護者會幹事等として盡瘁せり。

亀井織物工場主

亀井安次郎氏

（瀧野川町西ヶ原一四七六番地）
（電話小石川一三〇五番）

王子電車三の輪線梶原停留所附近に於て車窓より宏大なる織物工場を望むべし、之れ絹女帶地、絹袋物地、其他絹織物各種の織元として東西市場に重きをなす亀井織物工場にして亀井安次郎氏の經營する所なり、氏は新潟縣西頸城郡荒町村の人、實父繩德松氏は呉服商として知られたる人、氏は其長男として明治六年十二月二十日を以て郷里に生る。二十三歳の時上京南千住町岡本織物工場に見習として入り、進で監督となり、同工場に勤續すること實に十有七年、功績多大なりき。大正元年同工場を辭し獨立して南千住に工場を創む。氏は三十歳の時竈甲商亀井與五郎氏の養嗣子となり亀井姓を襲ふ。大正十二年二月九百餘坪の敷地を現所に索め工場及び住宅と共に數十戸の家作をも新築して移轉し、ジャカト紋織機、獨逸製レース織機、其他五十餘臺を以て八十餘名の男女工を督して業況隆々たる成績を見るに至る。氏は現に東京織物製造同業組合評議員たるの外、瀧野川第五小學校後援會役員に擧げられ、公事に盡すの模範的成功者たり。

『瀧野川町』は特殊の製産工業に乏しく何等全國的に誇るべき名産を有せざるも、亀井織物工場は、西京西陣を凌ぐの逸品を製作し、斯界に斷然聲價を博す。

是れ本郡産業界の誇にして其の改善發展を祈るや切なり。

帝國美術院審査員

香取秀眞氏

（瀧野川町田端四三八番地）
（電話小石川四五九〇番）

香取氏は千葉縣印旛郡船穂村の名門香取家に生る。僅か五歳の時、佐倉町の神官郡司家に養はれ夙に美術を嗜む、中學校を卒へて十八歳皇都に遊び、東京美術學校に入つて鑄金科を專攻し明治三十年七月卒業、爾來鋭意鑄金の業に從ふ、其作品は眞に入神にして何人も追從を許さぬ獨特の逸品たり。氏が祖先は經津主の命にて印旛湖畔最古の名門なり。其の湖畔の風光と大自然とに天禀の藝術性を伸べ切瑳琢磨の功空しからず、今や東京美術學校講師、帝室博物館學藝委員、商工省工藝審査會委員、帝國美術院審査委員等の名譽ある公職に任命せられ益々盛名を博されて居る。氏が大正十四年五月瀧野川町會議員に推され始めて秀次郎なる本名を知る町民多かりしが多數を以て當選し、爾來公平無私俗流に阿せず、眞に愛町至誠に終始され高潔の人格は愈々町民の敬仰する所となれり。

前長崎町長

鴨下六郎氏

（長崎町並木一三〇七番地）

明治四十三年以來長崎村長となり終始一貫平和の町建設に獻身しつゝある鴨下六郎氏は、明治十一年九月十三日を以て先代文藏氏の長男に生る。同家は土地の舊門にして先代は戸長を勤め、町村制施行後第一次村長に擧げられ、二十二年間勤續せる自治功勞者たり。氏も亦嚴父の衣鉢を享け夙に公共自治に與り明治四十年五月輿望を擔ふて村會議員に擧げられ、同四十三年十二月には村長に當選、滿期毎に再選を重ね、昨年十二月十七日五度び其榮職に就く、氏は帝國の干城として日露戰役に出征功に依り勳八等に叙せられ更に大正十一年十一月自治功勞者として勳七等に昇叙せられ次で昭和五年十月卅日には東京府知事より、地方自治功勞者として表彰せらる。此間氏は町長として町政首班たる外、農會長、衛生組合長、耕地整理組合長、荒玉水道町村組合、豊島病院組合議員兼常議員、町内自治團體宮町本會長等として殆んど一身一家を顧る暇なき奮闘を續けつゝあり。家庭にはせん子夫人との間に一男あり。書畫植木を愛好す。而して氏は本年一月十五日後進の爲め町長を勇退閑地に在り。

瀧野川町校醫

片平庸吉氏

（瀧野川町西ヶ原一四一番地）

氏は宮城の人、明治十二年十二月を以て仙臺市に生る。同家は仙臺藩士として名門舊家にして夙に刀圭家たらんと志し、明治三十五年十一月仙臺醫學專門學校醫學科を卒業し、翌年二月軍籍に入り、陸軍々醫として大正十年一月まで勤務し、日露、日獨戰役其他の功により最近叙勳せられ、同十二年十二月二十二日現住所に開業今日に至る。氏は多年の經驗と獨特の治効とは一般の信頼厚く、昨秋瀧野川町校醫をも囑託せられ西ヶ原の尋常高等小學校々醫を擔任して大に少國民保健衛生の爲に努力しつゝあり。

軍醫たる氏は沈毅寡默たるも練達の手腕行くとして可ならざるなく殊に内科小兒科に堪能なりと。

前尾久町會議員勝村組

勝村幾之介氏

（尾久町上尾久二〇三七地番
電話下谷二二六番五五八九番）

勝村氏は明治二十一年十一月茨城縣東茨城郡坏村の舊家に生る。十七歳早くも米國の富源を開拓せんと志し明治三十七年出京し、渡米計畫中皇都の狀勢を見るにその發展の氣運は將來土木建築界の極めて有望なる事業たることを敏察し、海外飛躍の壯圖は第二期に讓つて先づ斯業界に身を投ずべしと決意し、飜然馴れざる土木の實務に就きて酸苦を體驗しつゝ、晝は勤務に服し夜は勉學修養を怠らず、唯だ壯心熱血を資力として精力のあらん限りを盡し、遂に認められて一方の將に拔擢せられ、累進して斯界に頭角を現はすに至り、工務所を神田昌平河岸に設けたるは今を距る十五年前なり。其後郊外町村の發展に着目し、尾久町に移轉したるは王子電車三ノ輪線布設に先つ事十年、爾來市内外の大小土木工事請負ひ着々良好の業績を收め、巨財を擁する土木建築請負業者となり、同地方の信望を一身に聚むるに至る、政治に興味を有し又公共事業に熱心なる氏は、疾より道路下水の完成を叫び今や同町三百萬圓の大下水事業が起工さる、大正十年村會議員候補に推されしも之を辭し同十四年大多數を以て町會議員に當選し、事業調査委員を兼ねて町會一方の重鎭とさる、氏の請負工事は數ふるに遑なきも王子電車の敷設、其他同社の建築物の如き殆ど氏の完成したるものなり。而も今や氏は尾久町移住者の元老株として囑目され、現に大日本土木建築聯合會評議員、東京土木建築業組合常議員、同第七支部長の要職に在り。

家屋稅調査員

勝沼藤助氏

（瀧野川町上中里四一六番地）

右手には政治革新運動の旗幟を握り、左手には實業――牛豚氷問屋の算盤を掴み、熱血多才常に社會の第一線に立つを敢て辭せざるジャン、ジャック、ルソー張りの新人、是れを勝沼藤助（號忠正）氏となす。

氏は新潟縣の人、明治三十二年九月一日古志郡下鹽谷村山口に生る。幼少の頃は鄕里に於て勉學し、長じて群馬縣桐生に出で、同市の高等工業學校豫科を卒業、大正十年上京して晝間は實業に從事し、夜間は早稻田大學法科に入り、卒業と同時に現住地に來住して牛豚氷問屋を開き、孜々營々今日の隆昌を見るに至る。精力絕倫にして熱血的快男兒の氏は寸刻も安閑たるを欲せず、卽ち業務の傍ら社會的に進出、又進出、曩には北豐島地代値下同盟會副會長、住宅保全組合長、同進會副會長等として活動、又政界刷新のためには立憲安國黨遊說部長として壇上に熱辯を振ひ、業界に在つては東京氷卸商組合聯合會理事長たり。昭和五年四月家屋稅調査員に擧げられて民意を强調す。家庭はなつ子夫人との間に長男勘助、長女一枝氏あり。又氏は柔道初段の猛者なりと。

前瀧野川町會議員

金子幾三郎氏

（瀧野川町上中里二五一番地）

金子氏は上中里有數の素封家にして町村制施行以來村會議員として十有餘年を村治の爲めに貢獻せる音五郎氏の二男にして明治二年に生る。其の愛町の念は父君に劣らず公共の爲めには直接間接に力を盡しつゝありし、爰を以て大正二年六月補缺選擧の行はるゝや有志の慫慂する所となつて町會議員に擧げらる、本町發展の機運は此の時代より急激の進展に向ひ、事毎に擧町一致の態度を以て向上を圖り、遂に文化の瀧野川たらしむるに至りし貢獻者として認めらるゝ一員たり、職に在る二期八ヶ年に及び引退せるも尙ほ第五小學校後援會長、平塚神社氏子總代として活動す、同神社改築の議起るや卒先して實現に努力し、郡神職會は其の功勞を厚く表彰し、氏子有志亦氏の爲めに祝賀會を開く、如何に氏が質實にして實行の士たるかを窺ふに足る可し。

管野醫院々主

管野紐氏

（瀧野川町田端三百番地
電話小石川二九六七番）

氏は仙臺藩士にして岩手縣東磐井郡田河津村醫師友說の息、夙に帝都に出で日本醫學專門學校を卒業し、帝國大學醫科專科に入り、内科小兒科耳鼻咽喉の各科を專攻し、微に入り細を究め研鑽以て辭するや、直に前東京井上病院平塚分院長に聘せられ大に其の技能を發揮して令名嘖々たり。明治四十一年獨立して現地に醫院を開く、而して多數患家の診療を爲すと共に多年瀧野川町第一尋常小學校醫に推され兒童の保健に貢獻する所尠なからず、今や退職して專ら自家の患療に從事し一般の信賴益厚きを加ふ。氏の趣味は謠曲にあつて其の技能は大家を凌ぐの聲量と節調を有すと云ふ。

氏は明治十六年一月廿一日生れにて資性高潔溫雅、頗る人情に厚く仁術家の典型とも云ふべく、又町公共事に寄與する所多く現に田端在家組合顧問たり。

巢鴨町家屋稅調査員

菅野熊次氏

（巢鴨町一〇八二番地
電話淺草六六三四番）

前巢鴨町會議員として又現巢鴨同志會々長として不斷の努力を自治公共の爲に傾倒しつゝある菅野熊次氏は、新潟縣の人、明治二十年一月を以て三島郡西越村の精農、林藏氏の嫡男に生る。十八歳の時既に建築家たらんとして上京、麻布區六本木町の大工職安達利平太の徒弟に入り、實地に就て技倆を研磨すること五年、爾來各地の大小工事に携はること多年、其奮鬪努力の結果は報ゐられ、大正三年遂に素志を貫きて現住所に獨立土木建築請負業を開始し今日に至る。資性任俠義氣に富み、幼時より辛酸を嘗め盡せる氏は、常に社會の爲に奉仕を怠らず。大正十四年には輿望を負ふて巢鴨町會議員に擧げられ、土木委員を兼ね、又信用組合巢鴨町金庫評定委員をも勤め、部落團體たる巢鴨同志會々長たること多年現に其の任にありて公共事に竭す。氏が家職として請負へる工事の主なるものは、東京市水道課吏員公舍、本所區千田町豐榮橋、巢鴨仰高小學校、築地魚市場冷藏庫其他大小數十に及び、何れも感謝狀記念品を贈られ、其業績の優秀なるを證せらる。昭和五年家屋稅調査員に擧げられ專門的見地より職責を竭して令名あり。家庭にはきん子夫人との間に四男二女あり。

瀧野川町會議員

河合末太郎氏

（瀧野川町瀧野川一三四四番地
電話小石川　番）

土木建築業界の巨擘錢高組の創立者の一人として、又斯界の成功立志傳中の一人として令名ある河合末太郎氏は、岐阜縣の人、明治六年を以て鄕里に生る。夙に土木建築家たらんと志し、彼の鐵道工事の覇王と稱さるゝ錢高組の先代善藏氏と協力して該組を創立し、爾來其業務に從事すること實に三十有餘年、全國各地の工事を請負ひて奮鬪努力し　同組の今日あるに至らしむ。氏の功績は單り錢高組の爲めのみならず、實に我國建築界に寄與する所大なりと謂ふべし。大正十三年氏は後進に職を讓り自らは其顧問として推され現在に至ると共に同町現住地に邸宅を新築して來住、家業は令息に托して自ら閑地に就き、專ら公共事に努力しつゝあつて、昭和四年五月には町民多數の推擧によつて瀧野川町會議員に當選し、土木委員を兼ね氏が多年の專門的智識技能を以て、同町土木事業のために熱心に活動しつゝあり。氏は圓熟の才と倦くなき精勵とを以て町議の間を往復し、自治の圓滿なる運行に竭す所多きは人の知る所なり。令息增太郎氏は一家を成し官公衙の指定請負業者として業界に重をなしつゝあり。

王子町會議員

加藤定五郎氏

（王子町王子一二八五番地
電話王子二三三番）

公共事には卒先身を以て盡し愛町至誠の人として人望高き王子町會議員加藤定五郎氏は、明治二十年四月廿九日を以て王子町下十條の山本家に生る。氏は大鄕組の棟梁大鄕房次郎氏、山本伸銅所の山本四郎三氏、商工省統計調査員にして金物雜貨商たる山本吉兵衛氏等の有力者と實の兄弟たり。常に土地の振興に努力して一般の信望厚く、居町部落の宮本町會副會長に擧げられ、熱心に消防設備の充實に奔走して之を完成し、住民感謝の的となり衆望期せずして氏の一身に集り去る昭和三年には理想選擧を以て町會議員に送られ現に火防委員を兼ねて町政に貢獻しつゝあり。氏の家職は雜貨商に肇ぬるに名物煎餅を業とす。所謂實行主義の公人として、町民の爲めには草鞋履きを以て努力すると云ふ、熱心家にして信望は益々加はり將來の王子町政中堅人材として囑目せられつゝあり。

計器製造業

勝間計器製造株式會社

（瀧野川町中里三七九番地
電話小石川三五六二番）

當社は、本邦計器製作界に嘖々たる名聲を博すると共に、絶對不拔の信用と權威とを有せし勝間與曾吉氏の個人經營なりし勝間計器製作所を株式組織に改めたるものなり。

即ち昭和四年三月三十日を以て資本金二十萬圓全額拂込の同社は創立せられしなり。而して社長には實業界の巨頭、大葉久吉氏を推し、常務取締役としては創業者たる勝間與曾吉氏之に當り、他に取締役三名、監査役二名あり、全株主は五十六名にして基礎最も堅實なり。又同社の製品は壓力計、眞空計、聯成計、廻轉計、酸素、アンモニヤ、炭酸用調製器、計壓器試驗器、水壓ポンプ等の計量器にして製產額は一ヶ年十萬餘圓に達し、從業員三十名を有す。販路は陸海軍を始め三菱の諸關係會社、日本製鋼、大日本人造肥料其他にして滿洲、朝鮮、樺太、臺灣等にも取引し現在の不況にも拘らず此特種の製品は好況を齎しつゝあり。

合同油脂グリセリン株式會社

資本金五百萬圓、本社を東京市丸の內興業ビルに、出張所を大阪市東區第一ビルに置き工場を本郡王子町、大阪佃、神戸兵庫に設けて化粧石鹼、洗濯石鹼の製造をなし、同時に其原料たる硬化油、副產物たるグリセリン、人造バター等を製造しつゝある同社は、神戸の鈴木商店直營の油脂工業と大正五年創立の日本グリセリン工業株式會社とを同十二年合同して現社名に改め名實共に東洋第一の權威として斯界の認むる所となれり。而して王子工場はレコード石鹼製造を主とせるが、同工場は荒川に面し敷地八千餘坪、職員三十名、職工傭人共百五十名を使用し、日々化粧石鹼五千ダース、洗濯石鹼一萬貫の製造をなし、一年間作業日數三百日と見る時は、化粧石鹼百五十萬ダース、洗濯石鹼三百萬貫を製造する事となる。而かも其原料硬化油は一切の一部にて自給自足し品質本位を以て不斷の研究を續け大量生產に依つて廉價提供をなすより、レコード石鹼の聲價は全國は勿論海外にまで販路を有し牢固たる信用を博しつゝあり。尙同社々長貴族院議員川村竹治氏、營業部長は長久伊勢吉氏、王子工場長は持田由孝氏なり。

貴族院議員

川村竹治氏

（高田町高田一六四二番地
電話牛込一一一五番）

前臺灣總督たる榮位に在り、治績大に擧がりて名總督と謳はれし川村竹治氏は、明治四年七月を以て秋田縣鹿角郡花輪町の川村俊治氏の長男に生る。夙に東京帝國大學法科に入り、明治三十年卒業と共に遞信省書記官となり、東京郵便電信學校教授を勤め、多度津電信局長、長崎電信局長、橫濱、大阪等序を趁ふて榮進し、通信事務に貢獻する所偉大なりき。後內務書記官、同參事官等に歷任し、臺灣總督府內務局長に拔擢せられ、又和歌山、香川、靑森の各縣に知事となり、良二千石の評高く、大正七年原內閣成立と同時に內務次官の榮位に昇り、更に同十一年滿鐵總裁に就任、辭任後歐洲を視察し歸朝するや貴族院議員に勅選せられ、次で臺灣總督に任ぜられ從四位勳二等に叙せらる辭任後は政友會の長老として今日に至る。ふみ子夫人は同町に川村女學院を經營亦令名高し。

椎名町郵便局長

鴨下篤太郎氏

（長崎町並木一三七〇番地）

長崎町の中堅人物として異彩を放てる鴨下篤太郎氏は、明治十九年十二月を以て三之亟氏の長男に生る。同家は土地の舊門にして代々名主たりし家柄なり、氏亦公共事に熱心にして夙に長崎町會議員に擧げられ前期まで其職に在りし外、耕地整理組合評議員をも勤め又先年同町の通信機關の不便を遺憾として奔走し、椎名町郵便局設置認可を得て其局長となり熱心に精勵し、町內會の宮元町會長に擧げられて奉仕の功績多し。きん子夫人との間に五男一女あり、長男富士太郎氏は立敎大學在學中なり。

横瀬精一氏

瀧野川町會議員

（瀧野川町中里四三〇）
（電話小石川五九六九番）

横瀬氏は明治二十七年清五郎氏の長男として下谷區仲徒士町に生る。瀧野川小學校を卒業し、聖學院英語科に學び、更に進んで東京高等工業に入學して應用化學科を專攻す、嚴父清五郎氏は公共自治に熱心にして曩に瀧野川町學務委員、消防部長等の公職に擧げられて貢獻する所多く、家は夙に製油業に從事せらる、大正六年工場を中里二百十七番地に起し、事業の發展と共に同町上中里五百四十七番地に事務所並に宏大なる工場を建設し、印刷用ワニス、塗料、ボイル印刷、コロンベーバー等特種の製品を產す、其創業は明治三十七年にしてワニス製造の始祖と云ふ、殊にコロンベーバーは其需要日毎に增加し最近の製產額年四十萬圓を突破し個人經營事業としては未曾有の大成と謂ふべし、大阪に支店を有し全國各地は勿論海外に迄販路を有して年々巨萬の純益ある獨占的事業なり。氏は大正十四年五月瀧野川町會議員の改選に當り當選し爾來同町會の闘士として重きを成し、土木委員、道路下水調査委員、小學校臨時建築委員の要職を兼ね、又在鄕軍人瀧野川分會長に推されて衆望を擔ひ、中里町會青年團長中里町會顧問等に擧げられ青年の指導自治の振興に貢獻する所多大なり。

熱烈なる政治の愛好家として曩に府議に立候補し現に民政黨院外團の巨頭として瀧野川支部長たり。

吉田義孝氏

日暮里町吉田醫院主

（日暮里町旭町一ノ三番地）
（電話下谷四四七〇番）

產婦人科、內科、小兒科の權威として令名嘖々たる吉田義孝氏は、公人として亦自治公共の貢獻者たり。卽ち氏は繁激なる醫業の身を以て曩には日暮里町會議員に擧げられ、學務委員、日暮里信用購買組合評定委員等を勤め、現に日暮里第二小學校々醫たる外、昭和五年四月には家屋稅調査委員の要職に擧げられ、又睦會顧問、福井縣人會々長、日暮里婦人髮結組合、北豐島郡鍼灸マッサージ組合顧問、仁壽、日清、東華、有隣、醫師共濟等各生命保險會社診査醫等公私に亘る職務枚擧に遑なし。氏は明治十一年三月十八日福井縣吉田郡上志比村大月に生る。十八歲笈を負て上京、日本醫學校を卒業し、大石博士、天本學士に就き產婦人科を專攻し大正三年には帝大醫科に小兒科を專攻す、又大正八年口腔衞生を研究し同十三年日本醫科大學產婦人科教室に新學說を講究する等一日も學究を廢せず、辻岡病院副院長の職に在る事十有餘年にして大正二年現所に內科、小兒科產婦人科を標榜して開院し同十四年には鐵筋コンクリート建の大醫院に改築し入院に便し隆々として繁盛を極む。豐子夫人は大織冠鎌足公の後胤たる關伍三郎氏の令妹にて明治五年十二月群馬縣吾妻郡澤田村に生れ、同三十七年濱田產婆學校出身にして產婆界の泰斗たり。曩に北豐島郡產婆會々長に擧げられ現に同會顧問並に日暮里產婆會理事長たり。夫妻の間に一男一養女あり、澄子孃は旣に千葉市の喜多詰保親氏に嫁せり。

吉田小兒科内科醫院主

吉田義雄氏

（王子町豐島一四〇番地
電話王子三三三番）

醫師にして消防小頭たる義勇仁俠の人、是を吉田義雄院長に見る。氏は福島縣の人、明治二十年五月白河郡滑平村故米太郎氏の第三男に生る。

氏は明治三十七年醫を志して上京、苦學奮闘により濟生學舍を卒業し、爾來研學を怠らず大正四年開業試驗に合格して王子町豐島の現住地に開業、逐年信望を加へ一般の稱賛の的となり現に王子町豐島川小學校々醫、町教育會役員たるの外、町消防第五部小頭として頗る功績あり。卽ち王子消防組に救護班なかりし大正十年正月、同町王子の大火に數人の死傷者を出せるに鑑み、氏は自發的に所屬第五部に救護班組織の必要を建言し、自ら小頭となり部下五六名を以て整然たる救護班を設置するに至る、是れ同町消防救護班の嚆矢にして他町村も亦是に倣ふ所多し。又氏は大震災の際は隱れたる功勞者にして當時私財を投じて施療せる重輕傷者百名を下らず其職務に忠實にして仁俠なる如斯し。家庭に要子夫人あり一女澄子孃は東洋高女に通學中なり。氏は銃獵、謠曲、旅行を以て樂とす。

第二次家屋稅調査員
東京齒科醫學士

吉田秀一氏

（王子町下十條
一二二九番地）

健康は日脛より、人生は健康にして初めて幸福なり。卽ち齒科醫の本領は實に偉大なりと謂ふ可し。吾が吉田秀一氏の如きは全く人類最大の幸福たる健康の鍵を握る名齒科醫と謂ふ可し。

氏は名古屋市の產、明治二十七年一月一日を以て愛知縣名古屋市紙漉町に生る。夙くより家を王子町に移して住し、同町に人と成る、卽ち氏は小學の業を王子尋常高等小學校に於て卒へ更に進んで磯江潤氏の校長たりし、本郷區京華中學校に學び茲に齒科醫たらんと志して東京齒科醫學專門學校に入りて勉勵優等の學績を以て卒業す。後大正五年一月現地に齒科醫院を開業し現在に至る。溫厚誠實の氏は堪能なる技術と共に一般の信望年と共に加はり斯界に重きを成し、今や東京府齒科醫師會北豐島郡、南足立郡支部會の會長に推擧せられ現職にあり。昭和五年家屋稅調査委員選擧の行はるゝや推されて候補となり、當選以て克く其任務を竭さる。亦氏の識見抱負の一端を窺ふべきなり。喜久子夫人との間に王子第二小學校に通學せる米子氏及び次女早子の二令孃あり。氏の趣味とせる謠曲は業に堂に入れるものなりと。

日暮里町役場庶務課長

吉田眞夫氏

（王子町堀の内
六七八番地）

氏は千葉縣の人、明治二十七年八月十日を以て印旛郡佐倉町内新町十六番地嚴父元次郎氏の長男に生る。同家は德川時代佐倉藩の重臣として墨付まで授けられし家門にして、嚴父は佐倉町長たること三期、又印旛郡會議員となり郡會議長たる事一期、町會議員九期に亘れる自治功勞の元勳者たり。氏は明治四十五年三月佐倉中學を卒業し、爾來東京工科學校、正則英語學校等に研學し、大正三年六月

京都府紀伊郡役所に奉職し、月給十五圓を振り出しに官界に入り、同六年四月には遞信省に在勤する事三年、同八年十月現日暮里町役場に就職、翌年四月拔擢されて書記となり、現に庶務、土木、衛生の各課長として精勵恪勤克く町政運用の衝に當る。田宮名町長亦氏の熱心と手腕とに信賴し寵顧厚きものあり、資性仁俠に富み、抱擁の才あり必ずや將來大成を期待すべき人材たり。

日暮里町會議員

吉田幸太郎氏

（日暮里町谷中本三六四番地
電話下谷七四四二番）

不言にして實行力に富み、而かも公共心に燃ゆる町議、是れを吉田幸太郎氏となす。

氏は富山縣の人、明治十一年十一月十九日を以て西礒波郡福道町字角田町に生る。十六歲の時建築業に志し修業五年、二十一歲の時既に上京、神田區五軒町に業を開く、爾來營々建築に從ひて蓄財し、明治四十三年始めて浴場の有利なるを知り、現地に自ら浴場を建築し其經營の傍ら本業に精進せり。氏は平生寡默なるも、公共事業に熱心にして從來土地開發の爲に犧牲を拂ふこと多大、町内の信賴益厚かりき。卽ち大正十四年推されて町會議員に當選し、克く協賛の任を盡し、昭和四年再び推されて當選し現に土木委員、警備委員、職業紹介所委員を兼ぬ。此間第四小學校賞賞會幹事、諏訪神社氏子總代、富山縣人會相談役等に擧げられ、又龔には第四小學校の兒童水呑場を建造寄附する等熱心に公共事業に盡瘁せり。氏も亦立志成功傳中の人と謂ふ可し。

奈良漬製造卸商

吉川吉六氏

（板橋町大山一五七八番地
電話板橋一二八、四四二番）

國產奬勵の聲高き今日、過去既に二十年間に亘り、獨特の奈良漬を創製して北米、南洋にまで販路を拓きし功勞者に吾が吉川阿久太郎氏あり、吉六氏は實に其長男として益々父君の業を興隆しつゝある人なり。

氏は明治十六年三月板橋町下板橋大山の現住地に生る。同家は土地の素封にして歷代農を以て業とし、嚴父は同町の元老にして明治二十五年以來町會議員の職に在る事多年、常に公事に奔走して鄕黨の信賴頗る厚く又農事改良には與つて力ありき。明治四十五年獨特の研究に依り奈良漬を創製發賣せる所、市場に大歡迎を受け、爾來益々好評を博し、年產額二萬樽に達する盛況を呈す。吉六氏は父君の事業を繼承し實弟久四郎氏と共に協力、該事業の進展に奮鬪の結果、今や遠く北米、南洋の海外を始め帝國の領土悉く到らざる所なく、販賣所を京橋區築地南小田原町、下谷區入谷町並に市外池袋驛に設け、支店を横濱市港町に開きて繁忙を極めつゝあり。資性質實圓滿、町民の信望亦頗る厚し。

王子町會議員

米田王道氏

（王子町王子一三五八番地
電話王子六三八番）

任俠義氣を以て世に處し、波瀾重疊の人生史を有し、今や公人と

して敏腕を王子町政及社會方面に揮ふの人、之を米田王道氏となす。

氏は明治十三年三月十五日を以て鳥取縣鳥取市新茶屋町に生る。郷愁を出で十三歳にして大阪市に出で、北野高等小學校に學び、辛ふるや直に建築土木の業に志し研鑽の後、大林組に入り陸軍第四師團經理部建築の監督に就任す。氏は更に土木建築の蘊奥を片山工學博士に師事して大に究むる所あり。明治三十九年には朝鮮統監府の建築に從事し、又元山廣島砲臺建設に從ふ。同四十二年には朝鮮咸境北道羅南第二十師團の建設工事を監督し竣工するや、大正六年上京して神奈川縣淺野造船所工事を請負ひ、大正十二年四月王子町に來住し現在に至る。

熱血多感の氏は本郡自治の偉勳者故熊谷源左衛門翁の表彰碑ある音無河畔熊谷小公園の開發に努力し別天地米島亭と稱し風流の邸宅を築く。曩に社會事業として簡易宿泊所を王子町榎町に建設し、又同地に日用品廉賣市場を設くる等民衆の爲に盡す所多大にして信望頗に加はり、町會議員並に第一次家屋税調査委員に擧げられ、現に其職に在りて火防委員を兼ぬ。曾ては王子新報を創刊して町政革新を叫び又辯舌獨特意氣聽衆を魅す。また非凡の材幹と謂ふべし。

巣鴨二郵便局長　吉田　達德氏

（巣鴨町二丁目三十番地）

前巣鴨町會議員として町政の樞機に參し俊敏達識の才能を發揮して令名嘖々たる吉田達德氏は靜岡縣の人、明治二十八年一月を以て磐田郡笠西村に生る。嚴父正直氏は郷里に於て村長に擧げられ幾多の公職を帶びて自治公共に貢献せる功勞者にして、土地の名門たり。

氏は二十歳の時上京。明治藥學校に入り在學六ヶ月にして藥劑師試驗に合格す、以て如何に氏が天才的頴敏の頭腦を有せるかを知るべし。後陸軍省衛生材料廠技員となるも攻學を廢せず、大正五年同藥學校を卒業し、翌六年獨逸協會學校をも卒へ翌七年現住所に藥種商を開き以て今日の隆昌を見るに至る。常に熱心公共に盡瘁して衆望厚く大正十四年五月擧げられて巣鴨町會議員となり、警備委員、出納檢査委員等を兼ねて能く町政の向上に努むる事一期、更に日本藥劑師會委員、明治藥學專門學校評議員、同監事、北豐島郡度量衡計量部組合理事長、遠州會理事等公私頗る多忙を極めつゝあり。尚氏は昭和五年初めて巣鴨二丁目に無集配三等郵便局設置の認可を得て自ら局長となり同地界隈の通信爲替貯金等に便宜を與へ、居住者より感謝されつゝあり。又同氏の專門的獨特の研究を以て發明せる痔の特効藥『ヘモリリキン』注射劑は專賣特許を得たるものにて醫界に定評あり。

巣鴨腦病院主　吉澤　宗孫氏

（西巣鴨町巣鴨一〇一五番地　電話大塚一六六番）

氏は埼玉縣の人、文久二年五月一日を以て金右衛門氏の長男に生れ明治廿年家督を相續す。同卅七年より西巣鴨庚申塚の保養院に勤め會計主任たると共に經營萬端に當り其非凡の手腕を認められる、後獨力現在の巣鴨腦病院を設立し、斯界の泰斗石川貞吉博士を院長に迎へ經營宜しきを得て今日の大發展を爲す、曾て郷里に在つては村議學務委員助役等に擧げられたる自治功勞者にして、家庭にはしや子夫人との間に保重氏あり同夫人に孝子、芳江兩孃と康夫君あり。

日暮里町長　田宮惣左衛門氏

（日暮里町谷中本二二番地　電話下谷五六八八番）

玲瓏至純、溫良恭敬、眞に匹儔を見ざる青年紳士として欽仰せられつゝある田宮惣左衛門氏は、明治二十八年十二月二十二日を以て先代惣左衛門氏の嫡男として現住所谷中本の邸に生る。同家は近郷に鳴る大地主にして代々谷中本の名主たる舊家素封の門地たり。先考は町村制施行と共に收入役に擧げられ、更に町長として自治に貢獻せる功勞者なりき。氏は前名を美四瑠と呼び嚴父の長逝後家督を相續して襲名せるにて、小學校より本郷郁文中學校を卒業して父君の家職を佐け、傍ら青年の指導啓發に努めつゝありしが、大正十年五月二十七歳を以て町會議員に擧げられ、町議最年少の記錄を作る以て如何に氏が信望厚きかを窺ふ可し。同十四年五月再び町議に當選し、同年八月には一躍名譽助役に推擧され、更に昭和四年一月には岡田町長勇退後擧町一致を以て後任町長に當選して現在に至れるなり。此間氏は精勵恪勤、町治萬端に遠大の抱負と經論とを實現し、小學校の增設、道路下水の完備、並に職業紹介所を新設して社會事業方面に心血を注ぎ、現に豐島病院組合會議員、日暮里町消防組頭、日暮里町青年團長等の要職を兼ねて熱心に町政を主宰し、郡中唯一の平和町として着々町是の遂行實現を期しつゝあり。有繋に名門の出、風格貴錄共に當代稀に見る大器にして、將來必ずや中央政界に進出すべき偉材として嘱目せらる家庭には町の名門冠權四郎氏令孃たる久子夫人あり。

近時社會の風潮は實に輕佻浮薄に流れ、國民の自治精神も亦日を逐ふて破壞せられんとする今日氏の如き、社會一般の師表として仰ぐべき德望の士が、里正として町治に膺り、新時代の善政德政を布くに於ては、帝國自治制完成に寄與する所偉大なるを信ず。

日暮里町會議員　田宮　幾藏氏

（日暮里町谷中本二二番地）

多年軍隊生活を續け、在郷軍人として眞に義勇奉公の精神作興に努め、公共に熱心にして幾多の公職を帶び、最も郷黨の信頼厚き田宮幾藏氏は、現日暮里町助役清水福太郎氏の令弟にして、又日暮里町長田宮惣左衛門氏の義弟たるの人なり。

氏は明治二十五年六月を以て日暮里町谷中本一〇八三の清水家に生る。大正三年十二月騎兵第十六聯隊に入營し大正八年まで在隊騎兵曹長に昇進して除隊す。後現同町長田宮惣左衛門氏の令妹の養嗣子となり、翌九年現住地に分家して今日に至る。氏は歸郷後在郷軍人會幹事となり、副會長に進みて二期を勤め、更に分會長に擧げられ現に三期を勤續中なり。昭和四年衆望を負ふて日暮里町會議員に當選し、東部下水道町村組合議員、町警備委員を兼ぬるの外、昭和五年四月には家屋税調査委員に擧げらるゝ等聲望頗る高く、日暮里信用組合監事として庶民金融機關の實を擧げ、第四日暮里小學校奬賞會幹事としては兒童奬勵に盡し又青年團幹事として青年の指導啓發に勗むる等公共自治に貢獻する所多大なり。乘馬は軍隊にて鍛えたる所最も之を好み、家庭にはせい子夫人との間に二男一女を擧ぐ

日暮里家屋調査委員

田戸惣右衛門氏

（日暮里町日暮里一〇六六番地）

田戸家は日暮里に於ける素封家にして、門地高く積善の家として敬仰の餘慶を享く。

現主田戸惣右衛門氏は、明治十七年三月十九日を以て現住所に呱々の聲を擧ぐ。同家も亦公共自治に稗献せし功勞多き家柄にして、氏も大正十年五月には選ばれて町會議員に當選し、克く議員の職責を竭し、同十四年には土木委員に擧げられ、急激の發展地たる同町の道路下水計劃に參與して今日の基礎を作り昭和四年には衛生委員に推薦せられて現在に及ぶ。

又昭和五年四月には家屋稅調査委員に推されて當選し、土地の事情に精通する氏は、公平なる課稅と均衡とを期して奮闘し不當なる決定を排して負擔輕減に努力せり。

氏は資性溫厚質實にして遜讓の美德あり、他に見るが如き地主としての臭味なく一般より信望厚し。又町内會日暮里公衛會々長に推され自治の圓滿なる發達に盡瘁せり。

田岡合資會社代表社員

田岡重次郎氏

（三河島町三河島三〇一三番地　電話下谷一九八八番）

空拳徒手、阿波より上京、奮闘と努力とを以て今日の成功を贏ち得たる人、是を田岡重次郎氏となす。

氏は德島縣の人、明治二十七年三月十日美馬郡八千代村嚴父伊七郎氏の第七子に生る。生家は農を營み土地の素封家にして乃父は村會議員等を勤めたる有力家にて、氏は十八歳の時上京淺草千束町に獨力現業たる空鑵鐵力板製造を創む。初め阿波屋商店と號し商勢隆昌販路遠く新領土に及ぶ。大正七年現住地に來住し、工場を三河島町三河島二九四二番地及町屋一三九六番地、尾久町上尾久三二二四番地に置き、倉庫は六棟五百坪に及び其他數ヶ所に倉庫を設け從業員五十餘名に達す。昭和四年三月合資會社組織に更め、資本金二萬圓全額拂込とし、營業課目を空鑵、空箱、賦力地金、並に硫酸瓶、醋酸瓶等とし、現下の不況に拘らず、氏の努力と奮闘とは、斷然盛況を呈しつゝあり。

田中醫院主

田中省吾氏

（瀧野川町上中里三九五番地　電話王子五五九番）

最新の醫學を研磨し、少壯官仕して臺灣に在勤、從七位に叙せられ、現に瀧野川町校醫として名聲嘖々たる國手、是を田中省吾氏となす。

氏は新潟縣の人、明治二十六年四月九日を以て越後中頸城郡水上村吉木八四二番地に生る。明治四十四年三月新潟縣立高田中學校を卒業し、醫を志して官立千葉醫學專門學校に入り大正四年九月卒業、後三井慈善病院、杉本胃腸病院、高田市知命堂病院等に在て各科薀奥を實地に研鑽し、大正十年四月臺灣總督府醫官に任ぜられ、臺北刑務所醫務囑託を兼ね勤續五年、大正十四年七月二十五日依願本官を免ぜられ、歸國の上更に上京瀧野川町上中里四二八番地に開院、翌年同所三八八番地に移轉し昭和四年十月現住所に洋館二層閣の莊大なる醫院を建築し移轉開業して今日に至る。同所は環狀線道路に直面して交通の便良く、氏の圓熟せる神技と患家本位の親切とに信賴頗る厚く常に醫務繁忙を極む。氏は昭和二年五月より瀧野川第五小學校々醫を囑託せられ同五年七月重任して現在に至る外、同五年三月北豐島郡醫師會醫政調査部委員に囑託されて貢獻す。よし子夫人との間に長女文子（第五小學四年生）長男滋君（同一年生）次女節子孃（四歳）の一男二女あり、氏はピンポン、尺八、讀書、圍碁將棋を趣味とす。

瀧野川第三尋常小學校長

田中順一氏

（尾久町上尾久二七六八番地）

育英家の使命固より重且つ大、而かも純眞、純美なる兒童を育成して日本獨特の國史國民性を傳統せしめ、更に全世界の競爭場裡に起たしめて優者勝者たらしめんとするの覺悟、洵に之を吾が田中順一氏の抱負經綸に見る。

氏は西多摩の人、明治廿六年二月十八日を以て西多摩郡多西村二九一二番地に生る。明治四十三年四月四日東東府青山師範學校に入學し大正四年三月二十八日同校卒業、同年三月三十一日西多摩郡西秋留村共和尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同年十月十一日西秋留農業補習學校訓導を兼任、同五年三月三十一日同郡菅生村外四ケ村組合智進尋常高等小學校訓導に轉じ、同年九月三十日同村智進農業補習學校訓導を兼任、同七年四月二日更に西多摩郡福生村外一ヶ村組合能川尋常高等小學校訓導となり、同年八月八日東京市育英尋常小學校訓導として進出、同十年四月十二日東京市淺草區育英實業學校助教諭兼任、同十二年十月二十五日兼職を免ぜらる、昭和二年十月二十六日瀧野川第四尋常小學校訓導に榮轉首席となり同四年九月二十七日瀧野川第三尋常小學校訓導兼校長に榮進して今日に至る。

土木建築請負業株式會社大郷組

大郷彌太郎氏

（營業所王子町堀の内九六〇番地　電話小石川七六九番王子二六九番）

城北土木建築業界の鼻祖にして巨鎭たる、株式會社大郷組は、大正十三年四月の創立にして資本金十萬圓（全額拂込濟）なるも其經費と無形の信用資本は莫大なるものあり、即ち重役には取締社長に大郷彌太郎、專務取締役大郷房次郎、取締役黑川直吉、監査役堀江鍾作、堀江松五郎、顧問大郷三吉の諸氏にして、當大郷家は往時姓を醍醐と稱し德川の末紀に至り家運一時衰へたるも、中興の偉材、醍醐米吉氏寢食を忘れて家運の輓回に努め漸く再興の業を成就し醍醐を大郷と改む。然るに氏に子なく仙太郎氏を迎へて養子嗣となす、養父米吉氏永眠するや、大に其遺志を承けて勤儉產を治め大仙と號して大工棟梁として一般民家の建築に從事せしが明治三十九年四月病歿せるより長男彌太郎氏亦大仙と稱して嚴父の業を繼ぎ、先づ關東酸曹株式會社新築工事を振出しに土木建築請負業を創め、爾來極めて順調に成功して今日の基礎を築くに至りしが、氏は大正十三年一月六十三歳にて易簀せり。氏に嗣子なく依て亡仙太郎氏次男三吉氏の長子一郎氏（明治三十五年十月二十五日生）を養子嗣とし彌太郎の名を襲はしめ大正十三年一月家督を相續す。後大郷組を株式組織に改め今日に至る。

當主彌太郎氏は夙に築地工手學校建築科を卒業し現に取締役社長たり。現今東京市役所、遞信省、農林省、商工省、海軍省、大藏省、警視廳、印刷局、大日本人造肥料、東京輸出セルロイド工業組合、隣接町村役場等を主なる指名先とし、年請負高六十萬圓に達す。

尙既往及最近施工の主なるものは印刷局印刷部工場並廊下增築、瀧野川第三小學校、印刷局印刷部食堂及浴場、同活版部改築、大日本人造肥料電解部鉛室、濱町公園內臨時收容家屋、特殊合金工場、遞信省二長町倉庫、瀧野川警察署、藤安事務所及倉庫、豐玉小學校、東京輸出セルロイド工業組合小豆澤工場、王子腦病院病舍增築等にして瀧野川警察署新築完成につき成績佳良の廉を以て警視廳より金盃壹個、中新井村豐玉小學校も亦金盃壹個、大日本人造肥料株式會社より金五千圓を授與せられ、納稅額は年三千二百圓の多額に上れり。社長彌太郎氏は任俠義氣に富み、盆栽、金魚、刀劍、書畫、旅行等を好愛し、家庭にはとし子夫人あり。

土木建築請負業

大郷房次郎氏

（瀧野川町西ヶ原一三三五番地　電話王子一〇二番）

土木建築請負業大郷組の巨擘として知られ、日獨戰端を開くや遠く狂濤を凌ぎて彼の艨艟を追擊したる海の驍勇として聞え又家庭に在つては、愛金鯨家として情緒優雅の人たる大郷房次郎氏は當代稀に見る斯界の權威者たり。

氏は明治二十六年九月十五日を以て王子町下十條八〇七番地山本由太郎氏の四男に生る。夙に京北中學を卒業、更に築地工手學校建築科を出で、後海軍に入りて日獨戰爭に參加し遠く南洋の熱風と戰ひ獨艦エムデン號を退擊して武功を樹て、大正四年十一月勳八等瑞寶章を授けらる。同六年九月十六日氏は大郷とく子氏と養子緣組を爲し同八年三月十七日入籍す。同家は大郷家の新家と稱し大郷仙太郎氏の三男與吉氏より始まり、與吉氏の娘すゞ氏の養子と爲る。同十三年四月株式會社大郷組の成立するや、氏は入つて專務取締役となり同社の柱石となりて社長彌太郎氏を輔け、斯界に活躍しつゝあり。同社本日の隆盛は氏の手腕にまつところ頗る大なり。又氏は町內公共自治に熱心盡瘁し現に西ヶ原御殿下町會副會長に推され、在鄕軍人分會第十三班長に擧げられ、其他教育に消防に多大の努力を拂ふ。尙ほ氏は趣味極めて廣く就中愛金鯨家として聞え我邦隨一の金鯨を有し、大會毎に優勝盃を獲得しつゝ有り。氏が愛養の獅子頭金鯨『數尾』は全國希れに見る鯨にして是を養成する迄の苦心は實に筆舌の能く竭す處にあらずと云ふ。其他謠曲、寫眞、俳句、書畫等を愛好す。家庭にはすゞ子夫人との間に一男二女を儲けらる。

日暮里第六小學校長

多田子之助氏

（西巢鴨町池袋六一一番地）

囊には本郡岩淵町第二小學校長として聲名共に高く、教育家の典型と稱揚せられたる多田子之助氏は、今や日暮里町に在りて、其手腕經綸を大に伸べ一新紀元を劃しつゝあり。

氏は千葉縣の產、明治二十二年一月十日を以て下總香取郡の南部久賀村字谷三倉七三八番地の農家に生る。同地は多古町に近く、三里にして佐原町に達する農村なれど、氏は夙に人材教育の天職に膺らんことを志望し學級を經て上京、池袋の豐島師範學校に入學し、大正三年三月本科第一部を卒業するや、直に本郡王子町荒川尋常小學校訓導に任ぜられ、更に同七年四月には東京市立業平尋常小學校訓導に轉じ、大正十三年六月十六日再び本郡の教育家となり西巢鴨町第三巢鴨尋常小學校訓導として來任、大に父兄の信賴を博す越て大正十五年三月三十一日岩淵第二尋常小學校訓導兼校長に拔擢せられ、更に昭和四年四月日暮里第六尋常小學校訓導兼校長に榮轉し現在に至れり。氏は囊に中等教員の資格を得たる篤學の士たり。

瀧野川第四尋常小學校長

立谷宗三郎氏

（西巢鴨町巢鴨二一二八番地）

剛邁の膽力を以て恬淡磊落而かも教育家の本領に透徹し、熱心に業績の改善向上に勉むる人是れを立谷宗三郎氏とす。

氏は明治二十四年一月三十日福島縣相馬郡中村町大字中村字大町七七番地に生る。明治四十三年三月二十八日相馬中學校を優等を以て卒業、更に同四十五年三月三十一日福島縣師範學校本科第二部を卒へ直ちに同縣岩瀨郡仁井田尋常高等小學校訓導に任ぜられ、大正二年一月二十五日仁井田村村立實業補習學校訓導を兼任、同三年五月三十一日同郡須賀川町第一尋常高等小學校訓導となり勤續多年、同十一年六月十五日北豐島郡日暮里第四小學校代用教員に奉職、同年七月八日訓導に任ぜられ同年八月三十一日日暮里實業補習學校教授囑託となる。越えて大正十年四月二日本郡西巢鴨町第三巢鴨尋常小學校首席訓導に榮轉し、運動體育に熱心なる教育家として知らる。昭和五年三月三十一日瀧野川第四尋常小學校訓導兼校長として榮轉現在に至れる人なり。

瀧野川第五小學校長

武田倉松氏

（日暮里町元金杉六二六番地）

帝都の教育界に在ること二十有五年極めて順調に累進して校長の要職に進み、孜々として使命本分に邁進しつゝある武田倉松氏は現に瀧野川第五小學校長として信望を鍾む。

氏は明治十九年八月一日を以て東京市下谷區南稻荷町九番地に生る。明治三十七年四月二十日東京府靑山師範學校に入り同四十一年三月二十八日同校卒業と同時に、西多摩郡靑梅尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同四十四年四月二十日には東京市立本村小學校訓導となり、翌年三月三十一日東京市立千束尋常小學校訓導に轉じ、勤續多年大正十二年三月三十一日東京市立櫻川尋常小學校訓導となり、越て昭和二年三月三十一日南葛飾郡第一吾嬬尋常高等小學校訓導に轉じ、翌三年十月二十三日南足立郡綾瀨村村立弘道尋常高等小學校訓導兼校長に榮進し、同年十一月十二日同郡綾瀨村靑年訓練所主事に囑託され、又同日同村實業補習學校助教諭兼校長に任ぜらる。昭和五年四月二十五日瀧野川第五尋常小學校長に榮轉し現在に至る。

尾久赤土尋常小學校長

臺　享氏

（豐多摩郡中野町二四八番地）

北埼玉出身の教育家成功者中第一人者に推すべき臺享校長は至誠

溫厚の人格者にして、年齢尙少壯、必ず爲す有るべき育英家として斯界に待望さるゝ人材なり。

氏は明治二十七年正月元旦を以て埼玉縣北埼玉郡中島村北萩島三四五番地に生る。同地は僻陬の農村なりしが氏は夙に教育家たることを志望し、大正三年三月埼玉縣師範學校第一部を卒業し直ちに北埼玉郡利島尋常高等小學校訓導を拜命し、翌四年十二月には同郡加須尋常高等小學校訓導に轉じ、更に同六年三月に同郡種足尋常小學校訓導となり、同八年十二月には不動岡尋常高等小學校訓導に榮轉し、同十年四月依願休職となり、同年九月上京豐多摩郡中野町桃園尋常高等小學校訓導に任ぜられ、多年勤續の後昭和三年には巢鴨町仰高西尋常小學校訓導に轉じ尙青年訓練所指導員を囑託され一般の信頼厚かりしが、翌四年拔擢せられて尾久町赤土尋常小學校訓導兼校長に榮轉し現在に至れるなり。

瀧野川第六尋常小學校長

瀧田忠衛氏

（瀧野川町西ヶ原六一番地）

多年瀧野川尋常小學に在りて熱心と努力とを以て町民一般の信望を集め、首席訓導に進み渾身の智囊、純潔の志操を發揮し遂に拔擢されて同町第六校長に榮進したる瀧田忠衛氏は福島縣の產なり。

氏は明治二十七年七月七日を以て福島縣安積郡永盛村大字荒井四番地に生る。夙に向學の心熾にして明治四十年四月五日福島縣立安積中學校に入學し大正三年三月二十五日同校を卒業し更に氏は教育家たらんとして同年四月五日東京府豐島師範第二部へ入學し同四年三月三十一日卒業と同時に瀧野川尋常高等小學校訓導に職を奉じ、大正七年には西ヶ原補習學校訓導を兼任し、十年一日の如く熱心精勵され父兄の信望厚く遂に首席訓導となる。昭和三年八月十五日瀧野川第六尋常小學校の新設と共に拔擢せられて校長の重職に就く、氏は體軀偉大ならざるも雄魂膽大、頭腦明晰にして職員の統制宜しきを得良校長の名高し。

岩淵町助役

竹之內林藏氏

（岩淵町赤羽七〇八番地　電話赤羽一〇一番）

征露の一擧は、實に是れ驚世の雄圖、絕代の偉業なり、宣戰一下、一意奉公の誠を盡し、鄕に歸りては園閭の模範となり自治政の爲に健闘する人、是を吾が竹之內林藏氏となす。

氏は明治十四年十二月三日を以て岩淵町赤羽の舊家竹之內源兵衛氏の長男に生る。青年時代は學究の傍ら家業の農事に從ひて模範青年と稱され、明治三十四年十二月徵兵として第一師團歩兵第三聯隊第七中隊に入營し翌三十五年十二月には成績優秀を以て上等兵に昇進、同三十六年十一月歸休除隊となる。同三十七年二月十日征露の宣戰布告さるゝや、翌三月充員召集を受けて歩兵第三聯隊に入り、同年九月伍長に進み、同三十八年一月軍曹に昇進し、同年七月動員下令と共に第五十八聯隊に編入され、軍國の干城として一身を鴻毛の輕きに比して捧ぐ、同三十九年四月召集除隊となるまで軍人の訓規を嚴守して出師の目的を達成せしむ。爾來氏は組紐製造業を起して業況頗る順調に赴く。同四十年四月日本赤十字正社員となり、大正五年五月には在鄕軍人分會長に擧げられ又同十四年五月には衆望を負ふて岩淵町會議員に擧げられ、昭和四年五月再び町議に當選し、更に同年六月二十八日岩淵町名譽助役に推擧されて沼野町長の女房役として熱心町是の遂行に當り、昭和五年四月家屋稅調査員にも當選令名嘖々たり。

建築設計業龍谷工務所主

龍谷長次郎氏

（瀧野川町西ヶ原九〇六番地　電話小石川三二三六番）

建築の善美、莊嚴、其構造の堅固、結構は一に係りて其設計の技倆に存す。就中神社佛閣の如き特殊の美觀莊嚴を要すべきものにありては獨特の實力を必要とす。此點に於て吾が龍谷長次郎氏の如きは第一人者を以て推すべき設計家なりとす。

氏は明治二十三年七月十九日を以て深川區東扇橋町に生る。同四十年三月東京高等工業學校附屬徒弟學校を卒業するや當時建築業界に名聲嘖々たりし嚴父の下に實際の技を磨き、特に神社佛閣の建造に關する研鑽を積む。而して大正三年氏は東京市立第二補習夜學校講師を囑託され製圖設計等の講座を擔任し後進を指導して令名を博したるも中途嚴父の長逝に遭ひ、其職を辭して父君の業を繼承し、一層斯界の信望を集む。大正十二年現住所に來住建築、土木、設計、監督、官廳出願代理の事務を開き、多年の研鑽蘊蓄を傾けて熱誠事に當り、益々一般の信望を博す。現に東京設計同業組合の會長たり。氏が最近設計せる主なるものは左の如し。

茅ヶ崎妙蓮寺本堂及山門。下谷區南稻荷町成就院本堂及庫裡。埼玉縣起町法恩寺本堂。深川子田神社拜殿及本殿。尾久町花藏院山門。

日暮里第二尋常小學校訓導

爲井安太郎氏

（尾久町上尾久一一七六番地）

吾が爲井安太郎氏は純粹の北豐島男兒にして、また終始北豐島教育界に貢獻しつゝある新人なりとす。

卽ち氏は東京府北豐島郡尾久町上尾久二〇三八番地に於て明治三十二年二月四日を以て生る。鄕學を經て明治四十五年三月小石川區私立京北中學に入學し大正六年三月同校を優等の成績を以て卒業し、同七年八月教育家たらんとし、東京府豐島師範學校第二部に入學し同八年八月同校本科第二部を卒業と同時に本郡三河島町第一峽田尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同九年二月九日同町實業補習夜學校訓導を兼務となる。尙同町には尋常夜學校の設置あるを以て、氏は同十一年十月その訓導をも兼任するに至る。越えて大正十四年日暮里第二尋常小學校訓導に榮轉し、又同町に於ても昭和二年十月より尋常夜學校訓導を兼任し兒童並に父兄の敬慕一方ならず今や首席訓導として嘖々の令名あり。

東京府屬

高橋剛氏

（板橋町下板橋一〇二八番地）

大正四年以來十有六年間我が北豐島郡治のために貢獻し功勞著大なる人に高橋剛氏あり。

氏は明治十年五月一日を以て岩手縣利賀郡江鈴子村に生る。生家

は土地の舊家として知られ嚴父半助氏は十三ケ年間の久しきに亘り江鈴子村長として村治に一身を捧げたる家柄なり。氏も亦夙に同村々會議員に擧げられ、更に同村收入役に推され共天禀的數理の才能を以て出納事務に當り、大に地方自治に貢獻せり。明治四十三年秋上京して東京第十一區府縣立全生病院雇、鐵道院博物館掛、同院總裁官房研究所主任付等に歷任して、大正四年二月十日本郡々書記に任ぜられ會計主任となり、同十年十二月産業部主任に轉じ、同十一年五月土木部主任となり庶務部副主任を兼職し、同十三年六月三十日より同七月九日まで三河島町長職務管掌の任に當る。爾來郡制廢止の大正十五年七月まで會計部副主任を兼ねて郡政に竭し、同月一日東京府屬を拜命、現に東京府板橋土木出張所に勤務し昭和四年三級俸に累進現在に至る。氏の如く本郡の農村多き時代より終始一貫郡治に盡せる人は稀にして新興北豐島の土木事業完成に一層の健闘を待つ所なり。氏は圍碁を趣味とし、家庭には夫人との間に二男三女あり。

所得調査委員　**高野角太郎氏**

（志村中臺一四六番地）

大兵肥滿、膽亦如甕、而かも任俠義氣に燃えて常に社會の第一線に起ち、名を揚け産を興し以て父祖の遺志を啓光する人、是を高野角太郎氏となす。

氏は元北豐島郡會議員として快男兒と稱され本郡の政界に名物男たりし高野音吉氏の令嗣として明治二十九年六月四日を以て生る。鄕愛を出で夙に嚴父の家業たる土木建築請負並に砂利採取販賣業を習得しつゝある際大正九年十月乃父の訃に會ひ家督を相續と共に遺業を繼承せり。爾來東京府、志村、赤塚、上板橋、其他本郡西部町村役場の指定請負人として年請負高十萬圓内外に上り、尙ほ前助役平岩正行氏と平野組を組織し、埼玉縣入間郡坂戸町高麗川にて砂利採取事業を營みつゝあるが其採取高年約二千坪に及ぶ。此繁激の中にも公共事に貢獻して信望厚く現に所得調査委員、志村々會議員、同青年團幹事長、同窓會副會長、志村教育會幹事、消防小頭等に擧げられ、東京土木建築業組合第七支部長に推され斯界の重鎭となる。旅行は氏の最も趣味とする處なり。

瀧野川町會議員　**高畠清吉氏**

（瀧野川町瀧野川四四八番地）

現瀧野川町會議員、東京府方面委員たる高畠清吉氏は、明治十九年三月を以て茨城縣那珂郡芳野村に生る。明治三十四年上京して研學修養すること多年、特に財政學に就て研鑽する所あり、後橫濱市に到り生糸商として活躍したりしが、大正十年再び上京、最近まで辯護士事務所に奉職して民權の擁護に當る、又氏は政治に熱烈なる趣味を有し、同町政友派一方の闘士たり、昭和四年五月の瀧野川町會議員選擧には馬場町有志並に政友黨員の支持により立候補し、町會議員に當選、財源調査委員、道路下水改良調査委員等を兼ね十一萬町民の爲に寄與しつゝあるの外、町内會馬場町會々計の要職に擧げられ東京府方面委員として盡す、氏は又堂々たる體軀の所持者にして友情に厚く後進を愛する俠氣ありて常に慈父の如く慕はれつゝあり。

巢鴨町家屋稅調査員　**高島俊雄氏**

（巢鴨町三丁目一一六番地）

高島氏は明治三年市内日本橋區の日暮家に生る。長ずるや中央大學の前身たる東京法學院に學び同二十三年卒業す、一年志願兵となり日清戰役當時は豫備役として出征せり、凱旋の後三井銀行に入り、累進して三井東神倉庫株式會社東京支店長、同神戸支店長を經て東京本店參事に昇進す、而して大正十二年退職せるが此間實に三十年、功成り名遂けて退くとは之れを言ふべし。同十四年町會議員に推され學務委員、臨時建築委員を兼ね昭和四年まで在職、現在家屋稅調査第一第二次委員並に荒玉水道組合會議員にあつて最善の努力を捧けつゝある當町の元老格たり。

長崎町會議員　**高木市太郎氏**

（長崎町五郎窪三八七四番地）

眞の愛町至誠の人として、一般の敬慕を受け、町民の儀表として稀に見る人格者、高木市太郎氏は、明治四年六月十七日を以て土地の豪農安右衛門氏の長男に生る。同家は五郎窪の舊門にして、先代安右衛門氏は村會議員に擧げられ、幾多の公職を兼ねて公共事に貢獻し、また精農家として知られ、本郡農事改良の爲にも功績尠からず、現在も尙ほ農を營み、祖業を尊重して純朴、恬淡善く民俗を導く、大正十年衆望を負ふて村會議員に擧げられ、再選既に三期に及び學務委員、土木委員、耕地整理組合評議員を兼ね、又長西會長たる事多年自治公共に奔走せり。長男安太郎氏は模範青年として大に將來を囑目せらる。

セブラ自轉車製作所主　**高橋長吉氏**

（工場三河島町三河島三三三〇番地　電話下谷四七九番）

輪界の寵兒覇王として全天下に愛用者を有するゼブラ號自轉車製造所主の高橋長吉氏は、慶應三年一月二十五日を以て、千葉縣君津郡湊町に生る。嚴父は鳥海長八氏と呼び鍛冶職を營み、氏は其三男たり。夙に自轉車製作の有望なるを看取して之が研究に努め後淺草區聖天町に工場を設けゼブラ號と命名製作發賣するや、其優美、輕快、耐久、廉價を以て忽ち人氣沸騰し、注文全國より殺到して工場狹隘を來せしより、大正七年南千住町に移り、更に同十一年現地に大工場を設けて移轉、百餘名の職工を使ひ、年製産高一萬數千臺に達し、東京市内は勿論全國に販路を有し、業況隆々たり。尙氏は現に下谷區下根岸町四一番地に居住せり。

前王子町々長　**高木靜馬氏**

（上十條二二四番地）

高木氏は明治六年王子の高木大盡と稱されたる豪家に生る、同二十一年荒川小學校を卒り板橋高等小學校を經て明倫義塾、共立學校、郁文館中學等に學を修む。明治三十七年王子町々會議員改選に際し

衆望を荷つて町會議員に推され爾來大正十三年に至る二十年間改選毎に選出され、又石神井川水利組合會議員、北豐島郡會議員等にも推さる、議員在職中の大正十二年十二月卽ち大震災直後町長に擧げられ自治の難關たる復興事業に當り大に抱負を實現せしめんとせしも家事の爲め果さず數月にして職を辭するの止むなきに至れり、其後暫く學務委員たりしも都合上之れを辭し今や閑地にあつて自治體の前途に注目しつゝあり。

前王子町會議員　**高木太右衛門氏**
（王子町上十條一二八一番地）

高木氏は明治十一年上十條の素封家に生る、愛鄕の念は植物を培かふ如く鄕黨の發展向上を培かひ、善事は人に知らしめず之れを行ひ功を貪らず名を求めず、おのづから君子の德を存す、玆を以て鄕黨は均しく其の淸高なる人格を推賞せり、大正十三年町會議員の改選に當るや衆望は期せずして氏に集りて當選し、衛生委員としては保健上に努力して功績を擧げ、土木委員としては同町の消長に關する道路改修事業に熱誠を擧げて與り、其の向ふ所は盡く實となり種となり核となつて存す、實に氏の如きは眞の實踐躬行家にして地方自治の至寶として推賞す可き人物たる者なり。

王子町會副議長　**高木要太郎氏**
（王子町下十條千百七十番地）

王子町會議員、副議長、土木委員、火防委員、衛生組合長、教育會幹事、第四小學校後援部常務委員、石神井用水組合會常務委員、荒玉水道組合會議員、王子神社氏子總代、所得調査員、學務員、國勢調査員等過去現在に亘つて此の多くの職責を成し遂げ又成しつゝ席溫まるに遑なき要職を荷へる高木氏は、土地の名門素封家たる友吉氏の長子にして慶應二年の生れ、町會議員に推されたるは明治三十九年にして二十餘年一貫して職に在る事は、意志の堅實と手腕の中庸と一般の德望とを證するに餘りあり、更に有限責任王子信用組合の常務理事として事務を執掌する等其の精力も亦絕大なり、今や王子町の一元老として町民の推服する所となる、乞ふ健在なれ。

西巢鴨第六小學校長　**高木重之氏**
（下十條千百七十番地）

重之氏は別項記する所の王子町の元老高木要太郎氏の嫡男にして明治廿五年の生れ、氏は育英に志し豐島師範學校に入り同四十五年同校を卒業するや王子町豐川尋常小學校訓導となり、大正五年轉じて荒川尋常小學校に教鞭を取り、同十二年第一日暮里小學校に轉じ、同十四年二月拔擢されて第五日暮里尋常小學校長に進み、同十二月廢校と共に第五校長に榮轉し、其後轉じて西巢鴨の現校々長として今日に及べり。氏が堅實なる思想と慈潤なる情味とを以て育英に當る事は、頗る父兄の安意と信賴とを高め良師として多くの贊賞を受けつゝあり。

氏は斯く名門の出にして資性溫厚穎悟、斯界に重視せられ少壯早くも校長に擧げられて國民教育に貢獻する所多大。尙令夫人は瀧野川町會議員横瀨精一氏の令妹たり。

王子製紙會社
王子工場長　**田藤高輔氏**
（王子町王子製紙會社々宅
電話王子一一〇八番）

王子製紙株式會社は洋紙製造の目的を以て明治五年に創立せられたる本邦最古の會社たり。殊に王子工場は創設以來實に五十有餘年に及び帝國文化の開發に寄與する所甚大なり。現在の規模は用地一萬一千餘坪、煉瓦造建物四千百廿坪抄紙機械三臺、原動電力千七百馬力、汽力四百九十馬力、原料破布、藁、パルプ、製品教科書用紙、畫用紙、筆記用紙、上等普通印刷用紙等十數種に上り一ヶ年生產額二千三百萬所に達す、此古き歷史と沿革とを有し現在總資本七千萬圓を擁し名實共に東洋一を誇るに至りし裡面には幾多同社經營上の功績者あるを忘れてはならぬ。吾が田藤高輔氏の如き實に其功勞者中の第一人者たり。氏は茨城の人、明治十五年鄕里に生れ明治卅八年今の商科大學の前身たる高等商業を出で、大阪商船株式會社に入り同四十三年王子製紙會社に轉じ、北海道苫牧工場長に榮進し更に本社會計課長を經て大正七年王子工場長に榮進して今日に至れるなり。氏の豪快人を容るゝの度量と、廿餘年一日の如く奮勵して倦まざる手腕とは、藤原社長の信賴極めて深く多數從業員亦能く敬慕しつゝあり。

瀧野川町會議員　**田村忠之助氏**
（瀧野川町瀧野川一四〇〇番地）

十萬町民の大町瀧野川町會の初代議長たる榮譽を贏ち得、常に至純至朴、卒直の言議を以て獨往し町會の流行兒として氣を吐く田村忠之助氏は、明治十七年八月八日を以て小石川區大塚坂下町に生る。生家は代々水戸藩に仕へ、嚴父竹次郎氏まで四代に亘り坂下町に居住せる名流にして、大正十年九月道路改正の爲め、瀧野川御代の臺の現住地に來住せしなり。氏は日露戰役に從軍し名譽の負傷を被り勳八等に叙せられ、凱旋後小石川區會議員に擧げられ、特別市制實行委員、大塚學校敷地選定並建築委員、兵器廠移轉實行委員、各區聯合瓦斯値上反對實行委員等に擧げられて克く活躍し、現住地に來住後も町內團體御代の會の組織に卒先盡瘁して會長に擧げられ、同部落の道路衛生方面に努力する所多く現に其顧問たり同十四年五月には衆望を擔ふて町會議員に當選し財源調査委員を兼ね、更に議長制度の設けらるゝや初代議長に當選し、越えて昭和四年五月再び町會議員に當選し道路下水改良調査委員を兼ね、町會毎に是と信ずる意見を吐露して自由奔放の立場に在つて精勵活躍しつゝあり。氏は義に府議戰に出馬して府政刷新の抱負經綸を天下に問ひしも、時利あらざりしは惜む可し。家庭には美津子夫人との間に三男三女あり。日本女學校出身の八榮子氏は他に嫁し、四郎氏は巢鴨町二丁目に金物店を開業せり。

尾久町會議員　**田村清七氏**
（尾久町上尾久二〇六九番地）

尾久町議中の熱あり血ある人として畏敬され、又任俠義氣に富む土木建築家として斯界に覇を成しつゝある田村清七氏は、長野縣の人、明治廿三年二月十三日を以て信州諏訪郡に生る。鄕里の中學を

中途退學して材木商を經營したるも更に土木建築業界に轉して尾久町の勝村組に入り專心同組の發展に努力し、斯界に於て氏の手腕を認むるに至る。後氏は獨立して同町に土木建築請負業を創め、以て今日に及べるなり。養に氏は同町方面委員に選ばれ、又南町々會の組織に奔走しその創立成るや會長たること久しく、昭和四年五月興望を擔ふて町會議員に擧げられ、現に警備委員の要職を兼ねて現在に及ぶ。氏は堂々たる體軀の所有者にして、眉宇の間に覇氣横溢を見せ、氣骨稜々たるも頗る人情美に富みて人の難事を見ては一身を顧みずして私財を投じ、以て急を救はんとす、洵に俠骨の快男兒と謂ふべし。

尾久町地主

田中榮次郎氏

（尾久町上尾久一二七七番地）

田中氏は王子町出身の名門石神市藏氏の次男にして慶應元年の生れ、明治二十年上尾久の素封家として又同所の自治功勞者として聞こゝたる田中丑五郎氏に迎へられて田中姓を繼ぐ、爾來公共事に盡瘁し大正六年村會議員に擧げられ村治の向上に努力する事二期に及べり、第三期の改選に於ても衆望は氏に集まり再起を强要せるも、今や後進に代る可きの時なりとして頑として肯ぜず勇退して後者の途を啓けり、此の間第一回國勢調査員、九番分水組合議員、下用水組合委員等に擧げられ功績を殘し、又は西本町々會の創立に力を致し會長として町内自治に盡し、其他八幡神社氏子總代として功勞多く郡神職會は之れを表彰し、更に延命寺信徒總代等を務め貢献する所多し、今や身を閑地に置きて尚ほ且つ公共事に心を傾けつゝあり。

前町會議員

高尾市之助氏

（瀧野川區田端二二〇番地　電話小石川六九一三番）

瀧野川町會議員たること二期、町民本位に立脚して町政に終始したる愛町の士、高尾市之助氏は滋賀縣の人、明治十七年二月を以て蒲生郡の舊家高尾太藏氏の長男として生る。幼少既に覇氣に富み、十八歳の時上京し本郷根津の某メリヤス店に入りて斯業に關する智識技能を研磨し、更に日本橋區のメリヤス問屋佐藤商店に勤續すること四ヶ年餘、遂に獨立の機會を得て日本橋區久右衛門町に於てメリヤス仲買商を開きしが、大正三年瀧野川田端の現地に移り、工場を新設して其製造に從事し、業務益々發展の域に進み同十年十一月洋品部をも開き今日に至れるなり、大正十年五月町政刷新を標榜して町議に當選し、同四年再選し消防委員を兼ねて町治に功勞多きのみならず、町内會谷田町會を組織し其會長たりし事多年現在は同地一帶商人の繁榮策のため、分離して谷田橋商業同志會を創立し自ら其副會長として活躍しつゝあり。殊に谷田川治水の爲めには全幅の努力を致し、又府道擴張促進等にも盡力し將來ある人材として一般より囑目されつゝあり。滿佐枝子夫人との間に養嗣子康夫氏を迎へ頗る圓滿の家庭たり。

東部下水道組合管理者

高梨新次郎氏

（三河島町町屋五十七番地）

高梨氏は三河島町々屋の舊門且つ三河島屈指の功勞者たる故惣次郎氏の嫡男たり、資性温良にして聰敏、且つ其の父母に事ふるの厚きは鄕閭の一異彩として推賞せらるゝ所なり、氏が孝道の信念は引いて他に及ぼし、隣人に篤く鄕黨に厚く荷も公共に益する事は直接間接に其の至情を以て當るを常とせり。大正十三年父君の喪に依つて家督を相續するや、里人は先考の其れ以上に尊仰の意を表し翌十四年五月施行の町會議員選擧に當るや衆望は一つに氏に歸し易々として當選せり、更に昭和四年の改選にも再選の榮を荷ひ町治の爲めに奔走盡力貢献する所多大なり、又町内にあつては町屋町正會の副會長に推され、或は天王神社氏子總代として努力せり、又昭和五年三河島、日暮里、南千住の三ヶ町聯合して下水道の改修事業起るや多士儕々の中より推されて同組合の管理者に擧げらるゝ等、其の德望は即ち人格の半面にして氏が如何に道德的に社會的に活動し而も謙讓に身を處すかを知るに足る可きなり。

三河島高崎染物店主

高崎榮作氏

（三河島町三河島二八四〇番地）

眞に國を愛し、町を愛する忠良の臣民たり善良の國民たるものは、自己の業務に不斷の努力を以て精進するものでなければならぬ。ロに百萬陀羅の大言壯語を吐くも、一の實行の伴はぬ者は國家社會に何の役にも立たぬのである。此の意味に於て一切の功名は之れを人に讓り、自らは孜々營々として家職に奮勵して公益の爲には辛先盡瘁しつゝある高崎榮作氏の如きは、眞の愛國者愛町者たりと斷ぜねばならぬ。氏は埼玉縣の人、明治二十二年十一月二十二日を以て南埼玉郡黑瀨村の篤農家に生れ、夙に志を立てゝ上京し、染色業の智識技術を研磨し、獨立して現住地に開業せるは今より二十有五年前の事である。爾來氏は熱心に業務を勵み、其精巧の技と獨特の意匠とを以て聲價を博し、顧客遠近に擴がり遂に今日の如き牢として拔くべからざる老舗の基礎を築き家運隆々たるに到らしめたのである。

王子町火防委員

高木惣市氏

（王子町下十條一一六六　電話王子五五四番）

懸河の辯を以て穩健中正の言論に訴へ、心から聽衆に感動を與へて、偉大の効果を收むる少壯有爲の雄辯家に、吾が高木惣市氏がある、其の天才的快辯は常に聽衆をして嘆服せしむる所である。氏は東京府北豐島郡王子町大字下十條千百六十六番地の現住所に生まる、家は同地の名門にして父祖共に王子町の自治公共に盡し、土地開發の爲めには多大の効勞ある家柄なり、氏も亦青年の身を以て常に土地の向上進展に心を碎き、事大小となく嚴父を補佐して東奔西走し、一般住民の感謝の的となつて居る、而して今や王子町火防委員にして、同町内團體たる大字下十條の南町々會々長、又王子、東京府の兩方面委員として努力し寄與する所多し。氏の理想とする所は祖先崇拜を基調とする宗教の徹底的普及と云ふに見ても其の人格崇高なるや知る可し、思想圓雜の現代にあつて氏の活躍は大に人意を强ようするに足る。

谷田橋町會長

高際良七氏

（瀧野川町田端二一一七　電話小石川五〇八九番）

高際氏は、栃木縣下都賀郡赤麻村の舊家たる高際琴太郎氏の二男に生る。同家は、關東の舊族として後醍醐天皇に歸順し、建武中興の大業を成し勳功第一に居り、武藏、下野、下總の守護となつた足利氏の後裔なりと云ふ、此の勇者の血を享けたる氏は、夙に鳳志を抱き獨立自尊以て君國に奉仕せんと小學を出づるや、私塾に入つて螢雪の苦を積み、尙ほ青年士氣の振はざるを慨して自ら體育武道の鍛錬を以て範を示すべく、鄕里佐野町の加藤師範の門に入り、劍道を學びたるは實に氏の二十歳の時なり其の熱心なる修行は、武道の進境拔群の伎倆を示した、後、兵に徵され二年間兵營に在て更に武道の錬磨を怠らざりし、二十四歳の時上京し、下谷區御徒町山越工作所々主となり、精勵奮鬪五ヶ年、遂に獨立自營の念願叶ひ田端現住所に牛肉販賣の業を開き遂に今日の大成を爲すに至る。來住後在鄕軍人分會等に武道を奬勵し、眞影流の奧義を以て神身の修養鍛錬に努力さる、現に田端谷田橋町會長に擧げられて衆望を一身に荷ひ、瀧野川獸肉營業組合長に推されて業界の刷新向上を圖れり。尙ほ氏は國民精神の作興を計り思想國難の打開一手段として當町に有信館支部を設け武道の奬勵を爲す可く道場を設けて指南の任に當れり。

瀧野川町會議員

谷脇岩千代氏

（瀧野川町田端五二五）

谷脇家は由緒ある名門にして、岩千代氏は實に其十六代目なり。夙に學を好み經世家の風あり、學階を經て明治大學に入り、卒業後警視廳警部を拜命す、官界政界共に知名の士と交友多く、大に素志を伸べんとして官界を去るや、東京每夕新聞社經濟記者として腕を振ひ政界に雄飛せんとせしも病痾のため果さず、郊外に居を卜し悠々自適の閑地に就く、震災當時西ヶ原に居住し其警備救護に活動し非常なる功績を殘し、尙西ヶ原交和會を組織して第一期會長に擧けられ其後も相談役として努力されつゝあり、氏は田端の現住所に移轉されてよりは更に同地の町內會の爲に盡瘁する所多く、先には田端高臺組合と稱せし自治團體の幹部となりて、田端高臺町會と改稱し、其の會長に推さるるや其の抱負を傾注し刷新改善面目を新たにして模範團體と稱せらるゝに至れり、昭和三年町會議員に擧げらるゝや常議員たる外消防第十一部長に推され、一面には大日本皐月同好會副會長、豐國共濟株式會社專務取締役たりしが現在は同好會相談役として盡力せるが其の向う所一つとして熱誠至上を以て當らざるなく實に當町公職者中稀れに見るの篤志篤行家たり。

所得調査委員

瀧澤石男氏

（瀧野川町瀧野川一九八二番地　電話小石川五三九六番板橋七六番）

稅制研究の實際家として、稅務の民衆化を叫び、常に營業者の唯一の味方として熱心に努力し、又酒類商界の覇王として飛躍を重ね、令名府市に洽き瀧澤石男氏は、明治十二年八月埼玉縣北足立郡加納村の素封家に生る。明治三十二年赤羽近衞工兵隊に入營同三十五年伍長に昇進除隊せるも、日露役の起るや忽ち出征、各地に轉戰、同三十七年軍曹に進み、名譽の負傷後凱旋、補充役として書記を勤務し同三十八年曹長に昇り、勳七等功七級金鵄勳章を授けられたる勇士たり。同三十九年より瀧野川町の現地に酒類商を創め覇氣に富み才能橫溢の氏は、長躍又長躍遂に今日の一大成功を贏ち得、更に瀧野川在鄕軍人分會長として多年劃紀的活躍をなし、聲名共に揚がり、殊に板橋稅務署管內營業稅調査委員たること數次、昭和五年更に擧げられて所得調査委員となり、練熟せる手腕を以て官民の間に應衝し、又瀧野川酒類商組合顧問、東京酒類商組合北豐島南足立兩郡の十八部長として業界に貢獻すること多年功績亦偉大なり。

東京建鐵株式會社長

田島壹號氏

（瀧野川町上中里一三七番地　電話王子二四九番）

本邦工業界に特權的獨自の地歩を占め、近代建築文化に偉大なる功績を擧げつゝある田島壹號氏は、明治十六年五月を以て淺草區松清町の機械製作業田島勝五郎氏の長男に生る。同家は祖父宇太郎氏時代より諸機械の製造を營み、父君は陸海軍の御用製作家たりしを以て氏も亦幼時より斯業に精勵せり。而も氏は天才的發明の頭惱を有し、建築業界に鐵製金屬類の應用時代あるを先見し、大正二年巢鴨町四丁目に東京巢鴨製作所を起し、自ら所主となりて建築建具金物の製作を開始し、漸次需要增大して業況隆昌に赴くや、同九年には同製作所を三河島に移し、一大擴張と共に株式組織に更め自ら社長となり努力奮鬪の結果一躍斯界の覇王となり、一時は年產額三百數十萬圓に達するに至る。同社製品の主なるものは特許田島式スチールサッシ、同スチールドアー、同スカイライトバー、同スチールシャッター、特許防火扉、鐵製家具金物等にして今日迄我國の特許を受けたるもの百三十餘種に及び英、佛、伊の專賣特許を得たるもの亦數種を有し、其販路は東洋全般に亘るは勿論海外にまで取引せられつゝあり。以て同社の製品が如何に最新建築に威力あり、耐震耐火に無比を誇れるかを證す可し。氏は此の外同十三年に尾久町に東京鋼鐵家具製作所を起して異數の業績を收め、又東京鋼板工業社をも兼營して共に社長たり。斯くの如く建築界に革命的進步を賚したる結果、全國の郵便電信局、農林省、鐵道省、銀行、病院、保險會社、ビルディング、官公立學校、劇場等より注文を受け常に納入に忙殺されつゝあり。家庭は花子夫人との間に春緣、平三兩令息、千枝子、歌子二令孃あり。

田島製作所主
西巢鴨町會議員

田島順三氏

（西巢鴨町庚申塚三七四番地　電話大塚八六六〇、一七一六番）

西巢鴨町會議員中寡言實行主義を以て終始し、曾ては名擧助役に推されんとせるも自ら辭退し只管ら西巢鴨十二萬町民の福祉の爲に至誠を以て健鬪しつゝある田島順三氏は、埼玉縣の人、明治十八年を以て入間郡川越在の舊家に生る。氏は若冠業に美術工藝に關する天才的技能の所有者にして、夙に銅像、銅器、靑銅製置物、彫刻、鑄造の研究を始め、更に我國建築の將來に着目して、建築裝飾金物

の製作に移り、大正八年現在所に工場を新築して田島製作所と稱し着々業務を擴張し、遂に今日の大を成すに至る。同所製作品の主なるものは、建築用裝飾金具、美術的青銅製金物、ブロンズ及び眞鍮製建具金物、銅像、銅器、砲金眞鍮鑄造、鐵柵、鐵扉其他諸金物にして、其製品の優秀にして獨特の發明になれる點は社會既に定評あり、外國品を凌駕するは勿論幾多の專賣特許を有し、斯界の權威とされ全國の都市より需要せられ、財界の不況の昨今に拘らず第二工場の新設を爲すと等の隆運を招來しつゝあり。氏は大正十四年五月衆望を負ふて町會議員に擧げられ、豐島病院組合議員並に學務委員の要職に推されて克く其職責を盡し、昨五年十二月再び町議に擧げられ、前同樣豐島病院組合會議員として活躍し、町會の重鎭として仰望せらる。

肥料及藥品製造

大日本人造肥料株式會社

（王子町豐島一七〇〇番地　電話王子四二、同四三　同六七、同一一〇五番）

同社王子工場の起原は、明治十二年大藏省印刷局にて苛性曹達、晒粉等を製造したるに始り、同十八年工場を現地に移し硫酸事業を加へ、同十三年御料局所管に移り佐土金山製煉用藥を造る。同二十八年陸軍省に移し後現社長田中榮八郎氏等之を拂下げ同二十九年五十萬圓の資本に改め關東酸曹株式會社と稱し、同四十年百萬圓に大正四年五百萬圓に增資、同十二年大日本人造肥料株式會社及び日本化學肥料株式會社と合同し、現在會社名と更め拂込濟資本金二千二百四十萬圓を擁し、全國に十五工場を置き、最近三千五百萬圓に增資して農業界並に化學工業界に貢獻しつゝあり。

工場敷地七萬三千坪、工場建坪二萬五千坪、職員職工一千名、人夫三百名を擁し硫酸、鹽酸、硝酸、硫化曹達、ハイドロサルファイト、サンソー液、フロライト、過燐酸、配合肥料、清澄濟、苛性曹達、晒粉、合成酸鹽等を製造しつゝあり。荒川水運の便を以て原料を搬入し、鐵道引込線にて製品を運搬して便利よく、工場内に診療所を設け、共濟組合、購買組合をも設け、從業員の福利增進を圖りつゝありて、勞資爭議等の頻發する今日同工場は常に平和圓滿に隆々たる實績を擧げつゝあり。昭年二年前關工場長の後任として上倉次郎氏就任せるが、氏は溫厚至誠にして斯界の權威と稱され信望頗る厚し。

王子町役場戸籍課長

高野貞一氏

（王子町豐島三五七番地）

王子町九萬の人口動態を查察し其正鵠なる統計の下に町理事者の施設方針の指南車となり、又嚴正公平に戸籍を正して國務の一端を鞅掌し忠實精勵の良吏として令名ある高野貞一氏は、明治十九年十一月廿八日を以て埼玉縣大里郡明戸村大字宮ヶ谷戸一番地農故孝作氏の三男に生る。夙に鄕黌を卒へて大正四年一月一日氏が三十歲の時、川口町役場に奉職し、更に隣村横曾根村役場書記に轉じ、同八年三月王子町役場書記補に就任兵事係兼戸籍係を擔任、翌九年四月書記に昇進、同十年三月戸籍係主任心得となり、同年九月戸籍主任に進み、同十一年三月戸籍課長に榮進して現在に至る。此間氏は大正十三年及び昭和二年の兩回に亘り戸籍簿の改寫をなすの難事業に當り、毛毫錯誤なく完成せるは全く氏の手腕と努力に依る所其功績著大と謂ふべし。資性溫厚謹直、精勵家にして、滿ん夫人との間に長男孝良君、養女あき子孃あり。

染谷眼科醫院主

染谷乙五郎氏

（王子町王子八四〇　電話王子三一五番）

染谷氏は埼玉縣の人、明治十八年鄕里に生る、兩親と共に東京に移住し、小學校を卒ふるや本鄕區京華中學校に入り、同三十七年卒業するや醫學に志し東京慈惠會醫科大學の前身、慈慈醫學專門學校に入り同四十一年出身の慈惠醫學士なり。以來眼科に就て深く期する所ありて、鋭意專門的に攻究して大に治療上の發見をなし、玆に始めて現在所たる王子町王子字岸八百四十番地の名主の瀧と相對する風光清雅の地に開業す。氏の練達せられたる技術は、忽ちにして患家の信望を博し、『染谷眼科』と名主の瀧は以て王子の双美と稱さる。宜なるかな染谷醫院は眼科專門として誇るに十二分の最新設備をなし、大病院のそれと些の遜色なき大規模の手術、治療の設備が完成され而も其の練達の技を以て懇切叮嚀に治療せるは社會の爲め慶す可し。

板橋莊病院長

莊　寛氏

（板橋町瀧野川二四一一番地　電話板橋一一二番）

歷代產婦人科の權威名刀圭家として獨特卓拔の神技を傳統し、連綿今日に至り、今や板橋の產婦人科醫と言へば、直ちに『莊病院』と指稱するに至れる斯界の泰斗莊寛氏は、前院長莊博翁の嫡男として明治二十二年七月二十日を以て鄕里に生る。同家は代々埼玉縣北足立郡戸田村に住する舊門素封にして、仁術を業とし產婦人科の耆宿として天下に聞ゆるの名醫たり。時代の進運、交通の發達に鑑み、先代博氏大正四年板橋町に進出して莊病院を開くや翕然として人氣を博し、患家門前に市を成すの盛大を極む。氏は新潟醫學專門學校を卒へ、更に順天堂病院東博士の下に產婦人科の深奧を究むること多年、同病院に院長として臨み、爾來身骨を碎きて熱誠診療に從事し聲名嚴君に讓らざるに至り、同十二年初春數萬圓を投じて現在の理想的一大病院を建築し、越えて昭和五年七月には五萬餘圓を投じて純日本式理想邸宅を新築し宏莊なる一城廓として其成功を如實に表現しつゝあり。一度び同院參考室に入る時は、氏が手術の結果を示す幾多の實物標本に何人も其神秘的技倆に感嘆せざる者なし。尙ほ氏は義に志願兵として入營正八位陸軍三等軍醫たり。

根岸浦吉氏

日暮里町會議員

（日暮里町金杉六〇九番地）

曾ては郷里埼玉縣加須に於て輸出貿易に盛名を馳せ、今や公人として日暮里町議の重鎮となり、私人としてはゴム工業家として知らるゝ人に吾が根岸浦吉氏あり。

氏は明治十五年一月十二日を以て埼玉縣北埼玉郡加須町に生れ、郷校を出でゝ家業に從ふ。同地は忍町に次ぐ商工業地にして、氏が在郷の當時は麻玉眞田の輸出貿易盛に行はれ、氏も亦之を業として卒先北武同盟會を組織して其會長となり、麻眞田の品質改良に努力すること四年に及びたる時、時の縣知事岡田忠彦氏も其事業の有望なるを考へ、重要物産同業組合法を適用して縣下の統一を企てしも、氏は却て粗製を慮つて之に反對し抗爭三年遂に製品檢査の方法を設け、大に生産品の向上を圖りしが、世界大戰亂に遭遇輸出杜絶の難に會ふ。而して氏は將來ゴム工業の有望なるを看て、大正六年上京底物專門のゴム工業を興し、大阪、名古屋方面を始め全國市場に取引販路を擴張し孜々營々として活躍し今日の大成を爲すに至る。昭和四年日暮里町會議員に當選、豐島病院組合會議員、町常議員として侃愕の議を立つ。又現に金杉衛生組合副組長、交和會、豐島工業聯合會等の幹部として令名高し。

氏の如きは獨創的識見を以て産業界に地歩を築き國産奬勵に資し國益增進に功多き人と言ふ可し。

根本佳守氏

尾久町會議員藥劑師

（尾久町下尾久七七四番地）

尾久町本町の優良藥局として順風堂藥局の名は全町に洽ねく知られ、又尾久町會一方の闘士として重きをなしつゝある根本佳守氏は茨城縣の人、明治二十六年六月一日を以て郷里に生れ、夙に藥學に志し大正六年東京藥學專門學校を優秀の學績を以て卒業し、後尾久町の現在所に來住して順風堂藥局を開業して現在の隆昌なる店勢を築く。氏は彼の大正十二年大震災直後、本町々會を創立して其會長に擧げられ、町内の公私に盡す所多く昭和四年五月自治功勞者として町會より銀製カップ並に感謝狀を贈られて其功勞を表彰せられたり。之より先き氏は大正十四年五月衆望を負ふて町會議員に擧げられ、更に昭和四年五月の改選に再び推されて町議に當選、今日に至れるなり。氏は勤王の搖籃地茨城に生れて其士氣慷慨の風を傳統し、正義公道の爲めには身を擬して奮鬪する將來ある人材にして、信望年と共に加はりつつあり。

『尾久町』は今や人口七萬有餘震災直後に於ける長足急速の進展は公共施設之に伴はざるものあり、全く過渡期にありて道路交通の整備、塵芥衛生設備の企劃、學校の增設、警備機關の充實等實に枚擧に遑なきの實狀に在り、殊に目下工事進捗中の大下水工事の如きも同町百年の計を遂行する基調として實に樞要の公共事業にして行樂の尾久町、工業の尾久町としての將來を確立すべく、町民は達識有能の町議を渇望して已まざる際に在り。氏の如き新進氣鋭の士の活躍を待つ。

衆議院議員　中村繼男氏

（瀧野川町西ヶ原二四二番地
電話小石川一二二七番）

衆議院議員に當選すること二回、文部大臣秘書官となり、萬國議員會議に列する等破天荒的大成をなせる中村繼男氏は熊本市の人、明治二十一年十月十五日を以て鄕里に生れ、神戸高等商業を出でゝ陸軍三等主計に任じ更に税務監督局に職を奉じて其俊秀の才腕忽ち省内に轟き、令名嘖々、税務監督官に榮進と共に依願退官して、自ら税務懇話會を組織し納税思想の普及と税務に對する官民協調を提唱し東京を中心に十四税務官署及び千五百有餘の會社銀行を會員として一大勢力を張る、又大正十四年瀧野川町會議員に擧げられ一方の驍將として町政刷新を叫び、越えて昭和二年二月衆議院議員總選擧には民政黨公認として駒を逐鹿場裡に進め全國最高點を以て當選の榮冠を擔ひ、小橋文部大臣の秘書官に擧げられ、一躍黨中に重きをなすに至れり。同五年二月の總選擧にも再び當選して同年夏萬國議員會議に派遣され、露國勞農政府、獨逸、瑞典、那威、芬蘭、丁抹、白耳義、和蘭、フランス、瑞西、イタリー、ブルガリヤ、英國、米國の諸先進國を遊歷し同年十一月歸朝せるが、黨中税制の權威として將來を囑目されつゝあり。

氏は同黨今春の役員改選に當り常任幹事たるの要職に擧げられ、更に税務の權威たるの故を以て拔擢され減税調査委員會の筆頭理事に推され多年の蘊蓄を傾倒して國民負擔の輕減に當れり。

前三河島町長　仲村由太郎氏

（三河島町三河島二四八五番地）

三河島八萬町民の治者たる仲村由太郎氏は石川縣の人、明治廿一年十二月を以て鹿島郡に生る同卅八年上京下谷竹町に住し同四十三年現住地に來住と共に陸上運送業を開き、業況日に隆盛に赴き日本橋に營業所を設くの進運に向ひ、東京荷馬車運送業組合長に擧げられ、相互救濟奬勵貯蓄會頭取となり、斯界の巨頭を以て目さる。大正十年五月衆望を擔ふて町會議員に當選し引續き再選、土木委員、出納檢査委員等を兼務し、町會一方に重きをなすに至り、昭和二年には前町長山口久太郎氏の後を享けて三河島町長に當選同六年一月退職迄、新興三河島の町政向上に貢獻する所多く、東部下水道町村組合、東三隅離町村組合、豐島病院組合、江戸川上水道組合會常設議員として不斷の努力を捧げつゝあり。趣味としては書畫を愛翫すと。

東洋紡績王子工場長　中村卓爾氏

（王子町船方七番地
電話下谷一七〇八番）

東洋に於ける紡績界の王者たる東洋紡績に在つて、斯界の權威と稱され、而かも六百有餘の從業員より慈父の如く敬慕さるゝ人格者、是れを中村卓爾氏となす。

氏は廣島縣の人、明治十七年四月十五日を以て廣島市榮町三丁目十五番地に生る。明治四十年三月大阪高等工業學校を卒業し、直ち

に東洋紡績株式會社の前身たる三重紡績會社に入り爾來四日市の本社に在勤すること實に二十年、精勵恪勤遂に紡績課長に榮進するに至り。更に昭和二年七月同社王子工場長に榮轉して現今に至る。

該王子工場は明治四十一年下野紡績分工場として建設され、後大正三年六月二十六日三重紡績株式會社及大阪紡績株式會社の合併に際し、同社も買收されて三重紡績より東洋紡績王子工場と改稱するに至る。敷地一萬四千八十六坪あり、工場建坪五千七百二十一坪に達し、現在從業員は男一三五名、女四九六名合計六三一名に上る。本工場は氏の理解ある指導愛撫と遜讓の美德とを以て、常に春光和順一糸を紊さず業績を擧げつゝあり。家庭には倅子夫人との間に一男二女あり長子は目下中學三年に在學せり。

中村齒科醫院主
瀧野川町消防委員

中村嘉氏

（瀧野川町田端四七五番地）

氏は明治二十七年十一月二十七日日本橋區小傳馬町に生る。父君嘉三郎氏の甲府警察署長として赴任と共に同地に移り、甲府中學を卒へて上京、東京齒科醫學專門學校に入り大正四年同校を卒業し翌年文部省の開業試驗に登第、同年三月瀧野川田端の現地に開業して今日に及ぶ。氏は開業以來十萬餘人の患者を取扱ひたりと云ふの一事に見ても如何に氏が獨特優秀の技を以て患家に接し、懇切至厚仁術の本領を發揮しつゝあるかを窺ふに足るべし。熱血的快男兒の氏は政治自治に趣味を有し、論壇上熱烈の氣を吐き、人を畏服せしむ。町消防委員たること二期、在鄕軍人分會第四班長、田端高臺町會の會長に擧げられ、又現に瀧野川町第一小學校齒科校醫として兒童口腔衛生に貢獻せり。家庭には芳子夫人あり內助の効多き賢夫人たり。

永井醫院主

永井誠夫氏

（瀧野川町西ケ原五六〇　電話王子七二四番）

永井氏は明治二十六年十月を以て群馬縣碓氷郡横川町の名門又太郎氏の長男に生れ、縣立富岡中學を經て東都に出で、醫に志して東京醫學專門學校に入り大正九年卒業す。氏の最も得意とするは內科、婦人科にして實地臨床の研究三年に及ぶ。大正十一年瀧野川町西ケ原の現地に永井醫院を開業今日に及べり。

世人永井氏を呼んで『婦人科の永井先生』と稱す、以て其の特技や知る可し。氏や性情行徑天眞爛漫にして一塵の驕衒なきは一般の憧憬する所たり。又一度び正義の爲に起んか、素志の貫徹する迄は一歩たりとも退かざる慨がある熱血的士人にして常に社會の爲に貢獻する所多く、北豐島郡醫師會評議員、瀧野川町產婆會顧問、武藏野高等女學校々醫並瀧野川第三小學校々醫として其任を竭せり。

前王子町會議長

直江富五郎氏

（王子町王子二五三番地）

直江富五郎氏は明治十年八月十四日を以て王子町の名門、熊次郎氏の長男に生る。夙に人望あり明治三十四年五月王子村助役となり、更に同四十年五月町會議員に擧げられ爾來引續き町議に當選し昭和二年町會議長に擧げられ公正無私克く其職責を盡せり。此間大正九年興望を負ふて郡會議員に擧げられ、郡制廢止まで其職に在り郡治に盡す所亦尠からず。日露の役當時助役として功勞顯著なるものあり同三十九年四月勳八等瑞寶章を授けらる。家庭には瀧子夫人との間に三男五女あり。何れも俊才にして孝心深く夫れ〳〵成功の途に在り、又幸福の門地と謂ふ可し。

三河島家屋稅調査員
三河島工場協會副會長

直江和助氏

（三河島二ノ坪二七一二番地　電話下谷四〇一八番）

直江和助氏は岐阜縣の人、明治二十一年十二月を以て武儀郡美濃町に生る。生家は有名な割烹店にして父君を鷲見和一氏と呼び其三男たり。年少名古屋市に出で商業を見習ひ、後上京日本橋横山町學用品問屋井上商店に入り支配人に進みしが、大正元年森商會に轉じ販賣部長となり同四年直江家の養嗣子となり其家職たる製袋事業の經營に當り工場を三河島の現所に置き、營業所を神田和泉町に設け、米麥製粉、繭等の容袋として全國鮮滿に販路を有す。大震災後土地區劃整理の完成と共に工場及住宅の建築を了し、爾來益々事業の隆昌を見つゝあり。氏は前衛生會旭會々長、第三峡田小學校後援會副會長等に推され、現に二ノ坪町會長として部落に盡す外、同地工場協會副會長に擧げられ更に昭和五年家屋稅調査委員に當選する等公職に貢献しつゝあり、尙氏の義弟は昨年府議補缺戰に出馬し當選して民政系の爲に健闘しつゝあり。

氏は尙ほ年壯にして頗る春秋に富み、必ずや社會の一角に進出して中堅人士たる待望を負ひ、其抱負手腕を中央に振はるゝや期して待つべきなり。

王子町役場主事

直井幸之助氏

（王子町下十條一五三六番地）

刀筆吏より身を起し、精勵其もの、謹直そのものゝ如く乾々として事務を鞅掌し、累進遂に王子町收入役代理たるの信任を得たる人に直井幸之助氏あり、以て公吏の範とすべきなり。

氏は茨城縣の人、明治十四年二月二日を以て筑波郡豐村大字彌柳に生る。鄕里の谷井田尋常高等小學校を卒業し、後三ヶ年間皇漢學院に於て國語漢文科を修業し、明治三十八年上京、內閣印刷局雇を奉職し同四十年十二月退職す。爾來實業に就いて活躍する所ありしが、大正二年五月王子町役場臨時雇となり而かも日給四十錢を給せられたるは今日以て語草とすべし。同年八月雇に任命され己來書記補、書記を經て現在庶務課長兼收入役代理たるの要職に榮進す。

氏は俳句を能くし、號を耕野鋤と稱す。又長男彪氏は明治四十五年三月十四日生にて目下巢鴨高等商業學校第二學年在學中にて學績優秀なり。

瀧野川尋常第六小學校訓導

長島留吉氏

（瀧野川町田端五七一）

瀧野川第六尋常小學校に首席訓導として令名嘖々たる吾が長島留吉氏は、神奈川縣の人、資性溫厚篤實、而かも兒童教育には一家の見識を以て着々學績を擧けつゝあり。

氏は明治十九年三月十七日を以て、神奈川縣三浦郡南下浦村宮田

一七一四番地に生る。夙に育英家たらんと志し、十八歳の時既に神奈川縣三浦郡上宮田尋常小學校准訓導を拜命、豐三十八年には同郡北下浦尋常高等小學校訓導となり、同三十九年七月二日神奈川縣師範學校乙種講習科を卒業と同時に同郡長井尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同四十二年三月二十一日には同郡南下浦尋常高等小學校訓導に榮轉せしも、家事の都合により同年八月三十一日依願退職す。豐四十三年十月一日練馬町開進尋常高等小學校代用教員となり豐年五月東京市立西町尋常小學校代用教員に轉じ、同四十五年一月二十五日訓導に任ぜられ爾來引續き勤務、大正十一年九月十三日無試驗檢定に依り小學校本科正教員の免許を享く、而して昭和三年瀧野川第六小學校開校と共に榮轉し現在に至る。

瀧野川城官寺住職　長岡慶信氏

（瀧野川町上中里一六一番地）
（電話王子一三四三番）

眞言宗豐山派財務部長として一宗の大藏大臣たる吾が長岡慶信氏は、實に現代宗教界の第一人者たり。

氏は明治二十一年九月十八日を以て群馬縣勢多郡荒砥村大字原澤の名門士族本多義裕氏の次男に生る。夙に佛教に歸依し眞言宗豐山派に屬す。學階を經て豐山大學を卒業し、瀧野川町上中里の城官寺先住長岡氏の後を襲ひて其姓を繼ぐ。資性頴悟發明、氣魄豪快にして衆俗を導く天禀的德望を具ふ。卽ち自ら寺院を開放して日曜學校を設け兒童を集めて一脈の崇高なる佛心教育を施す。又修養お伽噺會の講師として各地に巡講、天才的快辯は少年少女を感激薫蒸する事多大、豐山派特遣傳道師に任命せられては全國各府縣に錫を駐め、同宗の眞使命の爲に善男善女を悟道に導き、更に大正大學教授としては、得意の佛教史講座を擔任する等、寧日なき師の活躍は檀信徒は勿論一般民衆の隨喜渴仰する所、眞に靈肉共に濟度の手腕ある現代的善智識と謂ふべし。昭和五年八月氏は豐山派の財務部長たる要職に推擧さる以て如何に宗の內外に氏の信望高きかを證すべし。

城官寺は、平塚山安樂院と號し、新義眞言宗音羽護國寺末にて鄕社平塚神社の別當、木像阿彌陀佛は赤栴檀坐像にして毘首羯摩の作、義家公守本尊十一面觀世音と共に名高し、春子夫人との間に俊雄、公平、玄造の三令息忍子英子の二令孃あり。

東京府方面委員　並木寅藏氏

（王子町王子三一〇番地）
（電話王子五五六ノ乙番）

王子町王子郵便局通りに多年精白米業を經營し、界隈の信望厚く、商勢亦隆々たる人に並木寅藏氏あり。

氏は本郡岩淵町神谷農業並木彌四郎氏の第五男として明治二十三年九月を以て生る。大正三年より精白米業を創め爾來專心努力の結果今日を招來せるなり氏は公共の念厚く克く自治に盡し、現に選まれて王子町榎町會長に推され、更に町並に東京府方面委員に選任せらる。方面委員の職責は社會事業を最も公平に完全に遂行する上に必要缺く可らざる機關にして擔當區域內の事情に精通し、居住民の生活狀態を知悉して之れが保護又は指導に任ぜざる可らず、氏の如きは全く此の意味に於て好適の材と謂ふべし、氏は又町消防多年の功勞者にして現に第四部長の重職に在るの外、同第一部後援部役員たり。資性圓滿恭敬にして謠曲、圍碁を趣味とす。

瀧野川町會議員　永山宣志秀氏

（瀧野川町田端一四三番地）
（電話小石川四五七七番）

瀧野川町會議員中の變り種として、又無產階級の利益を代表する主義の下に終始一貫活躍しつつある町議として知らるゝ永山宣文氏は、鹿兒島の人、明治廿三年を以て鄕里に生れ、夙に上京して學究之れ勉め、育英家たらんとして小學教員檢定試驗に應じて登第し王子町豐川尋常小學校に教鞭を執ること三年、退職後更に志を立てて瀧野川町中里の聖學院に學ぶこと四ヶ年、基督教の奧義を究め傍ら正則英語學校に語學を專攻して益々基教の研鑽に資し、遂に牧師として關西地方に傳道すること一ヶ年、現住地に來住せるは大正十二年五月にして、政治社會に趣味を有し昭和二年社會民衆黨に入り、安部黨首の下に活躍す而して北豐島支部長に擧げられ、同四年五月には同黨公認として瀧野川町議戰に出馬し多數の得票を得て當選、町會毎に侃々愕々の論議を以て主張の爲に奮鬪しつつあり。現に社會事業調査委員、土木委員、財源調査委員等の要職を兼ね町公共のため克く働き克く盡すの精力家たり。家職は製藥事業の外印刷業をも兼營し、又自治政助長機關として新聞を發行する等繁忙を極む。尙氏は現在社會共同黨を組織して其幹部として勇飛しつゝあり。

瀧野川家屋稅調査員　中島外次郎氏

（瀧野川町瀧野川一三〇八番地）
（電話王子一四五一番）

曾ては帝國の干城として軍務に服し、現在は精白米商として所謂士魂商才、克く一家の榮達を計ると共に、社會公共に爲に貢献しつゝある中島外次郎氏は、富山縣の人、明治二十五年を以て鄕里に生る。曾ては徵兵として陸軍に入營、砲兵軍曹に昇進して除隊し、模範軍人として鄕黨の崇敬措かざりき、後現住所瀧野川町に來住してより既に十年、同地に精白米商を經營して營々その發展に努力し今や業界に重きを成すの盛況を招來せり。氏は熱烈なる愛町の士にして常に能く働き能く盡して寧日寧處なく、現に宮本正交會副會長に擧げられ、第六校保護者會幹事に推され、又瀧野川軍人分會第五班評議員、東京白米商同業組合第十九部副部長等の公職に在り、昨年家屋稅調査委員の選擧に當りては同業及び同志の推薦の下に當選、氏も亦將來ある公共人として囑望せらる。

衆議院議員　中島守利氏

中島氏は前田氏と共に政治家として政黨人として第六區双美の榮譽ある士たり。氏は南葛飾郡新岩町の出身、少壯時代より公共の爲めに政治の爲めに南船北馬霜雪雨露を冒し、且つ一身の利害得失を念頭に置かず、一つに國家の走狗として實に十年一日の如く奔走努力す、故に東京地方政界の一名星として仰がれ、中央政界にあつては政友會の一權威として重きを爲せり。氏の性もと義俠にして一旦前諾するや水火も厭はず身を擲して當り、懲强扶弱は江戸俠客の如く然り、此の故に人の爲めに時に奇禍を買ふ事あるも氏の心境に於ては一つのやましき無きを以て常に暢然として拘泥する所なく主義の爲め黨の爲め敢然として所信を遂行し、而も空想空論に耳を借さず偏へに實踐躬行を以て國家の爲めに竭すの一國士たり。

巣鴨町名譽助役　村木政太郎氏

（巣鴨町巣鴨一六九五番地）
（電話大塚二五二六番）

剛直英斷、明徹の智、精覈の能を以て自治政の執行機關に當り、施設經營着々實績を擧げ、又一面には庶民金融機關たる信用組合の常務として不斷の努力を致し巣鴨町民の產業及び經濟の發達に甚大の寄與をなす人に吾が巣鴨町名譽助役村木政太郎氏がある。村木氏は明治十九年巣鴨町前町會議員村木政五郎氏の長男に生る、氏の家は土地の豪農にして舊家なり、氏は大正三年七月巣鴨町兵事議會の評議員に擧げられ、越えて同六年五月には年少三十歳にして町會議員に當選し、翌七年二月十八日には土木委員に擧げられ、翌八年一月二十日には消防委員に、同年九月一躍北豐島郡々會議員に當選し、又同九年二月二十七日には巣鴨町建物調査委員となり、同十一年五月町議滿期となるや、再び當選し、同年六月巣鴨町學務委員に推さる、又町常設委員として土木、消防學務等苟も公共團體として最も重要なる機關には悉く參畫せり。大正十三年一月十八日には現町長桑澤松吉氏の町長就任と同時に、推薦せられて名譽助役となり、更に翌十四年五月三度び推されて町會議員に當選し今日に及べり。而も彼の名町長桑澤氏の女房役として、先天的外交の要訣を發揮して、其の手腕を神ぶ。尙大正十一年四月には信用組合巣鴨町金庫の常務理事に擧げられて今日に至り、斯界中堅實第一位を占むる業績を擧げて居る。

瀧野川町消防委員　村山藤之助氏

（瀧野川町上中里四〇九番地）

瀧野川町上中里の舊門として六軒家の一たる村山家は三百有餘年の歷史ある家柄にして當主藤之助氏は明治二十五年十月十三日故金之助氏の長男に生る。大正七年嚴父の長逝後家督を相續し、大正十二年中里の消防委員たる島村氏等と紙器製造の業を起し、今や順調の業況を續けつゝあり。氏は常に土地の發展に心血を濺ぎ、公共の事に努力し大正十四年には町消防委員に擧げられ、昭和四年再び同委員に推されし外、上中里町會理事、鄕社平塚神社世話人、在鄕軍人分會上中里現評議員等として熱心に奔走し、人望益々加はりつゝあり。

田端村山醫院主　村山瑋平氏

（瀧野川町田端二二番地）

氏は新潟縣の人、明治二十一年二月を以て中魚沼郡下條村の醫家に生れ、縣立小千谷中學校を卒へて上京、東京慈惠會醫學專門學校に學び、大正三年卒業と共に地方病院に招聘され專ら外科の研究に努め、同六年歸省父君と共に診療に從事せしが、同十四年春上京、現在地を買入れて來住今日に至れるなり。生家は五代に亘り仁術を業とし先代は長岡藩醫として重用せられ、嚴父亦村醫校醫として令名あり。氏は地方自治の貢獻者にして在鄕開業中下條村會議員、中

魚沼郡會議員たりし事ありき。家庭は梅子夫人との間に二男三女あり。昭和五年秋冬、洋館二階建の宏莊なる現醫院を新築し共懇切滋能の治術を以て一般の信頼頗る厚し。

田端醫院主　**村井鐵太郎氏**

（瀧野川町田端一一二七番地）

氏は新潟縣の人、明治二十三年八月嚴父信章氏の三男として高田市に生る。家は榊原藩に仕へて武門の譽高かりしと。明治四十二年高田中學校を卒へ愛知醫學專門學校に學び、大正四年卒業と同時に軍醫を志願し翌年三等軍醫に同八年二等軍醫に昇進し同十一年依願退官して、田端療院主高橋正知氏の下に田端分院を開設同十三年八月獨立して田端醫院と改稱今日に至れるなり。氏は內外科、小兒科、等各科に滿能なるも特に耳鼻咽喉科は最も得意とする所にして、現に瀧野川町第四小學校々醫を囑託され兒童衛生に盡瘁せり。氏は軍人精神を以て至誠純直忠恕家を差別せず、一般の信頼頗る厚し。

日暮里町助役　**村松貞之助氏**

（日暮里町日暮里一八二番地）

氏は茨城縣の人、明治四年七月十三日を以て稻敷郡牛久保村田宮二十四番地に生る。明治二十年七月茨城縣尋常中學に入學同二十二年十月中途退學、和佛法律校外生として法制を研究し、同二十二、三年に亘り、鄕里牛久保小學校代用教員を勤む。同二十八年四月牛久保村收入役となり翌年十二月退職し、越えて三十四年四月より同村會議員に當選、二回、此間三十九年十二月牛久保村助役に擧げられ四十一年五月同村長に當選、同四十五年五月再選せられ大正五年四月まで村政に貢獻せる功勞者たり。同七年五月上京、東京地方裁判所公證役場に入り、同年十一月日暮里町役場雇となり、同九年書記に昇進、同十二年庶務課長に拔擢、昭和四年二月二日有給助役に推擧せられて今日に至れるなり。今や日暮里町は本郡中稀に見る整備進展せる町となる氏の十數年來の功勞に俟つ所多し。

西ヶ原エビス亭　**武藤傳次郎氏**

（瀧野川町西ヶ原五九番地）

本店を瀧野川町役場横通りに支店を西ヶ原海軍火藥前に置き常に繁昌を極めつゝあるエビス亭は、武藤傳次郎氏の獨力經營する所、西洋、支那料理井類の調理の妙と低廉親切とを以て定評あり、町役場各學校一般家庭の注文に忙殺さるゝの盛況なり。氏は明治三十一年八月を以て王子町豐島の舊門武藤家に生れしが幼少父君を亡ひ一家を擧けて下谷區谷中に移住せるため、谷中小學校を經て京北中學を卒業す。氏は中學時代より義姉の經營せるコトブキ亭の洋食部に在て之を研究し、更に上野精養軒に入つて調理の奧技を究め大正八年十月現地に開業して今日に及ぶ家庭には貞淑の佳人まつ子夫人ありて內助の功極めて多く夫妻の間に二令孃を儲く。

西ヶ原の銀座街と稱すべき同店前も昭和六年より六間道路に擴張の片鱗を町豫算に現はせるを以て將來益々有望繁榮を招來すべく氏の如きは正に好運兒と謂ふべし。

王子町會議員　**武藤與四郎氏**

（王子町豐島二六一一番地）

舊名主たる名門の家に生れ、十六歲夙くも獨立自營の業を起し、今や年少町議並に家屋稅調査員たる桑職に在る武藤與四郎氏は又社會事業家として知らるゝ人なり。

氏は明治三十年八月嚴父音吉氏の長男として現住地に生る。豐川小學校より王子小學校を出で、夜學に於て漢學を學び大正元年十六歲の時獨立自營を以て薪炭商を開き鄕黨を驚嘆せしむ、大正六年近衛第三聯隊に入營し除隊後も引續き薪炭商を營み、現に王子薪炭商組合顧問たり。氏は幼少より頗る苦學力行の體驗を有し下層社會に理解と同情厚く、社會事業に興味を持ちて現に昭和四年四月より城北勤勞者共濟會を組織して相互扶助の目的を達成しつゝあり。現在會員百三十餘名に上る。同家は代々與五郎を以て稱し、豐島村名主として令名ありし家柄にて、氏も傳統的に公事に努力し夙に十八歲位より父君の町總代々理として移住土着者の協調融和に努む。昭和三年三月王子町會議員選擧に際し最年少を以て當選し、又昭和五年四月家屋稅調査委員に擧げられ、元築地町睦會顧問等として熱心公共事に盡瘁せり。

東部下水道町村組合技師　**武藤新吉氏**

（下谷區上野櫻木町四五番地）

北豐島郡東部の日暮里、三河島、南千住三ヶ町は下水改良事業を共同を以て處理し、町民の保健衛生に資し、住民の福祉を增進すべく、東部下水道町村組合を組織し、昭和三年已來着々として事業を遂行しつゝあるが、之れが工事の企劃經營と施設完成とは一に懸つて工務掛長の手腕に俟つ可く、其重大責任を双肩に擔ふ所の吾が武藤新吉氏は、現に技師として工務掛長たり。氏は東京市の人、明治十年十一月廿三日を以て麴町區一番町七番地に生れ、夙に私立工手學校を卒業し、同三十三年八月東京市役所に奉職、勤續六ヶ年同三十八年二月退職と同時に東京電燈株式會社技手として奉職、同四十年一月退職と共に宇治川電氣株式會社に聘せられ、勤續七ヶ年大正二年五月退職し、再び同年十二月東京市役所下水課技手を拜命し同十年三月には技師に昇進、翌十一年四月下水課淺草出張所長に榮轉し、昭和三年六月退職と同時に當東部下水道路組合の技師に轉じ同四年五月工務掛長に進み現職に在り。本事業完成の曉には二十萬町民の文化生活を向上し都市美觀上理想街の出現を見るべく、洵に慶賀すべきなり。氏の長き經驗と練達の技倆とは三大町民の期待する所、同氏が組合事務所落成式に報告せし所に據ると、一般都市に於ける下水道築造は、明治卅三年法律第三十二號を以て制定せられたる下水道法により下水道築造認可申請書の提出を以て足れりとするも特別都市に於ては大正八年法律第三十六號都市計畫法の支配を受け前記の申請書の外、都市計畫委員會に付議する年割步合設定の申請もせねばならぬ、又同時に起債認可申請、國庫補助申請、府補助申請、低利資金貸下申請、下水道受益者負擔申請等をなさねばならぬ、而して國庫補助は三分の一、府補助は六分の一を給せられると、如何に氏が其計畫に苦心せるかを知る可し。

家屋稅調査員 藥劑師 内野敏行氏

（瀧野川町瀧野川四七五番地 電話王子一二二八番）

進取向上の一路に絶倫の精力と熱血とを以て起ち、克く家業を興し、社會公共に獻身するの人に吾が内野敏行氏あり。

瀧野川飛鳥山新改正道路の府立商工學校を眞向とし、一般化粧品、調劑、賣藥品を親切第一主義を以て販賣する内野商店主卽ち是なり。氏は茨城縣新治郡土浦町田宿の舊家内野雪松氏の次男として明治二十四年十二月十九日を以て生る。鄕里土浦中學校を卒へて上京、東京藥學專門學校に入り大正元年優秀の學績を以て卒業、同二年十二月社團法人東京市芝口實費診療所藥局に奉職、同五年五月日本橋の藥品貿易商として有名なる濱野商店に入りて貿易經營の實際を體得す。

更に大正九年四月陸軍化學研究所毒瓦斯研究部に入り、世界的最新科學の研鑽に當る。同十二年退いて現地に藥局を開設して現在の盛榮を見る。氏は第一回第二回共國勢調査委員を勤め、又多年町内會の爲に熱心努力し、現に馬場町會幹事長の要職在る他更に第一次家屋稅調査員に擧げらる。尙專門關係としては藥劑師として母校東京藥學專門學校評議員、瀧野川藥業會常任幹事たり。氏は專門學校時代より一廉のスポーツマンとして知られ、就中テニス、野球に傑出す、又氏は在鄕軍人として重きをなせり。夫人千枝子氏との間に未だ儘兒なく二名の店員を實子の如く勞る、洵に情熱の人と謂ふべし。同店を木鋪として發賣する風藥良治散は好評を博し外數種の賣藥何れも家庭に歡迎せらる。

前東京府會議員 上杉章雄氏

（板橋町下板橋七九〇番地 電話大塚二二二三番板橋三三番）

上杉氏は明治十一年埼玉縣熊谷郊外葛和田に生る、同四十年上京板橋町役場に刀筆の吏たること十年多才多能其の名全郡に鳴るに至る、大正六年職を辭して司法代書業を開くと共に事業界に乘り出し、一擧百萬長者となる、大正九年府議補選に出馬して一躍先輩を凌ぐ、更に同年推されて板橋町長に擧げられ、大に町の面目を一新す、同十二年秋職を辭して專ら實業方面に活躍す、然るに同十四年町議改選後、同町政の混亂より再び町政和平の爲めとして出廬を懇望され、町長に就任して他の追從を許さぬ手腕を發揮して克く治績を顯はす、爾來建康を失して町長の職を辭するや、閑地にあつて靜養自適、昭和三年二月衆議院議員選擧となるや眠れる獅子は突如として北豐の山河に呼嘯し、氏の名は第六區の天地を轟かして得票の意外に多大なるに郡民は再び駭目せり蛟龍久しく地中のものにあらざるは勿論なり。

上練馬村會議員 上野傳五右衞門氏

（上練馬村上練馬六五八八番地）

上野氏は慶應元年七月三日上練馬の現住地に生る。同家は田栖大盡と呼ばれ代々農を以て業とする素封の名門なり、夙に上練馬村會議員に擧げられてより二十有餘年現職に在るのみならず、各種の常

設名譽職を兼ね、曾ては同村々長に推されて村治に當り、又屢々郡會議員に當選して郡參事會員に推され、北豐島郡教育會幹事、郡農會副會長等幾多の要職に在りて獻身地方自治の爲に奮闘され其功績の顯著なるものあり篤農家たる氏は本郡の名産練馬大根の聲價を益々天下に廣めんとし、練馬産種株式合資會社の創立に奔走し之れが取締役社長の重職に在つて、種苗及び生産品の發賣をなし同地方農産奬勵の先驅として常に多大の犧牲を拂はれ農事改良に稗益する所絶大なり。資性溫厚篤實にして利を追はず、功を貪らず、靜かに正義正道を辿り一つに農村啓發に意を注ぐ現時稀れなる君子人なり。

上野麟慧智氏

瀧野川第七尋常小學校訓導

（瀧野川町田端五一三番地）

上野麟慧智氏は野州の人、明治三十一年十二月二十九日を以て栃木縣河内郡吉田村上川島二番地に生る。鄉黨を優等の成績を以て卒業するや、教育家たらんと志して上京、大正四年四月一日東京府青山師範學校に入學し、孜々として螢雪の効を積み大正八年三月二十六日を以て同校を卒業し同年三月三十一日本郡瀧野川第一尋常小學校に職を奉じ、江口校長の下に在りて熱心に教鞭を執り父兄の信頼日一日と加はり同僚の間に頭角を現はす。同校勤續實に十年、昭和三年八月三十一日に至り瀧野川第七尋常小學校の新設と共に同校に榮轉し首席訓導たるの要職に在り。氏は兒童を導くに親切衷心より溢るゝ熱心を以て當り、萩澤校長を輔けて實績を擧げ、父兄の氏に囑望する所多大なり。

臼倉平十郎氏

王子町會議員
王子町信用組合長

（王子町豐島一四七三番地
電話王子二〇四番）

王子町政の元老を以て自他共に許し、政友派の重鎭たる平十郎氏は、慶應二年八月十八日を以て同町豐島の舊家源助氏の長男に生る。明治卅三年大藏省印刷局の雇を拜命し爾來大正六年に至る迄前後約二十年間勤續して功勞多かりき。同四十一年五月衆望を負ふて王子町會議員に當選以來每期再選して現在に及び、終始一貫公共に盡瘁せり。此間大正八年二月王子町長に當選し、同九年三月辭任して翌年五月庶民金融機關たる町信用組合の創立に努力し理事兼組合長に擧げられて今日に及び優秀の成績を擧ぐる外、現に常務委員及び火防委員を兼ね、老來益々矍鑠として不斷の努力を續け居れり。

臼倉繁次郎氏

臼倉運送店主

（王子町豐島四三六番地
電話小石川六二六八番王子六五番）

城北運送業界の鼻祖と稱すべき臼倉運送店主臼倉繁次郎氏は明治十三年五月嚴父繁次郎氏の長男に生る。祖父彌八氏は現人造肥料會社の前身たる御料局當時の明治六年より創業し運送御用を勤め、嚴父繁次郎氏之を繼承し大日本人造專屬の運送業として隅田驛に出張所を設け二百有餘名の從業員を使役せり。當主は前名を榮一郎と稱し、大正六年家督相續と共に先代を襲名し同店經營の一切を一身に擔ひて今日の隆運を招來せり。氏は夙に慶應大學附屬商工學校を出で事業經營上に學術を應用し、其組織を井然整備し、店員の畏敬と一般の信望を博しつゝあり。

野木三吉氏

瀧野川町收入役

（瀧野川町田端三四六番地
電話小石川三一九三番）

所得税調査委員として四期に亘り、家屋税調査員としては第二次員に擧げられ、瀧野川町收入役たること亦四期に及び、實に數理の天才、理財の權威と仰がるゝ野木三吉氏は、明治十五年二月を以て木郡上練馬村の豪農、上原傳左衛門氏の三男に生る。幼時聰明既に鄉童の群を抜き、父兄は高等の學府に入らしめんとせしに、氏が小學校時代長兄鐵次郎氏の不歸の客となり嚴父亦易實し次で次兄四方吉氏二豎に犯され氏は已むなく家職の農に從ひ使用人を督勵して夙夜怠らず模範青年と稱揚さる、同卅三年瀧野川町田端の名門素封たる野木家に迎へられ養嗣子として今日に至る。養父故隆歡氏は人も知る剛毅果斷の人、本府地方自治の偉勳者たるは勿論瀧野川町政の功勞者として二十三年間引續き町會議員名譽助役、名譽町長として努力せる名里正たり。家職の植木盆栽は天下の逸品を蒐集し、閑院宮、小松宮家を始め高貴の御用たりしも明治四十一年廢業、當主の氏は精白米業を起し、經營十數年今は之をも廢業し專ら町政の事に一身一家を獻げつゝあり。氏は大正六年九月推されて同町收入役に就任、已來再選既に四期に及び、又板橋税務署管内所得調査委員たる事四期、昨昭和五年最初の家屋税調査員の設定せらるゝや、税制の權威として擁立せられ、氏自らは更に選擧に關與せずして優位を以て當選し、更に第二次員に當選しては、東京府の家屋税調定額が杜撰過大極まる事を爬羅剔抉し、遂に數十萬圓の減税を斷行せしむるに至る。其深遠該博の專門的識量に對しては納税者の感謝嘆賞措かざる所たり。殊に財政極めて困難の瀧野川町に於て十萬町民の負擔を輕減し、其公平と均衡とに島むる氏の手腕は他に得べからざる名出納吏と謂ふ可し。氏は書畫を愛し鑑賞一家の識あり、俳句は古瓢と號し、盆栽は好翠と稱し雅懷欽すべし。家庭は登美子夫人との間に二男一女あり、長男晋一郎氏は明治中學の教諭、次男二郎氏は郁文中學出身、智惠子孃は東洋高女出身にして王子町の素封家眞壁家に嫁けり。

野本源之丈氏

三河島町會議員

（三河島町三河島一三一六番地
電話下谷六一六二番）

氏は群馬縣の人、明治十一年九月邑樂郡千江田村千津井に生る。十九歲同縣藤岡町順氣社養蠶傳習所に入り二年間斯業を研修、後養蠶教師として群馬栃木兩縣下に活動貢獻せしが、二十四歲上京、本所區林町川合毛氈製造工場に入り勤續十年、明治四十四年九日獨立して現住地に工場を起し今日の盛運を致せり。氏は頗る社會の爲に奉仕する所多く、大正十四年大衆を味方として町議に當選し、昭和四年五月再び町議に擧げられて學務委員、出納檢査委員の要職を兼ね町治に寄與しつゝあり。氏は信仰の念厚く、常に觀世音菩薩を讃仰して社會民人を啓導し、思想善導に奉仕せるの外、曩には城北辯論研究會を組織し、青年修養に資すと共に自治精神の發揮に努めつゝあり。家庭には令室との間に二男一女あり、多數の工場員を挈族的に勞はり、製品の優秀を期すと共に勞資共榮の倫理化を實現しつ

つあり。

野本醫院主

野本正直氏

（瀧野川町西ヶ原一七番地）
（電話小石川五五二五番）

郡内刀圭家中優越の手腕を以て信頼篤き野本正直國手は、新潟縣の人、明治十四年を以て高田市に生る。同四十一年十一月仙臺醫學專門學校を卒業と同時に同校助手に拔擢され、縣立宮城病院助手を兼務すること二年更に函館市役所、並に市立函館病院醫員として大正七年まで滿十ヶ年も勤續し、最新の醫術と實地とを十二分に體得して同年十月上京、現在地に宏莊なる醫院を新築して開業今日に及ぶ氏は特に內科小兒科外科を得意とし、殊に外科の大家として知らる。資性溫厚篤實、頭腦明敏にして斯界の信望夙に高く、本郡々醫師會理事兼會計の重職にあること多年、刀圭界の重鎭として推重せられつゝあり。

尾久町收入役

野島平太郎氏

（尾久町上尾久二六九三番地）

氏は尾久町生え拔きの有力者として同町の產みの親たり育ての親たり。嚴父平次郎氏の長男として慶應二年二月を以て生る。一寒農村たる尾久町の今日に培ひ其美花を發かしめたるは全く氏等先覺の力與つて大なるは勿論、明治三十九年以來氏が村會議員に擧げられてより昭和四年まで實に二十有餘間一意町治に傾倒せる功勞者にして、今や町收入役に擧げられ小學校增設大下水道計畫其他財政困難の局に奮鬪しつゝあり。此間氏は學務委員、石神井用水組合會議員、豐島病院組合會議員、小學校保護者會長等の要職に就き熱心に盡瘁しつゝあり。家庭には勝子夫人との間に六男一女あり長男廣吉氏は實に模範的新人として尾久町青年の中堅と稱され公共精神に厚く、將來氏の後繼者として出藍の質たり。

岩淵町赤羽寶幢院住職

野中勇眞師

（岩淵町赤羽四三六番地）
（電話赤羽二一一番）

宗派の最高學府を出で現に大僧都の僧階に在る野中勇眞師は新義眞言宗智山派赤羽醫王山東光寺寶幢院第卅八世の住職たり明治二十七年十一月二十八日栃木縣那須郡黑羽川西向町明王寺に生れ、八歲の時嚴父德定師と共に同院に轉住す、母は氏が七歲の時永眠せり。當時同院は財政頗る不如意なりしが父君は苦辛菅騰寺門の興隆を圖り大正十三年九月二十五日遷化さる。氏は同卅九年四月川口錫杖寺にて得度し管長瑜伽大僧正より度牒を受く。同四十四年千葉縣中村成願寺にて大阿闍梨豐獄僧正より受法、大正四年京都總本山にて一流傳授其他事相受法す。又學歷は豐山中學を經て東洋大學に學び更に京都智山大學を卒業し大正十年日本大學に法經倫理を修了す又同六年十二月一年志願兵として步兵第五十九聯隊に入り翌年十二月除隊せり。智山大學卒業と同時に布敎師試驗にも合格し昭和三年九月傳燈大阿闍利の稱號を得、同年十二月大僧都を拜命せり。師は大正八年六月住職拜命と共に先代の遺志を繼ぎ專ら寺門の興隆に努力し、大震災直後破損甚しき本堂庫裡の復興のため壹萬三千圓を投じ全く舊觀を一變するに至る。此大事業完成の爲め師は好物の酒を斷然禁酒せりと。又元東京府第一號宗務支所副管理、宗務調査局員組合寺院斡旋委員の外赤羽青年會の創立、岩淵町第三土地區劃整理組合評議員として社會公共事業に健闘しつゝあり。

く之部

瀧野川町助役

國井秀作氏

（瀧野川町西ヶ原九八三番地）
（電話王子七五三番）

國井氏は明治二十六年五月新潟縣佐渡郡相川町に生る。夙に三菱王國の經營に成る中等學校、佐渡鑛山學舍に學び、同校を卒業するや、上京し後岩倉鐵道學校の編入試驗に及第、僅々一年二ヶ月を以て卒業し、更に進んで日本大學高等工學校に入る、是れ亦二ヶ年を以て全科を修業せり、如何に氏の俊敏なるかを知る可し、大正十四年五月町會議員に推さる、爾來町會一方の闘士として重きをなし、瀧野川町治水問題の第一たる谷田川氾濫防止工事を始め、曩には同町百年の大計たる道路下水に關する建議を當局に致し、今や同町は道路下水調査委員會を設けて、愼重研究調査の結果道路に四百二十萬圓下水に參百拾九萬圓の費額を算出して大事業の企劃を爲す等氏の專門的建議の賜たり。氏は初め玉川電氣會社に職を奉じ、後大正四年東京市役所に入り土木局に勤務し、市長より屢々感狀を受け、或は都市計劃路線現場監督として沿道住民より表彰せられたる事枚擧に遑なし、又大震災當時西ヶ原方面に於ける氏の活動は、町民の嘆服する所、後西ヶ原公友會設立に盡し現に相談役である。

尙ほ國井氏は、昨秋以來瀧野川町助役問題の擡頭するや、氏の同志は町理事者として縱橫の才腕を町政上に揮はしめんとし、慫慂已まざりしより氏も遂に決心し、町議、豐島病院組合議員の要職をも犧牲とし『瀧野川町政を救ふためには躊躇すべきでない』とて六年一月廿七日の同町會に於て推擧に依り、全會一致を以て有給助役に當選したが、尙ほ氏は部落選擧民に就任の可否を諮つた上堂々と男々しくも就任し今や着々平素の抱負實現に努力しつゝあり。

石神井村長

栗原鉚三氏

（石神井村上石神井一九〇〇番地）

本郡唯一の史跡、三寶寺池畔の石神井城趾の境域中に、昔ながらの門地を控え、素封舊家として近鄕に聞えたる栗原鉚三氏は、明治八年四月を以て先代仲右衛門氏の嫡男に生る。同家は代々上石神井村の名主を勤めし名門にして、嚴君仲右衛門氏亦名主たり。氏は夙に擧げられて村會議員となり、大正五年十一月廿一日には田中文五郎村長の後を享けて村長に擧げられ、爾來引續き村長たること二期、昭和五年秋三度び村長に擧げらそて現に其職に在り。此間氏は同村助役並に收入役たること各三回、村農會長、學務委員、土木委員、村敎育會長、石神井信用組合長等の要職をも兼ね、同村の發展向上の爲めに畢生の努力を傾倒されつゝあり。曩には石神井郵便局長として同地方の通信機關を創設して文化生活に資する所多く、祖先より傳統の氏子檀家として鄕社氷川神社氏子總代、三寶寺檀家惣代として其興隆に盡瘁する外、同村繁榮策として三寶寺公園の實現に努力し、今や三寶寺池畔は東京府の經營になるプールの完備と共に夏季納凉客陸續として來り、史跡を探り、勝景を賞し以て土地の繁榮を招來しつゝあり。氏の功績や又偉大なりと謂ふべし。

久喜一作氏

瀧野川町會議員

（瀧野川町中里 二六四番地）

意思の堅きこと鐵石の如く事を處斷すること公平無私、所信に向つては確固不拔の精神を以て勇往邁進し、斷じて言行を二三にせざる至純至誠の人、是れを吾が瀧野川町會議員久喜一作氏となす。

氏は明治二十二年四月二十七日を以て瀧野川町中里の舊門にして素封家たる久喜要作氏の長男に生る。嚴父は曾て學務委員等の名譽職に擧げられ、自治公共に盡瘁して功勞多かりしが大正十年七月易簀せられ、氏は家督を相續し土地の發展と共に其家業たりし農業を早く廢し、地主家主として町政を執るの外夙に荒物廛を開きて土地の需要者に便せしが、幾多の公職に就き寸暇なき現在は之を廢し、昭和五年新邸を築きて移り住はる。

氏は曩に兵に徵され大正元年騎兵第一聯隊除隊後は、在鄕軍人瀧野川分會第七班長に擧げられ、更に副分會長の要職に推されて貢献する所多大、又前後三回國勢調査委員となり、又本町の模範自治團體たる中里町會の副會長兼會計の重任に在ること多年、道路交通衛生火防等の施設を完備し居住者の感謝と信賴頗る厚く、大正十四年には町土木委員に擧げられ、昭和四年町會議員に當選、學務委員、道路下水調査委員、財源委員等を兼ね熱心町政に奮勵努力す。又同町第二區劃整理組合、町第五部消防機具改善委員會の會計に推されて此大事業を完成する等功績最も顯著なり。家庭には母堂とつる子夫人及二令息あり。

久喜一氏

中里青年團顧問

（瀧野川町中里 二四〇番地）

冀には瀧野川消防第五部部長として又北豐島郡聯合青年團評議員として令名高き久喜一氏は瀧野川町中里の舊門素封の家柄として知られ、明治十七年八月十五日を以て嚴父乘太郎氏の長男に生る。累代農を以て家業とせしも郊外町村の發展と共に之を廢し、大地主大家主として富豪を以て聞ゆ。尙ほ氏は農村時代より浴場『梅の湯』を經營し公衆衛生に資する所多く、昭和五年には巨資を投じて現代式理想的浴場に改築し日夜繁盛を極む。氏は日露の役に出征せる勇士にして、今や中里の中堅人士として公共に盡し、火防組合組織に卒先盡力して會計幹事に擧げられ、又中里青年團の創立に奔走して顧問となり、鄕社平塚神社氏子總代、町道路委員等の公職に在つて熱誠貢献せり、氏は子女の教育に重きを置き武藏野高等女學校後援會幹事、第七小學校保護者會幹事等として斡旋せらる、家庭には令室との間に一男二女あり。

久喜辨藏氏

瀧野川町土木委員

（瀧野川町中里 二三七番地）

瀧野川町中里の素封家久喜家に入つて同家を繼ぎ、將來有爲の人材として令名高く、鄕閭の囑目最も大なる久喜辨藏氏は溫厚篤實、而かも公共に熱心なる人材なり。

氏は明治三十一年十二月を以て本郡志村字志の素封家にして舊門たる大野家に呱々の聲を揚げたる人なり。令兄己之助氏は現に陸軍一等主計たるの成功者にして、氏は作次郎氏の第五弟に當る。氏も亦資質俊敏頭腦明晰にして算數に長じ、實業界に雄飛せんとせしが、昭和三年十月乞はれて前記久喜家に養子嗣となる。同家は町議久喜一作氏及び久喜一氏と同族にして中里の舊門たり。氏は中里下町會々計の要職に擧げられて町內自治に盡瘁し、昭和四年五月には瀧野川町土木委員たるの重任に就きて熱心に道路下水の完成に努め、更に昭和五年六月には谷田川治水期成同盟會の成るや擧げられて其會計に推され、爾來引續き其職に在りて献身的努力を捧げ殆んど寧日なきの活動を續けらる。氏の如きは全く公共人の典型と謂ふべし。

桑澤松吉氏

巢鴨町長

（巢鴨町巢鴨一〇五四番地 電話大塚九五六番）

天下の模範町たる巢鴨町の自治を確立し、町是百年の大計を樹立して盛に經綸を行ひ、其手腕の卓越と德望の光被とは全國町村中の第一人者として欣慕敬仰せらるゝ偉人、是れを吾が桑澤松吉氏となす。氏の如きは眞に修身齊家治國平天下の古賢政道の金科を其儘實踐躬行せる大爲政家と謂ふ可きなり。氏は信州の一寒村より出で自ら職工と伍して苦楚具に嘗め身を立て家を興し遂に『宰相たらずんば村長たれ』の國家獻替の要位に就く、氏こそ彼のソクラテスの自ら動きて天下を動かせる者、一世の大器偉材と云ふ可きなり。

氏は長野縣の人、明治十年一月十六日を以て松本市在の農鍛冶の家に生る。鄕黌を出で十八歳の時上京、當時神田須田町の十文字新介氏經營たる十文字銃砲店工場に入り、一介の職工として健鬪すること五年、店主並に實弟大元氏は至誠勤勉而も俊敏英才の氏に囑目し、明治三十三年新歸朝の大元氏は瓦斯水道計量器の製作を決意し、桑澤氏を拔擢して神田淡路町に小工場を創立之が經營に當らしむ。氏は玆に登龍の門を開き得て衷心感激を以て日夜苦心慘憺之が完成に努力し十年刻苦の結果、同四十三年舶來品を凌駕する計量器を完成し、大正六年現在の巢鴨町に大工場を建設するに至り、從業員七百有餘に達し數十萬圓の純益を擧げ、金門商會の名聲天下を壓するの大成を爲す。氏は金門商會經營の外、桑澤ゴム工場を經營し其製造に係る庭球、ボール、軟式野球ボールは斯界無二の逸品として歡迎され五六十名の從業員其製作に忙殺さるゝの盛況なり。氏が立志傳中の私生涯は如上の如くにして、又公生涯の一端を見るに大正十三年一月十八日擧町一致巢鴨町長に擧げられ昭和四年再選現職に在るの外、荒玉水道町村組合管理者、東京府町村長會副議長、巢鴨町金庫副長、信用購買組合府聯合會理事、巢鴨青年團長、同教育會長、同訓練所長、同消防組頭、土地家屋調査委員、警視廳工場協會委員巢鴨支部長等を勤め、此間小學校の增設、道路下水計畫の遂行、郵便局の移轉、役場廳舍の完成等巨額の私財を投じ功績絕大なるものあり。又氏が練馬町江古田に設けたる三千餘坪のテニスコートは觀覽所、選手食堂、休憩所便所等完全無比にして體育に資する所大なり。家庭又圓滿十一名の子福者たり。

桑村計穗氏

日暮里第六尋常小學校訓導

（西巢鴨町宮仲二一七七番地）

桑村計穗氏は美作の人、明治二十九年十二月一日を以て岡山縣勝

田郡北吉野村大字中島東二八六番地に生る。幼にして神童と稱せられ、夙に育英家たらんと志し、鄕黌を優秀の學績を以て出づるや、岡山市に出で岡山縣師範學校本科第一部に入學し、大正六年三月十六日を以て業を卒へ、同年三月岡山縣勝田郡の小邑勝間田町の勝間田尋常高等小學校訓導として錦を故山に飾る、爾來同校に在りて研究攻學怠らず青年教育家として閭門の待望大なるものありき。勤續滿五年、氏は大正十一年四月より同町勝間田高等女學校助教諭となり、更に同十四年三月教諭に昇進し令名嘖々たり、此間氏は勉勵向學倦む時なく大正二年中學教員たるの免狀を得て同三年三月三十一日岡山縣林野高等女學校教諭に任ぜられ、越えて昭和四年四月上京、日暮里第六小學校訓導として赴任し首席訓導たるの要職に在り、氏は年齢尙少壯、頗る春秋に富む本郡教育界の爲め健闘を期待す。

黒澤源七氏

北豐島郡醫師會副會長
王子黒澤醫院主

（王子町王子五三五番地
電話王子八番）

王子町刀圭界の鼻祖、殊に耳鼻咽喉科の泰斗として聞えたる黒澤醫院主黒澤源七氏は、單り王子町の功勞者たるのみならず實に本郡醫界の元老として貢獻多大の人なり。

氏は宮城縣の人、慶應三年七月六日を以て仙臺市に生る。同家は代々舊仙臺藩に仕へ重臣に列せる名門にして、氏は夙に中等の學を了へ、日露語學校に露語を研修する事六年、後醫術に志し本鄕區東竹町濟生學舍に入り勉學數年後內務省醫術開業試驗に合格、王子町に來住開院せるは明治二十八年十一月なりき。當時同町には醫家一戸もなかりしと云ふ。篤學の氏は其後も帝大醫科に耳鼻咽喉科を專攻し常に最新學說の研究を怠らず卓絕せる技術を慕ひ遠く診を乞ふ者相踵ぎ、遂に大正十四年の秋現在の宏莊なる一大洋館の醫務局並に病室を新築するに至る。

氏は、王子町醫たる事既に三十年現に其職にあり校醫としては嘗て重く表彰せらる。又王子製紙、大日本人造肥料、日本加工紙、日本フエルト各會社の囑託を兼ね、更に郡醫師會健康保險部長、郡醫師會副會長等の要職に擧げられて貢獻す。氏は文墨風流の趣味多く殊に南畫を能くし、俳句和歌に一家を成し尺八も亦堪能なりと、家庭にやす子夫人あり四男一女を儲く。長男眞一郎氏は大正十一年三月日本醫專を卒業し直に和泉橋病院耳鼻科に勤務し、翌十二年拔擢されて耳鼻科醫局長となり同十四年十二月迄勤續、同十五年より父君と共に自院の診療に從ひ、晝間は慶應病院助手となり現在研究會に在て斯界の蘊奧を研む。次男愛二郎氏（三十一歳）は慶應大學理財科を出で金澤水力電氣に在勤し、三男三樹男氏（二十九歳）は帝大農科實科を卒業し、現に西ヶ原農事試驗場に昆虫學の研究中。又四男威夫氏（二十七歳）は早稻田大學電氣科卒業にしてバスケットボールの世界的選手として令名高く、現に中野無線電信隊に一年志願兵として在隊中。長女きさ子孃（十九歳）は跡見高女を卒業し現に駿河臺の基督青年女子學院ワイダブルに通學中なりと。

× × ×

× × ×

山本吉兵衞氏

山本伸銅所販賣店

（王子町下十條九八三番地
電話王子一七六番）

金物類一式、荒物雜貨卸小賣を業とし商勢隆々として山吉號商標の聲價坊間に洽ねき王子町山本吉兵衞商店は、現主の多年努力奮勵の結果にして、又氏の發明に係る殺虫劑は他に其類を見ざる優秀のものなり。

氏は明治十六年七月二十四日を以て本郡王子町下十條八〇七番地に生る。日露戰役當時は麻布三聯隊に補充步兵として召集を受け、軍隊教育を受く、後山本伸銅所の經營に當り、更に現住地に商店を開きて山本伸銅所製品販賣所を設け、熱心經營の結果今の如き商運益々繁榮に赴き他の羨望の的となるの成功をなす。又氏は頗る發明の才あり大正二年六月より殺虫劑の發明を思ひ立ち、苦心研究を重ね、遂に一ヶ年有半寢食を忘れて實驗を重ね大正三年十月十九日漸く其發明を完成せるが其効果實に驚くべきものにて絕體に他の追從を許さざるもの、大正四年四月二十三日には特許を得るに至れり。氏は資性舊落濶達にして酒を嗜み、盆栽を愛す信仰は佛教にして眞言宗なり。

山本四郎三氏

山本伸銅所

（王子町下十條七五四番地
電話王子一三七五番）

其製品の優良を以て聞え、經營の堅實なるを以て知られたる山本伸銅所主山本四郎三氏は王子町の產なり。

氏は明治二十二年十一月二十二日を以て王子町下十條七五四番地に生る。夙に橐駝の技に長じ、大正十年より浦和町に出でて盆栽を業とせり、その趣味とする所も亦盆栽なるが故に天才的手腕を以て一小盆中よく天地の大を容れ、一木一石悉く大自然の妙處を表はす、故に同業界に令名嘖々たるものありしが震災後は、令兄と代りて山本伸銅所の經營萬端を繼承することゝなり、此盆栽の業は追々縮少し之を廢業するに至れり。今や山本伸銅所は氏の熱心なる奮闘努力により業界不振と雖も何等の痛痒を感ぜず、聲價益々市場に高まり、販路も亦年一年と擴張し隆昌に赴きつゝあり。之れ一に氏が經營の宜しきを致すがためにして國產奬勵上に寄與する所大なり。

山崎菊次郎氏

瀧野川尋常高等小學校長

（瀧野川町西ヶ原七六五）

教育界の巨星、人材教育主義の權威として東京府下に令名洽き奏任校長、是れを吾が山崎菊次郎氏となす。

氏は明治十六年三月十六日を以て埼玉縣南埼玉郡萩島村字野島一〇番地に生れ、夙に教育家たらんと志し、東東府青山師範學校豫備科に入りしは明治三十五年四月なりき、天資俊敏の氏は優秀の學績を以て同三十九年三月同校本科卒業と同時に本郡の首邑たりし板橋尋常高等小學校訓導に任ぜられ、不屈不撓熱血的奮勵を以て育英に膺り既に斯界に錚々の盛名を馳す。同四十五年二月九日瀧野川第一尋常小學校訓導兼校長に榮轉し更に大正三年一月には瀧野川尋常高等小學校長兼訓導に榮進以て今日に至れるなり。此間大正七年四月

二十六日西ヶ原補習學校長兼訓導となり。爾に青年訓練所の設立と共に主事として貢献し町青年團の組織、府、郡、町教育會の役員、町學務委員等として熱誠努力し、父兄を始め町有志の信任頗る厚く、其兒童保護者會の如き貴族院議員大川平三郎氏自ら會長として同校を後援し、智育德育體育何れも他の追從を許さゞる實績を擧げ、幾多の人材を蓋出して功績顯著なり。

氏は昭和三年九月一日を以て異數の拔擢を受け、奏任文官を待遇せられ叙位叙勳の榮擧を擔ふ。又以て我が國教育界の矜とすべきなり。

瀧野川第一尋常小學校訓導

山崎悅三郎氏

（瀧野川町田端二八四番地）

英物に非ざれば英物を造り得ず、吾が山崎悅三郎氏の如きは正に英物の資、實力の材、育英家として至大の囑望を負ふの人なり。

氏は埼玉縣の人、明治二十四年三月十七日を以て北足立郡大石村大字辨財九番戸に生る。夙に教育家たらんと志し、明治四十二年十月九日同縣北足立郡教員講習所を卒業す、之より先き既に氏は准訓導として明治四十二年二月十七日北足立郡大石尋常高等小學校に奉職し、日夜勉學に努め、小學校本科正教員試驗檢定に應じ、修身、國語、漢文、習字、歴史、地理、博物、物理化學、法制經濟、體操の成績佳良なる證明書を受領し同四十三年十一月二十一日本科正教員となり、同四十四年一月十日訓導に任命せらる。越えて大正六年八月三十日退職し、同年十一月三十日瀧野川第一尋常小學校訓導に職を奉じ、爾來熱心に兒童教育の任に當り首席訓導として令名噴々たり。

獸疫調査所長

山脇圭吉氏

（豊多摩郡代々幡町代々木六〇八番地）

木邦唯一の獸疫調査所に長となり、畜産界に絶大の貢献をなしつゝある、從四位勳四等山脇圭吉氏は奈良縣の產たり。

氏は明治十一年三月を以て大和國磯城郡織田村に生る。夙に上京農學に志し、明治三十八年駒場の帝國大學農科を卒業し農學士の學位を受く、直ちに農商務省技手に任じ五ヶ月にして大阪府技師に榮轉し、同府の農事改良に盡すこと多大、勤續五ヶ年にして再び農商務省に入り技師たり。大正十四年には瀧野川町西ヶ原の獸疫調査所長兼務を命ぜられ、後專任所長として現在に至り、高等官三等に叙し勅任待遇たり。氏は學生時代よりテニスの選手としてスポーツマンたりしが、特に乘馬に堪能にして唯一の趣味とせり。

獸疫調査所は當初農事試驗所に附屬せしが明治三十二年頃分離獨立し、獸疫及家畜傳染病の調査研究を行ひ、ツベルクリン試驗其他重要なる發見創始をなし斯界に多大の功績を擧げつゝあり。

三河島町長
東京府參事會員

山口久太郎氏

（三河島町三河島三〇一八電話下谷九四六番）

山口氏は埼玉縣の人、明治十六年九月北足立郡志木村に生れ、夙に實業に志して帝都に出で獨立自尊の信條を以て直往邁進、遂に富を積んで屠を三河島町に定め、身を以て公共事に奔走し、大正五年五月在鄕軍人三河島分會長に推され努むること四ヶ年、更に大正六年町會議員に當選し再選既に三期同十二年二月同町名譽助役に推擧され、翌年六月辭任するや再び擧げられて同町名譽町長に推さる。爾來三河島町大刷新に着手して一躍氏の政治的手腕を轟かすに至れり、氏の眞骨頭たるや思ひ立つた事を敢行する所にある、斯くして三河島百年の町是も確立し、面目一新せり。

氏が曾て東京府會に意見を提議して畜犬、諸演藝其他の脱税に就て手嚴しく當局を鞭撻して町村財源の危急を救ひ、府政の刷新に精進したる勞は酬ひられて府議として未曾有の激戰裡に當選し前警務委員、現府參事會員として活躍す、本年一月卅一日の町會は氏を再び町長に推擧し今や全幅の心血を町治に傾到しつゝあり。

前瑞光尋常高等小學校長

山口袈裟治氏

（南千住町南千住一二一八）

大正元年日本最初の奏任校長三名中の一人にして、今や從六位勳六等に叙任せられたる山口氏は長野縣埴科郡松代の藩士にて明治三年二月の出生。年少既に土地の小學校に准教員を拜命す、明治二十三年本正科教員試驗をパスし小學校教員普通免許狀を受く、同二十三年八月南千住町瑞光尋常小學校訓導となりてより四十年間同町に勤讀する模範教育家たり、其間、同二十五年三月二十一日瑞光尋常高等小學校に轉じ、同二十七年九月二十一日同校々長心得を拜命、同二十八年二月二十五日に同校長に榮進し、同三十四年十月二十日には第二瑞光小學校長を兼任し、大正元年九月三十日には第三瑞光小學校長をも兼任し、大正六年二月十四日兩校の兼任を免ぜられて、瑞光尋常高等小學校長專任となつて今日に及べり、而して明治三十四年には普通教育奬勵規程に依り金圓を賞興せられ、同四十年三月には日露戰役中職務勤勞の功績に依り金圓を賞與され、同四十三年二月十二日文部大臣の表彰を受け、大正元年十月三十日奏任官を以て待遇せられ、同五年一月三十日從七位に叙せられ、同七年五月四日には帝國教育會より教育功勞者として功勞牌を贈られ、同九年十月三十日賞勳局より銀盃壹個を賜はり、同十一年十一月三十日には正七位に昇叙し累進して今日の榮位を授けられて居る、現に少年審判所少年保護司の重職をも囑託され、小學教育の元勳として府郡の教育に貢献する所亦絶大なり。

日暮里町會議員

山口助次氏

（日暮里町金杉七〇〇番地電話下谷一四〇四番）

人生七轉八起、不屈不撓の人にして始めて運命の鑰を握る。吾が山口助次氏は眞に勇邁活志の人、遂に今日の大成を見る生ける教訓の權化と云ふ可し。

氏は新潟縣の人、明治十三年七月二十四日南魚沼郡大崎村に生る。父君は辰藏氏、氏は第五子なり。日露戰役にば策一師團經理部附として出征、上官は君の澄澈たる才氣を愛で永く止らん事を勸めしも、明治四十年退いて本所區八軒町東洋硝子製造株式會社に入り勤續三年の後、同四十五年十月本鄕區駒込神明町二四に下駄鼻緒レザー工場を起し三百人内外を使用したるも大正二年全然失敗に歸し裸一貫となりて前橋市の前橋製糸會社に勤續するの止むなきに至れり。而

かも氏は覇氣滿々何時迄も地方に雌伏するを好まず、再び上京して日暮里谷中本東亞セルロイド會社に入り前後三ケ年、セルロイド工業一切の祕訣を習得し茲に獨立して現住所にセルロイド加工業を開けるは實に大正七年の春なりき。爾來苦心經營幾度か逆風逆潮と闘ひて今日の盛況を招來す、昭和四年五月推されて町議に當選、土木委員、東三隔離組合會議員を兼ね、又東京輸出セルロイド工業組合理事、日暮里署管内安全會々長、同西部睦會相談役等に擧げられて業界に盡し信望高し。芳子夫人亦稀に見る内助者にして實、茂の二令息あり。

荒玉水道町村組合助役　**山田千佐人氏**
（板橋町中丸二八五番地　電話大塚一〇〇八番）

郡制廢止まで本郡首席書記に居り、更に荒玉水道町村組合助役たること二期に及べる山田千佐人氏は、宮城縣の人、明治二十二年十一月二十四日柴田郡大河原町に生れ、夙に刀筆の吏として鄕里柴田郡書記となり、大正九年十一月北海道廳屬に轉じ更に翌年八月柴田郡書記に任ぜらる。此間氏は庶務、會計、勸業、學務衛生等諸般の郡務を鞅掌して大に熟達する所あり。同十二年五月本郡首席書記に榮轉し大震災當時の活躍は郡民の等しく感謝する所たりき。精練達識の氏は、郡政の樞機に參與して大に事績を擧けしが、郡制廢止となり大正十五年六月二十九日地方事務官高等官七等從七位に叙せられ、東京府勤務を命ぜられしが、依願退職して荒玉水道町村組合に入り主事となり、幾許ならず助役に擧げられて大に其完成に功績を積み、昭和四年七月全會一致再選して今日に至る。此間氏は皇孫殿下御乳母選定の功勞を思召され東宮職より酒饌料一封を下賜され、又日本赤十字社は氏の功勞を賞し特別社員に列せり。

日本畫家　**山田敬中氏**
（瀧野川町田端四〇七番地　電話小石川五六〇番）

山田氏は、明治元年淺草區吉野町に生る、天分の高き氏は幼時既に畫才に長じ、川端玉章氏に師事して斯道の研鑽を怠らず、夙くもその神技は斯界に名を馳するに至り。一家の畫風を成し、今や日本畫壇の聖として聲譽を内外に轟かすに至れり。氏は鄕土愛の至情厚く田端を愛し、瀧野川を愛する爲には綽然として餘力を自治公共に捧げられ、曩に町會議員に擧げらるゝこと二期、高潔廉直の人格美を議席に現はして克く町政の美化に貢献せり、又氏は多作を禁じ、苟も自ら會心の作にあらざれば門外一歩を出さずと云ふ、構想の遒勁、無雙の神品、世の鑑賞家の贊頌稱美禁ぜざる所、今や帝國美術院美術展覽會委員を任命せられ、斯界の權威たるは勿論、東京府美術館評議員に擧げられ、又國際美術協會の第一部展覽會委員に推擧せられ、日本畫壇の向上進歩に多大の貢献あり、曩に從七位に叙せられたる功勞者なり。

柔道練習所長　**山中茂利氏**
（瀧野川町西ヶ原一五一番地　電話小石川一七九六番）

山中氏は明治二十年茨城縣鹿島郡息栖村に生る。水戸に於て中等の學業を卒へ、明治大學法科に學びて軍籍に入り、青年士官として前途を囑目され、拔擢せられて軍事視察の要職を命ぜられ、滿鮮の山河を跋渉すること實に六ケ年有餘、皇國の爲に一身を捧げて奉公せられた丹心報國の勳功は又偉大なり、任を果して歸朝するや、瀧野川町西ヶ原の現住所に居を構へ、附近に道場を新設して柔道練習所を起し、自ら所長として青少年の體育武道を奬勵し、健全なる第二國民を養成し思想惡化の防止に血を灑ぎつゝあり。氏は柔道五段の武道家で多年諸流の極意を比較研鑽し、奇正變化の技術を究めて專ら青少年の身心鍛練に教範を垂る。斯くして我が頽敗惰落せる士風正氣の振作に當つて居らるゝは現下の世道人心に鑑み誠に感謝すべきことなり。又家業として電氣工業並に土木事業を營み、斯界に活躍するの外政治に趣味を有し各方面に潛勢力を有し選擧毎に無くてならぬ人物となれり、其將來や必ず中原に馳驅する人として期待さる。

前瀧野川町會議員　**山西與次郎氏**
（瀧野川町田端一〇六三番地）

山西氏は明治三年十一月十七日滋賀縣甲賀郡三雲村の舊家甚兵衛氏の五男に生れ、十二歳の時京都に出でて和漢の學を修め、後、或は米穀仲買をなし、一轉して自由黨に投じ彼の川上音次郎、藤澤淺次郎、溝口一郎、辰野周一郎氏等と自由民權を提唱して古壯士と交遊し東西に遊說を試みしが、一年餘にして翻然修身齊家の道を悟り、再び商業界に入り米相場に飛躍せり。一敗地にまみれ捲土重來を期して皇都に出しは明治二十五年氏が二十三歳の秋なりし、翌二十六年漸く當時の日本鐵道會社上野汽車課に傭はれ、恪勤十有餘年同卅九年同鐵道の國有となるや、氏は試驗に應じて雇員より技師補、技師と陞進す、大正五年眼疾を以て辭任、翌六年五月瀧野川町會議員に擧げられてより三期十二年間の久しきに至り、各種の常設委員に擧げらる、又第四小學校保護者會長、田端八幡神社氏子總代を歷任し公共自治の爲に熱誠奮鬪せり。尙ほ氏は下田端井堀郵便局長たる外實業界にも令名を走す。尙ほ氏は政黨政治の革新に奔走し、憲政會より民政黨の現在に至る迄終始一貫清節を守り選擧毎に無くてはならぬ、演壇の雄にして其舌端火を吐くの熱辯は反對黨をも畏服せしむる慨がある。

瀧野川町土木委員　**矢部喜助氏**
（瀧野川町田端三一二番地　電話小石川一五六七番）

漬物製造問屋高島屋商店として東京市内に數ヶ所の支店を有し商勢盛榮を極むる矢部喜助氏は、明治十年十二月二十六日を以て田端の現地に生る。同業は維新前牛込區市ヶ谷に在つて『新々』と稱し祖父の代に創業し諸大名旗本邸の御用を勤めしといふ。氏は先代常吉氏の長兒にして斯業を繼ぐや益々時代の嗜好に應じて販路を擴張し、今や都下第一の漬物問屋となり、陸軍省御用を始め、東京市並に東京府の指定商人に擧げられて各市場に提供しつゝあり。氏は亦公共の念に篤く、町民の信頼頗る深くして一方の有力者として活躍しつゝあり、現に瀧野川町土木委員に擧げられ克く其職責を盡す。常子夫人との間に子なきも養嗣子清八氏穎悟俊才好嗣子たり。

日暮里第四小學校長

矢萩守次氏

（小石川區久堅町三一一番地）

師範を出で、更に中央、法政兩大學を卒業し、本郡教育界に異彩を放つ新進の教育家に吾が矢萩守次氏の在るを矜とす。

氏は東京府下の人、明治二十七年十一月十日を以て南足立郡江北村大字廉濱一一〇四番地に生る。幼にして頴悟、鄉閭大に將來を期待せり。大正四年三月東京府青山師範第一部を卒業するや、南足立郡淵江村東淵江小學校訓導に任ぜられ、同年九月には同郡千住町千壽第二小學校訓導に轉じ多年同校に在りて精勵し、父兄の親頼頗る厚きものありき。大正十二年四月東京市立千駄木尋常高等小學校訓導に轉じ、越えて昭和三年四月には尾久町赤土尋常小學校訓導となりて令名高く、同五年四月二十五日日暮里第四小學校訓導兼校長に榮轉、同年五月同町實業補習學校長兼助教諭兼任となり現在に至る。尙氏は此間に大正十一年三月中央大學專門部經濟科正科を卒業し、更に昭和四年三月法政大學專門部高等師範科英語科を卒業せし勉强家なり。

日暮里町會議員

箭内吉太郎氏

（日暮里町旭町二ノ一三七番地　電話下谷八三一番）

曾ては北海氷濤の間に國家の干城として一身を捧げ、更に商界に飛躍して興產の基礎を築き一轉ゴム工業に着目して遂に業界に覇をなせる箭内吉太郎氏の如き、成功立志の一人者と謂ふべし。

氏は明治十九年七月二十九日を以て福島縣田村郡片曾根村に生る。兵に徵され旭川聯隊に籍を置く、除隊後上京、下谷區に於て木炭商を營み大に商勢を張る。當時ゴム工業の有望なるに着眼し、大正元年日暮里町に移りて古ゴム精選工場を新設し爾來孜々營々遂に今日の大成を見るに至れり。氏は昭和四年五月普選第一次の町議戰に出馬し當選の榮冠を擔ふ、是れより先き氏は日暮里町の道路、衛生等部落的施設の急務を叫び睦團體を結びて大に公共方面に努力せしを以て、信望一身に鍾り一致推擧の美談を見る。現に仲睦町會顧問たり。尙町常設委員としては衛生委員として克く同町民保健衛生施設に貢献し、町議として聲望亦高し。

建築金物工業會社代表

柳留吉氏

（瀧野川町田端一八〇六番地　電話下谷六〇三五番）

成功立志傳中の第一人者として推すべき吾が柳留吉氏は、埼玉縣の產、明治十五年二月十六日を以て埼玉縣大里郡明戸村に生る。明戸小學校を卒るや明治三十二年上京して將來の成功を期し、先づ問屋に入りて刻苦精勵すること多年、同三十七年日露の風雲急を告ぐるや氏も徵されて皇軍に從ひ、硝煙彈雨の下克く國家の干城たるの任を完ふし、勳八等白色銅葉章を授けらる。越えて四十二年氏は獨力を以て農具改良製作販賣を志し、即ち柳英雄商會を創設し各種の有益なる農具を製作して全國に販路を擴め高評嘖々たりき。

大正十一年氏は瀧野川町田端の現住地に來住し、工場を新設して益々事業の發展を見るに至る。昭和四年同工場は新に東北本線の敷地となり鐵道省に買上げられしを以て、一時閉鎖の止むなきに至り、更に新工場を三河島尾久に置き、合名會社建築金物工會社として其代表者となり今日の隆運を築かる。此の間氏の苦學力行の跡は實に當代の青年子女を奮起せしむるものあり、而かも氏は常に國益事業の精神を以て奮闘せらる愛國の熱血家と云ふべし。家庭には後添たま子夫人と三男二女あり、又工場には三十餘名の從業員和衷共同して活動せり。氏は敬神家にして又弓道に堪能、宮前弓道倶樂部長なり。

岩淵町第二小學校長

柳沼清氏

（瀧野川町上中里二六四番地　電話王子三〇六番）

柳沼氏は明治二十六年福島縣安積郡永盛村に生る、氏は終生の事業として育英に志し早くも鄉里豐田小學校に教鞭を取り着々と其の抱負を傾くるや忽ち視學の認むる所となり同郡赤津小學訓導に任ぜらる、明治四十五年本郡板橋尋高校訓導に榮轉し、大正二年瀧野川町第一小學に、翌年同尋高校に、同十四年同第五小學校の新設と共に初代校長として迎へられ蘊蓄を傾けて確乎たる校風を樹立し、且つ臨海團等を組織して範を示せり、此間豐島師範學校に入り大正五年卒業す、此の精勵勉學を以て益要素を固めて進出する事は單に氏の爲めのみならず國家の爲めに推服する所たり。昭和四年三月は此の良師をして豐多摩郡穢原校長とならしむる至れり、而して五年岩淵第二校長に轉ぜり。氏の性や極めて豪快にして婦女子的小事に拘泥せず、又巧言なく令色なく爲めに醜官俗吏の忌む所となるは止むなしと雖ども、兒童の人格をつくるは師の人格の高低雅俗の及ぼす力の大なるは言ふまでもなし、氏の如き良師に依つて育英さるゝ兒童は幸福たる可し。

松竹キネマ株式會社營業部長

山本吉太郎氏

（瀧野川町西ヶ原八七二番地　電話小石川三五一四番）

曾ては育英界に在つて國民教育の天職を盡し、今や社會教化の隨一機關たる映畫界に在つて聲望並ぶものなき山本吉太郎氏は、金澤市の人、明治二十九年石川縣師範學校を卒業するや、多年教壇に立つて第二國民の教養に當りつゝありしが、後感ずる所ありて上京、日本大學商科に入りて新希望の達成に勉め、同四十四年卒業するや、當時映畫界の覇王たる福寶堂に入る。大正元年十月斯界に一大トラスト行はれ、同二年日本活動寫眞株式會社創立せらるゝや聘せられて營業部長に進み、更に同八年國活合併後も俊敏の手腕を揮ひ、同十一年十一月松竹キネマの營業部長に推されて現在に至れるなり。氏は常に時代の先驅たる映畫の躍進に一歩を先んじ、人氣の照點を自社に收め、今日の超越的一大成績を業界に誇るに至らしむ。洵に氏の縱横敏活の手腕や推稱推服の外なし。

氏は又自治公共の念厚く、居町西ヶ原部落の發展向上にも努力して信望厚く、現に西ヶ原九一會長に擧げられて奔走し住民より感謝せられつゝあり。同會は其會名の如く大正十二年九月一日の創立にして夜警を主として今日の自治會となれるもの、現會員百五十餘名ありて堅實の發展を爲せり。大學在學中はスポーツマンとして知られボートレース、雄辯會等に牛耳を取り、今や映畫界に活躍して令名を馳す、趣味としては殊に謠曲を愛せり。

家屋調査第二次員

前島鎌太郎氏

（日暮里町金杉二〇一番地）

熾んなる公共心を以て日暮里の開發に心血を注ぎ、父祖相繼いで自治に貢献せる前島鎌太郎氏は又地主として好評嘖々の德望家たり

氏は明治二十年九月十八日を以て現住地たる日暮里町金杉に生る。土地の舊家にして祖父平五郎氏は多年村會議員として村治に盡したる家柄なり。氏は大正六年五月町會議員に推され年少尙且つ當選の榮を擔ひ、更に同十年五月再び町議に擧げられ同十四年三度び町會議員に當選して各種の名譽委員を兼ね大に貢献し、又青年團役員としては金杉支部長たりき。昭和四年六月には、學務委員に推薦せられて同町教育機關の完備充實に努力し、昭和五年四月には家屋稅調査員に當選し、更に全調査員の與望を擔ふて第二次員に就任し現在に至る。尙ほ氏は金杉衛生組合長たること多年、又日暮里第二尋常小學校父兄會幹事長として兒童奬勵に盡力す。

王子町會議員

前島正雄氏

（王子町上十條一三一七番地）

身は高等官として鐵道省に仕官し、而かも居町自治政の爲めに貢献せる紳士、前島正雄氏は紀州の出身なり。

明治十八年五月二十日を以て和歌山縣有田郡八幡村大字楠本に生れ、明治三十六年三月和歌山縣立中學校を卒業して上京し大正九年七月東京中央大學法律科を卒業す。

爾來鐵道省に職を奉じ、歷進して今や鐵道省主事に任ぜられ東京鐵道病院事務長を命ぜらる現に正七位勳七等たり。氏は公共心に富み居町の自治公共事業の發達を念とし、昭和三年三月には輿望を負ふて町會議員に當選し、町常務委員の要職を兼ね更に王子町臨時財務調査委員、王子町教育會評議員に擧げられ又町內會たる上十條仲原町會の副會長として土地の發展に努力す、町會にあつては常に穩健公正の意見を主張し、人格者として主きをなす。

前板橋町會議員

增田寅藏氏

（板橋町下板橋一一四番地　電話板橋一三九番）

板橋町會群鷄の一鶴たりし吾が增田寅藏氏は、昭和四年の改選に松村、花井氏等元老連の隱退と共に勇退し、淸節守操を完うしたる人格の人たり。

氏は明治十二年一月十五日を以て埼玉縣北足立郡鳩ヶ谷町に生る。生家は農業の傍ら機織並に荒物雜貨商を營む、嚴父銀藏氏の三男にして、二十三歳の時板橋町上宿に來住、荒物雜貨店を開き店運日に月に繁盛に赴きしが、氏の二十六歳の時、日露の風雲急なるものあり、必ずや出征の命あるべきを覺悟し輒ち、商品全部を破格廉賣して廢業するに至る。然るに氏に召集の事なく平和克復せるも、氏が盡忠報國の至誠こそ、傳へて以て美談とすべきなり。爾來氏は地主家主として產を治め其燃ゆるが如き奉公の念を擧げて公共事業に捧げ、町會議員たること四期、檢疫豫防委員其他の要職を兼ね現

に學務委員たり。又多年板橋上町々會長、鄉社氷川神社氏子總代たること十餘年、前板橋町信用組合理事、現板橋自動車株式會社敢締役たり。如上氏の社會公共に貢献せし功績は實に著大にして曩に御大典記念に附し町功勞者として金盃及感謝狀を贈らる。秋子夫人との間に三男二女あり、長男一男氏は隣地に別居し二令孫をあけ、次男正男氏は日本大學商科を出で、長女きよ子、次女菊江子兩孃は共に豐島高等女學校出身の才媛なり。本年新邸成り喬居す。

瀧野川町副收入役

町井省三氏

（瀧野川町田端六〇八番地）

瀧野川町に公吏たること既に滿十五年、謹直至誠、孜々として精勵せる町井省三氏は靜岡市兩替町の人、明治四年七月五日を以て故省三氏の長男に生る。氏は七歳の時一家を舉げて上京日本橋に於て祖業の旅人宿並に回漕店を營む。氏は小學校を出で當時の山崎中學校に學び卒業後は父君に從つて家職を勵むこと三十年、大正元年廢業と共に瀧野川町の現地に來住す。氏は前名を勝藏と呼び相續後嚴父の名を襲へるなり。大正五年二月二十九日瀧野川町役場に奉職同十四年副收入役となり現に其職に在つて名收入役野木三吉氏を佐けて令聞あり。家庭には清子夫人との間に二男一女あり、長男富太郎氏は東京高等工業學校出身の陸軍工兵豫備少尉にて多年藤倉電線株式會社技師として要位を占め、息女は夙に日本橋高等女學校出身にて夫々他に嫁す。氏は風雅に生き俳諧の趣味豐かに名吟少からず。

收入役代理として瀧野川町豫算萬一萬圓内外の出納の實際に當り一點の過誤なき手腕は亦以て名出納吏と謂ふべし。

東京府會議員

丸山秀天氏

（日暮里町谷中本六七六番地　電話下谷八七六番）

東京府政の腐敗惰落は年既に久し、施設事業は悉く黨派的勢力爭奪の具に供せられ、役員の選擧は情實選擧、黄白選擧に終始せられ、毎期その醜狀を繰返すのみにして、府議の人材を更新するにあらずんば百年河清を俟つも望む可らざる實狀なり。此秋に當り吾が丸山秀天氏を本郡より選出したるは、最も意義ある所、選擧民覺醒の現はれとして大に之を悅ぶものなり。

氏は明治二十年二月二十六日を以て長野縣南安臺郡三田村の舊家に生る。夙に俊敏英才鄉黨の推服する所たり。早くより現住所に來住し事業界に手を染むるの傍ら政界の刷新に努力し、殊に地方自治には最も造詣深く、信州男兒の任的義氣を以て活躍し曩に日暮里町會議員に當選して町政に貢献し、昭和三年五月東京府會議員選擧に出馬し、さしもの激戰にも遂に鹿を射止め當選の榮冠を荷ふ。現に警務常置委員、税制常設委員たり。氏の令兄は北海道より衆議院議員に當選せる政治家の家柄なるも、府政に在つては自治の本領に立脚し銘々倶樂部に在り、あくり夫人との間に長女うめ子次女禮子の二令孃あり。

元王子町會議員

眞壁金一郎氏

（王子町岸九五〇番地　電話王子四五三番）

高潔なる人格者として隱れたる力を王子町の進展に臻せる眞壁金一郎氏は、明治七年一月二十三日を以て嚴父鐵之助氏の長男として現地に生る。同家は土地の名門にして祖父は維新當初王子戸長を勤め、大藏省印刷局抄紙部設置に努力し、其原料供給に盡すなど同町發展の基礎を拓き、嚴父亦町會議員の職に在つて町治に貢献する所多かりき。氏も嘗て擧げられて町會議員となり公共自治に竭せしも後感する所ありて公職一切を辭し、爾來隱德を積んで社會民人の爲に竭しつゝあり。卽ち同町は商工地帶として地主、借地人間に屢々紛爭せるも、氏は町發展の犧牲者となり、低廉なる地代を以て滿足して更に値上げ等をなさゝしために借地人は氏の高潔恬淡なる人格に感嘆措かざるものありと。家庭には母堂つね子刀自あり、もと子夫人との間に三男一女を擧ぐ、長男鐵石氏は京華中學を出でゝ家に在り巴屋質舗の經營に當り、瀧野川町の名收入役野木三吉氏の令孃を娶りて平和の家庭をなす。

家屋稅調査員

馬淵金太郎氏

（瀧野川町田端三八番地）

重厚にして至誠を人の腹中に置くの人、熱心にして公共を好愛奉仕するの人に吾が馬淵金太郎氏あり。

氏は瀧野川町田端の舊家馬淵忠次郎氏の長男、明治十一年七月呱々の聲をあぐ。氏の祖父治右衛門氏は舊田端村の戸長として功績ありし門地なり。氏は幼にして父君を喪ひしが、向學の念深く田端光明院の伊藤六助氏に就て修養勉學すること六星霜餘、後家業の農に從ひ尙晴耕雨讀の志を舍てず。明治四十年密督を相續し植木業を創む、現在其家業を長男忠治氏に讓り、氏は公共事業に献身するの外、盆栽に菊花培養にその趣味を行る。

氏は瀧野川町消防委員として既に四期に亘り勸續し、警備施設の完成に貢献する所多大なるのみならず、昭和五年家屋税調査委員に擧げられて克く其任を竭し、又上田端町會副會長、瀧野川第七尋常小學校保護者會常任幹事、及購買委員並に村社八幡神社氏子總代、光明院檀徒總代等の任に在りて、常に至誠を以て事に當り衆望を擔はる。家庭には前記忠治氏の外、武藏野高等女學校を優秀の成績を以て卒業せる才媛つる子孃と、京北實業學校在學中の省三氏及び武藏野高等女學校在學中のいと子孃あり。

岩淵町會議員

丸澤萬五郎氏

（岩淵町赤羽四四六番地　電話赤羽二二二番）

出でては國家の干城として殊勳を奏し、鄉に在つては東京府會議員となり、町長助役等に擧げられ、岩淵町政の權威として自他共に元老を以て許す人に吾が丸澤萬五郎氏を有す。

氏は明治十三年四月二十二日を以て本郡岩淵町赤羽の素封家に生る。鄉黨を出で家業の農事に從ひしが、明治三十一年十二月近衛野戰砲兵第五中隊に入營同三十四年十二月一等卒に昇り同日砲兵上等兵新兵掛及士官候補生掛助手を命ぜられ、同三十五年伍長に進み同三十六年十一月滿期除隊に際し善行證書を授けらる。翌三十七年二月八日日露の役に召集され、同月二十一日近衛野砲第六砲車長として出征し同六月一日軍曹に昇進、同月三十一日名譽の負傷を被りて歸還同十月兵役を免ぜられ其功に依り翌年四月一日勳七等に叙し青色桐葉章を授けらる。氏は歸町と共に力を町の發展に致し大正二年

には衆望を負ふて町會議員に當選爾來毎期當選して今日に至るの外、同年六月には名譽助役に推され、同五年四月には名譽町長に擧げられ、更に大正十三年六月には東京府會議員に當選して府政に貢献する等事績頗る顯著なり。此間氏は大正四年六月在鄕軍人分會長となり青年團顧問等として多年殆んど全精力を傾倒して社會公共の爲に努力せらる。

江戸川上水道組合會議員

松本鶴太郎氏

（三河島町宮地三三五一番地）

町會議員たること三期、幾多の公職を兼ねて三河島町の今日に培へる功勞者の一人松本鶴太郎氏は明治八年七月を以て嚴父幸次郎氏の嫡男に生る。明治卅八年同町が耕地整理斷行の際氏は共會計として樞機に參劃し、同四十年五月には町會議員に擧げられ爾來三期に亘つて當選克く町治の爲に貢献して倦む處なく、殊に同町青年團の爲には私財を投じて熱心なる後援をなして模範青年團たるに至らしむ。資性圓滿任俠義氣に富み、常に公共奉仕を以て無上の樂しみとし、現に宮地町々會長、峡田第一小學校後援會々長、三河島社會事業協會方面委員等に擧げらるゝ外、江戸川上水道組合會議員として努力する所多大なり。家庭にはまさ子夫人との間に二男一女あり、長男幸一氏は早大理財科出身の俊秀、長女松子氏は女子美術學校を卒へ尾久町の素封家伊奈葉安五郎氏の令息惣作氏に嫁す。

惣作氏は三河島町一番地に家庭用雜貨商を經營して商運隆々たり。又次男鎌二氏は郁文中學を出で更に攻學中なり。

三河島町家屋稅調査員

松本富五郎氏

（三河島町屋四四三番地）

三河島町屋に於ける唯一の富門舊家として知らるゝ松本富五郎氏は、明治二十六年九月十九日を以て松本家十八代良之助氏の長嗣子たり。同家は由緒正しき家系の上に門地は開かれ、當主は十九代目に當り、初代を七兵衛と唱へ、二代を藤左衛門と稱し爾來一代措きに此名を襲名するを家憲とせしも、十七代藤左衛門氏に子なく、實弟良之助氏十八代の家督を繼ぐ、卽ち當主の嚴父なり。氏の祖父七兵衛氏は町屋の名主を勤め、町村制實施後は村會議員として十二年間も村治に盡瘁し、先々代藤右衛門氏も村政の功勞者たりき。氏は此名家に生れ、言萬長者たるに拘らず、身を持する極めて謹嚴質實、更に驕奢の風なきも、公共の爲には卒先財を投じて措まず、義勇消防に盡すこと十數年、部落團體町屋町正會副會長、町屋聯合自治會長等を勤め現に三河島社會事業協會方面委員たる外、昨五年家屋稅調査員に當選す。又子女の教育に熱心にして武藏野高等女學校後援會幹事に擧げらる。家庭にはよし子夫人との間に二男三女を擧ぐ。

日暮里町會議員

松本新一氏

（日暮里町日暮里八六〇番地）

松本家は新堀の昔、太田道灌時代よりの舊家にして由緒正しき家系連綿として續き、同町の名門たり、當主新一氏は其第十六代目に

當る。

祖父新太郎氏は、町村制施行以來引續き村會議員となりて自治政に貢献する所多く、父君新右衛門氏も亦其後を享けて町議員たること二期、實に代々町名譽職に擧げられて功勞多き家柄なり、氏も亦之れを繼で衛生委員を始め諏訪神社氏子總代、第六尋常小學校父兄會幹事、宮下町會副會長、日暮里在鄕軍人分會副長等に擧げられ公共の爲に盡瘁する所多大なり。

氏は昭和四年五月三十三歳の年少を以て、宮下町會一致の推薦により普選町議に立ちて當選し、衛生委員及び警備委員を兼ねて熱心町治に努力し、祖先の名をも顯揚しつゝあり。氏は名門に生れ、地主階級の新人たるも更に地主根性なく、恭謙克く一般居住者と和し共存共榮の精神を以て事に當り衆望を一身に集む。氏の前途や公私共に期待する所絶大なり。

瀧野川町家屋稅調査員

松本伊之助氏

（瀧野川町谷津一一六一番地）

幾多の公職に在り眞摯熱誠を以て終始一貫せる松本伊之助氏は、明治二十年を以て嚴父久三郎氏の長男に生る。家は土地の素封にして農を以て業とせしが氏は同四十一年横賀重砲兵隊に徴され、衛戍病院看護卒となり、四十三年除隊後は家職に從ひ在鄕軍人として鄕黨青年に範を垂る。曩には國勢調査委員に擧げられ、谷津正和會の創立に盡瘁して會長に推され、又長く町消防第十部長として熱心に努力し、在鄕軍人分會評議員、瀧野川第六小學校保護者會々計、町土木委員等の要職を兼ね更に昨五年同町家屋稅調査員に當選せり。こと子夫人との間に一男一女あり。氏は將來ある人格者として一般より待望せらる。

荒玉水道町村組合議員

松村孫兵衛氏

（板橋町下板橋六四九番地　電話板橋四〇番）

人格に於て德望に於て本郡の長老として推稱賞仰の的たる吾が松村孫兵衛氏は、地方政界に又地方實業界に令名治ねき重鎭なりとす。

氏は明治元年四月九日先代孫兵衛氏の長男に生れ、峰太郎と稱せしが明治四十一年十月家督を相續し襲名す。同家は板橋町の舊家にして德川八代將軍享保の時代より中仙道板橋宿「伊勢孫」の名現はれ旅宿伊勢屋孫兵衛を以て知られたる富門たり。氏は明治四十年五月衆望を荷ふて町會議員に當選、爾來再選に再選を重ね勤續六期に及び、更に同四十二年には町民の輿望を以て板橋町長に當選同四十四年まで在職、越えて大正七年再び町長に擧げられ同年十一月まで町治に盡し、同十四年三度び同町長に推されたるも氏は固辭して後進に讓る。此間氏は郡會議員、郡參事會員、豐島病院組合會議員、所得調査委員、相續稅審査委員等に歷職し、大正十三年板橋町會は自治功勞者として重く氏を表彰す。現に荒玉水道組合會議員、板橋町學務委員として公共に盡瘁せり。又曩には板橋郵便局たること七ケ年克く其業績を擧げ其簡易保險の成績の如き全國第二位の好成績を擧げ當局の賞する所となれり。又御大典記念に際し氏は再び自治功勞者として金盃を贈られ其功績を表彰せらる。三男萬三郎氏青山學院高等實業科を出で家政を執り、松四郎氏は東京商工出身なり。

尙ほ萬三郎氏は同町青年團第三分團長たり。

松戸裁縫女學校長　松戸　左中氏

（王子町下十條七一五番地）

人類生活の三大要素、之を衣食住となす。其發達變遷の跡を究むる時、本邦衣服の如く多種複雜なるもの蓋し他に類を見ざる可し。服制は時代を表徴し思想を現示し國民精神を傳統して我が國の歴史、國體を永遠に物語るべき實に尊き資料たるに拘らず、之が研究の等閑に附せらるゝは洵に遺憾とする所也。而も茲に古典故實の大家にして古代服の權威たる、松戸左中氏在るは眞に國家のため慶賀すべきことなりとす。

氏は千葉縣の人、明治三年八月十五日を以て生れ、六歳の時父を喪ふ。鄕學を卒へて上京、越後家（現三越）直屬の仕立屋落合幸之助（羽織屋）に奉公し後三越に入り恪勤精勵二十年一日の如し。明治三十一二年の交、外人の和服註文に際し氏は米突尺使用を始む、之れ米突尺使用の嚆矢なり。同四十二年三越裁縫部に轉じ累進して部長となる、大正二年『實地裁縫の奥儀』を發行、同年同部を辭し神田區錦町に和服裁縫傳習所を創立、更に『實科裁縫講習錄』を刊行、同七年本鄕區團子坂に日本裁縫女學校の開設と共に專任教師となり、時の中橋文部大臣より中等教員免許狀を授けられ、現在の王子町に松戸裁縫女學校を設立するに至る。

此間氏は畏くも宮內省調度寮の御用命により　大正天皇東宮に在す當時より御衣謹製の光榮に浴し、又各宮家に出仕せる外、東京女子高等師範學校裁縫教員研究會講師となり、千二百餘年前大寶令に依る日本服の始めより明治中葉に至る古代服雛形二百數十種を納め、氏の研究と造詣深きに世人を驚嘆せしむ。尙氏は將校婦人會、大妻技藝學校等に其蘊蓄を披講して好評を博せり。同校所藏の三百數十種の二分の一雛形は日本唯一の研究資料なりと。本校は女子の德性涵養に必要なる裁縫技術を授け、裁縫技術により人格の向上威嚴の發揚を期せんとするにあり。今や氏の錚々たる令名と共に松戸裁縫女學校の聲名東都に高し。

尾久町助役　正木　米吉氏

（尾久町下尾久九六八番地）

正木氏は尾久町の素封家勘次郎氏の嫡男にして明治二年の生れ、七歳より學に就き同十六年より家事に從ひ且つ父君を輔けて公共事業に奔走せり、資性堅實明敏にして能く働き能く盡す而も中庸を失はず世と共に推移せり。明治四十三年村會議員に擧げられ、翌年は下用水十番分水々利組合議に員推され、大正元年は町學務委員に、同九年には東三隔離町村組合議員に、同年第一回國勢調査委員、同九年尾久信用組合理事に推され今尙ほ在職、同十年尾久町收入役に擧げられ同十四年任期滿了するも再選せらる、而して任期中名譽助役に擧げられ今日に及べり。尙ほ氏が社會奉仕に篤き事は異數にて大正九年米價騰貴に當ては細民救濟費として一百圓を贈り府廳は賞するに賞狀並に木盃を以てし、同二年には尾久町役場建築費中に一百圓、同九年には尾久小學校建築費に三百七十圓、同十一年同校增築に四十圓を寄附する等、公共の爲めに資を惜しまざる事氏の如きは稀れに見る好模範とす可き篤志家なり。

長男久彌氏は日本大學經濟科を卒業せる新人なり。

瀧野川町會議員　松本　定吉氏

（瀧野川町瀧野川九二〇番地　電話王子七二九番）

父祖相繼ぎ『公共』の二字の權化とも謂ふべく、公共人の典型とも言ふべき吾が松本定吉氏は、明治十九年八月二十七日を以て先代定吉氏の長男に生る。松本氏は土地の素封舊門にして、其邸宅の數百年を經たる巨木大樹に圍繞せられ今尙ほ名主たりし門地を偲ばしむ即ち氏の祖父たる松本吉左衛門氏は瀧野川村と西ヶ原村の聯合村當時村役人を勤め名聲高き人物として傳へられ、嚴父定吉氏は家業の農事の傍ら夙に乾物商を營み、土地の進展に貢獻せる功勞者なりき、氏は前名を吉左衛門と稱せしが天正八年八月嚴父の永眠により家督を相續して襲名せるなり。夙に京北中學に學び後徴兵として入營、除隊後は農業に精勵せしも土地發展と共に今は大地主として模範的良地主の評高く、公共に熱心なる氏は大正十三年四月町內團體小原會の設立に盡力して副會長に擧げられ、同年六月より會長となりて現に其重職に在り、又在鄕軍人分會にあつては、第十四班長たること多年、第二尋常小學校保護者會に在つては副會長として兒童教育の奬勵に當り、更に町消防には殊に熱心家を以て聞え第二部長として活躍しつゝあり。昭和四年五月衆望を負ふて町會議員に當選し、財源調査委員、衞生委員を兼ね、所得調査委員にも擧げられ、瀧野川自治聯合會の副會長をも勤め町政上の重要人材として重きをなす。尙氏は敬神崇祖の念厚き積善積德の人にて家庭には內助の功多き夫人との間に二令息あり。

松竹キネマ株式會社常務取締役　町田　唯介氏

（瀧野川町上中里二〇番地）

興業界の先覺、重鎭として一代の成功を收めて名聲嘖々たる町田唯介氏は山梨縣の人、明治二十年二月町田佐兵衞氏の六男として東山梨郡松里村に生る。大正元年早稻田大學商科を卒業し、直ちにルナパーク株式會社に入り會計課長に擧げられ、年と共に其手腕を認められて同七年には支配人兼取締役に就任するに至る。後同社が松竹キネマ株式會社と合併するや氏は入つて常務取締役に擧げられて現在に至る。同社が常に映畫界の尖端を馳り、外國映畫と何等遜色なき卓越の作品を提供して聲價映畫街を壓倒しつゝあるは全く氏の天禀的卓識に依るものと謂ふべし。氏は同社の外、日本運輸倉庫、大正企業兩會社取締役、上毛紡織、東京製飴、明治座、新富座の各監査役、淺草興業組合顧問等として活躍し、前途益々勇飛すべき才能の士として斯界の厚く待望する所たり。とり子夫人との間に一女照子氏を擧ぐ。

福田太郎兵衛氏

板橋町家屋稅調査員
前板橋町會議員

（板橋町平尾七九〇番地
電話小石川七〇五七番板橋六番）

板橋稅務署と並び建築木材薪炭問屋として有名なる『嬉野商店』の當主福田太郎兵衛氏は明治二十六年十二月を以て故幾次郎氏の長男に生る。大正十四年五月には町民多數の推擧により年少を以て町議に最高點を以て當選大に町政上に健闘し、昭和四年の改選に際し再起を懇願せられしも、花井、松村、增田氏等の諸元老と節を同うして勇退す洵に名と功とに淫する者多き當代に稀に見る高潔の士と謂ふべし先考幾次郎氏は多年町議として功勞多く、嬉野商店は父君の二十一年に創業せるものにて木材薪炭問屋として都北唯一と稱せられ、東京市、陸軍省、十泉組、荒川組、東組其他都下材木店と取引し板橋製材會社、板橋自動車會社の重役たる要職にありき。氏は之等の事業を繼承すると共に公共自治に献替し、今や板橋町土木委員たるの外、昨五年家屋稅調査委員に擧げられ其職責を盡しつゝあり。氏が捲土重來の活躍は寧ろ將來に在る可し。

古家重朗氏

巢鴨町會議員

（巢鴨町上駒込三九七番地）

巢鴨町會議員には府議戰に立候補し、又模範町巢鴨の町政に參與し、公共自治に貢献する所多き人、是れを古家重朗氏となす。

氏は明治二十年二月二十一日山梨縣北都留郡上野原町二七一五番地に生る。上野原町靜修學舍を卒業して上京、現に富士生命保險株式會社本社直轄部長として敏腕を振ひ、又日本實業新報社長たるの外、日華萬歲生命保險會社代理店主、明治火災保險會社代理店主、すがも新聞社顧問等となり、町內會たる巢鴨町南染井吉野會常任監事たり。昭和四年巢鴨町會議員に當選し、仰高東尋常小學校保護者會幹事たり。

氏は公共に熱心にして曾ては染井第一睦會を創立し、又染井銀座を起して古家商店を經營すること七年間土地の發展に盡瘁する所多し。氏の趣味は演藝、謠曲、旅行、讀書、義太夫等にして又祖先崇拜の念頗る厚し。

藤原由太郎氏

藤原醫院主

（瀧野川町西ケ原九五四番地
電話王子一一四、六六三番）

瀧野川町の史跡『二本榎』前に內科殊に小兒科の權威として知らるゝ藤原醫院主藤原由太郎氏は、明治二十年五月を以て愛媛縣溫泉郡三津濱町に生る。同四十一年上京、現日本醫學專門學校の前身たる日本醫學校に學び、同四十四年十月醫術開業試驗に合格し、直に宮城縣牡鹿郡公立病院に聘せられ實地の研鑽を重ね、大正三年八月實地に開院して今日に至れるなり。大正十一年以來昭和五年まで同町校醫を勤續して令名高く、患者に接しては周到懇切を極め信賴極めて厚く常に門前診察を乞ふもの相踵ぎ、客年醫院の大改築をなして一層患家の利便を圖れり。

代書業

藤田常次郎氏

（王子町役場前）

法規制度の複雜なる今日一般民衆は、日常不馴の願屆の書式を辨へざるは當然にして況して專門的事案に對しては、之を代書家に委託するを最も便なりとす。吾が藤田常次郎氏は代書業の鼻祖と謂ふ可し。

氏は明治五年二月二十二日を以て東京市牛込區加賀町に生る。夙に赤城小學校に學び、進んで麴町區飯田町の大藏省印刷局學堂に學ぶ、同校は憲法發布と同時に廢校となる。後氏は警視廳刑事課に勤務し、明治二十六年退職し、明治四十二年には王子町へ移轉して代書業を創め今日に至れるなり。氏の家は德川家の舊幕臣にして、嚴父は元老院に勤務し、又實兄は大藏省に奉職し居たる關係を以て、氏も亦大藏省印刷局學堂に通學せしなり、爾來氏は王子町民の爲に熱心懇切に代筆をなし、官公衙の書類は勿論建築設計製圖に至るまで業務を擴張し、公衆の利便を圖ると共に公共に盡瘁し信用頗る厚し。

農林省囑託

吹井健三郎氏

（瀧野川町西ヶ原八三番地）

和洋建築技師の泰斗として、近代科學應用の設計家として斯界稀に見る權威者、吹井健三郎氏は、新潟縣の人、明治七年十二月十一日を以て西蒲原郡岩室村大字田子島に生る、氏は鄕黌に學び、夙に立志上京後は、建築技師たらんと欲して苦學力行多年螢雪の功を積みて斯界に一家を成すの地位を獲得し、今より約三十年前より西ヶ原農事試驗場に入り、同所の工營事務を鞅掌して愈々技能を研磨し、天才的手腕は認められて益々重用せらる。曩に依願退職當時は農林省高等官技師として內外より非常に痛惜せられ、現に氏は同省農事試驗所、獸疫調査所、大藏省印刷局、文部省高等蠶絲學校等の囑託に擧げられ工事設計監督の任にありて、造詣深き識倆を以て克く職責を竭しつゝあり。此間氏は瀧野川町在住の關係より、同町公益事業に常に犧牲的奉仕を吝まず、瀧野川町立小學校新增築に當つては殆ど氏の設計に成らざるものなき程にして、最近には第五小學校の增築、第八小學校の新設、町職業紹介所、第四小學校增築等悉く氏を煩はし、又農事試驗場、小峰病院等の新築に當つては、現代式鐵筋混凝土建の頗る斬新なる設計をなす等氏の手腕は斯界の畏敬推服する所たり。家には令閨との間に長男秀治氏次男二郎氏を擧げらる。

二の坪町會々計

藤生忠太郎氏

（三河島町三河島二六六九番地）

藤生氏は明治十一年群馬縣新田郡籔塚元町に生る、其の門地は名家の血統に出で大に產を爲せるも、祖父の代に至り產を傾く、氏は此の窮境裡に人と爲り、二十三歲の時家運挽回の念に燃え蹶然として出京し幾多の辛慘を嘗めて後獨力織物工場を起し稍素志を達するに至り事業界に進出して二三會社の重役たりしが大震災の爲め手を引くに至れるも尙ほ多數の家作を有し初一念は貫くに至る、公共事

としては大正九年第一回國勢調査員に擧げられ、震災直後は第六十三區土地區劃整理委員に推さる、其當時附近一帶災禍に罹りたるに關はらず獨り氏の住宅周圍の一部のみ厄を免れたる事は天祐とは雖ども情儀と義氣に燃ゆる氏としては自己の幸福を寧ろ苦痛に感ずる場合なれば整理委員たるを幸ひに公共の爲めに酬ゐんと殆んど寢食を忘れて二ノ坪及び前沼方面の區劃整理に當り貢献する所尠なからざりしなり。尙ほ氏は多年本邦無盡業界の模範として信用ある平和無盡株式會社の監査役に擧げられ貢献する所ありたり、今や閑地にあつて千代子夫人の間に擧げられたる令孃に養嗣子を迎へ圓滿平和の裡に渡光しつゝあり。

三河島町會議員

藤井熊太郎氏

（三河島町三河島一四四〇番地）

龔には東京府產業主事として信用組合の指導奬勵に渾身の努力を捧げ、令名府下に洽ねき藤井熊太郎氏は、兵庫縣の人、明治十一年を以て加東郡下東條村直七氏の次男に生る。夙に向學の念篤く、漢學の泰斗金田俊隣師に就て攻學實に五年、出藍の譽れある模範青年たりき。同三十一年旣に村治に盡して聲名を馳せ、同三十四年には裁判所書記登用試驗に登第し、翌三十五年兵庫縣飾磨郡々書記に任ぜられ、同三十八年同縣揖保郡首席郡書記に榮轉し、大に郡治の更新を圖り、同四十三年には同縣農商課首席屬に拔擢せられ、大正三年山梨縣農業技師に轉じ、更に同六年東京府產業主事に榮轉、同十二年末まで勤續せり、氏は官界に在る實に二十有一年從六位に敍せられし功勞者たり。此間氏は我國產業界に活躍し或は講演會に講習會に獨特の熱舌を揮ひ、全國各府縣に令名を謳はれ、其劇務中幾多の著書を公にす、卽ち耕地整理論青年の活動、青年團と事績、青年の修養、郡是並町村是調査論、市町村發展策、產業組合實務指針、產業組合講演集、產業組合と勤儉貯蓄、產業組合の趣味、產業組合の經營、產業組合講義錄、產業組合關係書式等あり。退官後は三河島有志と共に濟美建築信用購買利用組合を起し其組合長たる事多年、其他多くの信用組合に理事等として活躍し、又自治公共に盡して信望厚く昭和四年五月三河島町會議員に擧げられ衛生委員、出納檢査委員、東部下水道町村組合議員等の要職を兼ね町政一方の重鎭として囑望せらる。ふじえ夫人との間に一男二女あり、令息弘氏は高等工業を卒へ工業技師として知らる。

古明地齒科醫院主

古明地義勇氏

（瀧野川町瀧野川一八五〇番地）

瀧野川第二小學校齒科校醫として町兒童の口腔衞生に貢献しつゝある古明地義勇氏は、明治二十六年九月を以て山梨縣東山梨郡に生る。夙に齒科醫を志して上京、大正八年三月東洋齒科醫學專門學校を卒業し、同時に開業試驗に合格するや聘されて京都府齒科醫師會主催齒科醫學講習會講師として赴任し、齒科醫生の爲に蘊蓄を傾け、同九年九月辭して瀧野川町に來住し、現所に開業今日に至る。此間同十二年郡齒科醫師會評議員に擧げられ、同町齒科校醫たる外、東京府齒科醫師會北豐島南足立郡支會副會長に推擧され、又公共の事に努力し町民の信賴益厚し。家庭に山梨縣立高女卒業のとく子夫人あり英子信子とみ子三令孃を儲く。

こ之部

小峰病院長 醫學博士 小峰茂之氏

（瀧野川町上中里一五六番地）
（電話小石川五二〇三番王子一〇四番）

當代精神醫學界の權威として洋の東西に盛名を馳せ、世界人類愛のために渾身の努力を捧げ眞に帝國の文化を歐米先進國に紹介して學界に貢獻しつゝある醫學博士小峰茂之氏は、神奈川縣の人、明治十六年十一月を以て鄕里に生る。明治卅六年東京醫學專門學校を卒へ、同卅八年十一月醫術開業試驗に登第したる、俊秀高邁の材幹たり。翌年瀧野川西ヶ原なる王子精神病院醫員となり、傍ら帝大醫科に精神病學を專攻する事多年、同四十一年同大學精神病學教室介補となり、帝大附屬巢鴨病院醫員を囑託され、翌四十二年より現王子腦病院長として其經營に當り今日に至る。此間氏は雄大の天分碌々たるに滿足せず、大正七年米國に遊び、ヒラデルヒア市ペンシルヴァニア醫科大學附屬ウイスター研究所に入りドクトル、ドナイルドソン氏に就き精神化學を專攻し、翌八年九月歸朝後も學究大に勉め、同十二年多年研鑽の結晶たる『神經系統の新陳代謝機轉』の論文を東北帝國大學に提出、學位を請求するや同年六月二十三日の教授會は全員一致通過し『醫學博士』の學位を授與せられしなり。同年十二月二十八日不幸同病院は祝融の災に遭ひ、同十四年總建坪五百七十八坪餘の耐震耐火鐵筋コンクリート三階建病院を新築して內科、神經科の治療を開始し十年四月別に王子腦病院の理想的新築を竣り、更に同十五年十二月私財を以て財團法人小峰研究所を設立し、我國精神病學研究の文献を世界に紹介する本邦唯一の機關たらしむる等、實に斯界に貢獻する所絕大なり。氏は又一町民として大正十年五月瀧野川町會議員に擧げられ、文化の瀧野川町建設に遠大の抱負を伸べ、又瀧野川町醫師會、同齒科醫師會、同產婆會の設立に奔走努力して其顧問となり、北豐島郡醫師會長の要職に在ること多年、東京府醫師會理事に擧げられ、斯界の指導啓發に當り功績著大なり。家庭は、はる子夫人に一男二女あり長男善茂氏は日本醫科大學の出身、長女雪子嬢は本年一月金原種一氏長男醫學士種光氏と結婚す。

前日暮里町會議員 小坂醫院主 小坂春吉氏

（谷中本一〇五八番地）
（電話下谷二六五〇番）

小坂氏は明治七年宮崎縣飫肥町に生る、同三十七年千葉醫科大學の前身たる第一高等醫學部を卒業するや一年志願兵として入營し陸軍二等軍醫となり從七位勳六等に叙せらる、官を辭し大正五年現住地に移轉し小坂醫院を開き治療懇切を極む、又町治にも心を傾注し盡力至らざるなく大いに町民の信望を受け會ては町會議員に擧げられ又日暮里在鄕軍人分會に於ては分會長の職にある事既に二期に及べり、其他町醫、校醫、谷中本衛生組合長、同委員、東京府醫師會議員、本郡醫師會評議員、北豐島郡學校醫會々長として第二國民の保健衛生に對し獻身的努力を盡す等其の貢獻顯著たるものあり。

前東京府會議員 家屋稅調査員 小泉金之助氏

（尾久町熊の前二七四八番地）
（電話下谷四五〇二番）

前府議として小泉園經營者として又ラヂウム溫泉鄕の開拓者とし

て知らるゝ小泉金之助氏は尾久町の舊門素封にして、祖先は太田道灌の重臣なりしと謂ふ。祖父金右衛門氏は町村制施行當時より同廿六年六月まで收入役を勤め、同卅年には村會議員に擧げられ同卅四年まで村治に盡せし人なり。氏は今より二十五年前尾久村が農村時代火葬場設置問題起るや青年の身を以て之が反對の急先鋒となり、發展防害の危機を救ひ其後幾許もなくラヂウム鑛泉の發見さるゝや土地發展の先驅となりて小泉園を經營し、遂に一寒村より一躍人口七萬の尾久溫泉鄕を招來する基礎を招けり。大正十年五月村會議員に擧げられ、同十三年六月には東京府會議員に當選し府政刷新に貢獻する所多大、昨五年家屋稅調査員に當選して第二次調査員にも擧げらる。今や小泉園は新別館の宏莊雄大なる新築あり都下第一の料亭旅館として誇り土地の發展に資する所甚大なり。家庭はとり子夫人との間に二令孃を擧ぐ。

小篠電鍍工場主

小篠義男氏

（日暮里町三河島町二七九一番地
電話下谷三〇九二番）

小篠電鍍工場は、日暮里町正庭に在つて其加工の優秀確實なるは世既に定評あり。同工場は我國電鍍工業の鼻祖たる氏の嚴父秀一氏の創始なり、秀一氏は舊會津藩側小姓の俊才にて幕府に拔擢されて軍樂を修め、功に依り陸軍少尉に任ぜられ正八位に敍せられた軍樂の權輿なり、後獨逸語豫備學校を開きしも、間もなく帝國大學圖書館に聘せられ執務の傍ら歐米の圖書に依て化學工業を研究し、明治二十六年始めて電氣鍍金事業を開始せるも、發展の域に達せざるに先だち、同卅七年逝去さる。當時義男氏の令兄秀清氏其遺業を繼ぎ、工場を設け營々として努力奮鬪を續くる中、時至り明治四十一年需要激增の好機運に入り今日の基礎を大成す、然るに秀清氏は大正十年三月不歸の客となる、茲に於て氏は二十六歲にして其遺業を繼ぐや彼の大震災に一切を灰燼に歸せるも、更に屈せず再興して今日の隆昌を築けり。爰に氏は三河島町議候補に推され學務委員に擧げられたるも、父兄の遺業を守る責任上今尙時期にあらずとて固辭せしを見ても堅實なる人格を窺ふに足るべし。

所得調査委員
三河島町會議員

小泉惣五郎氏

（三河島町町屋三八二番地
電話下谷三九〇七番）

少壯有爲の材幹として幾多の要職を帶び公共に奉仕する小泉惣五郎氏は、明治三十二年十月三十日を以て嚴父惣五郎氏の長男に現地に生る。同家は土地屈指の富門にして、祖父は村總代より第一次村會議員に擧げられて村治に盡し、嚴父も亦村會議員學務委員として功績多かりき。氏も家督を繼ぐや父祖積德の血を享けて公事に盡す所多く、町屋町正會副會長、峽田第四小學校後援會役員等に擧げられ、更に昭和四年衆望を負ふて町會議員に當選し、學務委員、東部隔離組合會議員の要職を兼ね又昨夏所得調査委員に擧げられたる外、客年十二月二十日には三河島町區劃整理組合副組長に推擧せらるゝに至る。以て如何に氏が信望高きかを窺ふべく將來の活躍期して待つべきなり。

氏が所得調査委員選擧戰に臨むや府議山口久太郎氏、尾久町小泉喜左衛門氏等極力應援し第三位の高點を以て當選せり。郡民の營業、收益所得の審査に公平嚴正の健鬪を望む。

東京府會議員

小柴惣九郎氏

（日暮里町旭町一ノ四七番地
電話下谷七四六八番）

府會議員中の人格者として又二十有五年間公共人として國家社會の爲に奔命せる吾が小柴惣九郎氏は、日暮里町の生める一偉材なり。

氏は明治十三年十一月三日を以て同町の富門舊家たる小柴家に生る。家系連綿として由緒正しき素封の家に生れたる氏も不幸にして十一歲の時、嚴父の死に會ひ、母堂久子刀自の掬育に依て人と爲る。幼少學を好み修養研鑽怠らず、家政の處理に任じ益々產を興し鄕黨の囑目多大、明治三十九年には廿六歲にして町衛生委員及び石神井川用水組合會議員に擧げられ、十四ヶ年間勤續して功勞を表彰せられ同四十三年には輿望を負て日暮里町會議員に當選、引續き五期間其職に盡瘁す。此間大正十年には推されて名譽助役となり彼の大震災當時、代理町長の職に在つて救護警備に、各般の應急施設に、大手腕を振ひ當時府市郡並に警視廳より氏の功勞を表彰したる等氏の公共に熱心にして經綸の才亦非凡なる證左とす。昭和三年全郡民の輿望を擔ひて東京府會議員に當選、警務常置委員に擧げられ府政刷新に努力し、郡民福利の增進に奮鬪せらる。又所得調査委員としては負擔の輕減均衡を期し、或は衛生土木區劃整理委員、日暮里青年團、小學校保護者會等の名譽役員に擧げられ、終始一貫全精力を擧げて町民の爲に盡瘁す。家庭には芳子夫人及び次女文子孃あり。尙ほ氏は讀書、旅行を好愛す。

近年府政の現狀は市郡負擔の均衡を缺き彼の三部制の撤廢强調せらるゝの時氏の如き努力家の奮鬪を待つ事大なり。

小松齒科醫院長

小松留夫氏

（王子町王子森下五六番地
電話王子二一一二番）

小松氏は靜岡縣小笠郡笠原村の人明治二十二年の生れ、夙に學に志して掛川中學校に學び卒業後兵に徵さる、大正二年一月齒科醫たらんことを志し皇都に出で、東京顯微鏡院の齒科部に入つて專攻すること數年、遂に初志を達成し、王子町森下五百五十七番地に居をトし開院せるも同所が鐵道の擴張の爲め現在所に移轉擴張し今日に至る。氏の齒科醫術に於ける天才的技巧と口腔外科の手腕とは實に入神の譽れあり。又德子夫人も東京女子齒科醫學校卒業生にて常に夫君の治療を佐けて患者のために萬全を期せらる。

氏の公職としては王子第一尋常小學校齒科校醫、前北豐島郡齒科醫師會副會長、前北豐島郡青年團評議員、王子青年團副團長等に推され、又王子町消防組第三部長、東京府消防協會地方委員等に擧げられ、更に昭和三年三月町會議員に擧げられ少壯中堅として重きを成し、學務委員等の要職を兼ねて町政刷新の爲めに奮鬪しつゝあ。

日暮里町會議員

小宮勝太郎氏

（日暮里町日暮里七一〇番地）

小宮家は日暮里町の名門として、冠家と並び稱されたる素封家にして、當代の主勝太郎氏の祖父治右衛門氏は戶長を經て第一次の村

長に擧げられ、多年自治公共のために盡瘁して大に功績を認められ、藍綬褒章を授けられたる名譽の家門たり。

氏は明治十三年五月十三日を以て、勘太郎氏の長嗣として日暮里七一〇番地の現所に生る。父君勘太郎氏も村會議員に擧げられて永く自治政に參與し貢獻する所多大なりしが、君も亦大正十年補欠選擧の際、推されて町會議員に當選し、爾來引續き町議に列し一方の重鎭たり。

氏は徴兵として騎兵聯隊に入營したるが、三十七八年戰役には召集されて軍に從ひ大に戰功を立てゝ勳八等に敍せられ、歸鄕後は軍人分會の前身たる在鄕軍人團の創設に努力し基本金の造成に盡したる等功勞多大なりき。又町會議員として東三隔離病院組合會議員、土木委員を兼ね、彼の豐島病院組合が百二十餘萬圓といふ尨大の豫算を以て新築に臨まんとするや、氏は卒先反對して遂に其目的を達し、現に豐島病院組合議員に擧げらる。町內會としては昭和會々長として部落の統一和平に努め冠町衛生組合長として亦土地の發展、公衆衛生の向上に奔走し令名嘖々たるものあり。

小林光學機械製作所主　小林幸三郎氏

（瀧野川町上中里一九番地　電話小石川五六八二番）

氏は明治十四年十一月、文武兩道の名門として代々德川族下の直參として祿を食みたる小林家に生る、嚴父良武氏は學術武道の達人にて維新當時彰義隊の勇士たりしなり、此の血脈を承けたる氏の人格亦高潔なるや知る可し　先に瀧野川尋常高小學校保護者會幹事に擧げられ、兒童體育向上のため私財を投じて運動競技の奬勵をなし、瀧野川體育協會を組織して巨額の財を散ぜり、又初めて兒童臨海學校の企てあるや發起者の一人として奔走努力し多大の効果を收め爾來引續き盡力斡旋至らざるなき熱心家なり。同校保護者會の副會長として雨天體操場新設に努力す、又敬神の念厚く夙に鄕社平塚神社氏子總代に擧げられ、社務所新築、社殿修繕、舞殿廻廊の新築に力を竭し、更に上中里青年會創立に力を致し、一方上中里高臺町會を創立して會長に推され現相談役として自治公共に馳驅し貢獻する所多し。一面政治思想に大なる興味を有ち、北豐島郡青年聯盟の總帥格を以ておされ、各選擧毎に此の潛勢力と智謀とを發揮し、宛も民政黨の安達謙藏氏の如き觀あり。內にあつては小林光學器械製作所の經營主として又技術家として聲價を斯業界に馳する實に多技多能の人材なり。大正元年現製作所を本鄕根津に起し業務の發展と共に現所に工場及事務所住宅を建設移轉して今日に及べり。

南千住町主事　小林甚一郎氏

（尾久町上尾久二七六四番地）

多年自治政の事務を鞅掌して其妙諦を體得し、今や南千住町の主事として令名ある小林甚一郎氏は、明治十七年栃木縣下都賀郡富山村皆川に生る、栃木中學校を卒業後同郡中村小學校に教鞭を執り、更に鄕里村役場書記たること四ヶ年、同四十四年二月上京、本郡三河島町役場に入つて書記となり、戶籍、兵事、庶務係等を經て遂にその庶務課長、司稅課長に昇進し、大正十一年二月には同町有給助役に榮進して大に町治に貢獻する所ありしが、松本理三郎町長の退職と共に其職を退き、一時尾久町役場に奉職したりしが同十五年南千住町役場庶務課長に榮轉し今や町主事兼稅務課長として練達精緻の才腕を揮ひ、町治の爲に努力しつゝあり。

瑞光第二尋常小學校長　小林梓氏

（瀧野川町田端三四五番地）

我が國に於ける教育文化の最も進歩せる長野縣に人と爲り大正七年以來、既に十三年間の長き本府教育界に在つて人材作出の天職を全うしつゝある小林梓氏は、今や不惑の壯齡、働き盛りにして一般の囑目する所大なるものありとす。

氏は長野縣の人、明治二十四年七月十日を以て諏訪郡原村字中新田一三六〇番地に生れ、明治四十五年三月二十六日長野縣師範學校本科第一部卒業と同時に長野市鍋屋田尋常高等小學校訓導に任じ、大正三年九月十日諏訪郡四賀尋常高等小學校に轉任し、同五年三月同郡豐平尋常高等小學校に赴任、同七年一月十八日東京府に出向を命ぜられ、同月廿八日豐多摩郡大久保尋常高等小學校訓導に職を奉じ、同九年三月同郡幡代尋常高等小學校、同十年四月同郡淀橋第二尋常小學校、同十一年六月南足立郡千壽尋常高等小學校、同年十月同郡體操科指導員に任命せらる。越えて同十四年三月同郡教育會は氏の多年の功績を表彰せり。同十四年九月には南葛飾郡第一寺島尋常小學校訓導に轉じ同實業補習學校助教諭に任ぜられ、十年七月寺島青年訓練所指導者に囑託さる。昭和三年三月尾久西尋常小學校訓導兼校長に榮轉し同六年二月三日付南千住町瑞光第二尋常小學校訓導兼校長に轉任し現在に至る。

瀧野川町校醫　小林定平氏

（瀧野川町瀧野川一六八一番地）

氏は福島縣の人、明治二十二年一月を以て伊達郡大枝村に生る。幼少麒麟兒の稱あり、鄕校を優秀の學績を以て卒業し、夙に志望せる仁術の業に邁進して大正三年八月東京慈惠會醫學專門學校を卒業して同醫學士となり更に研學實習を怠らず、大正十年八月瀧野川町に來住して現所に開業今日に至る。氏は患家を待つに頗る親切叮嚀、其治療に當つては多年練磨の奧技を以てし、一般患者は實に安心して治療を託し、百發百中回春せざるなく信望極て厚く、昨秋瀧野川町校醫に推擧せられて今日に至り、第六小學校兒童の爲めに努力しつゝあり。

西巢鴨第二尋常小學校長　小名文一郎氏

（王子町下十條九五三番地）

良校長小名文一郎氏は新潟縣の人、明治二十二年十二月三十日を以て刈羽郡二田村字妙法寺に生る。夙に越後柏崎中學校を卒業し、育英家たらんと志して上京、青山師範の第二部に入り同四十三年三月卒業、間もなく豐多摩郡澁谷町の澁谷第二尋常小學校訓導となり、大正七年三月三十一日同町猿樂尋常小學校に轉じ、同九年十一月十五日本郡巢鴨町尋常高等小學校訓導に榮轉し、同十三年三月三十一日更に西巢鴨町第二尋常小學校訓導兼校長に榮轉し以て今日に至

る。氏は體育に熱心にして周到克く兒童教育に當り町民の信頼頗る厚し。趣味として觀世流謠曲に堪能なりと。

ベニヤ板製作業　小縣藤吉氏
（尾久町上尾久三五八二番地）

氏は岐阜縣の人、明治十九年九月九日を以て惠那郡川上村に生る。十四歳の時名古屋に出で足袋卸問屋高木商店に入り十五ヶ年間勤續し、後獨立して履物商を營む。大正五年名古屋の人永井準一郎氏と合同してベニヤ板製作の研究をなし、同八年上京深川區木村町に工場を建設ベニア板製作を創めて業況大に緒に就きしが、彼の大震火災に工場全部を烏有に歸し名古屋に避難し、翌十三年九月現在所に工場を設け捲土重來今日職工二十餘を使用する大成を見るに至り、販賣所を三河島町花の木二四〇番地に置き永井準一郎氏を支配人とし、全國各地に取引をなす盛況なり。氏は先に國勢調査員、尾久原町睦會幹事となり現在會計の重任に在り、又大門小學校保護者會評議員、東京工場協會尾久支部幹事、民政黨尾久支部常任幹事として活動せり。家庭にはいう子夫人との間に一男二女が擧げられ、長女ふじ子氏は國華高等女學校に在學中なり。尚ほ氏は基督教を信仰し平和圓滿なり。

前瀧野川町長　越部淺五郎氏
（瀧野川町瀧野川一九五四番地）
（電話板橋七五番）

今を距る六百五十年前、俊威卿の息女越部の禪尼を祖先とする名門素封の家に人と爲る吾が越部氏は明治九年の出生、前名を半三郎と呼び十八歳まで芳林學校に在て中等の諸學科を學び、後、農業と種苗問屋の家職に從ひ、明治三十八年家督相續と共に淺五郎を襲名さる、同家が本邦種苗界の鼻祖として練馬大根を始め蔬菜品種の改良に功績絶大なるは斯界の認むる所にて、氏は大正九年同業五大問屋の一致共同により資本金百五十萬圓を以て帝國種苗殖産株式會社を起し取締役社長に擧げられて我國農業の進歩發達に貢献し、又公共方面に熱心にして、自治團結のため夙に町友會の組織を始め、明治四十年五月町會議員に當選し、大正五年名譽助役に推され翌六年九月野木町長の後を承けて町長に擧げられ同十九年九月滿期勇退まで實に德風名節、一町を風靡心服せしめたり、此間同七年米價暴騰時に在ては恩賜金に義捐金六千金を以て庶民を恤し同八年には寄附金七萬四千圓を以て現在の役場を新築し翌九年には十五萬圓を以て第三第四兩小學校を新設し自ら一萬金を寄附して紺綬褒章を授けらる、又敬神の念深く村社八幡神社氏子總代として社地百二十坪並に改築費金千圓を寄進する等の美德枚擧に遑あらず、氏は昭和四年西新井總持寺の碩德堅海僧正の得度を享け大師の大慈悲を世間に教示し衆生を安心立命に導きつゝあり、其の崇高なる人格以て窺ふに足るべし。

家屋稅調査員　越部芳之助氏
（瀧野川町瀧野川二二七三番地）

越部氏は明治十八年二月十五日故留吉氏の次男として瀧野川町瀧野川千六百六十三番地の邸に生る、幼にして同地の芳林學校に學び、

更に研修の傍ら家業の種苗栽培を佐く、明治三十九年四月補充兵として近衛歩兵第二聯隊に入營し、六月十三日一旦除隊後補缺兵として札幌歩兵第二十五聯隊に入營、同四十一年十一月除隊と共に、故長兄留吉氏の經營せし『瀧野川農園』が我が國五大種苗問屋の一として他の四問屋と共に帝國種苗殖産株式會社の創立さるゝや、氏は入つて其卽賣部係長として大に手腕を振ひ後、令兄留吉氏の長逝により後を襲ふて同社專務取締役に就任し爾來今日に至る。尚ほ氏は頗る公共心に富み、模範町會公德會副會長、第二小學校保護者會幹事として活躍する外、居住地北谷端睦會々長として若睦みの親善融和に盡し、又最近家屋稅調査委員に擧げられ最も公平なる見地に立つて盡されつゝある。而して國民精神作興のためには維新の勇士近藤勇の史蹟改修を發起し御大典を記念して完成したり、其義氣大に感ずべし。

前瀧野川町會議員　後藤常吉氏
（瀧野川町田端一一〇番地）
（電話小石川六二三番）

後藤氏は明治元年、板橋町金井窪の舊家矢島萩右衛門氏の次男として生る、七歳の時、瀧野川村田端の現住所たる後藤峰吉氏の養嗣子となり其家業たる植木栽培に技を磨き、剪裁誘導妙を得て、一旦氏の手に掛けられた一石一木は悉く奇石名木と化する底の名手として知られ、高價なる園藝は同家に限るとさへ稱されたり、家督を繼承し公共事業に心を致せり、明治三十四年五月村會議員に擧げらるゝの衆望を擔ひしも、當時瀧野川町は政爭の渦亂激しく村政にまで其禍の及ばんとするより、氏は同志と共に辭任す、同四十年五月再び村會議員に擧げられ、爾來二十有餘年間一日の如く自治機關に參與して貢獻する所多大、其間學務委員、衛生委員、土木委員等の各常設委員に任じ、克く職責を竭し、又町內會の鼻祖たる田端交友會の幹事に擧げられ、田端第一尋常小學校保護者會幹事として熱心兒童教育を助成し、更らに村社八幡神社氏子總代として多年その興隆に盡瘁して功多く、大正十五年北豐島郡神職會より其功勞を表彰する所あり、又北豐島郡教育會は氏が二十有餘年間名譽職として學事に寄與せる功績を厚く感謝し銀盃を贈つて表彰する所があつた。氏は信仰の念厚く常に神社佛閣に參拜し、木曾御嶽山に毎年登拜さるゝは人の知る所なり。家庭には賢夫人えい子氏との間に一男五女あり長女よね子氏に當町の舊家加藤竹次郎氏の四男忠次郎氏を迎え三孫あり又同氏は現に早和會會長、町土木委員として町の中堅人物たり。

瀧野川學務委員　越部次郎氏
（瀧野川町瀧野川二三七七番地）

越部氏は明治十五年瀧野川の舊家にして名主及び戸長を務めたる權左衛門氏の六男に生る、幼にして長兄峰次郎氏に養はれ芳林學校に中學課程を修む、同三十五年令兄の永眠と共に家業たる砂糖其他雜貨商店を繼承し、時代に伴なふ刷新を施し實用百貨店として今日の大成を見るに至れり、又外にあつては各公共事業に力を致し、町學務委員を始め町內團體たる公德會々長、上町若睦會顧問、瀧野川聯合會幹事、第二、第六小學校保護者會々計等を兼ね盡力至らざるなし、之れより先き第一第二回の國勢調査並に失業調査員に擧げらるゝ等貢献するところ尠なからず尚ほ前途を囑望されつゝあり。

瀧野川町會議員

越部甲次郎氏

（瀧野川町瀧野川谷津一一三六番地　電話王子二五五番）

越部氏は明治二十七年瀧野川の門地辰五郎氏の二男に生れ、幼時同族甲次郎氏の養嗣子となる。小學を經て大正三年京北實業學校を卒業するや家職酒類の店務に就く、同七年養父の逝去と共に家督を相續して襲名せり、其の資性の質實と手腕の敏鋭とは夙に認められ而立に達せざるに東京酒商同業組合代議員、瀧野川町酒商同業第一組合長等に擧げらる、氏や町内自治に盡す事又人後に落ちず、早くも有志の信頼を受け、大正十四年町會議員の改選に當るや多數の推薦に由つて當選し昭和四年再び當選し財源調査委員を兼ね、其他荒玉水道組合等の委員たる上に、町内正和會副長、第二小學校同窓會幹事長に推さる、此の間國勢、失業兩調査委員に二回共に擧げられ努力する事多大。氏は常に言ふ、自治制の運用は議論にあらずして熟議談合にありと、以て町に對する至平や窺ふに足る可し。

田端山谷交正會長

小泉勝五郎氏

（瀧野川町田端一六八二番地）

土地の素封家にして温厚そのものゝ如く、常に部落開發の爲に盡瘁して今名ある小泉勝五郎氏は明治二十七年八月を以て田端山谷の現地に生る。夙に鄕校を出でゝ家職の農業に從ひ模範青年として鄕黨の崇敬する所なりき。近時郊外の發展と共に農を廢し專ら地主として來住者の便益を圖り、道路の改善、下水の完備、衛生警備の施設に至るまで常に率先私財を投じて之れが助長をなし、先には町内部落團體として定評ある田端山谷交正會の會長に擧げられ、其重任に在りて熱心に同方面住民の福利增進のために奔走しつゝあり。同會は大正十三年一月二十六日の創立にして會員約二百五十名ありて堅實に發達し、會内を四區に分ちて極力衛生方面の施設に竭しつゝあり。殊に同山谷方面は環狀線の開通と府道尾久道の改良と共に一新生面拓かれ、將來益々有望の土地にして、從て公共事業も一層多端を極むべく、此時に當り小泉氏の努力は住民の待望して已まざる所なり。

三河島鐵工所主

小作彦太郎氏

（三河島町三河島三九〇九番地）

小作氏の經營する工場に於ての製作品は諸機械、諸工具、自轉車並にオートバイ附屬品一式其他にて何れも斯業界に優越の地歩を占む。氏は本來政治家として立つの素地を有するの人なり、其の生地は關東に於ける自由民權の發祥地たる府下西多摩郡西多摩村に生れ夙に板垣退助の獅子吼に浸たり、大井憲太郎の硬論に耳を傾け、而して先輩同志と共に民權擴張に寢食を忘れ、官憲の迫害を恐れず、白刃の下をくゞり、血みどろになつて自由を叫びたるの一員たりしなり。二十四歳の時飄然悟る所あつて小石川砲兵工廠に入り專心鍊冶精製の技術に傾注し居る事數年、而して一般の技術を體驗するや去つて暫く氣を養ひ、大正七年現住地に於て工場を開き、自らも亦從業員となつて他を指導し營々として業務の進展に意を注ぐ、其の製品や精巧、其の價格や品質に比して廉なり、此の故に聲價は日に揚がり遂に大成して今日の不況時代と雖ども微瘁を感ぜずして益々猛進する態度は恰も青壯時に於ける政治運動の如く愈よ壯なり。尙ほ夫人澄子氏は温良にして貞淑大に内助の功あつて從業員の推服する所たり。

瀧野川町會議員

小原種次氏

（瀧野川町田端一三一四番地）

多年我が國鐵道界に在りて功績を擧げ、今や其後半の餘力を瀧野川町政に捧げて新人中の精鋭として活躍しつゝある小原種次氏は、岩手縣の人、明治十七年七月十四日を以て鄕里に呱々の聲を擧ぐ。夙に志を立てゝ鐵道に入り、精勵恪勤常に吏僚中の模範を以て稱せられ、約二十五年間殆んど一日の如くに勤續し遂に助役に拔擢せられ、曾ては田端驛助役として令名嘖々たり。後鐵道省を辭して閑地に就き、現住地に多くの家作を建築し、良家主として一般の敬仰を受けつゝあり。昭和四年五月には瀧野川町政の刷新を標榜して奮起し、町會議員に當選し土木委員の要職を兼ねて全く席の温まる時なきの努力を土木方面に致し、孜々として絶倫の精力を町政に傾注しつゝあり。又第四小學校增築に就ては町會毎に之を主張して遂に實現し町内自治團體下田端睦會に在つては消防設備の完全を期して第十四部の設立に盡瘁し、現に副會長に擧げられて部落の繁榮に努む。

巢鴨町會議員

鯉淵末松氏

（巢鴨町四丁目一六番地）

建築業界の成功者として獨立獨歩、今日の地歩を築き上げ更に地方自治の爲めに不斷の努力を捧げつゝある鯉淵末松氏は茨城縣の人明治十年八月十三日を以て東茨城郡飯富村字藤井の篤農家清五郎氏の四男に生る。氏は別に志を立て十九歳にして上京、建築家たらんとして巢鴨町一丁目の大工棟梁西山岩助氏に就きて建築上の實際技能を修得すること多年、明治三十七年九月日露の役に際しては勇氣勃々たる氏は陸軍建築部員に應召して滿洲出征軍に從ひ、同地に於て凜烈の寒氣と戰ひつゝ克く任務を盡し、在滿壹ケ年にして歸來し、後現地に建築請負業を開業して今日に至れるなり。爾來氏は家職の發展のため奮鬪努力を續くると同時に常に燃ゆるが如き熱誠を以て居町の繁榮のために奔走し、曩には巢鴨四丁目居住者の自治的結合を促し、協和會の設立に盡瘁し現に其の第五部長として活躍しつゝあり。昭和四年五月衆望を負ふて町會議員に當選し、現に土木委員として同町道路の完備を促す外、下水道部委員としては材料檢査を擔任せるは適材適所と云ふべし。家庭にはとく子夫人との間に二男一女を儲く。

前尾久町會議員

小泉喜左衛門氏

（尾久町上尾久三〇〇八番地　電話下谷一三八番）

尾久町の素封を以て知られ、町政の重鎭として今や同町の中堅人

士として、一般の信望頗る厚き小泉喜左衛門氏は、明治七年八月廿四日を以て上尾久の舊家たる現地に生る。同家は父祖共に尾久町發展の基礎に培ひ、自治の功勞者として名望高き家門なりき。氏も亦夙に公共事に奔走し、先には同町熊野前に尾久郵便局の新設に奔走して認可を得、自ら局長として同方面の通信機關を完備して居住民に至大の便益を與へ、又多年町會議員として町治に盡瘁すること多大なるのみならず、同町庶民階級の金融機關たる同町信用組合の理事として尾久産業の振興に寄與する所亦多く、小學教育には卒先して兒童保護者會の創立に盡瘁し、村社八幡神社氏子總代、花藏院信徒總代等も代々之を勤めて敬神崇祖の誠を臻せり。眞に氏の如きは尾久町百年の樞機に參する元老と云ふべし。

瀧野川町消防委員　越部權十郎氏

（瀧野川町瀧野川一二四九番地）
（電話王子一〇六八番）

瀧野川谷津の名門として、前途有爲の材幹たる囑望を一身に鐘めつゝある越部權十郎氏は、明治十四年十二月十七日を以て嚴父已之助氏の長男に生る。同家は土地の素封として舊くより知られ、祖父までは代々名主を勤め、維新以降、西ヶ原瀧野川聯合村當時祖父權左衛門氏は戸長に擧げられて村治に盡したる功勞者なり。氏は鄕校を卒るや、家業の農事に精勵して嚴父を佐けしが、後大正十一年同所に於て漬物販賣業を創め、孜々として其經營に當り現に漬物同業組合理事に擧げられて斯界に重きを爲すに至れり。氏も亦父祖傳統の公共精神に厚く町内自治會たる谷津正和會副會長に推されて同會の牛耳を取り、昭和四年には瀧野川消防委員に擧げられて十萬町民の警備消防機關の改善充實に努力せり。氏は旅行を唯一の樂しみとし又頗る信仰の念厚く十七八歳頃より毎年丸三講社の先達株として富士登山をなせり。家庭にははな子夫人との間に一女を儲けらる。

王子町長　江口義一氏

（王子町豐島一二四五番地）
（電話王子三七二番）

本郡中唯一の工場地として急進的大發展を遂げ、今や各般の公共施設に一新面目を企劃しつゝある王子町政の首腦たる、江口義一氏は、明治九年五月六日を以て故淺次郎氏の長男に生る。同家は土地の舊門にして百萬長者たる素封たり。嚴父は豐島村、堀の内の船方村の最後の戸長として村治に竭し同廿年十二月准判任官九等となり同廿二年六月王子村助役に擧げられし功勞者なりき。氏は夙に學を好み研鑽修養大に勉め、三十三年十月には早くも王子村助役に推され、翌年五月收入役となり、卅七年以來引續き町議に當選を重ね、四十年十月郡會議員に擧げられ當選二期郡治に貢獻せり。大正十三年四月石井孫次郎町長の後を享けて町長に推され、爾來益々氏一流の眞骨頭を發揮して圓滿平和なる町政を招來し、人呼んで『哲學町長』の敬稱を以てし、其天眞爛漫にして虛心淡懷唯だ至誠を以て町政萬端に當る氏の氣象を賛稱す。昭和四年四月全會一致町長に再選され氏が豫て企劃せる道路網の完成、大下水道の實施に邁進し、町是百年の大事業を促進しつゝあり。その圓滿無碍の自治的手腕は擧町民の推重惜かざる所以なり。家庭には梅子夫人あり、王子女子青年團長を勤め、長男一夫氏は京華中學出身、次男二郎氏は外國語學校に學び、三男孝氏は小學校在學中なり。

前瀧野川町長　榎本初五郎氏

（瀧野川町上中里二七七番地）
（電話王子三一二番）

公心日月の如く昭々、裁斷水の如く正々、文化の瀧野川建設に當り、而かも時代の推移は模範町瀧野川にも流弊の浸蝕を餘儀なくせられ、頗る難治の町と化したるに拘らず、天才的手腕と過去千軍萬馬の間を來往せる體驗とを以て克く所信を斷行し、郡中第一の手腕ある町長として知られし、前瀧野川町長榎本初五郎氏は、上中里の人、明治十三年十月を以て嚴父伊三郎氏の三男に生る。夙に麟鳳の資あり、郁文中學を出で更に大學に進むべく高等學校入學試驗に登第するや、偶々病痾を得て素志を擲ち、實業に志し傍ら經書を研究すること多年、遺詣蘊蓄頗る深く、夙に鄕黨の畏敬する所たり。大正六年五月輿望を擔ふて町會議員に當選し、次で北豐島郡會議員に擧げられ、同十年町議に再選せらるゝと共に越部淺五郎町長の下に名譽助役に推され、同町長の勇退と共に町長に擧げられ、爾來引續き町長に當選すること三期、その半ばにして昭和五年七月勇退したる町治、郡政、公共自治の功勞者なり。此間氏は小學校を新設すること五校、道路下水改良計畫を樹て消防機關の充實、荒玉水道の完成等幾多の事業を遂行し名町長の聲名府下に洽ねく、昭和四年の町議改選には全國第一の高點を以て當選し今日に至る。尙嚴父は榎本家の養嗣子にして、出は磐城國平安藤對馬守の家臣として祐筆を勤めたる龜山貞時氏の長男にて、幼少同地の素封榎本喜右衛門氏の家に迎へられ、其儘養嗣子となれるなり。家庭にはさよ子夫人との間に二男一女あり、長男市太郎氏次男喜代次氏は共に京北中學出身にて、市太郎氏は既に夫人を迎へて家職の質商を營み既に令孫を儲く。

前東京府會議員　榎本鉦太郎氏

（瀧野川町瀧野川一九六一番地）

榎本氏は明治七年二月先代鉦太郎氏の嫡男に生る。同家は『桝家』と號し、累代種苗商を營める素封家なり。瀧野川町字三軒家の稱呼の起りは、其昔、氏の祖先桝屋孫八、越部半右衛門、榎本重左衛門の三軒が德川五代將軍綱吉時代より種子販賣店を創設せしに由ると云ふ。氏は幼時神童の稱あり、十五歳神田義塾に入り英、漢、數を專攻、明治二十九年嚴父の長逝により家督を相續して鉦太郎を襲名す。氏の公的生涯は二十八歳にして瀧野川町會議員に擧げられ、同三十四年より同四十五年五月まで其職にあり、更に大正二年より同十四年まで再選を重ねて町政に參與すること實に二十餘年の久しきに及ぶ。此間常議委員、學務委員等を兼任するの外、大正八年には北豐島郡會議員に當選し、初めて憲政派より推されて郡會議長に就任し同十二年郡制廢止まで名議長として知らる、同年九月東京府會議員選擧に府政の根本的革新を期し非政友を標榜して蹶起せるも大震災のため延期となり、翌年六月再び出馬して當選の榮冠を荷ひ、府政刷新に盡瘁せる所多し。曩に濟美會々長、第二小學校保護會々長、帝國種苗殖産會社專務取締役として活躍せる本町の元老として令名あり。

氏は、屢々瀧野川町長たらんことを懇懇せられしも、斷じて受諾せず、閑地にあつて悠々自適せらる。

瀧野川第五小學校保護者會々計

榎本巳之吉氏

（瀧野川町上中里二六六番地）

出でては帝國の干城として殊勳を奏し、入りては模範町民として公共精神の發揮に努め國民教育の向上、青年士氣の鼓舞に力めつゝある榎本巳之吉氏は明治十四年六月二日を以て瀧野川町上中里の素封家嚴父新吉氏の四男に生る。明治三十四年十二月近衛野砲兵第十四聯隊に入營、同三十七年除隊の年、日露の役起り同年五月十二日清國張家屯に上陸、金州南山の激戰に加はり同六月得利寺、七月蓋平、太平庄に八月首山堡、九月遼陽、十月沙河に轉戰、翌年二月より三月まで奉天の攻擊に參加して戰功を樹て、三十九年四月一日勳八等功七級に叙せられ金鵄勳章を授けらる。氏は歸鄉後榎本紋太郎家に迎へられ、養嗣子となり家職の農に精勵して青年の師表と仰がれ土地開發の爲に努力せり。曾て第五小學校新設の際には卒先共敷地を坪十錢を以て提供し、他の地主の間を斡旋して共新築を促進し、町民より感謝せられしは人の知る所なり、氏は現に第五小學校保護者會々計、上中里町會相談役として公共に盡瘁し、又曩には同小學校前に弓術の大道場を新設し、士氣を高調すると共に體育修養に資しつゝあり。家庭には鈴子夫人との間に嫡男榮三郎氏あり京北實業に學べり。

西ヶ原町正會第七區長

榎本金太郎氏

（瀧野川町西ヶ原九八番地）

西ヶ原の素封家にして溫厚謹直、公共自治に隱れたる功勞者と仰がるゝ榎本金太郎氏は、明治十七年九月を以て嚴父勘藏氏の長男に生る。嚴父は夙に町內公共に盡し、町內總代等に擧げられ功勞多かりしが、氏も亦曾て西ヶ原青年會の會計、西ヶ原若睦會幹事長、現に西ヶ原町正會第七區長として部落民の爲めに克く奔走倦む所なく、功名を貪らず着々として奉仕す。氏の家は植木栽培家として古くより知られ、盆栽、鉢梅などの作出の妙技に至つては斯界の巧者として都下に現はる。家庭はりよ子夫人との間に三男一女が擧げられ極めて圓滿幸福の團欒たり。

中里郵便局長

榎本卯三郎氏

（瀧野川町上中里二五四番地　電話王子八七〇番）

瀧野川町中里の高臺一帶は往時一面の菜圃麥壟たりしが、大正に入りて年と共に邸宅地と化し、聖學院中學校、女子聖學院を始め、多數有力者の來往により爲替、通信、貯金事務の必要多きを加へしも、同地に郵便局の設けなく、居住者は王子又は駒込局に赴かざる可らず、不便此上なきを見るや、現町會議員榎本喜右衛門氏當局の間に斡旋奔走の結果大正十年中里郵便局の認可を得、爾來民衆本位の執務振りを以て町民の稱賛を博し居れるが、昭和五年三月氏の退職と共に令弟卯三郎氏に其重職を譲る。

氏は、故榎本音五郎氏の次男にして明治三十六年を以て上中里の同邸に生る。郁文中學を出で更に專修大學理財科に學べる人、資性穩健着實にして輕兆なる現代青年とは全く其儔を異にし、稀に見るの青年紳士たり。嚴父音五郎氏は明治四十三年以來毎期町會議員に再選せられ、町治公共方面に獻身努力して町の重鎭と仰がれし德望家、又令兄喜右衛門氏は嚴父に優れる公共家にして昭和四年五月町會議員に當選と共に瀧野川町會副議長たるの榮職に在り、素封名門の出たる同氏は模範的郵便局長と稱すべきなり。

前瀧野川町會議員

榎本重次郎氏

（瀧野川町三軒家九三一番地）

人格手腕共に瀧野川部落の師表として仰がるゝ榎本重次郎氏は明治十六年九月四日を以て舊家たる榎本家に生まる。京北中學を經て今の中央大學の前身東京法學院に學び、日露戰役には補充兵として出征各地に轉戰して勳功を樹て勳八等白色桐葉章を授けらる。凱旋後は在鄉軍人分會の設立に盡力し、瀧野川班長たること多年、又町土木委員、第二小學校保護者會役員、濟美會幹事等に擧げられ、更に大正十四年には町會議員に當選して常議委員を兼ね、其の剛直の氣公正の進止を以て町會に重きをなせり。現に濟美會副會長として同地方の公共に奔命しつゝあり。

日本商會製綱所代表者

榎本菊次郎氏

（瀧野川町上中里一五五番地　電話王子一〇二六番）

威嚴ある長髯を撫し、千軍萬馬の間を往來せし老將軍の風丰あり、曾ては瀧野川町の收入役として令名ありたる吾が榎本菊次郎氏は、同町の舊門たり。

氏は慶應二年七月二十一日を以て本郡瀧野川町上中里二六八の自邸に生る。幼より學を好み又頻る覇氣に富み、武道の嗜み深く夙に柔道の師範として明治三十三年頃まで盛んに青年の士氣を鼓舞す。後輿望を負ふて瀧野川村收入役に推擧せられ、明治三十七年七月より同三十九年九月に至る間能く出納事務を樊理す。時恰も日露の役に際會し役場事務亦複雜多端を極む、氏は此間に在つて熱心共職責を盡したるを以て、同十四年平和克復と共に賞勳局より共功勞を表彰し銀盃壹個を賜はる。現在は雜貨店を營み、且つ南葛飾郡砂町本砂町一〇三二番地に製綱日本商會を經營して其代表者となり、業界に雄飛す。園碁を趣味とし悠々綽々として自適す。

高田町長

海老澤了之介氏

（高田町雜司ヶ谷七三二番地　電話牛込三三二一番）

新興高田町の更生に寄與し、今や其町尹として令名高き海老澤了之介氏は茨城縣の人、明治十四年七月七日を以て海老澤村に生る。同家は祖を海老澤武藏守に發し、連綿たる舊家にして、氏は水戸中學卒業後早大文學部哲學科を明治四十年に卒業し、東洋實科女學校教務主任となり、更に飛鳥山日本釀造協會の編輯主任に轉じ、又文藝大辭典の編纂に當り、一方日本女學會講義錄の發行等終始子女教育の爲に貢獻する所多大なりき。大正十年町民の輿望を擔ひ、高田町會議員に擧げられ、第二小學校保護者會長、町青年團長、中部町民會長、池袋幼稚園後援會長等を兼ねて公事に盡し、昭和四年十月には名譽助役に推され、更に中山町長の後任として名譽町長に擧げられ現在に至る。此間氏は小學校の增新築、高田町役場廳舍新築等の懸案を解決實現し、町公共事業には卒先私財を投じて奔走しつゝ

あり、信望牢固として氏の一身を巨人巨器とす。家庭には内助の功最も多き町議後藤筆五郎氏の令姉あり、富門積德の氏は將來府下政界の活躍又期して待つ可し。

江口茂吉氏

瀧野川第一尋常小學校々長

（瀧野川町瀧野川一七三九番地）

斷々たる教育方針、斷々たる教育理想を把持し、時代の大勢を察知して國家の將來に備ふべき人材養成の天職に在る吾が江口茂吉氏は、田端第一囊の長たる人なり。

氏は山形縣の人、明治二十四年二月二十五日東置賜郡吉野村大字小瀬六八七番地の舊家に生る。夙に教育に志し、大正三年三月二十八日東京青山師範學校本科第一部を卒業し、小學校本科正教員として同年三月三十一日瀧野川第二尋常小學校訓導に任ぜられ、同六年十月五日本郡尾久町尾久尋常高等小學校に轉じ翌七年十月七日瀧野川第一尋常小學校訓導兼校長に榮轉し現在に至る。此間同七年十月二十二日田端補習學校教諭兼校長に任ぜらる。氏は質實不拔の資性にして而かも用意周到教育事業に當り、その努力家たるは一般の認むる所にして父兄の信望厚く、校風亦大に振作せらる。

榎本喜右衛門氏

町會議員兼議長代理

（瀧野川上中里二五四番地）（電話王子八七〇番）

野川町會の副議長として廉潔剛直を以て聞え、町利民福のためには、一切を超越して邁進、初志の貫徹の爲には敢て一歩も讓らざるの慨ある吾が榎本喜右衛門氏は明二十三年十一月を以て故嚴父音五郎氏の長男として瀧野川町上中里の現在地に生る。夙に京北中學校を卒業し、專ら家職の農業に從事して嚴父を佐けしが、同四十三年徴兵に應じて近衛輜重大隊に入營、滿期除隊後は新に中里高臺に精白米商を開きて之れが經營に當り、同方面の進展地に通信機關なきを遺憾とし大正十年當局の間を往復奔走し、三等郵便局（無集配）設置の認可を得て其局長に擧げられ、居住者の便益を與へて感謝さるゝ外、幸先地代の安價提供を敢行して土地の殷盛を招來する等同町進展に貢獻する所絶大なり。又同年春、上中里青年會創立に努力し、其副會長に擧げられ又曩には瀧野川在鄕軍人分會に在つては多年第八班長たるの外、副分會長に擧げられ、更に兒童教育に熱心にして大正十年以來夏季臨海學校を組織して鎌倉海岸に兒童體育保健に盡す所多く、現に町立第五小學校後援會幹事たり。昭和四年五月には全町の輿望を擔ひて最大多數を以て町會議員に當選し、一躍町會副議長に推擧せられ、更に衛生委員、道路下水改良調査委員、財源調査委員等の要職をも兼ね、佐藤議長を補佐しつゝ複雜多難の町政機關を運行しつゝあり。同家は上中里に於ける名門素封にして嚴父は『町の大久保彦左衛門』と呼ばれし人にて町政の元老として重大問題の解決には翁の直言直裁を煩はさざるなく、明治四十三年より大正十四年まで町議に列し町政の樞機に參じて自治公共に貢獻せし功勞者なりき。此舊家富門に人となれる氏は、當代稀に見る高潔の人格者にして十萬町民より其前途を囑望さるゝ事至大なり。家庭にはきん子夫人との間に三男一女を擧げらる。

尙ほ最近には瀧野川町政が暗礁に乘り上げ累卵の危機に瀕せしを憂ひ、國井助役推擧に活躍、遂に成功して町政の安定を圖る。

榎本東三郎氏

上中里町會理事

（瀧野川町上中里三六六番地）（電話王子一〇七八番）

瀧野川町上中里の舊門素封を以て知られ、聰敏にして温厚の青年紳士として將來を囑望せられつゝある榎本東三郎氏は、明治三十八年十二月二十二日を以て上中里の名望家兼三郎氏の三男に生る。瀧野川小學校を出で郁文館中學校を卒へて父君の業を佐け、現在は良地主として來住者より敬慕せられ、土地開發のために寄與せる所また尠しとせず。此間氏は徴兵として輜卒に徴され二ヶ年の軍隊生活を了へたる模範在鄕軍人たり。公共精神に燃ゆる氏は共存共榮を眼目とし、能く部落の圓滿と平和とに努力し現に橋本三右衛門氏を會長とする上中里町會の理事として常に町内の衛生、警備、道路交通等の完備を期して活躍する新進の才能たり。同家は瀧野川の名町長と稱揚せられし前町長榎本初五郎氏の本家にして、父祖共に町公共のために貢獻したるは人の周知する所、其功勞亦多大なり。家庭には賢母の稱あるまつ子刀自の外、實兄牛政氏、次兄亦一氏、實婦はる子氏の外、てい子夫人との間に長息和夫君を儲け、頗る圓滿の團欒たり。春秋に富むの氏は將來同町の中堅人物として期待せらる。

榎本善三郎氏

瀧野川町衛生委員

（瀧野川町上中里一七五番地）（電話王子九一五番）

瀧野川町唯一の史跡にして鄕社たる平塚神社前、蟬坂下り口角の旭屋酒店主として又公共熱心家として令名ある榎本善三郎氏は、明治卅三年十二月六日上中里の舊家榎本鎭作氏の長男として現住地に生る。嚴父は農業を家職とし氏も亦之を佐けたりしが、大正十年徴兵として前町長榎本初五郎氏令息市太郎氏と共に習志野騎兵第十六聯隊に入營し同十二年上等兵に昇進滿期除隊するや直ちに京橋區新川の酒問屋山城屋に入りて、酒類商を見習ふこと二ケ年、之に關する一切の商才を習得し其體驗を以て前記に酒類雜貨店を開き、自ら注文を取り自ら配達をなすと云ふ努力振りにて、良品を廉價に提供するより益々好評を博し、商勢亦屋號通りに旭日昇天の繁榮を極めつゝあり。氏は又公共事に熱心にして、現に瀧野川町衛生委員たる外、在鄕軍人分會評議員、上中里高臺町會評議員等に擧げられ、常に殊勝けなる働きをなし、一般より推服されつゝあり。

江森浦吉氏

二ツ家食堂主

（巣鴨町上駒込、駒込驛前本店三〇番地支店二三番地）（電話小石川九八二一番）

巣鴨町上駒込省線電車駒込驛上の市電通りを左右に挿んで店舗を設け、大衆食堂として界隈の元祖であると同時に、最も安直で而かも最も多くの親しみを持ち、和洋支那料理の清新珍味を味はせて食通を喜ばせつゝある人氣店こそ、吾が『二つ家』である。同店は江森浦吉氏の獨力經營せるものにて、今日の成功を收むる迄には氏の苦心と努力とは想像以外のものありて立志傳中の一人者と呼ばれつゝある。氏は埼玉縣の人、明治十七年七月を以て彼の足袋の特産地行田在の二ツ家村に生る。生家は農を業とせしも氏は足袋製造業に從事せしが今より十五年前に上京して東京市電の一車掌となり、約三年間精勵克く勤めて模範車掌と稱され、飄然意を決して飲食店開

業を思ひ立ち、僅かに三十圓の資本を以て駒込驛に添ふ平家建の小店舗を借り受け、天婦羅惣菜を主としての一膳めし屋を始め、朝は未明に河岸の買出しに自轉車を飛ばし、又出前持から板前と總ゆる忍耐辛苦を嘗めて營々努力を續け、土地の發展と共に益々繁忙を加へて四年前には舊店の向側に一萬金を投じて堂々たる洋館の民衆食堂を手に入れ、專ら顧客本位でサービスをよくし、長女時子氏總支配人格となつて斡旋に努め、多年一日の如くコックとして腕を揮ふ『春さん』の技倆と相俟つて頗る評判よく、日夜千客萬來の繁昌を極めつつあり。とく子夫人は本店に在つて名物の蒲燒天婦羅黨を喜ばせ內助の功を積んでゐる。夫妻の間には三男四女が儲けられ何れも中學、小學校に通學中なり。

巢鴨中學、商業學校長文學博士　**遠藤隆吉氏**

（西巢鴨町宮仲二六三九番地　電話大塚九三二番）

財團法人巢鴨學園理事長として高遠なる理想の下に、新時代に活躍し得る人材敎育の爲め、渾身の熱血を注げる文學博士遠藤隆吉氏は、明治七年十月二日を以て群馬縣前橋市神明町に生れ、明治三十二年東京帝國大學文科を卒業し、四十年十一月には文學博士の學位を授與せられたる學界の權威たり。翌四十一年西巢鴨村に巢鴨學園を創設し、社會學研究所及び易學研究所を設け、更に出版部を設けて印刷所を兼營す。大正十一年巢鴨中學を創設し、翌年更に巢鴨商業學校を開設して學風大に揚がり、全國より笈を負ふて修學するもの年々增加する一方なり。昭和三年四月には專門學校令に依る巢鴨高等商業學校をも創立し時代要求の新人材を育英しつゝあり。此間氏は帝國中學講義錄、帝國實業講義錄、日本通信學校を經營して全國青年の敎養に當り、又大日本國粹全書刊行會を作り、硬敎育、日本人の精神的獨立及び東洋人文主義等を高唱し、高潔の人格德操を以て斯道の爲に寄與せらるゝ所偉大なり。

瀧野川町家屋調査委員　**青山多喜彌氏**

（瀧野川町西ヶ原八三八番地）

銅山王古河家の功勞者として又瀧野川町の矜有する典型的紳士の一人たる、青山多喜彌氏は、明治十四年六月を以て秋田縣鹿角郡に生る。嚴父庄藏氏は鑛山國秋田縣の產たるが爲めか天才的鑛脈透視の不可思議なる魔力を有せし人にて夙に足尾銅山其他に勤めて古河家の鑛山事業に偉大なる功勳を捧げられたるは斯界の以て美談とする所、氏も亦父君の緣故を以て乃父長逝後實兄と共に十二歲の時上京、日本橋區瀨戸物町の古河邸に入り、後古河鑛山に勤務する事となり爾來引續き各所の同家鑛山事業に全幅の努力を竭し、大正六年には再び上京して古河事務所に轉じ精勵恪勤、令名益々揚れるも、昭和四年七月に病を得て同家を退かる。此間氏は同家に勤續する事實に三十有六年間、父子二代相繼で忠勤を勵みたるは當代の美事として傳ふべき揷話たり。氏は土地の福利增進にも心を碎き、西ヶ原中和會の創立に努力し其副會長に擧げられ、又昨年四月家屋稅調査委員選擧に衆望を負ふて當選し、克く其任を全ふし、同年十一月には京橋區京橋際に店舗を設けて『ボンインキ』一手販賣を創めしが好評嘖々として隆昌を極む。家庭には、あい子夫人との間に令息榮喜氏あり、現に明治大學に通學中なり。

氏は古河男爵家と如上の如き深き關係あると同時に、西ヶ原の地は氏に緣故深き第二の鄕土として益々愛町自治の爲に健在を翼む。

東京府板橋稅務出張所長　**相原雅次氏**

（荏原郡荏原町中延七二〇番地）

世界的の名勝地、甲州御嶽の山紫水明の自然美に育てられ常に書畫を愛翫しつゝ、明晰の頭腦を以て稅務に鞅掌する人、是を相原惟次氏となす。

氏は明治二十二年四月十五日を以て山梨縣御嶽山下昇仙峽畔に呱々の聲を揚ぐ。靜岡中學を經て明治大學法科を卒業し、鐵道院時代新橋運輸事務所庶務課に奉職、其後明治四十五年山梨縣廳に勤續すること十三ヶ年、大正十三年九月東京府に轉任し庶務、稅務に勤め擢られて荏原稅務出張所長となり、昭和三年九月板橋稅務出張所長に榮轉して現在に至る。

全國第一の人口を有する北豐島郡の府稅徵收の府たる板橋出張所は、稅務吏員五十名の外臨時雇員十一名を擁する所、而かも敏腕の氏は部下と共に能く徵稅成績を擧げ、昭和四年度に於ては其收納高實に四百三十六萬餘圓に達せりと云ふ。

日暮里町會議員　**荒井政義氏**

（日暮里町渡邊町一〇四四番地　電話下谷三五二六番）

商は猶智識の戰場の如し。と又商は弘通を貴び業は博識を尙ぶ、と。凡そ日暮里町會議員中の論談風發の士として推すべきは、商才を以て鳴る吾が荒井政義氏を第一人者とすべし。

氏は埼玉縣の人、明治六年九月九日を以て大里郡久下村新川に生る。鄕里に在つては常に公共に盡し、鄕黨の畏敬する所たり。大正六年六月氏は現住地たる日暮里渡邊町に薪炭業を開き盛んに販路の擴張に努め、資金の豐富と品質の優越なる點に於て一躍業界の覇者となり、同十五年四月には東京薪炭同業組合日暮里支部長に擧げられ、尙同組合理事に推され、同業者のため熱心にその指導啓發に當る。昭和三年四月には東京薪炭同業組合副組合長の要職に推擧され更に同五年四月再選今日に至る。昭和四年五月普選第一次の町會議員選擧に擧げられ衞生委員を兼ね町政に參與して、圓熟老練の手腕を揮ふ。其談論商才より湧出し、又議場の至寶たり。

藍田醫院主　**藍田寬氏**

（王子町下十條一四六五番地　電話王子四五二一番）

苦學成功、立志傳中の刀圭家中一段出色の士に藍田寬氏あり以て青年學徒の軌範とすべき也。

氏は京都市の人、明治二十年四月嚴父宗欣氏の嫡男として生る。父君は今尙健在にして古稀を越ゆる四歲なりと。氏は弱冠ならざるに仁術家たらんとして上京醫家の代診を勤め月給拾六圓の內より研究書を購め、兩親に送金して老後を慰むる等苦學勤勉の狀聞くも奮然たらざるを得ず、而かも十七歲にして醫術前期豫備試驗に合格し、更に大正二年には醫術開業の國家試驗に當り二千名以上の受驗者中百名の合格者中に加はり見事登第したる俊才たり。後二十七歲の時群馬縣高崎市に開業せしが大正九年王子町の現地に來住開院して現

在に至り、得意とせる内科、産科の治療に於て非常なる信頼を博し現に王子町第三小學校開設より校醫として貢獻し、王子教育會評議員に擧げらる。尙氏は篤學にして昭和四年六月より帝大稻田内科、鹽田外科にて學究を怠らず。資性極めて溫厚深切家庭に登志之夫人との間に四男あり。謠曲に堪能、文藝、讀書を趣味とす。

岩淵町書記

秋田末吉氏

（岩淵町岩淵本宿四五八番地）

明治四十三年以來府下町村役場に在りて自治政に貢獻せる人是れを秋田末吉氏となす。

氏は岐阜縣の人、明治六年一月十七日を以て大野郡高山町に生る。夙に高山小學校を卒業し進んで岐阜縣立斐太中學校に入り、卒業と共に更に金澤第四高等學校に入學せしが中途家事上の都合により退學の止むなきに至る。其後明治四十三年四月上京、王子町役場書記として職を奉じ、多年同町役場に在りて精勵恪勤令名あり、大正五年一月退職して同年九月本郡石神井村役場書記に任じ同十年四月まで勤續し、同十一年五月には岩淵町役場書記に轉じて同十五年八月まで勤續し、昭和二年十二月再び王子町書記として就任し同四年九月退職と同時に岩淵町に再び赴任し庶務課、戸籍課、兵事課の各課長を兼任し老練熟達の手腕を以て町政の務を鞅掌し令名嘖々たり。

東京府會議員
瀧野川町長

有馬淺雄氏

（瀧野川町西ヶ原九〇七
電話王子七三三番）

有馬淺雄氏は四十一年四月瀧野川村役場に入る、村長保坂平三郎氏の寵遇を受け、道路下水地目變換等には、出勤時間前に自ら測量すると云ふ精勵にて全村の地理情勢を腦裡に納め熱心と努力と忍耐を以て活動を續けたる忍苦實に十八年間に及ぶ。野木隆歡町長は大正五年十一月氏を有給助役に推し、大正九年十一月再選して名譽助役に就任、大正十四年町議員改選に當選し助役を勇退す、而して東京府會議員に當選すること二回府參事會員たりし外、稅制委員會理事、警務委員其他の要職に擧げられ又先に東京府消防協會設立並に大日本消防協會設立を首唱實現して理事となり、瀧野川消防組頭、瀧野川町會議員、同學務委員を兼ねる外帝都教育會評議員、北豐島郡教育會理事として教育の刷新向上に盡し、稅務の權威として五郡七十ヶ町村稅務協議會を組織して會長となり府民負擔の均衡輕減に努力し又府會に於て現に稅制委員長に擧げられ而して昭和六年一月廿七日瀧野川町長に當選し澁滯せる町政の進捗に努力し道路下水改良の新規事業に着手と共に一方社會事業協會の設立に盡し、又谷田川改修に熱誠努力遂に府費九十二萬圓を以て改修に決す等功勞多大なり。

尾久町會議員

有田萬次郎氏

（尾久町下尾久二九五番地）

有田式無藥消火噴霧器の發明家として知られ、又文墨風流の才子として聞ゆる人是を煙雨莊柳蛙有田萬次郎氏となす。

氏は明治十四年二月六日を以て東京市本郷區富士前町二十四番地に生る。氏の家は同區の吳服商として名高く、氏も亦中學校を卒ゆるや父を扶けて家業に從ひ商勢大に隆盛に赴く、後氏は自ら有田式無藥消火噴霧器を發明し、各所に於て實地應用の結果好評を博せしを以て、之れが製造販賣の業に變り、大に販路を擴張し國益を圖れり。大正十一年八月尾久町の現住所に來住し現在に至る。氏は新發展地には土地家屋管理業の必要なるを感じ、現に之れを營むの外公共事業に盡力して衆望を負ひ昭和四年五月には同町會議員に當選し、豐島病院組合會議員を兼ぬ。又赤土尋常小學校保護者會副會長として兒童奬勵に竭し、東京電話相互組合尾久支店長たり。政治を好み政友會常議員に擧げられ又風流に遊び、俳句に造詣深く柳蛙と號す。句あり。白菊や黃菊に交る野菊かな。

長崎町名譽助役

足立銀次郎氏

（長崎町椎名町一九五一番地）

由緒正しき家門を擁し、父祖相繼で長崎町開發の爲に貢獻し聲望赫々として全郡に聞ゆる足立銀次郎氏は、明治二十三年十一月二十日を以て先代三次郎氏の長男に生る。同家は土地切つての舊家にして始祖佐右衛門氏に發し、代を累ぬること十一世、當主銀次郎氏に至る。嚴父三次郎氏は多年村會議員を經て助役たること實に八年、自治に捧げたる犧牲的奉仕は町民の共に感謝する所なり。氏は父君の後を承けて町會議員に擧げられ、又在鄕軍人分會の名會長として令名高く、學務委員、耕地整理組合副組長、青年團、青年訓所練各相談役、第一小學校保護者會長、在鄕軍人北豐島聯合分會評議員等を兼ね常に席の溫る時なく昭和四年十二月二十日名譽助役に擧げられて今日に至る。家庭にはふみ子夫人との間に一男三女を擧ぐ。

長崎町收入役

足立平藏氏

（長崎町大和田二一七七番地）

長崎町の名出納吏として再選重任三期に亘り、父祖と共に同町自治政の功勞者たる足立平藏氏は、明治二十七年七月二十一日を以て同町の舊家長右衛門氏の長男に生る。生家は代々農を業とし、土地の素封として聞え、祖父鍋五郎氏は町村制施行以來村會議員たること四期、又嚴父も同村會議員たること二期に涉り村治に盡して功勞多大の人なりき。氏は青年時代より町の中堅人物として町發展に努力し、現に大和町會長、在鄕軍人分會長たる外、耕地整理組合、衞生組合、町農會、小學校保護者會の各會計、青年訓練所、町青年團の各相談役を勤め、大正十一年五月十八日以來收入役として町財政のため奮鬪しつゝあり。

瀧野川町會議員

淺賀竹之助氏

（瀧野川町田端二九七番地
電話小石川六二一〇番）

町の公人として純眞無垢、一私人としては積善積德の家長として仰がるゝ淺賀竹之助氏は明治八年九月を以て田端の素封家にして舊門たる金次郎氏の長男に生る。同家は遠く元錄三年頃より顯はれ、當主は十一代目に當る。嚴父は嘉永三年九月に生れ、明治四年村會議員に擧げられ田端分教場設置等に奔走して功勞多く同三十六年七

月病を以て退き大正十一年五月七十四歳を以て逝く。氏も夙に公事に盡し先には公友會幹事、第一小學校保護者會幹事、町土木委員、八幡神社建築委員をも勤めしが、同十四年五月衆望を負ふて町會議員に當選し、土木委員を兼ね更に昭和四年再選消防委員財源調査委員を兼ねて今日に至る。此の間氏は田端第一區劃整理組合の幹部として非常なる努力を捧けて其完成に寄與する所大なるものありき。家庭にはまさ子夫人及び母堂健在し、長女たか子氏は府立第一高女及び女子高等師範專攻科を出で、既に他に嫁し三女松子氏は佐藤高等女學校より女子美術學校を昭和三年卒業せる才媛なり。

元瀧野川町會議員　**淺賀銓之助氏**
（瀧野川町田端三〇五番地）

文化の瀧野川建設に寄與し人格手腕の人として知らるゝ淺賀銓之助氏は、明治五年四月を以て、前代議士淺賀長兵衛氏の祖父喜右衛門氏の三男に生る。嚴父は維新前後名主、戸長を經て町村制施行後村長として同町開發施設に貢獻する所多大、氏も亦明治三十三年六月一青年の身を以て瀧野川町名譽助役に擧げられ町政事務の一新を圖れり。同三十九年補缺選擧に町會議員に當選し爾來大正二年まで其職に在て町治に盡して功績を擧ぐ。勇退後は經濟界に勇飛し、現在は悠々趣味の生活に自適す。家庭には春子夫人との間に四男一女を擧け、長男連平氏は東京商工學校を卒業し、次男俊郎氏、三男純一氏は共に京北商業學校に在り、長女つぎ子氏は大妻技藝女學校を卒業して家庭に在り四男勇君は第一小學校在學中なり。乞ふ名門淺賀家一門の爲めに自愛健在たれ。

前瀧野川町學務委員　**淺香民三郎氏**
（瀧野川町田端一三八番地）

氏は明治元年十一月三十日を以て嚴父才次郎氏の長男に生る。嚴父は明治二十二年町村制實施當時より村會議員に擧げられ、同二十七年共任期中收入役に推され、同三十年四月まで出納の事務を執掌して令名あり。氏も亦大正二年選ばれて町會議員となり、同六年勇退の後は町學務委員たること多年、第一小學校保護者會役員、先には公友會幹事、村社八幡神社總代等として不斷の力を公共に盡され現に引續き神社總代たる外早和會顧問たり。家庭にはかの子夫人との間に二男一女が儲けられ、長男光太郎氏は、明治二十九年十日に生れ、早稲田大學出身後、近衛歩兵第四聯隊に入營、同十一年三月見習主計として除隊、同十三年三等主計に任官從八位に叙せられ、多年貴族院委員課に勤務せるも今は之を辭す、又町在鄕軍人分會副長たること多年、其人格識見に於て聲望高く既に町名譽助役に擢せらるゝの人材にして將來の飛躍や思ふべきなり。次男義周氏は郁文中學を卒業し、靜枝氏は高女通學中なり。

瀧野川町會議員　**淺香銀治郎氏**
（瀧野川町田端一五〇番地
電話小石川五〇五六番）

淺香氏は明治二十一年の出生、夙に明治大學法科を修め、世襲の農事に從ふ、大正六年町會議員に擧げらる、其の論議の正皆、質問の合理は多くの追隨を許さず年少議員として卓絶の氣を吐けり、之れ其俊敏な才器と學殖とに由つて然らしむるものたる可し、大正十四年の町議戰に失脚せしも昭和四年に於ては捲土重來の勢ひを以て當選再び氣を吐くに至る、現議員の外常議委員、家屋調査委員を兼ね、町內會にあつては先に中田端相和會を創立し會長に推されて幾多の功績を遺して昨春勇退し又は村社八幡社の建築委員として力を致し、公友會、兒童護會の役員として第二國民の保護涵養に盡す等公共の爲めに多大の奉仕者たり。身を處するや虛榮と衒氣に陷らず堅く正しく明るきを以て本領とす、誠に好個の紳士たり。

日暮里第四尋常小學校訓導　**淺川乙松氏**
（尾久町下尾久一一七六番地）

新進の教育家として令名嘖々前途に至大の期待を以て囑目さるゝ吾が淺川乙松氏は、現に日暮里第四尋常小學校首席訓導の要職に在り。

氏は下野の產、明治二十七年十一月十三日を以て栃木縣芳賀郡物部村高田五番地に生る。夙に小學校教員を志して上京、東京府青山師範學校に明治四十四年四月を以て入學し、大正五年三月同校本科一部を卒業し直ちに東京市立六間堀尋常小學校訓導に任ぜられ、同年六月には徵兵として六週間現役を勤む。大正八年四月には同六間堀小學附設の尋常夜學校訓導を兼職する等精勵恪勤功績大なるものありしが、大正十二年九月の大震火災によりて夜學尋常小學校の中止と共に同年十月その兼職を免ぜらる。翌十三年九月氏は東京市立八名川尋常小學校訓導に榮轉し、昭和四年四月同校夜學尋常小學校訓導を兼任する等稀れなる勤勉家たり。而して昭和五年四月三十日本郡日暮里第四尋常小學校訓導に榮轉、以て今日に至る。

農事試驗場長農學博士　**安藤廣太郎氏**
（瀧野川西ヶ原農事試驗場官舍
電話小石川四〇三九番）

本邦農學界の泰斗として三十有五年間終始一貫農事改良に貢獻し其功績絶大なる、從三位勳二等農學博士安藤廣太郎氏は、兵庫縣の人、明治四年八月を以て安藤久治郎氏の長男として鄕里に生る。明治二十八年帝國大學農科を卒業し後農商務省臨時產業調査局技師として奉職し、次で氏が十八歳の時今より三十六年前に、農事試驗場技師として、西ヶ原試驗場長兼九州大學教授に任じ、爾來引續き其職に在りて全人生を農業文獻に捧げ農業種苗の改良、肥料及び土壤の試驗、農具の改善、栽培科學の研究應用等極めて幼稚なりし我が國の農業をして今日あらしむるの基礎を作り、農立國の大本に培ひたる功勞實に偉大なるものあり。現在は帝大教授を兼ね依然場長たり。博士の同試驗場に入りし頭初時代は、駒込妙義坂より西ヶ原に渉る一帶は殆んど茶園にして、瀧野川町役場脇の暗闇坂邊は雜草生ひ被りて路狹く全くの寂寥たる農村にて、農事試驗場たるに恰適たりしも、現在の如く市電馳り、車馬輻輳の狀を見ては實に隔世の觀ありと。同試驗場長は多年現帝大總長古在自直博士たりしが、十年前共後任として就任今日に至れるなり。農界の權威者宿たる兩博士を有する西ヶ原は以て全國民に周知せられ又世界の文獻史上に矜を有す。

淺賀長兵衛氏

元衆議院議員

（瀧野川町田端三二一番地　電話小石川一四三一番）

帝國の選良として議政壇上に送らるゝこと二回、而かも大正十三年には全國中第二位の最高點を以て當選し、威名政界を轟かし當時の憲政會議員中の幹部として重きをなせる淺賀長兵衛氏は、明治十六年七月を以て瀧野川町の名門淺賀鋭次郎氏の長男に生る。同家は代々名主を勤め、氏の祖父喜右衛門氏亦其職に在り、維新後は副戸長となり、明治十二年町村制實施と共に第一次の村長に擧げられ、引續き同三十一年まで村議たる功勞者にして嚴父亦多年村議として名望高かりき。氏は順天中學より、第四高等學校を經て東京帝國大學法科獨法科に入り、同四十三年卒業して一時辯護士の業務を開きしも、大正四年東京府會議員に當選、同八年三度府議に當選し同年五月の衆議院議員選擧に出馬して當選の榮冠を擔ひ、更に同十三年再び立法府に送られ我國憲政のため奮戰せしが、若槻内閣の成るや憲政常道論を高調して其政黨政治の逆轉に憤慨し、遂に同黨を脱退し國民の政治道德に一大刺戟を與へ爾來閑地に英氣を養ひつゝありしが、昭和五年二月再び民政黨公認候補として逐鹿場裡に勇姿を現はし、氏一流の抱負經綸を以て健闘せしも、時利あらざりしは一般の痛惜する所たり。氏の如き高潔至純の典型的紳士は寧ろ現代の至寶として更に一段の自重と自愛を薦め再起を祈るや切なり。

近時、世道人心頽廢、感恩報謝の念は社會人の腦裡を去り、過去に於ける國家の功勞者を棄て顧みざるは、實に慨歎すべし。吾人は氏が昨今悟道的生活に入り、書道に親しむを聞き、熱涙滂沱たり。

荒井新之助氏

前南千住町會議長
家屋調査委員

（南千住町通新町七二番地　電話淺草三九五二番）

荒井氏は埼玉縣北葛飾郡上高野村の人にして明治六年七月の生れ、長じて帝都に出で、神田駿河臺成立學舍に學び更に當時の東京高等商業に遊ぶ、爾來南千住町に居を構へ、精白米業を營み堅實の歩武を實業界に進めて斯業界の重鎮を以て目さる、大正三年東京白米商同業組合部長として評議員を兼ね前後七ヶ年熱心業界の發展に貢獻され、更に大正六年五月南千住町々會議員に當選、爾來三期に及び、此間學務委員其他の常設委員たるのみならず、大正八年十月北豐島郡會議員に擧げられ、郡制掉尾の活躍をなす、又町内團體の親友會副會長として克く公共事業に盡瘁し、常に私財を投じて土地の繁榮興隆に努力さる、今や南千住町有力者中の巨鎭たり。又町政に參與しては公平正情を以て終始一貫し、初代町會議長としては名議長として稱せられたり、然るに何んぞ圖らん昭和四年の改選に當つて失脚せる事は町としての損失たり、併し昨春家調委員選擧に當るや易々として當選し依然として至情を盡して奮勵しつゝあるは多とす可きなり。

家庭には、とき子夫人との間に府立第一高等女學校出身の菊代孃と誠二君九歳となり、夫人は教育家として多年育英界に盡されし賢婦人たり。

佐藤愛藏氏

王子町收入役

（王子町王子一二七一番地）

佐藤氏は明治十九年王子町に生る、浦和中學校を卒業し後王子町書記に就職し格勤精勵、時の町長大谷氏に認められ一躍收入役に擧げらる、爾來良吏として稱され大正六年より現在迄在職四期に及ぶ此の十有餘年間町長の交迭五回に及ぶも未だ餘沫の氏に及ばざるは其の執務に缺點なきと頭腦明晰にして事に晦澁なきと性情廉潔にして暗明表裏の讒道を涉らず一つに至誠と公平とに身を處する所以たり、人をして良收入役と稱せしむる事茲にあり、又以て王子八萬町民の福利と云ふ可し。

佐藤正氏

日暮里町會議員

（日暮里町冠新道六九六番地　電話下谷七一九三番）

身を教育家に起し、更に法律を最高學府に修め、一轉實業界に入り而も社會公共に飛躍する新人、是れを佐藤正氏となす。

氏は福島縣の人、明治二十二年九月十日を以て伊達郡小國村の舊家に生る。初め育英家を志し福島師範に入り明治四十年業を卒へて小學校に職を奉じだるも中途感ずる處ありて職を退き、同四十五年上京明治大學法科に入り卒業と同時に栃木縣警察部に官仕す、後大正六年實業界に轉じ現在の牛乳商に着目し下谷區内に開業せり。同十二年の大震火災に遭ひて現住所に移轉開業し現在に至る。氏は夙に政治を好み辯舌を以て鳴る、即ち北豐城北青年雄辯會、自治町政研究會、日盛青年團等のリーダーとして令名嘖々たる外、公民自治會府町調査部、昭和町會、冠町衛生組合等の幹部として活動し、昭和四年五月の町議改選には自治政と政黨とを混同すべきものに非ずとて民政黨日暮里町支部常任幹事を辭して出馬し當選の榮を擔ふ、其公明正大の主張全く敬仰すべし。現に土木委員、警備委員を兼ね、職業紹介所委員たり。家業とする所の牛乳は一般需要家の歡迎亦頗る多しと。

佐藤寛太郎氏

家屋稅調査委員
石鹸製造

（日暮里町谷中本一二二番地　電話下谷二四一一番）

元日暮里町會議員として令名鄕閭に洽ねく、自治公共に盡して功績枚擧に遑なき吾が佐藤寛太郎氏は、實業家として石鹸製造業界の巨頭たり。

氏は茨城縣の人、明治十二年七月二十九日稻荷を以て知られたる西茨城郡笠間町に生る鄕校を出でゝ十八歳の時大いに期するところあつて上京、已來實業方面の研鑽に苦心し、機を圖り大正二年現住地日暮里谷中本に轉住して石鹸製造の業を創む。氏は小學教育の奬勵に熱心にして大正八年には、日暮重第四小學校翼賛會役員に擧げられ會計の要職を帶び更に幹事長に推擧せられて現在に及べり。大正十年輿望を擔ひて町會議員に當選し。町治に貢獻する所多く、大正十三年以來谷中本衛生組合副組合長に就任して町民の保健衛生に盡し

又昭和五年には推されて家屋稅調査委員に當選現在に至る。氏の製造に係る石鹼は品質の純精を以て市場に著はる。

瀧野川町校醫　**佐倉鐵馬氏**
（瀧野川町西ケ原四〇八番地）

氏は福島縣の人、明治二十三年十二月を以て安達郡二本松町に生る。同家は二本松藩士として聞えたる家柄にして、大正七年七月日本醫學專門學校を卒業し翌八年六月醫術開業試驗に登第し、同年七月開業免許狀を得て直ちに神田區淡路町病院池田博士の助手として實地に研鑽する所あり、更に東洋紡績株式會社王子工場醫務課に招聘せられて診療に從事し、同十一年五月退職と同時に現住地に開業專ら小兒科、內科を得意として一般患家の信賴を博しつゝあり、尙ほ昨秋擧げられて瀧野川町校醫となり、第八小學校兒童のため熱心盡瘁しつゝあり。

前三河島町會議員　**佐久間健次郎氏**
（三河島町町屋八十六番地）

今を距る四百餘年天文年間三河島町の町屋に來住して茫々たる武藏野の一角を拓き、今日の殷賑を招來せしめたる佐久間家の當主、佐久間健次郎氏は明治十年九月一日を以て故新太郎氏の長男に生る同家は維新前迄累代杢右衞門を名乘り家系正しき名門にして、父祖共に同町自治公共に盡瘁せる功勞者なりき。明治四十四年嚴父の逝去と共に家督を相續し、大正十年五月には輿望を擔ふて町會議員に當選し大に町政に努力せり。爾來衛生委員、町屋町正會長、峽田第四小學校後援會幹事等に推され又敬神崇祖の念頗る厚く伊勢大廟參拜會三河島分會長として活躍せり。家に房子夫人との間に一男一女を擧ぐ。

日暮里第一尋常小學校訓導　**佐々木良治氏**
（王子町上十條八五〇番地）

修身、法制經濟の中等教員資格を有し、而かも熱心なる小學教育家として甘じ、今や首席訓導として至大の囑望を享くる人、是れを佐々木良治氏となす。

氏は岩手縣の人、明治三十一年十二月十四日を以て膽澤郡前澤町大字白鳥子清水二六番地に生る。氏は教育家を希望し大正五年五月二十三日岩手縣師範學校第二種講習科を修了し、同月三十一日膽澤郡小山尋常高等小學校訓導となり、同七年三月三十一日師範入學のため休職となりて翌年三月三十一日岩手縣師範學校本科第二部を卒業し直ちに同郡水澤尋常高等小學校訓導に任じ、其年八月弘前第三十一聯隊に入隊し九月除隊せり。同十年十一月二十五日東京府へ出向を命ぜられ、同年十二月三日本郡日暮里第一尋常小學校訓導として進出、同十三年三月には巢鴨町仰高尋常高等小學校訓導に榮轉更に昭和二年二月には巢鴨青年訓練所指導員に擧げらるゝに至る。而して昭和五年四月十九日日暮里第一尋常小學校訓導に榮轉し首席に在りて教務を鞅掌す。

三河島齋藤材木店主　**齋藤才次郎氏**
（三河島町本町通二九九九番地）

三河島町に於ける材木店の元祖として良材廉價を以て聲價を擧げたる齋藤才次郎氏は、明治十三年九月を以て南足立郡梅島村根原に生る。二十二歲荏原郡池上町の叔父の木材店に見習ふこと二年、淺草に出て青果物店を開き、更に上州新田郡に赴きて石材採掘事業を起せしが時利あらず、一轉して最初の木材商となり三河島の現地に開業せしは明治四十四年なりき、爾來孜々として奮勵し、今日の隆昌を築き上げ、公共事にも寄與する所多く商工會の設立と共に役員に擧げられ、鄕社素盞雄神社氏子總代、峽田小學校後援會役員等として盡力せり、たみ子夫人との間に三男五女の子福者たり。

王子町會議員　**齋藤銀藏氏**
（王子町豐島一〇三九番地電話王子七五八番）

町議たること二期、少壯有爲の士として知らるゝ齋藤銀藏氏は、明治三十一年五月五日を以て豐島の舊門鶴藏氏の三男に生る。氏は明治大學、附屬商業學校出身の新進俊幹にして、嚴父の開ける白米酒醬油、荒物雜貨店『鶴屋』を相續繼承し、又克く土地の發展に盡し、大正十三年五月王子町會議員に擧げられ、昭和二年再選せられて今日に至る。今や衛生委員、火防委員、王子町青年團副團長、東京府方面委員等幾多の要職を兼ね、又馬場親交會長として熱心に奔走しつゝあり。家には母堂米子刀自、蝶子夫人あり、謠曲旅行を好愛すと。

新進氣鋭、既に町議たる事二期の氏は將來町理事者の一人として囑目さるゝ才物たり。

內國社印刷所主　**齋藤夏右衞門氏**
（王子町新道一二七一番地電話王子九七三番）

立志傳中の人として又印刷業界の成功者として吾が內國社主齋藤夏右衞門氏を推す。

氏は明治十九年五月二十五日を以て埼玉縣北足立郡中丸村に正右衞門氏の次男として生る。年少橫濱の杉本家に迎へられて養嗣子となり、橫濱中學在學中都合により同家を離緣となりて上京、爾來正則英語學校、岩倉鐵道學校等に入りて苦學力行大に勉め、明治四十四年四月飛鳥山前の現在府道の新石神井川橋角に全國新聞賣捌店を開業し翌年王子新道に移轉と共に內國社印刷所を起し、其隆昌を來すや新聞賣捌業を廢して專心印刷業に力を注ぎ、遂に今日の繁榮を見るに至る。

熾なる氏の公共心は夙に社會一般より認められて、王子町方面委員として齋藤夏右衞門の名を列ね、救護扶助の任を竭し襄には町衞生委員、王子大門町總代、王子新道協力會々長等に擧げられ。同業の北豐島印刷同業組合王子支部長たり。夫人うつき子氏との間に三男三女あり長男襲也君は郡立第六中學五年生にして他は王子小學在學中なり。

瀧野川町校醫　齋藤連氏
（瀧野川町田端三一四番地）

氏は埼玉縣の人、明治十三年十一月を以て大里郡市田村に生る。夙に醫學に志し明治四十三年四月日本醫學校を卒業し同四十四年醫術開業後期試驗に及第し同四十五年五月開業實地試驗に登第し、大正元年九月には進んで東京帝國大學醫科選科に入り、同二年九月卒業醫學得業士となり、更に同年十二月帝大醫科國家醫學講習會に入りて之を修了、同三年九月現住地に開業して現在に至る。此間氏は昭和二年一月より一ヶ年間日本醫科大學に於て最新醫學を攻究せる篤學の士にして其優秀老練の技と懇切とは一般の信頼頗る厚く、昭和五年の秋瀧野川町校醫となり第一小學校兒童の保健衛生に貢獻しつゝあり。

坂本醫院主　坂本禎一氏
（王子町大門一三一一番地）

王子町の小兒科專門醫と問へば直ちに權現前の坂本醫院と答ふるまで盛名を遠近に謳はるゝ坂本禎一國手は、栃木縣の人明治十二年一月四日芳賀郡長沼村古山に故謙吾氏の長男として生る。生家は累代醫を業とし名主をも勤めて名門たり、氏は明治三十八年七月東京醫學專門學校を卒業し、同四十年十月開業試驗に登第と共に東京砲兵工廠內診療所に聘されて實地に研鑽し、同四十四年八月退職して現地に開業今日に至る。氏は醫を以て天職とし更に脇目も觸れず專心せるを以て患家の信頼最も篤し、現在醫院は府道の改修と共に新名所音無橋畔に當り頗る交通の便よし。家庭には夫人早逝され一男五女あり。

前尾久町會議員　櫻井廣直氏
（尾久町下尾久九九一番地）

セルロイド加工々業に發明する所多く、又尾久町自治の貢獻者として知られたる櫻井廣吉氏は明治二十一年一月を以て長野縣小縣郡鹽川村の嚴父農蠶家佐四郎氏の長男に生る。二十三歳の時上京、セルロイド工業の將來有望なるを達觀して之れが加工業に從ひて大に發明する所あり、其保存法並に加工法に於て特許權を得たるもの數種に及び、大正七年聘せられて千代田工業株式會社に入り、同社尾久工場技師長に就任して其業績に寄與する所多大、後獨力工場を起して現時の隆盛を見るに至る。大正十四年五月衆望を負ふて尾久町會議員に當選し智囊の士として重きをなす。現に東京工場協會尾久支部副支部長たる、外下尾久協和會顧問、安全會副會長等に擧げられて盡瘁し町民の敬仰頗る厚し。

澤田米穀問屋主　澤田龜之助氏
（瀧野川町田端一三三番地）
（電話小石川六八五二番）

學を西ヶ原澤田學校に修む、明治三十八年徴兵に應じて近衛砲兵聯隊に入營、養父彦太郎氏を佐けて農業に從ひ、精勵努力養父母に孝養を怠らず、全く模範青年模範在鄉軍人として賞賜せられる。三十一歳の時、土地の發展を見越して適當の營業を起さんと、研究調査の結果米穀商の極めて堅實なると、又從來農家として其品質の良否鑑識に長ぜる所より、精米機を購入して營業を開始し、着々販路を擴張して今日の隆盛を招徠せしむ。

氏が何人にも押しも押されもせぬ斯業界の地歩を獲得したるは、資本の最も豐富なる點にて、原料取引上に權威と底力を把持せるが爲めと良品を薄利多賣し得る所以である。尙ほ氏は大正五年東京白米同業組合北豐島郡第十七部長に擧げられて、斯業界の向上發展の爲に盡し、又町內に在つては田端交友會教育委員に擧げられ自治公共に貢獻する所頗る多し。

櫻田療養院長　櫻田圭政氏
（板橋町新道六六六番地）
（電話板橋二一五八番）

櫻田氏は滋賀縣高島郡今津町字梅原の人、明治十一年八月屈指の素封家勇太郎氏の次男に生る、明治三十一年大阪に出で大阪醫學專門學校に學び、卒業後外科專攻の目的を以て木鄉順天堂病院に入り醫務に從事すること二ヶ年、更に下谷區練塀町東京田代病院に移り田代博士に從て整形外科の蘊奧を究め、實地臨床の上に發見する所多大、後更に東京帝國大學醫科に入り病理學國家醫學を專攻し、學術共に練達の手腕を以て明治四十年木郡板橋町共立病院に來往し、櫻田醫院と改稱し、大いに手腕を現はし、本郡中氏の聲名を知らざるもの無きに至る、內科、外科往くとして可ならざるなく、氏の爲に濟生起死せるもの幾許なるを知らず、寛宏磊落殊に金錢に恬淡の氏は眞の仁術家として一般の信望極めて厚く、患者常に門前市を成すの隆運に向ひ、大正十二年の震災前現在所たる板橋新道に病院樣式の大規模なる建造物を買收し櫻田療養院として移轉開業し、爾來內容の改築、新療設備の完成を圖りレントゲン室、物理療法室、外科手術室、藥湯溫浴室などの外三十室に近き病室をも完備して今日に至る。

尙ほ氏は性來政治を好み、大正九年には鄉里滋賀縣より憲政會公認として立候補し、又板橋町會議員たること三期御大典に際し町は自治功勞者として表彰狀並金盃を贈る洵に榮譽と云ふ可し。

西巢鴨町長　佐々木貞七氏
（西巢鴨町大字巢鴨二、七五七番地）

多年檢非違使の長として大連、奉天にまで大任を帶び、能く職責を竭して令名赫々、時の長官伊澤多喜男氏の寵兒として俊敏の手腕を揮ひ、淺草界隈の魔窟兒の心膽を寒からしめ、又粉亂贓の如かりし西巢鴨町政に快刀一閃、甦生回春の自治體に導きし佐々木貞七氏は、新潟縣の人、慶應二年九月二十五日を以て中蒲原郡龜田町に生れ、明治二十五年八月山梨縣巡査を官界への振出とし、同三十一年警部に昇進し、同縣衛生課長、保安係長を兼任、三十六年石川縣警視に任ぜられ、同四十年關東都督府警視に轉じ、大連民政署庶務課長、奉天警務署長を兼任、大正三年警視廳警視に轉じ、久松、象潟錦町の各署長を經て、監察官に補せられ、大正十二年三月依願退職し、同年六月二十三日、前町長西山氏辭任後町政極度に腐敗墮落し

遂に事務管掌を置かれし際、氏は有給町長として擧げられ、多年の積弊を一炬に消解せしめ、整然町是の確立を見るに至らしむ。以て其非凡の才能たるを知るべし。昭和二年六月二十二日滿期退職後約一ヶ年は田中初太郎氏町長たりしが同四年二月二十六日辭任と同時に再び擧げられて町長となり、絶倫なる精力を以て揮ひ、現に北豐島郡町村長會長たる他、荒玉水道町村組合、豐島病院組合常設委員を兼ねて令名嘖々たり。昭和五年の國勢調査の結果日本全國中第二位の大町となり、同年十二月町議改選に當り議員定數を三十三名に增加したるも同町を嚆矢とす。氏の時代の尖端に活躍する手腕や他に匹儔を見ざる所なり。

三河島町會議員

坂井龜之進氏

（三河島町三河島二六七〇番地　電話淺草五一一七番）

坂井自働車商會主、三之輪タクシーの經營者として城北の運輸交通に多大の貢獻をなしつゝある坂井龜之助氏は、明治二十四年八月一日を以て東京市下谷區竹町に生る。同家は加賀前田侯の藩士たる名門にして先代龜次郎氏の長男たり。十二歲の時父君を亡ひしが郁文館中學を卒業し、卜谷竹町に運送業を創め、同四十三年業務を擴張のため南千住町に移り、更に現在三の輪タクシー營業所の地に移轉し、自動車部分品販賣部を附設して今日の隆昌を見ると同時に、三河島町三河島二六七〇番地に乘客用、貨物用自動車運輸部を設け明治運送を始め各會社と取引して頗る繁忙を極めつゝあり。氏は熱情と義氣に富み、又政治上に頗る興味を有し選擧通を以て知らる。而かも至純高潔常に憲政常道論の主張者にして將來有爲の人材たり昭和四年五月衆望を擔ふて三河島町會議員に擧げられ、土木委員の要職を兼ねて克く活動し、町民の信賴益々加はりつゝあり。家庭には母堂あり、又しげ子夫人との間に二男三女が儲けらる。

東京府會議員

佐藤久太郎氏

（巢鴨町巢鴨一一三五番地　電話大塚六二二一番）

佐藤氏は明治十七年山形縣東村山郡千布村に生る。同四十年專修大學政治行政科を卒業し、山形縣酒田警察署長を拜命せるが官界に入る第一歩として東京府豐多摩郡長となり、東京府廳務課長に轉じ而して大正十年北豐島郡長として就任、當時本郡は激甚なる紛叫を極めたる村會議員選擧の直後にて餘焰未だ覺めずして村情和せず到る處自治運行に支障を來たしつゝありし、此際氏の敏捷なる手腕は能く斷じ能く治めて郡政自治に寄與する事顯著なるものありし、而して十二年の大震災、翌年の衆議院、府會、町村議員選擧等の勞苦を煩はすに最も大なるものゝみに逢着せり、然れども尙ほ能く之れを善處し郡長として世の推賞を受く、此の難關を突破するや同十一年の十月東京市內最も難町の評ある下谷區長に拔擢さる、總ての難厄を處理するには殆んど氏の手腕を俟たざれば能はざるかの觀あるは、假しや偶然にもせよ奇とす可し、而も氏は亦此の難處に向つて更新の氣運を拓かしめた手腕は推服に價ひす可し、昭和三年府會議員選擧に當選し一方の重鎭として活躍しつゝある氏の前途は端倪す可らざるものあつて存す。

昭和四年五月巢鴨町會議員に擧げられ現在に至る尙ほ本郡に荒玉水道の創設せられしは氏の力與つて多きものある事を牢記し置く。

瀧野川町會議長

佐藤悟郎氏

（瀧野川町瀧野川三五〇　電話王子九〇三番）

佐藤氏は福島縣福島市の人、明治二年の出生、長ずるや日本大學の前身たる日本法律學校に學び、二十三歲にして旣に高等文官試驗に登第す、後大藏省に入つて稅務官となり、松江、名古屋、宇都宮の各稅務監督局に歷任し十數年前に瀧野川飛鳥山前所在の釀造試驗所に榮轉して本邦釀造界に貢獻する所多大なり、曩に本官を辭し同所內の財團法人大日本釀造協會の爲めに努力し、淸酒、味淋、醬油其他我が國釀造界の向上發展に或は全國品評會を開き、或は府縣共進會を催して指導奬勵に力められ、全國の釀造家は氏を業界の慈父として敬仰しつゝあり。此間氏は前議員建築局勅任理事等に擧げられ法律的論理的なる頭腦を以て國家財政の上に應用し、其財務的造詣を傾倒して國家の爲に努力せられ、從四位勳四等の榮位に昇叙せらる。去大正十四年五月、町議改選に際し瀧野川町在住の福島縣人會一致の推擧を以て町議に當選、一勢力たる十日會の巨頭とし又老巧なる町會議員として令名嘖々たり。

昭和四年五月再び町會議員に當選し、町會議長に推擧せられて名議長の名を恣にし、公平無私其職責を全ふし、尙ほ昨年末以來同町助役詮衡問題の擡頭するや、榎本前町長と共に寢食を忘れて奔走し名倉町長辭職するや、急遽奧論を胸裡に秘めて町會を開き一擧にして町長並に兩助役を推擧せる鮮かなる議長振りには自他共に嘆賞する所たり。

上練馬村長
家屋稅第二次調査委員

佐久間勘右衞門氏

（上練馬村上練馬三八八番地）

北豐島郡西部に於ける元老の一人として又事業界の先鞭者として鄕黨崇敬の的たる、佐久間勘右衞門氏は、明治六年一月を以て上練馬村の現邸に七郎右衞門氏の長男として生る。同家は土地の豪農にして舊家、百萬長者の稱あり、父君は多年村政自治に與りて功勞あり、氏も亦夙に村會議員に擧げられ、爾來二十有餘年一日の如く村政の樞機に參じ、信望第一位に推され、郡西の中堅人物として令命を駛す。此間氏は農村開發の爲に上野傳五右衞門氏等と東上鐵道創立を發企して會計主任となり、練馬大根種販賣の練馬興業會社長に擧げられ、同村消防組頭、衞生委員、官有地調査委員、土木委員等の要職を勤めしが、現在は村會議員に在るの外、昨年十二月宮本村長の後を享けて村長に擧げられ今日に至り、また豐島病院組合常設議員たるは勿論幾多の公職を兼ね、尙ほ昨春の家屋稅調査員に當選し更に第二次調査委員に推されて現在に至る。曩に在鄕軍人會名譽會員、靑年團顧問助員、赤十字特別社員、八幡神社氏子總代、愛染院檀家總代等となりて盡すの外、自らは佐久間商會を主宰し、蕎麥粉製粉並に砲金鑄物製作事業を經營し、東西運輸株式會社重役、福壽生命保險會社代理店等として公私共に繁忙を極む。氏は溫厚至誠一滴も酒を口にせず、社會公共に奉仕するを唯一の樂みとせり。今や在鄕軍人分會長に佐久間榮吉氏あり、上練馬靑年團長に佐久間高保氏ありて同村は佐久間家門流の天地と云ふ可し。

菊池武氏

瀧野川町菊池醫院主

（瀧野川町西ヶ原二一番地　電話王子六三番）

瀧野川町の中心地町役場横通りに患家常に相踵ぐの繁忙なる菊池醫院主菊池武氏は、福島縣の人、明治二十七年五月を以て伊達郡栗野村の素封家菊池家に生る。氏は明治四十一年東都に遊學、大正三年東京中學校を卒へ翌四年七月青森縣立病院齒科部助手となり、在勤三年、後東京中央齒科醫學校に學び、同九年三月卒業と同時に開業試驗に合格し、更に東京醫科學專門學校に研鑽を重ねて同十年十月現地に齒科醫院を開業、同十一年同姓の醫家菊池鶴惠氏の養嗣子となり今日に至る。爾來瀧野川町齒科校醫たるの外、東京府齒科醫師會理事に擧けられ專ら斯界の爲に活躍しつゝあり、義父鶴惠氏は各病院に內科部長を勤め又軍醫として日露戰役に從軍し勳六等に叙せられ、メキシコに渡航して最新醫術を研磨現所に開業せる篤學の名國手たり。家庭には鶴惠氏夫妻と信子夫人との間に二男を儲く。

菊池貞作氏

三河島助役

（西巢鴨町池袋九一三番地）

巢鴨、日暮里、三河島の各新興發展町村の助役として敏腕を揮ひ令名高き菊池貞作氏は、明治十三年八月十一日を以て北海道札幌市に生る。同家は舊南部藩士、廢藩後開拓事業のため札幌に移りしなり。氏は明治三十三年函館中學を出て札幌農科大學に入りしも後、上京し日本大學に法科を專攻、同四十年三月卒業と共に東京府廳に奉職し、學務課、庶務課に精勵せしが、大正六年病を以て退職し、同八年荏原郡羽田町長となり、更に同年五月北豐島郡庶務課長に轉じ、同十二年五月巢鴨町助役に推擧されて桑澤町長を佐けて町民の信望を擔へり。後日暮里助役に轉じて岡田町長を補佐し、更に昭和三年三河島助役に聘せられて今日に至る。蓋し刀筆の吏として成功者の一人たり。

北島眞平氏

瀧野川町會議員

（瀧野川町瀧野川二二五八番地）

瀧野川町議たること二期、少壯有爲の材として令名ある北島眞平氏は、明治二十七年十一月を以て千葉縣香取郡神代村の名門故寓平氏の嫡男に生る。嚴父は鄕里の村會議員として幾多の公職に就き地方自治に貢獻せるのみならず、畜產界の功勞者たりき。卽ち明治三十五年西巢鴨に牧場『生新舍』を創始し、同四十一年歐米畜產界を視察し歸朝後大正元年現在地に移轉牛乳搾取業として大成せしも町勢の發展と共に當主に至り之を廢業せり。氏は、麻布獸醫學校に學び家職を勵むの傍ら、町內自治に盡力することを怠らず、大正十四年五月町政刷新を標榜して町會議員に當選、新進氣鋭の才を以て活躍大に力め忽ち一方の閥將として認められ、次で昭和四年再び當選して常議委員府方面委員等の要職に擧けられ、町名譽助役推薦の議ある毎に其候補に擬せらるゝの人望を加ふ。現に部落町會公德會々計、北谷端睦會副會長、第二小學校保護者會々計等に擧けられ、公共の

ため寧日なき奮闘を續けつゝあり。

王子町稅務課長

木島剛氏

（王子町上十條一〇三〇番地）

多年稅界に職を奉じ、國民の三大義務たる納稅思想の民衆化を圖り公平と恪勤とを以て聞えたる木島剛氏は、今や王子町稅務課長として老練の手腕を振ひつゝあり。

氏は新潟縣の人、明治六年八月二十五日を以て西頸城郡根知村蒲地四三番戶に生る。明治四十一年大藏省文官普通試驗に合格したるが、尙之を以て滿足せず大正二年には東都に在住せるを幸ひ、法政大學專門部法律科を卒業せり。是より先き氏は明治三十三年稅界に職を奉じてより、稅務署及會計檢査院等に勤務すること三十ヶ年、此の間新潟縣糸魚川稅務署の類燒、大正六年大海嘯の際東京府龜戶稅務署諸帳簿浸水に對する改調、大正十二年關東大震災等に於ける橫濱稅務署燒失に對する復舊事務等に鞅掌して多大の功績を擧げ、同十三年には茨城縣龍ヶ崎稅務署長に任ぜられ、同十四年同縣境稅務署長に榮轉し、昭和四年退職せり。時に正七位勳七等高等官八等たり。現に王子町役場に職を奉じ稅務課長となり、多年の經驗と明晰なる頭腦とを以て徵稅事務の成績を擧ぐ。家庭にはのえ子夫人との間に二男二女ありまさ子氏は實科女學校通學中にて他は商業に從事せり。

王子町は會社工場地帶として他町村に比し多額納稅者多く且つ事業界の興亡盛衰に依り其徵稅多岐複雜、氏の敏腕に待つ所多し。

第一第二次家屋稅調査員

木內重造氏

（三河島町町屋二三六番地）

氏は東京府南足立郡江北村の人、明治二十年五月十五日嚴父小宮勇次郎氏の四男に生る。小宮家は土地屈指の舊家にして嚴父は郡會村會議員として貢獻すること三十ヶ年に及ぶ功勞者たり、氏は鄕營を出で農事に精勵せしが大正二年三河島町町屋の素封家木內吉五郎家に迎へられ、木內姓を襲へるなり。父君も亦三河島村議たること多年村政の功勞者にして、當主は義務消防時代より十數年に亘る功勞者として大正十二年退職に際し感狀並に銀盃を授與せられ、又現町內會實揚會の組織に盡力して會長に擧げられ三河島社會事業協會方面委員として活動し、又昨年の家屋稅調査員選擧には衆望に依り第一次第二次調査員に當選、其職責を盡しつゝあり。同家は古き家歷を有し、中興の祖半右衛門氏豐によりて家運益々興隆し、今や土地の素封として知られ、當主任俠義氣に富みて人望高し、家庭にはかく子夫人との間に長男泰次君外二男二女あり。

三河島町會議員

岸伊平氏

（三河島町町屋二二九番地）

多年三河島町在鄕軍人分會長として、學務委員として名聲高き岸伊平氏は、明治二十四年九月十一日を以て町屋の豪農仲次郎氏の長男に生る。父君は溫厚の德望家にして曾て村會議員に擧げられ村治に寄與せし人物なりき。氏は同四十四年近衛師團に入營大正二年除となり、同六年在鄕軍人三河島分會理事並に常務理事會計となり、同九年副會長に更に分會長に推されて現在に至る。曩に學務委員たりしが大正十四年五月衆望を負ふて町會議員に擧げられ、熱心自治向上に勗め更に昭和四年再選せられて土木委員、衞生委員三河島社會事業協會方面委員等の要職を兼ね獻替日も足らざる有樣なり。

三河島町會議員

木內源太郎氏

（三河島町町屋一六四番地）

三河島町政の新興勢力として將來同町の中堅人物として囑目せらるゝ木內源太郎氏は、明治二十三年三月四日を以て町屋の素封家たる木內家に生る。同家は代々農事を以て家職とせしも、近年同町は長足の發展と共に大地主として土地の開發に力を致し、良地主として一般より敬仰せられつゝあり。氏は此の舊門に生れ、夙に自治公共に奔走し、在鄕軍人分會に在つては多年會計となり、又副分會長に擧げられ、又敎育にも熱心にして同町第四峽田尋常小學校後援會の副會長にも推擧せられて兒童奬勵のために心血を注ぎ、町內會の實揚會組織に當つては寢食を忘れて活動し現に其會長として共存共榮の實を擧げつゝあり、昭和四年五月には衆望を擔ふて三河島町會議員に當選し、學務委員、豐島病院組合會議員等の最も重要なる職責に就き克く其本來の使命に鑑みて進退し、三河島町民の爲めに一身を挺して奮勵しつゝある氣骨稜々の新人たり。

瀧野川町稅務課長

木俣善吉氏

（豐多摩郡小金井村小金井一七七六番地）

稅務官たる事二十年、此間嚴正謹直に府縣の稅務に鞅掌したる幾多の經驗と圓熟せる才腕とを以て瀧野川町の稅務課長として町民の信望を荷つて町稅事務を掌理する人に木俣善吉氏がある。

氏は明治十一年靜岡縣引佐郡氣賀町の舊家木俣竹松氏の次男に生る。氏が官界活躍の第一步は、明治三十七年同縣濱松稅務署屬を拜命せしより始まり、同四十三年靜岡稅務署に轉じ、後再び濱松稅務署庶務課長、次に愛知縣津島、及び豐橋等の庶務課長を歷任し、大正十二年東京稅務監督局に轉じ神田橋稅務署庶務課長に任じ同十三年高等官八等司稅官となつて退官せるが位勳は從七位勳八等の榮位を帶べり。翌十四年二月瀧野川町役場稅務課に迎へられ昭和五年三月課長に擧げられ銳意徵稅整理に努力され實績大いに上り良吏の名を空しうせざる人格者なり。家庭にはてい子夫人との間に四男二女あり、長子令一氏は專修大學の出身にて專賣局に奉職して活動しつゝあり。

瀧野川町は、近年急劇の發展を來し、歲入出豫算は追加更正豫算を含しては年々百萬圓內外に上り之れが徵稅事務は頗る繁劇困難の事にして、殊に五年度の如きは町收入減實に十數萬圓に達する有樣にして氏の手腕と努力とに依つて之れが補塡充實を期せざる可らず氏亦其責務大なりと謂ふ可し。

宮内病院長
醫學博士

宮内賢一郎氏

（瀧野川町田端六〇二番地
電話小石川四六六四番）

外科醫學界の泰斗、醫學博士宮内賢一郎氏は、明治二十一年五月を以て埼玉縣に生る。埼玉中學校を出で、仙臺醫學專門學校に入り學績優秀を以て特待生となり明治四十一年卒業まで終始一貫せしは如何に氏が卓拔の秀才たるかを知るべし。同四十五年帝大田代外科に勤務し、同年渡歐獨逸エーナボシ大學に外科學を專攻、更に瑞西ベルン大學に病理學を專攻、ドクトルメヂチーネの學位を受け、大正五年歸朝して田代病院に於て診療に從ふこと數年、大正八年十月現在に病院を開設して今日に及ぶ、同十二年氏は慶應大學教授會に學位請求論文を提出し、同年三月醫學博士の學位を授與せられし篤學の人たり。又氏は愛町の精神に富み、大正十四年五月瀧野川町會議員に推され理想選擧を標榜堂々言論戰に依て當選し、群鷄の一鶴として克く町民代表の責任を竭し、令名嘖々たりしが滿期退職後は專ら天職に邁進され養には病院の大改築をなし鐵道省其他の指定病院として常に滿員の盛況にあり。

宮崎醫院主

宮崎常次郎氏

（瀧野川町瀧野川四二番地
電話王子二二二五番）

昭和五年九月一日大震災記念日より飛鳥山醫院を宮崎醫院と改稱し、過去十八年間絶大の信頼を患家より受け、一層殷賑を極めつゝある刀圭家、是を宮崎常次郎氏となす。

氏は明治十八年四月を以て茨城縣江戸崎町に生れ、千葉縣立銚子中學を卒業して上京、當時神田區淡路町に在りし日本醫學校に學び明治四十五年二月醫術開業試驗に合格したるも、氏は更に醫術の蘊奥を究むべく先進泰斗に師事すること數年、大正三年八月現在地に來住して開院し其得意とせる內科、小兒科を始め一般診療に親切叮嚀なるより年と共に信望を博し、大正十一年八月より昭和五年六月三十一日まで瀧野川町校醫として貢獻せり。尙ほ氏は震災當時の隱れたる功勞者にして其年九月三日より十六日まで氏は洪水の如く流れ込む避難民救助のため飛鳥山前不動堂にて義弟某醫師の助力を得晝夜の別なく數百名に自費を以て繃帶藥劑を提供施療救護に當り感謝の的となれり、然るに當時は王子警察管內たりしと町役場はり混を極めし爲めか、氏の一方ならぬ功勞に對し他醫師の如く表彰の事なく、同氏を知る者は非常に同情し居れり。氏は小學時代より劍道を好み意思頗る强固にして任俠の士也。

同舟事業協會

宮本堤氏

（西巢鴨町池袋三二八番地
電話大塚一一八七番）

艫を操りて社會の水鐸を以て任じ、所謂無冠の帝王として其半生史を光彩あるペンを以て綴り、今や人生の後半生を、刑餘者の解放運動に心血を濺ぎて日も是れ足らざる奮闘を續けつゝある義人、是れを花堤、宮本堤氏となす。

氏は佐賀縣の人、明治二十四年十二月二十一日を以て、杵島郡北

方村字燒米二五五九番地に生る。夙に佐賀縣立鹿島中學に入り、霸氣横溢の氏は東都に遊ぶの志熾にして同校を第四學年にて退學、直に早稲田大學に入り政治經濟科豫科を卒業す。爾來天才的文筆と能辯とを以て、操觚界に入り、都新聞、門司日報、東洋日の出新聞、帝國日日新聞、北海道新聞、新秋田新聞、二六新報等に健筆を揮ふ。此間氏は東洋雄辯大學、及早稲田犯罪學大學を卒業し、自ら日本雄辯大學を創立し、更に西巢鴨日日新聞を經營す。氏の雄辯は世既に定評あり立憲民政黨院外團遊說部に重きをなす。氏が畢生の事業として創立せし、『同舟事業協會』は出獄者の選擧權獲得運動にして全國百五十萬人の刑餘者をして、立憲治下の公民とし參政權を與へ、社會の暗黑裡より救はんとするもの、而かも社會民衆は頗る此意義ある運動に冷淡にして實現困難なるも、氏は憤然蹶起、民衆の同情と理解を求め當路の人を動かすべく不斷の努力を捧げつゝあり。

瀧野川町校醫　**宮尾勝海氏**

（瀧野川町瀧野川一八四二番地　電話板橋六六七番）

新進の醫家として瀧野川町第二小學校々醫として令名ある宮尾勝海氏は、明治二十七年九月を以て生れ、夙に仁術に志し大正四年九月慈惠會醫學專門學校に入り、同十年三月卒業直後、俊秀の才同校の認むる所となり同醫院產科婦人科に勤務、同十一年四月まで勤續して其蘊奧を究め、横濱市醫員に拔擢萬治病院に勤務し、同十二年四月まで就任して實地に練達する所あり、同年六月現住地に向春堂分院として開業今日に至る、本院は西ヶ原に在り院長は斯界の重鎭折本勝治氏にして、既に定評あり、宮尾氏亦信望頗る厚く昨秋瀧野川町第二小學校々醫に擧げられて好評嘖々たり。

尾久信用組合長　**三橋周之助氏**

（尾久町上尾久三〇二番地　電話下谷一三七一番）

三橋氏は文久三年八月六日を以て同町の名門素封たる三橋家に生れ、明治二十二年五月村會議員に當選し、學務委員、土木委員を兼任し、引續き再選同三十年七月收入役に推薦せらるゝに當て議員を辭し同三十四年六月まで其職に在りしが、同年小泉金太郎村長の後任として村長に擧げられ、同三十九年五月まで在職、日露戰役中町村事務精勵の功により勳七等に叙せらる、更に同年八月村會議員に擧げられ、同四十二年四月再び村長に推され、大正十年四月まで三期十二ヶ年間、村治に盡瘁し、その勇退せんとするや、村民は尙ほ德を慕ひ功を稱揚し留任を懇願せしも、氏の辭意固きを知り、せめて名譽助役として留まられんことを望み、强て其職に就かしめたる如き如何に町民の重望を擔へるかを窺ふに足るべし。尙ほ翁は明治三十二年と同四十年の前後二期郡會議員に當選し郡參事會議員に擧げられて郡治に貢獻し、大正九年江戸川上水道組合會議員に推され上水道完成に努力し、又本郡信用組合の鼻祖たる尾久町信用組合を明治三十八年七月同志と共に創立し同町產業金融に資し、更に住宅改良貯金組合を創設して都市建築改善に稗益し、或は村社八幡神社氏子總代、花藏院檀家總代等實に枚擧に遑なき功勞者なり、因に記す令息鷹二氏は京大獨法科出身の法學士にして刑法は特に造詣深しと稱さる。

此の名門を繼ぐ令息の活躍は町民一般の刮目して待望する所たり。

元尾久町會議員　**三橋元吉氏**

（尾久町上尾久三〇〇七番地）

郊外唯一の行樂鄕として一躍人口七萬の大尾久町とし、商工の殷賑街たらしめし潛める力、開拓の義人として知らるゝ三橋元吉氏は明治十六年十一月を以て同町の舊門素封たる嚴父仙太郎氏の長男に生る。父君は夙に村會議員に擧げられ、又收入役として令名あり、殆んど全生涯を公共に奉じて功勞顯著なる人なりき、氏は先覺の模範青年として、廿一歲の時既に北豐島郡農事改良會實行委員を囑託され、各品評會に於て常に褒賞、木盃等を受くること十數回に及ぶ其篤農想ふべし、明治四十一年尾久青年會を組織して其役員に擧げられ、青年修養に勉む。大正十年衆望を負ふて町會議員に擧げらる是れ氏が曾て火葬場設置反對の先陣を承り尾久を永久に救ひたる恩惠者として酬ひられたるなり、家庭にはかの子夫人との間に三女を擧ぐ長女政子氏は神田一つ橋女子職業學校を出で、次女ふじ子孃三女敏子孃は共に武藏野高等女學校出身の才媛なり。

前尾久町會議員　**三橋賢一郎氏**

（尾久町上尾久三五〇六番地　電話下谷六五九四番）

尾久青年團の基礎を培養し今や模範青年團長として令名ある三橋賢一郎氏は、明治二十三年四月を以て嚴父岩吉氏の四男に生る。夙に青年の指導啓發に心血を濺ぎ、尾久青年團長として同團を郡中有數の團體たらしめつゝあるの外、大正十四年五月輿望を擔ふて町會議員に擧げられ、年少議員として極めて眞摯公正の態度を以て町政に參與し聲望高かりき、現に氏は學務委員として新興尾久の敎育事業に寄與し、又原膳會々長として町內自治に盡瘁する所多く、町民の信賴益々加はりつゝあれば氏の將來の活躍こそ期して待つべきなり。

王子町校醫　**三浦勝氏**

（王子町王子一〇六七番地　電話王子二〇六番）

王子町荒川小學校々醫として十年一日の如く勤續し、精神的奉仕と新進の學術技能は一般患家の信望を博せる刀圭家に吾が三浦勝國手あるを矜とす。

氏は下野國の人、明治十八年六月十五日栃木縣河內郡古里村大字中岡本一番地に生る。鄕黌を卒へ栃木縣立宇都宮中學校を經て醫學に志し、卽ち仙臺醫學專門學校に入り日新の醫學を研鑽して業を了るや更に宇都宮病院に於て三ヶ年間內科小兒科を實地に就て研究し又東京小此木病院に於ける講習會をも修了し、進んで東京和泉橋慈善病院に入りて眼科を專攻すること壹ヶ年、大に得る處ありて氏の技能は先輩諸大家の嘆賞する所なりき。次で明治四十四年八月氏は王子町上の原に醫院を開きて診療に從事し、曩に同町荒川小學校々醫に囑託せられ約十ヶ年に及べり。昭和四年十二月現在の王子千六十七番地に堂々たる醫院を新築移轉開業せるが、圓熟の手腕一般患家の信賴頗る厚く治を乞ふもの門前に相踵ぐ。

京北栃木縣人會王子支部長に擧げられて克く後進を導き共勵扶掖に努む。俳句、謠曲、碁、テニス等に趣味を有す、しん子夫人との

間に亮氏あり、現に慈恵會醫科大學一年に通學し、仁術家の後繼として勉勵せり。

瀧野川町會議員　三浦小一氏

（瀧野川町田端一八〇番地　電話下谷三三三七番）

三浦氏は、栃木縣矢板町の產明治七年小七氏の嫡男に生る、同家は五代以前までは百石小平と呼ばれた豪農、矢板町附近五里四方の地に於ける四大農家の一なり、廿三歳の時家督を繼ぎ、二十五歳の時鐵道運輸業に着眼して野崎驛に運送店を開業し、次で清涼飲料水の製造販賣に擴張を以てし、一方他人に利用せられて巨財を散じ遂に產を傾けるに至る、此の悲運輓回の爲め奮然起つて上京し、深川安宅町に建築木材販賣店を開く、土木建築界の重鎭飯島組飯島次郎氏は頻りに建築業者たるべく慫慂す、性來乾坤一擲の事業を好む氏は直ちに飯島組の建築事務所に入り斯業の研究と共に實地に技倆を磨き、大正四年瀧野川町田端の現在所に獨立し、土木建築請負業を創め大いに成功して業界の巨腕と認めらるゝに至る、鐵道省指定請負人となり東京土木建築請負同業組合評議員より現に同組合第七部理事として聲名高きのみならず、鐵道省上野東和會幹事に推さる。尙ほ氏は常に公共自治の念厚く社會公共の爲に私財を投じて吝まず大正十四年五月激戰地田端より町議に立候補して當選、消防委員、衛生委員の要職に擧げらるゝの外、同町立第四小學校保護者會副會長として教育に盡し、田端八幡神社氏子總代、町內團體たる田端町和會顧問に擧げられ熱心地方の發展に貢獻する所の愛町至誠の人物たり。

三宅齒科醫院主　三宅泰氏

（瀧野川町瀧野川三八番地　電話王子四七六番）

刀を執つて臨床すれば是れ仁術家、颯爽の雄姿を壇上に運べば是れ爲政家として一般崇敬の的たる吾が三宅泰氏は、實に口腔外科の泰斗を以て容すべき齒科醫界の重鎭たり。

氏は明治二十八年十月二十日を以て岡山縣小田郡堺村星田四一〇〇番地三宅昌夫氏の嫡子に生る。明治四十二年縣立矢掛中學卒業後關西大學法科に學び、更に同四十五年大阪齒科醫學專門學校に入り大正三年卒業同五年迄同校助手となり、同四月同校の委託研究生として東京齒科醫學專門學校並に和泉橋慈善病院病理研究室に入り、又口腔外科の泰斗福島尙能博士に師事して專攻し、大正八年開業試驗に登第後本郷壹岐坂の齒科醫學高等講習所幹事講師となり、同時に東大久保に實地講習所を創設專ら齒科醫養成に努めつゝ牛込市ヶ谷に診療所を開きしが、大正十二年瀧野川の現在所に移轉開業し今日の隆昌を致せるなり。此間氏は北豐島、南足立郡齒科醫師會、學校醫設置委員に擧げられ、東京府學校衛生會評議員、日本齒科醫師協會理事、東京府齒科醫師會郡支部方面委員、口腔外科會幹事、聖學院中學校々醫、瀧野川第三小學校醫、同町齒科醫會幹事等の公職を帶びて活躍し、雜誌齒科新論、日本之齒界等に執筆せる新進の學殖家なり。政治を趣味とし抱負の大と雄辯とは世既に定評あり。熱血的仁俠の氏は、常に正義に與して弱者を助け、又各種選擧毎に無くてはならぬ、政界通にして闘將たり。

板橋町長　水村清氏

（板橋町下板橋二一二八番地　電話板橋三三三番）

中仙道の首驛板橋町は郡制時代郡衙所在地として名實共に本郡の首都、政治の中心地として天下に知られ、政爭止む時なき難治の町長となり今や旭日昇天の勢威を張れる水村清氏は、土地の名門俠醫水村玄洞翁の長男として明治二十年十月二十四日を以て現地に生る。同家は守靜堂と稱し、富祐の門地にあつて醫を業とせしより、天下の名流志士と交遊繁く、勤王の偉傑にして同家に匿くまはれたる者多く高杉晉作を始め當時名士の遺品を祕藏する物尠なからず、又嚴父が近藤勇の首實見の物語は古老の興味を以て傳ふる所なり。氏は資性剛直任俠、青年時既に一方の闘將として演壇の雄を以て鳴り本郡政友系の元老花井源兵衛翁を向ふに廻して惡戰苦闘遂に同町民政系の首將となり、大正十年五月町議當選以來再選三期に及び、常に最高點を以て議場の人となる。昭和五年五月には町會議長に擧げられ、次で同月名譽助役に推擧され花井町長辭職後代理町長となり、更に同年九月殆んど全會一致を以て板橋町名譽町長の榮職を擔ふに至る。氏は初め早稻田大學法科に學びしが、祖業を繼ぐべく中途日本醫學校に轉じ、同校卒業後大正四年十月醫術開業試驗に登第し、同十一月開業せるものにて、板橋、志村兩校醫、板橋町青年團長、郡聯合青年團副團長等を勤め現に之を兼ね荒玉水道、豐島病院兩組合議員其他の要職に在り、將來有爲の政治家として囑望されつゝあり。

瀧野川尋常高等小學校訓導　水上健二氏

（瀧野川町西ヶ原八九八番地）

府下の模範小學校たる瀧野川町立瀧野川尋常高等小學校に副校長たるの要職に在り、日將月就の社會に活動すべき、次代國民の教育を双肩に擔ふ人、是を水上健二氏となす。

氏は九州の人、明治二十八年五月二十八日を以て福岡縣糸島郡可也村師吉一〇五四番地に生る。夙に教育家たらんことを志し、大正元年四月八日福岡縣小倉師範學校に入學し、同五年三月二十三日優等を以て卒業す。同年四月五日氏は育英家としての第一歩を福岡縣三潴郡安武尋常小學校訓導として出發し、爾來熱心に兒童の薫陶に當り、又教育の研究に心血を注ぎ、其手腕識見斯界に認められ令名縣下に嘖々たり。則ち大正九年三月三十一日東京府へ出向を命ぜられ、同年五月十一日瀧野川尋常高等小學校訓導に任ぜられ爾來十一年間一日の如く山崎校長の下に在つて熱誠教育の改善刷新に當る。資性極めて溫順、恭謙兒童の師表たる德望を兼ね父兄の信賴亦頗る厚し。

瀧野川町土木委員

清水錠吉氏

（瀧野川町瀧野川五六八番地）
（電話王子六三二番）

瀧野川の名勝地たる紅葉園主として又多年愛町至誠の努力者として知らるゝ清水錠吉氏は明治十一年十二月を以て嚴父正之助氏の長男に生る。同家は瀧野川の舊家にして嚴父は、明治廿五年より大正十年に至るまで三十ヶ年の長年月村議町議として熱心に貢献せられたる自治功勞者にして、氏も亦夙くより公共のために奔走努力し養には町消防委員たること多年、現に第三小學校保護者會副會長として兒童教育に盡し、第九部消防部長として消防警備の任に當り、更に馬場町會長、瀧野川青年會長に擧げられ、八幡神社氏子總代たること亦多年敬神家として功勞多く瀧野川自治聯合會幹事にも推されて協調克く部落民の福利を圖りつゝあり。嚴父正之助氏は客秋永眠せられ氏は家督を相續す、將來の活躍亦一般の期待する所なり。

前瀧野川町會議員

清水寅吉氏

（瀧野川町瀧野川六六番地）
（電話王子四八番）

本郡に於ける保險思想の普及發達に努力し、同業代理店中第一位の成績を持續せる清水寅吉氏は慶應二年四月を以て、南足立郡江北村故鎌太郎氏の次男に生る。初め家職の農業に從ひしが、明治廿六年飛鳥山前に來住、酒類店を開き經營十七年間に及びしが、店舗一切を店員に讓り、氏は郊外町村の發展に對し必須條件たる火災保險、生命保險の普及發達に着目し、同三十四年東京火災保險株式會社の瀧野川代理店を創め、同三十八年共濟生命保險株式會社の王子代理店を引受け、極力宣傳勸誘の結果加入者年と共に倍加し、今や兩社の代理店中最高位の成績にありと、之れ氏の信望厚きと、不斷の努力の致す所なり。氏は大正十年町會議員に當選、常議委員を兼ねて大に町政に盡瘁し、現に飛鳥山親友會顧問、第三小學校保護者會幹事等として寄與しつゝあり。

岩淵町家屋稅調査員

清水清次郎氏

（岩淵町稻付八五三番地）
（電話赤羽四七四番）

氏は滋賀縣の人、明治二十三年を以て八日市町に生る。夙に上京、大正元年三月早稻田大學商學部を卒業して實業界に活躍し、又常に社會公共の爲に私財を投じて奉仕する所多く、同十五年十二月には滋賀縣知事より社會事業功勞者として表彰せられ、昭和二年三月には八日市町長より再び社會事業功勞者として感謝狀を受く、以て氏が如何に社會事業に貢献する事の熱心なるかを知るべし。氏は現に旭電化工業株式會社の營業部長として活躍するの傍ら克く居町の爲めに盡し、稻付御法ヶ丘町會副會長、村社香取神社氏子總代、岩淵第三小學校後援會幹事等を勤め、昭和三年十二月には岩淵町長より同校へ校旗其他寄附の廉により感謝狀を受く。又昨年の家屋稅調査員選擧には衆望を負ふて之に當選其職責を竭しつゝあり。

日暮里町助役　**清水福太郎氏**

（日暮里町谷中本一〇三番地　電話下谷四四五六番）

清水氏は明治十五年九月十三日を以て、日暮里町谷中木の素封家吉兵衛氏の次男に生る。同三十一年小學校を終るや鴻儒服部氏に師事して專ら漢學を修め、家職を佐くる傍ら算數の學を研究す、同三十五年廿五歳を以て早くも道路委員に擧げられ、地目變換係等の繁雜なる事務を擔任して大正七年まで其職に在りし外、同四十四年には、金杉及び谷中木の一部に耕地整理の施行せらるゝや、氏は擧げられて耕地整理委員となり工事係を擔任し、大正五年整理完了まで勤續して其功勞を表彰せらる。日暮里町會議員に擧げられ、更に豐七年五月同町收入役に推擧せらる。爾來再選三期に及び現に其職に在るの外、曩に町內團體たる谷中木同志會の設立に奔走し、推されて會長となる。又大正八年北豐島郡々會議員に擧げられ、更らに日暮里町教育會々計、同小學校保護者會々計、同町青年團評議員、國勢調査委員又田宮町長就任によりて氏は名譽助役兼收入役事務取扱に推さるゝ等氏が公共に參與盡瘁せる所甚だ多し。

瀧野川町消防委員　**島村鋹太郎氏**

（瀧野川町中里二八五番地）

熱心なる消防委員として令名ある島村鋹太郎氏は明治十八年一月を以て中里の舊門素封たる瀧次郎氏の長男に生る。夙に俊秀を以て鄕黨の畏敬を受く、家職の農事に從ひ新進青年として拔擢郡農事講習會等を修了す、又政治に趣味を有し淺賀前代議士、榎本前府議等の選擧には一方の將として活躍し優秀の成績を以て當選せしむ。氏は氣骨稜々、一切の情弊に超越し常に大勢の赴く所に從つて公共施設を怠らず、即ち曩には中里火防組合の會計となり、中里青年團の組織に盡力して顧問に推され、瀧野川消防第五部長に擧げられ、平塚神社氏子總代、現に中里下町會總務部長瀧野川町消防委員等の任にありて克く自治公共に盡しつゝあり。此間氏が最も努力せるは中里第五部消防機具改善委員長として之が完成をなしたることにして終始本町消防の爲に貢獻しつゝあり。

土木建築請負業　**柴田庄太郎氏**

（瀧野川町西ヶ原四一四番地）

誠實一天張りを以て、少壯克く土木建築界に活躍し、今や瀧野川町同業界に於ては一頭地を拔いて信望を有する者是を柴田庄太郎氏となす。

氏は岐阜縣の人、明治三十二年三月を以て吉城郡國府村廣瀨町に生る。生家は藥種商を營み實兄長九郎氏は苦學力行、東京藥學校を卒業し後獸醫に登第現に岐阜縣畜產課の囑託たり。氏は大正十年立志上京、神田區五軒町三番地清水精米機特許商に勤務の傍ら令兄と等しく苦學力行、東京中央工學校に學び同校卒業と共に王子町豐島の陸軍省火工廠機械設計部に勤務し、後瀧野川町西ヶ原の字田川建築部に聘せられ、瀧野川町指名請負人として隆々たりし同部の全責任を負ひ、瀧野川第五尋常小學校新築工事を始め、同第二、第三、第四の各增築工事を擔任し大に其技倆を發揮して當局の信賴を博す。昭和二年氏は獨立して瀧野川町の指定請負師となり、爾來同所第三小學校御眞影奉安所、町自動車々庫、町職業紹介所其他町下水道工事等を奉仕的に請負ひて正確に其任を全うし、御眞影奉安所落成に當ては學校より金時計を町より感謝狀を職業紹介所竣工に當り町より金盃及感謝狀を贈られし程なり。尙氏は板橋町下板橋稻荷臺に出張所を設け業務倍々繁盛を極む。町內自治會に在ては中和會幹事、消防第八部員等として努力貢獻せり。

板橋町會議員　齒科醫　**澁谷常三郎氏**

（板橋町下板橋二〇九四番地　電話板橋二〇〇五番）

板橋町議中の言論家、手腕家として將來を囑目さるゝ澁谷常三郎氏は齒科醫として錚々たる人なり。

氏は新潟縣の人、明治二十八年八月十八日同縣中蒲原郡根岸村に生る。生家は代々醫を業とする舊家にして氏は明治三十八年齒科醫を志して上京、深川區吉田齒科醫院主に師事して研究の傍、東京齒科醫學專門學校に學び卒業と共に大正七年文部省齒科醫師檢定試驗に合格、同八年現地に開業せり。同家は氏の緣戚前檢事澁谷十郎氏の邸にて澁谷家養嗣子として現在に至る大正十年より町齒科校醫として盡し、又昭和三年社會民衆黨に入黨し、翌四年五月同黨員として町議に出馬當選し、常議委員を兼ね町政刷新に奮闘す。讀書を好み政論に長す。ふじ子夫人との間に三女を儲く。

瀧野川第二尋常小學校訓導　**重田明氏**

（本鄕區眞砂町二九番地）

進取向上の氣魄に富み、渾身の心血を兒童教育の爲に捧げつゝある重田明（サトル）氏は上總の產なり。

氏は明治二十二年八月九日を以て千葉縣君津郡富岡村玉野一一〇番地に生る。夙に教育家たらんと志して上京、大正二年三月三十日東京府豐島師範學校本科第一部を卒業し、直に北多摩郡三ッ木尋常高等小學校訓導を命ぜられ、翌三年十月一日に同郡大正尋常高等小學校訓導に轉じ、更に大正六年四月五日東京市芝區愛宕尋常小學校訓導に榮轉、同十一年四月二十一日東京市本鄕區富士前尋常小學校訓導となり、又同十二年一月十七日には本鄕區第一實業女學校助教諭兼任を命ぜらる。同十四年三月二十五日東京市根津尋常小學校訓導に轉じ、昭和二年三月三十一日東京市汐見尋常高等小學校訓導となり、同四年六月十三日北豐島郡第四峽田尋常小學校訓導に任命され、翌五年三月三十一日には瀧野川第二尋常小學校の主席訓導に榮轉して今日に至る。

氏は此間熾なる向學心を以て大正九年七月十五日には專修大學經濟科大學部を卒業し、更に昭和三年三月三十一日日本大學高等師範部國語漢文科を卒業何れも中等教員資格を附與せらる。

日暮里第一尋常小學校長　**上南哲太郎氏**

（王子町下十條九五六番地）

人を化育し、智德を授け、人格を修練せしむるの師表たるもの、

人を感激せしめ、人を薫蒸せしむるの熱誠と實力とを具備せざる可らず。此點に於て吾が上南哲太郎氏は、實に我が意を得たる熱と力の良教育家と謂ふ可し。

氏は三重縣の人明治二十六年三月廿九日を以て名賀郡花垣村大字大瀧四五番屋敷に生る。夙に向學の志熾にして鄕黌を出づるや三重縣師範學校に入り大正三年三月二十五日同校本科第一部を卒業し同月二十八日三重縣名賀郡名張尋常等小學訓導に任ぜられ、大正七年三月三十一日には同郡花垣尋常小學校訓導に轉じ在職六ヶ年大に名賀郡教育界の爲に貢獻す。越えて大正十二年八月二十九日東京府に進出して西巢鴨町の第四巢鴨尋常小學校訓導に任ぜられ同校勤續前後七ヶ年、精力絶倫の氏は熱心教鞭を執るの傍專門學校に學びて中等教員の資格を得昭和四年四月五日には拔擢されて、日暮里第一尋常小學校長に擧げられて現在に至る。

瀧野川種苗園主　清水由右衛門氏

（瀧野川町瀧野川八九番地　電話王子三〇八番）

德川幕府の初期より終始一貫農產種苗を業とし『瀧野川種苗園』の名聲を全國に轟かしつゝある同園主清水由右衛門氏は、明治七年四月を以て舊門素封たる先代由右衛門氏の長男として生る。氏は祖業に精進するの外、土地發展のために奔走して怠らず、一般の信望頗る厚く、大正六年五月には擧げられて町會議員となり、小學校の增設、道路の改修等に竭して倦まず、同十年任期滿了後も不斷の努力を公共事に捧げつゝあり、曩には飛鳥山親友會々長に擧げられ現に其顧問たる外、氏は教育事業に熱心にして現に瀧野川第三尋常小學校後援會々長に推擧され能く同校の施設を補ひ兒童奬勵に全幅の力を注げり。又累代村社八幡神社氏子總代を勤め、業界に在つても東京種子同業組合長等に擧げられ斯界の長老として重きをなす。資性極めて溫良圓滿にして流石に歷史ある舊家の出、貫錄自ら具り一般の敬慕措かざる所なり。家庭にはとよ子夫人との間に五男一女が儲けられ、嫡男眞一氏は夙に早稻田實業學校を出でゝ店務を執掌し、次男鎌次氏は慶應大學政經科出身たり。

東京市參與　子爵　澁澤榮一氏

（瀧野川町西ヶ原一〇三六番地　電話小石川四六一番）

財界の巨人として名實共に日本の實業界を世界に代表し、大隈侯逝いての後は、國民外交の大御所として八千萬國民を萬國に代表する、我が澁澤榮一子は、埼玉縣の人、澁澤市郎右衛門の長男として天保十一年二月十四日を以て鄕里に生る。幼名を榮治郎と呼び後榮一と改む。帝大工學部長澁澤元治博士、實業界の巨頭田中榮八郎氏、同貴族院議員大川平三郎氏等は皆な子の甥たり。夙に海外に遊び、大藏權大亟兼通商司に任ぜられ、帝國の財政に竭す所多く、尋で身を實業界に投じ、第一國立銀行總監役同頭取となり爾來各種一流銀行の設立經營に干與し國民經濟の培養に健闘せらるゝ事殆んど全生涯を通じて今日に至り現に第一銀行相談役たり。今日の銀行の名は子が日本に於て初めて彼の地に於けるシルバーバンクを飜譯して『銀行』と命名せるにて銀行の產婆役たると同時に名付親たるなり。從て銀行集會所、商法會議所、商法講習所（現商科大學）等は悉く子の發企に基きて創設せられしもの、夙に貴族院議員に勅選せられ、明治二十三年勳功に依り華族に列し男爵を授けられ、後子爵に陞され、從二位勳一等に叙せらる。現在は東京市參與、協調會理事副會長、理化學研究所副總裁、第一銀行相談役、東京府養育院長、文政審議會委員、其他國家の重要なる樞機には常に參與して至誠奉公しつゝあり。かね子夫人との間に嗣子篤二氏、二男武之助氏、三男正雄氏、四男秀雄氏あり、武之助、正雄、秀雄三氏は何れも西ヶ原に分家し、長女宇多氏は穗積陳重氏に、二女琴氏は阪谷芳郎男に、五女愛氏は第一銀行常務取締役明石照男氏に嫁せらる。

淺野セメント重役　澁澤武之助氏

（瀧野川町西ヶ原三五六番地　電話小石川二三二七番）

實業界の長老、日本財界の元勳たる澁澤榮一子の次男として知らるゝ澁澤武之助氏は明治十九年十二月を以て生れ、夙に東京帝國大學法科に學び秀才を以て聞ゆ、大正三年分家して現在所に在り、嚴君と等しく實業界に入り、現に大島製鋼所、並に淺野セメント株式會社の取締役たるの外、澁澤同族、日本醋酸製造會社等の監査役に擧げられ斯界に重きを成す。家庭には實生堂を以て全國に知らるゝ福原有信氏の女、美枝子（明治二七年生）氏ありて長女照子孃を擧げられてゐる。

東京商工會議所議員　澁澤正雄氏

（瀧野川町西ヶ原三六〇番地　電話小石川二二〇〇番）

氏も亦子爵澁澤榮一氏の御曹子、明治二十一年十一月を以て子の第三男に生る。大正四年東京帝國大學法科經濟科を卒業し、直に嚴君の干與せる第一銀行に入りて行務を鞅掌せしも同六年に至り同行を辭して實業界に入り、同十五年には實業視察のため歐米を漫遊して大に資する所あり、現に東京商工會議所第二號議員たると同時に常議員を勤め、國產奬勵委員會委員、石川島自動車製作所、富士製鋼株式會社の各社長及び東京石川島造船所專務、汽車製造株式會社、秩父鐵道株式會社各取締役、日本煉瓦製造、日本鋼製建具株式會社各監査役として財界に活躍せり。是より先、大正四年分家して現所に一家を成し、男爵池田勝吉氏の女鄰子を迎へ長男正一、長女博子、次女純子、三女良子の一男三女を擧げらる。

帝國劇場重役　澁澤秀雄氏

（瀧野川町西ヶ原一〇一二番地　電話小石川三三一〇番）

日本に於ける政界、財界を世界に代表する巨人たるのみならず、實に日本の思想精神を萬國に代表する偉人として、三歲の兒も尙ほ且つ我が澁澤子爵の名は之れを知る、其の長き年月に亘り國家のために貢獻せる勳功は以て一代の偉傑として世界に誇るのみならず、新日本建設の大恩人として永劫に之を傳へ之を活ける記念像として後進に光啓すべきなり。此意味に於て瀧野川町に最も親しみ多き子の末男に生れたる澁澤秀雄氏の前途こそ、眞に若き日本の國民が待望して已まざる所たり。氏は明治二十五年十月を以て澁澤榮一子の四男として西ヶ原御殿に生る。大正四年には分家して一家を創立し、同六年にば東京帝國大學法科佛法科を優秀の學績を以て卒業し、現在は嚴君と等しく實業界の人となり、株式會社江木寫眞店、箱根仙

石原土地株式會社、多摩川園、帝國劇場等の取締役たるの外、オリエンタル寫眞工業株式會社の監査役等として活躍せらる。氏は尙ほ春秋に頗る富み、新時代の雄飛や期して待つ可し。たけ子夫人は跡見高等女學校出身の才媛、長男一雄、次男秀二、長女榮子、次女花子の二男二女が儲けられる。

下村元治郎氏

瀧野川町會議員

（瀧野川町中里六五番地）

筆を執れば流麗錦繡の文を爲し口を開けば懸河の辯あり、二者之れを能くする者は下村氏に於て之れを見る。氏は明治十八年愛知縣に生る、幼にして學を好み長するや愛知縣農林學校に入り卒業後上京日本大學を卒へ同法學士たり、性來文學に趣味を有ち明治文壇の一巨星川上眉山の門に遊び、而して都下の大新聞社に入つて椽大の筆を執る、去つて東京府民新聞社を興し郡部機關として倔彊の論を爲せり。大正十四年以來町會議員に擧げられ二期に及び、常議員の重職の外土木、消防各委員を兼ぬ、此間極力社會事業の完備を主張し遂に當町職業紹介所を實現し現に東京府方面委員として活動す、又多年谷田川治水に努力し改修請願委員長として遂に府費改修の大功績を立てたり、町内にあつては大正九年以來中里青年團長として其の修養訓練に努め、又中里下町會顧問とし部落自治の振興に盡しつゝあり。氏や沾湯無慾にして溫良恭謙、利の爲めに人と爭はず常に公正に立脚して町政に參與し、一方の闘將として令名嘖々たり。

良婦の名ある夫人清子氏の間に長女千鶴枝（東洋高女出身）次女遊龜江（武藏野高女出身）長男一氏あつて圓滿なる家庭を爲す。

篠崎政治氏

所得調査委員

（三河島町三河島三三番地）
（電話下谷二六三七番）

篠崎氏は明治十一年南多摩郡堺村相原に生る、後ち一家を擧けて本郷區に移住し小學校を出づるや、實業家たらんことを志し同區湯島三組町二十番地の質店植村永之助氏方に見習ひとして入り、勤勵十二年、大正二年同店を退くや現住所に質業を開き、庶民階級の金融機關として歡迎せらる、氏は常に公共に熱心にして一般の信望厚く、曩に三河島町衞生委員たる町常設委員に擧げられ、大正十五年板橋稅務署管内所得調査委員、又新稅法第一次の所得調査委員に擧げられ更に昨秋同調査委員總選擧に際するや當町としては一員を擧ぐるにも不安を感する票數なるに氏と共に二人立候補の爲め郡下第一の激戰たるにも關らず第三位の高点を以て當選せる事は如何に信望の厚きかを證するに足る可し、尙ほ氏は該委員たる外、町會議員、東部下水道組合會議員、家屋稅調査員とし又先には町會議長代理として厚き信望を保持するの人格者なり。

芝江初五郎氏

芝江組長

（營業所日暮里町谷中本一四五番地）
（電話下谷四一〇〇番五八四四番）

芝江氏は尾久町の人、明治五年六月二十五日同地の舊家に生る、明治三十年土木建築業を創むるや、一に着實と入念とに立ちて歩一歩と擴張して今日の基礎を築くに至る、一子に新太郎氏あり、明治三十二年の出生、夙に神田中央工學校を卒業すると共に、父君と共力して事業の擴張發展を圖り、遂に都下屈指の請負業者となり、直接國稅の如き大正十四年度に於て、金參千四百五十圓四拾錢を納付せし以來引續き毎年四千圓内外を下らざるに徵するも、斯界有數の業績を擧げつゝあるを證するに足る。而して同組が最近工事を完成せる主なるものは、日暮里第三尋常小學校の鐵筋混凝土三階建請負金額三十四萬六千七百圓、明治病院の二十七萬三千八百五十圓を始め諸官公衙、小中學校、銀行、會社、佛閣等の工事を請負ひ契約以上の好成績を以て完成し、表彰せられたること枚擧に遑あらず、中にも本郷中學校々舍新築及び屋内體操場、中野町第四桃園小學校、尾久尋常高等小學校、淀橋町第二及第四小學、日暮里町の名刹善性寺の大改築を始め府下各町村の小學校新築の大工事は殆んど同組の落札する所であるが、殊に淀橋町に於ては大正六年第一小學改築工事を初めとし第二、三、四の各校を引續き請負ふ如き如何に信任の厚きかを證するに足る。

柴田小三郎氏

東京府三河島方面委員

（三河島町二六三〇番地）

柴田氏は靜岡縣の人、明治十六年三月を以て小笠郡原泉村農業嘉一郎氏の實弟に生る。氏の嚴父は同村の素封家として又任俠義氣の人として彦左衞門と呼ばるゝ顔役たり。實兄も亦多年村會議員、村長等に擧げられて村治に盡瘁せる功勞者にして現に村會議員たる家柄なり。氏は鄕里の小學校卒業後漢學塾に入り、後十八歳より廿六歳まで八年間靜岡地方裁判所雇書記として登記課に勤續し、此間徴兵ゴして野砲兵第三聯隊に入りて軍務に服せしが、裁判所退職と同時に上京し各種實業に從事して勤儉力行遂に大正六年三河島町の現住地に浴場を新設するに至り、爾來土地發展の爲に努力す。業務上の公職として前東京浴場組合幹事、三河島浴場組合創立者にして會長となり現に其相談役たり。又町内會たる商工會副會長に推され現に相談役を勤め、更に東京府方面委員、三河島社會事業協會方面委員に擧げられ寢食を忘れて要救護階級の爲に活動しつゝあり。家庭にはりえ子夫人との間に三男二女を儲けらる。

家屋税第二次調査委員

平岩千太郎氏

（志村小豆澤四六八番地）
（電話赤羽三一五番）

曾ては郡會議員に擧げられ又多年村議として公共自治に盡し今や志村の元老たる人、是を平岩千太郎氏となす。

氏は明治二年九月十四日を以て埼玉縣北足立郡芝村柳崎新藤金太郎氏の二男に生れ、後本郡志村の素封家平岩家に養嗣子となる。同家は小豆澤の舊家にして現當主千太郎氏にて十五代四百有餘年に及び庄屋、名主等を勤めたる名門にして、先代は志村消防組頭、學務委員、村會議員三期、氏子總代等として公事に盡力せる功勞者たり氏は埼玉縣根岸小學校修了後更に漢學者石川直伸氏に師事し漢學の造詣殊に深し。其後家督を相續し農事に從ふと共に父祖の志を繼ぎ全幅の經綸を公共事に捧げ、明治三十一年村會議員に當選、志村衛生組合長に推さる、越て大正六年再び村議に當選以來引續き擧げられて現在に至る。此間大正十年より郡制廢止迄郡議に擧げられて郡政に寄與する所多大、又志村消防組頭、村農會長、農會評議員、農會總代、衛生組合理事を勤め現に出納檢査員たる外、昭和五年家屋税調査委員に當選更に同第二次委員の要職に推さる。趣味は讀書を好み殊に法制經濟、佛書を渉獵、又登山旅行を嗜む。家庭は長女初子氏（三十八歳）令孫松子嬢（十八歳）は豐島高女出身、利高君（十五歳）は京北中學に其他小學通學中なり。

令閨富子氏は昨冬永眠せられしが非常に登山旅行を好み生前は毎年富士山其他高山を踏破されしと。

三河島平野醫院主

平野籌氏

（三河島町三河島九七六番地）

三河島町草分けの國手として令名高き平野籌氏は、明治五年三月を以て父君醫東伯氏長男として本郷區お茶の水に生る。同家は由緒正しき名門にして祖は平重盛に出で十八代前の祖は三河より江戸お茶の水に移り醫を業とする事三百餘年、大名諸侯の殿醫を兼ね歴代小兒科醫を以て鳴る、嚴父は十七代東伯氏にて一大藥舗をも兼營し巨富を積む。氏は藥劑師に合格し更に廿九年醫術開業試驗に登第し後、帝國大學醫科に内科を專攻し、更に傳染病研究所其他に最新の學術を究め、同卅二年現在に開業せしが同地醫家の最初なりしと、爾來三河島町醫、同校醫たること多年、現に其職に在りて町民保健衛生に貢献する所多し。

日暮里家屋調査委員

平野吉三郎氏

（日暮里町日暮里五五四番地）

年少孤獨の身を以て、志を立て孜々として精勵遂に今日の地位を贏ち得たる苦節力行の士に吾が曉雪平野吉三郎氏あり。

氏は新潟縣の人、明治二十六年三月十三日を以て北魚沼郡小千谷町に生る。夙に學を好み甲種商業學校卒業程度の學を修めて二十歳の秋上京、市外澁谷町に居住し法律家たらんと志せしも、同地の急激なる發展と都會化する繁榮を見るや、商業を以て立身せんとし二十七歳まで商事に從事したるも、中途病を得て遂に挫折し、後已む

なく恩師の經營せる博善消毒會社に入り勤務すること十ヶ年、昭和四年一月退職せり。爾來保險業を營み火災生命兩代理店を開き獨特の手腕を以て大に擴張に努めつゝあり。又公共に熱心にして平和町會副會長、北部衛生組合副組合長に擧げられ、昭和五年家屋稅調査委員に推されて當選現在に至る。氏は兩親兄弟を疾く亡ひ孤獨の半生を味ひしが今は子福者として頗る圓滿の家庭に在り、俳句、書道旅行の風流を好み俳號を曉雪と稱す。

家屋稅調査委員　**平田重次郎氏**

（板橋町瀧野川二四〇九番地　電話板橋一七三番）

前板橋名譽助役として、難治の町政を收攬し、花井老町長を扶けて令名嘖々たりし平田重次郎氏は同町名門の出たり。

氏は明治三十二年二月十九日を以て先代重次郎氏の次男に生る。生家は氏の祖父の頃より質舗を營み『金岡屋』と號す。嚴父重次郎氏は同町會議員たること四期に亘り自治功勞者として表彰せられし人なり。氏は前名を源三郎と呼び、京北中學校卒業後は父君の業を輔け、嚴父の易簀に遇ひ大正七年一月家督を相續し、同年四月重次郎を襲名す。氏亦父祖の志を繼ぎて公共に熱心に德望厚く、大正十年學務委員に擧げられ、同十四年五月には町會議員に當選し土木委員を兼ね。昭和二年五月には名譽助役に推擧せられて同四年六月迄在任小學校增設、千川上水埋築等幾多功績あり。更に同五年四月家屋稅調査委員に當選す。又同町瀧野川平屋組合相談役、光榮會々長北豐島郡質商同業組合幹事等に擧げられ、信望彌よ高し。家庭に母堂てつ子刀自七十九歳（昭和五年）の長壽を保ち、令閨治子夫人との間に三男一女を擧け、頗る圓滿の長者たり。

日暮里町會議員　**平塚新次郎氏**

（日暮里町谷中本一〇六番地）

久遠本佛の一大使命を帶びて我大帝國に應現し、人生の大理想を現示せる一代の偉人日蓮聖人の人格を賢仰する吾が平塚新次郎氏は眞に日蓮主義の奮鬪努力を生命とする人なりとす。

氏は新潟縣の人、明治二十五年四月八日釋迦牟尼如來誕生の日を以て西頸城郡能生谷村に生る。氏は鄕里に在つては父君を扶けて家業に從事し、孝悌の聞え高かりしが大正七年八月志を立てゝ上京、現住所に居を構へて薪炭商を開き、更に同十一年六月より保險代理業を開設して現在に至る。信仰に生きんとする氏は正直篤實を以て商業に從ひ又幼稚なる民間の保險思想を開拓して日夜倦むことなく現に保險外務員十六名を置くの盛況たり。昭和四年五月町內有志の推擧を以て町會議員に當選し土木委員、職業紹介所委員を兼ね又日暮里町新潟縣人會副會長として活躍し、不斷の精進と邁議とは聲望益々加はりつゝあり。

巢鴨町會議員　**久野德三郎氏**

（巢鴨町上駒込八番地）

久野氏は土地の素封家丹羽茂衛門氏の三男にして明治十四年の出生、地主として重きを爲す久野家を相續す氏もと自治公共の念に厚く家事を放擲するも土地の發展向上には日も亦足らざる努力を以て當れり、妙義町會の創設さるゝや會長兼會計に推され、又信望日に加はり町會議員に擧げらるゝや衛生委員、臨時建築委員を兼ね、更に家屋稅調査委員の選擧あるや之れ又多數の得票を以て當選す、嘗ては國勢調査委員に擧げらるゝ等其の德望推して知る可きなり。氏の趣味としては閑を見ては山川の風光、舊跡を探ぐるを樂しみ、內にあつては謠曲尺八等に心を遣る、其人格の優雅なるを知る可し。

前志村助役　**平岩正行氏**

（志村小豆澤一二二一番地）

古來荒川の湊港として、平將門の貢物小豆を積める船、沈みたりとの傳說より起る小豆澤の舊家名門に人となれる平岩正行氏は、明治二十六年一月十四日を以て先代仲右衛門氏の長男に生る。嚴父は夙に村公共事に盡して信望厚く、北豐島郡會議員として郡治に貢獻せる所頗る多く、村會議員たること又多年、同村の元老として地方政界に馳驅奔走したるは郡民の周知せる所たり。氏亦父君の精神を繼ぎ早くより公事に竭して信望厚く、大正十年五月には少壯の身を以て村會議員に擧げられ、引續き再選に再選を重ねて其職に現在するの外、豐島病院組合會議員、土木委員の重職を兼任し、嚢には同志耕地整理組合、並に同村消防組會計をも勤め、在鄕軍人分會に在つては名譽會員たり、殊に氏は青年團組織に當り發起人となりて東奔西走し、其創立せらるゝや會計幹事となりて其完成に努め、現に青年團長として模範的活動をなし、本郡中屈指の優秀なる成績を擧げつゝあり。氏は春秋に富み將來の飛躍を囑目され、同村の重鎭として畏敬されつゝあり。

町會議員辯護士　**匹田秀雄氏**

（瀧野川町田端五三四番地）

匹田氏は大分縣南海部郡臼杵町の產、少時上京して當町に居住する事二十餘年、田端小學校より西ヶ原高等科を經て大正七年開成夜學校を卒業、同八年中央大學法科專門部特科一年修了、而して辯護士事務員又は小學校代用教員となり同十三年辯護士試驗に合格して翌年開業す、然れども尙ほ學を止めず同十五年法政、經濟、財政社會學等を專攻す、昭和三年社會民衆黨に入り社會運動、政治運動に從事し、今や東京支部聯合會々計監督、第六區支部聯盟副會長兼顧問、豐島支部執行委員、瀧野川分會長、日本借家人組合調査部長、民衆法曹團幹事、產業學校講師、民衆法律相談所主、社民黨中央委員、全國俸給者協會法律部長等の外、町にあつては町會議員として學務、衛生、府方面等の各委員を兼ね縱橫に活躍しつゝあり。

日暮里淨光寺住職　**日暮宥阿師**

（日暮里町日暮里九番地）

通稱『雪見寺』と稱し八代將軍遊獵の際膳所を命ぜられ由緖最も正しき名刹淨光寺の現住日暮宥阿師は、當代稀に覯る碩學有德の善智識なり。師は明治八年同町の儒者橫川鎭三氏の三男に生れ、夙に豐山大學に學び、明治四十五年より大正四年迄瀧野川紅葉寺に住し後同寺に晋山、心血を寺門の興隆に濺き、一昨年苦心慘澹本堂庫裡の大改築を行はる。同寺は元享年間豐島經泰の草創諏訪神社別當たりし古刹なり。

茂串小一郎氏

仰高尋常高等小學校長

（王子町十條九五三番地）

茂串氏は明治十七年栃木縣安蘇郡氷室村字柿平に生る、夙に教育家たらんことを志し青山師範學校に入り、同三十八年卒業すると共に、王子尋常高等小學校に訓導たること八ヶ年、大正二年九月横島常三郎校長の後を襲ひ、同校に校長たる異數の拔擢を受け、爾來一層王子町の教育界に一新紀元を畫するの努力を捧ぐ、同十二年三月司法省少年保護司を囑託せられ奏任待遇を受く、同年四月現任仰高尋常高等小學校長として就任し、模範町巢鴨の模範教育を標榜し、德育、智育、體育の三方面に對し熱血を注いで人材陶冶に當れり。尙ほ氏は更らに圭角機鋒なく、溫厚謙和にして德風克く部下を統御し、命達能く行はれて校風の美も亦他に見ざるものあり、學務委員としては名町長桑澤氏に建策し、他校長と協調揖睦して共に俱に完備充實を圖り、又青年訓練所主事としては、其職責を完うし、巢鴨青年團副團長としては、桑澤團長を補佐して青年の修養意氣の振作に努めつゝあり。

諸葛三雄氏

西ヶ原諸葛診療所主

（瀧野川町西ヶ原二本榎前通）
（電話小石川一九二番王子二三番）

耳鼻咽喉科の權威として都下に聲名を震ふ瀧野川町西ヶ原の史跡一里塚なる諸葛診療所主諸葛三雄氏は、明治十七年一月一日を以て銀行家故政太郎氏の長男として京橋區に生る。嚴父は氏の十二歳の時長逝され母堂の慈育の下に東京府立第一中學校を經て、千葉醫學專門學校に進み、明治四十三年三月卒業と同時に、三井慈善病院（和泉橋病院）に入り耳科、鼻喉科主任となり、診療に從ふこと數年、大正八年辭任後日本橋區横町に醫院を開業せしが、彼の大震火災と共に閉鎖し、父君の買入れ置ける三千五百餘坪の現住所に洋館建診療所を新築し同十五年二月竣工と相俟つて開業今日に至る。靈手多年の藴蓄と獨特の技倆とは常に醫務の繁忙を極めつゝあり。

諸星元次郎氏

瀧野川第四小學校訓導

（巢鴨町上駒込二〇番地）

最高學府に法律を專攻し、該博の識見を以て初等教育の任に當る諸星元次郎氏の如きは得難き人材なりとす。

氏は明治二十九年十一月十八日を以て神奈川縣足柄上郡上秦野村萱沼一六八七番地に生る。明治四十五年七月十三日神奈川縣中郡土屋尋常高等小學校准訓導に就任、大正三年三月二十五日退職して同年四月一日東京府青山師範學校第一種講習科に入學し同五年三月二十五日卒業し同月三十一日北豐島郡巢鴨町仰高尋常高等小學校訓導に任ぜられ、同六年十二月一日同町仰高東尋常小學校訓導となり、大正九年四月十五日氏は府立瀧野川商工學校囑託を兼任して法制の講座を受持つこと多年、昭和四年四月二十日囑託を解かれ、同年十月十日には瀧野川町第四小學校訓導に榮轉して主席訓導となり現在に至る。

信用組合巣鴨町金庫理事

本橋喜右衛門氏

（巣鴨町二丁目九番地
電話小石川一〇九九番）

本郡信用組合の發達史中、特筆大書すべき功勞者にして、而かも模範町巣鴨の建設者の一人として信望最も厚き本橋喜右衛門氏は、明治四年二月廿六日を以て現住地に生る。夙に教育事業に熱心にして大正六年以來巣鴨町學務委員たること實に四期に亘り、現在其職に在つて同町小學校の施設經營に寄與する所頗る多く、同八年には舉げられて町收入役に就けるも、任期中途にして病を以て辭任せしが同十年五月には再び衆望を負ふて町會議員に當選し、更に同十四年再選し、昭和四年三度び推舉さる。而して氏は專ら信用組合巣鴨町金庫のために熱誠努力し、多年常務理事として同組合をして本邦に於ける最高位の好成績を擧げしむるに至らしむ。實に氏の孜々營々として倦まざる奮勵と、練達せる經營の實際とは到底他の企及し能はざる所、同町が有する隱れたる至寶と謂ふべし。蓋には巣鴨二丁目睦會々長となり、現に顧問たる外幾多の公職を帶びて精勵せられつゝあり。

氏は、大正十四年町議當選後感する所ありて辭任せんとせしが桑澤町長初め、町民多數の惜む處となり留任勸告一齊に起り、已むなく引退を斷念せしは町政のため慶賀すべきで、又昭和四年の改選には推薦候補を以て當選の榮冠を擔へるを見ても、如何に氏が信望高きかを窺ふべく、氏が常務理事たる巣鴨町金庫が、深刻なる財界不況時に拘らず、五年度に於て七萬八千圓の剩餘金を得たる如き全く氏の熱心なる努力の結果と云ふ可し。

前尾久町名譽助役

關口常右衛門氏

（尾久町上尾久一三五七番地）

尾久町の重鎭として町民崇仰の的となり、名實共に同町の中堅たる關口常右衛門氏は、明治二十一年六月一日を以て先代常右衛門氏の長男に生る。氏は前名を寅吉と呼びしが相續と共に襲名せるなり。關口家は同町屈指の大地主にして、先代は夙に村會議員として多年村治に盡したる功勞者たり。氏は明治四十一年騎兵第十六聯隊に入營、歸鄕後は尾久在鄕軍人分會長として活躍し、同十年一月尾久信用組合理事に、同年五月尾久町會議員に擧げられ、又東三隅離組合議員に推され、又同十三年町名譽助役に擧げられ幾多の町是を遂行し町の面目を一新せり。氏は現に江戸川上水道町村組合會議員たるを始め、町學務委員等の要職に在るの外部落町會北馬場會長として居住民の協和統一を圖り自治の向上に貢獻しつゝあり。家庭には令室との間に四男一女を儲く。

西巣鴨町收入役

關口小十郎氏

（西巣鴨町池袋一四七〇番地
電話大塚一六五七番）

「午後八時後自宅を空けぬ事」を家憲信條とする吾が關口小十郎氏の如きは、當代稀に見る人格崇高の人材と稱すべし。

氏は生粹の巣鴨池袋の產、明治十九年九月一日西巣鴨町池袋一四七〇番地の舊家に生る。而して西巣鴨時習尋常高等小學校の第一回卒業生にして夙に學を好み、北豐島郡小學校教員講習會を修了准教員の資格を得、更に麴町區所在私立明治義會中學校を卒業し進んで帝國大學農學部實科に入りて學業を卒へ大に斯道の研鑽に努む。後耕地整理技術者講習所をも卒業せり。

明治四十三年の交より氏は方向を變へ神田青物市場に於て呉服太物及荒物問屋を營むこと約十二年大に實業界に飛躍を試む此間氏は衆望を負ふて、西巣鴨町會議員たること二期に及び同町自治の進展に盡す所大なり。蓋に擧げられて同町收入役の要職に就き名出納吏として令名嘖々たり、現に相州鎌倉郡西浦在湘南農園合資會社及び同鍋島侯爵農園囑託技師たり。趣味として園藝及農作物の栽培は常に專門的研究の手を緩めず、演劇特に映畫に興味を有す。殊に不自惜身命の日蓮主義を奉ずる氏は如何に確固不拔の心田境地を持するかを窺ふべし。

土木建築請負業

關一壽氏

（王子町王子一二六五番地
電話王子一〇二九同王子二二二）

關氏は明治十二年一月三日埼玉縣比企郡三保谷村の名門故八壽次氏の嫡男に生る同家は代々村名主を勤めたる門閥家にて、同村に於ける一門同族三十有餘戸に及ぶ舊家なり、年少より嚴父の家業たる建築請負業を佐け二十二歲の時嚴父の逝去と共に其事業を繼承せしも、家督を令弟に繼がしめて自らは北海道に渡り爲すあらんとせしも事志しと違ひ、歸來せしも職なく遂に家具店の塗料工見習に雇は

れ爾來懸命に業を勵み明治四十一年一人前の洋家具傘工となり外人經營の工場に聘せられ職工長に累進す、併し男兒として此小成に安すべきにあらずと、再び素志貫徹の願ひ爵勃たるの時、當時王子新道に隆々土木建築業界に覇を成せる瀧澤龍藏氏の乃父金作氏と知己たりしより氏を迎ふること切なりしを以て、四十一年秋瀧澤組に投じて其業を援く、大正五年渡邊鍬次郎氏等と合資組織を以て請負業を營み、更に同八年其解散と共に氏は愈よ獨立自營の境地に起つて奮戰し遂に今日の大成を致し東京府指定請負人として直接國稅千數百圓を納むるに至る、王子驛頭王電停留所前の『セキヤ』は氏の巨資を投じ建設せるものにて喫茶、洋食洋菓子部あり目拔きの王子を飾る洋館なり。

日暮里町會議員

關傳兵衛氏

（日暮里町谷中本一八四番地）
（下谷五四六七番）

關家は日暮里町谷中本の素封家にして、家系の傳はるもの實に三百年、現主關傳兵衛氏は第十代目に當る舊家なり。先代傳兵衛氏は町村制施行以來の村會議員として自治公共に盡せる功勞著大なるものあり、同町は表彰規定により自治功勞者として表彰したり。

氏は父君が大正六年隱退せし後を享けて町會議員に擧げられてより既に四期に及ぶ。昭和四年五月には後進に讓るべしとて、町議出馬を肯ぜざりしも周圍は氏の人格と町會に於ける重要人物たるを惜み、再起を促して現在に及ぶ、町常議委員として理事者を扶け、學務委員としては能く同町教育施設の充實完備に盡瘁せり。昭和五年家屋稅調査委員に擧げられ、更に第二次調査委員に選出されて、課稅の公正、負擔の輕減に努力せり。

氏は資性廉潔にして借地借家人に對し、協調共益主義を立て　先賃貸料の輕減をなし、地借店子より慈父の如く敬慕せられつゝあり。

板橋町會議員

瀨田疇一氏

（板橋町大山一五九八番地）
（電話板橋一五五番）

板橋町唯一の富門にして、舊家たる瀨田家は家號を鍋屋と稱し、代々公共事に盡したる家柄なり。當代を瀨田疇一氏とす。

氏は明治二十八年八月十六日を以て本郡板橋町大山一五九八番地の自邸に故嚴父文次郎氏の長男に生る。板橋尋常高等小學校を卒業し、早稻田中學、同高等學院、早稻田大學法科に進み大正六年同大學を卒業し、更に明治大學の研究科に入りて是を修了す。

氏は大正十年五月町會議員選擧に當り、最年少を以て當選し土木委員を兼ねて新進氣鋭の活躍振りを示し、次で大正十四年再び町議に當選し、常議委員、學務委員の要職を兼ね。昭和四年五月三度び町議に當選し豐島病院組合會議員並に檢疫委員を兼ね、學殖ある紳士として令名噴々たり。祖父吉兵衛氏は町村制施行已來町會議員、助役等を勤め、乃父文次郎氏亦町議として多年町公共に盡し、氏は現代的抱負經綸を以て自治政の爲に盡瘁す。

上板橋村會議員、瀨田熊太郎氏は氏の叔父にして現に土木委員家屋稅調査第二次委員、耕地整理組合理事等として令名高く、又板橋町の瀨田吉之助氏も叔父に當り、駒場農大實科に學べる一年志願兵にして、共に同町の富門として錚々の名を馳す、又氏の令弟は戸枝川助役令妹と婚し池袋に實業を營むと。

前尾久町長

鈴木重三郎氏

（尾久町上尾久二〇三七番地）
（電話下谷四二六八番）

全生涯を通じて社會公共の爲に奉仕し、殆んど一身一家を顧るの暇なき貢獻を積み、德望信賴全町に洽ねき鈴木重三郎氏は明治五年八月十四日を以て上尾久の名門八五郎氏の嫡男に生る。同家は地方屈指の素封として知られ、嚴父は多年村會議員として村治に盡せる功勞者にして氏亦夙く公共事に奔走、熱烈なる愛町奉公の途を辿る。即ち明治三十四年六月より同三十九年五月迄尾久町收入役、同四十年には村長を、同四十一年村會議員を、同年十二月より大正十年四月まで收入役を、同十一年村長を、同十四年町會議員となり昭和四年再選、同五年十月三度び町長に擧げられ去る二月末の退職迄。此間明治四十四年には北豐島郡會議員に當選郡參事會員となり大正十二年三月迄其職に在り、同年八月江戸川上水町村組合收入役兼會計課長に擧げらるゝ等實に町治に郡政に、公共事に席の溫まる寸暇なき奉仕を續けつゝあり。氏の如きは當代得難き自治の權化にして尾久町が有する至寶と謂ふべし。氏は日露戰役中の功勞により表彰せられたるを始め自治功勞者として又社會奉仕者として官公諸團體より褒賞せられたること幾十回なるを知らず世には富豪高門にして社會公共を顧みざる者多きが中に氏の如きは現代的巨人と謂ふべし。家庭に內助の功勝れしきよ子夫人と長女こう子氏は俊秀雅之助氏を迎へ二令孫を儲けて頗る圓滿なり。

尙ほ尾久町信用組合が本郡最古の沿革を有し且つ模範的の實績を擧げつゝある事は、氏が終始一貫努力の結果と謂ふ可し。

大日本農園代表

鈴木政五郎氏

（瀧野川町瀧野川一八七二）
（電話板橋六六番）

鈴木氏は我が國種苗の元祖地たる瀧野川町字瀧野川の素封家、先代政五郎氏の嫡男として明治八年十二月を以て生れ政次郎と呼ばれしも先代の家督を繼承して襲名せり、中等教育を終はるや、農事と先代の創始せる種苗商とに從事し大いに供給範圍を擴め遂に內地は勿論海外に迄聲名を知らしめ、大正九年一月資本金五十萬圓を以て鈴木家一門に依る株式合資會社大日本農園を設立するの大發展を見るに至れり。而して其代表社員となり各種農產種苗の改良發達に苦心し、全國農家が優良なる種苗によつて、米麥蔬菜の純良豐產により、生產能率の增加を圖ることにのみ寢食を忘れて奮鬪しつゝあり、斯くの如きは尋常普通の營利のみを目的とする商家の到底爲す能はざる所にして眞に國家國民の利害休戚を念ずる人に於て始めて爲し得るものたり、從て瀧野川の種苗界の名をして益々好評に導き、同業界の繁盛をも招徠する結果となる氏の功や大なり。尙ほ明治三十九年擧げられて瀧野川町會議員となり、又町內團體たる濟美會の會長に推され模範町會として、町內自治の向上を圖るなど眞に功績を殘せり、現に同社の無限責任代表社員として社務執掌の外、東京種子同業組合會計等の重任に在つて同業の發展に盡さる。

丸安種苗店主

鈴木鑅太郎氏

（瀧野川町瀧野川六〇番地）

瀧野川町が古來蔬菜園藝の名産地として天下に知られたると同時に、其種苗も亦内外に聲價を轟かしつゝあり、之れ種苗家が信用第一を以て實直に經營を續けたる賜なり。『丸安』種苗店の如き全く此意味に於て種苗界の商業道德實踐家の第一人者と云ふべし。同店は鈴木鑅太郎氏の經營するもの、今や其優良なる商品は内地は勿論、南洋及び南北米にまで取引を有し信用牢固として拔くべからざるものあり。斯業は祖父の代に創業せられ、父君鈴木安左衛門氏を經て氏に及び實に三代に亘り種苗品種改良を以て本邦農業を改善せる功績多大と謂ふべし。かま子舟堂は前府會議員榎木銈太郎氏の令姉にて長男の氏は種苗店を繼承し、次男鍋藏氏も種苗商を、三男定吉氏は食糧品店を四男藤吉氏は早大商科出身にして書籍商を倘ほ父君は飛鳥山親友會々計として多年公共自治に盡瘁し、氏も亦公共の念頗る厚く一般より將來を囑目されつゝあり。

王子町消防第廿一部長

鈴木庄次郎氏

（王子町豐島四七番地）

任俠義氣に富み、出ては水火敢て辭せざる消防の部長たり方面委員として警備救濟の事業に挺身し常に民衆の味方として活躍せる吾が鈴木庄次郎氏は豐島に於ける舊家の一たり。

氏は明治十八年一月二十七日を以て本郡王子町豐島砂田の現住所に呱々の聲をあぐ、父祖より農を業としたるが、氏は石材商を創じめ同町を中心として廣く販路を有す、荒川の水運を利用して石材の運搬に便し、新興王子町の建築界に石材を供給する氏の先見の明は、今日の隆々たる商務を招來したるものと言ふべし。

又氏は公共心頗る厚く夙に消防に盡瘁し、今や王子町消防組第二十一部長に擧げられ警火消防の要務に鞅掌し、更に王子町並に東京府方面委員として克く相る扶助の實をあげ、社會事業の精神を發揮して隣保施設に貢獻し、又衛生委員としては公衆の保健向上に努めらる。

種苗業

鈴木八五郎氏

（瀧野川町瀧野川五二一番地　電話王子一二二五番）

二百有餘年間農產種苗界の元祖として全國に知られ、地方農家に鈴木八五郎商店の名は洽ねく喧傳せらる。先代八五郎氏の時、大正十一年同志相寄り帝國種苗殖產株式會社を創立し常務取締役となり、現當主亦引續き重役たり。

氏は明治十一年一月八日を以て本郡瀧野川町瀧野川五二一番地に生る。初め王子堀之内齋藤小學校を卒業し、後瀧野川小學校に轉校前後七ヶ年間修學す。後氏は家業たる農產種苗業に從事し、益々販路を擴張す。氏の前名は榮吉と稱し襲名して八五郎を繼ぐ、なつ子夫人との間に二令息を擧げ、長男錄太郎氏は現に中央大學法科に在學し、又次男松次郎氏も同大學法科豫科に通學中なり。斯の如き舊門素封の同家は、一門益々興隆し令弟清八氏は白米商を、次弟傳五郎氏は薪炭商として何れも商業界に雄飛成功せり。

種苗問屋

鈴木紋右衛門氏

（瀧野川町瀧野川五三五番地　電話王子一二二一番）

種苗問屋として歷史極めて古く、優良種苗を提供するを以て全國に信用を博しつゝある鈴木紋右衛門氏は、明治十二年三月を以て先代紋右衛門氏の三男として現地に生る。氏は前名を長五郎と稱せしも大正五年嚴父長逝と共に相續襲名せり。祖業を承くると共に益々これが販路擴張に力め今や全國より註文殺到の好商況を呈しつゝあり。氏も亦公共精神に厚く、曩には町學務委員、土木委員に擧げられ又第三小學校保護者會會計、八幡神社氏子總代等として貢獻され現に馬場町會副會長たり。家庭はくま子夫人との間に三男三女あり。天資玲瓏玉の如く溫厚の君子人たり。

瀧野川町消防委員

鈴木金右衛門氏

（瀧野川町瀧野川一三九八番地）

氏は瀧野川の素封家幸次郎氏の次男として明治二十七年六月二十一日を以て生る。同家は農業を家職とせしが部落發展と共に之を廢し今は大地主として土地の開發に意を注ぎ、町内自治に力を致せり。曩には宮本正交會々長、現に相談役を勤め、第二小學校保護者會評議員等に擧げられ町内の德望家を以て推重せられ、昭和四年町消防委員に擧げられ熱心に奔走せり。家庭には嚴父夫妻を始め、いの子夫人との間に二男三女を擧ぐ。

飛鳥山郵便局長

鈴木萬之助氏

（瀧野川町瀧野川五番地）

瀧野川町唯一の名勝にして日本全國に共名を讃はるゝ飛鳥山公園前に郵便局を經營し、自ら局長として公衆の通信機關となり、爲替、貯金、簡易保險等の事務を鞅掌し、懇切に公衆に接して利便を與へらるゝを以て令名嘖々たる吾が鈴木萬之助氏は當代稀に見る人格者なり。

氏は明治二十六年一月を以て同町瀧野川七五鈴木與八氏の長男として生る。同家は土地の名望家にして自治公共に幾多の功勞を積まれたる人なりしが既に長逝せられ、氏は家業たる商業に從事さるゝの傍ら神田高等簿記學院に學び、震災後は專ら家業に從事さる。後同地附近は十二間幅の環狀線道路は貫通し岩槻街道は擴築せられて舊觀を一變、大發展をなしたるも公衆の通信機關なきを慨し、奔走の結果大正十五年十二月一日開局となり、同時に局長に任命されて現在に至る。資性悲謙至誠、公共心厚く社會に奉仕すること多大なり。

瀧野川中里貝塚町會長

鈴木政之助氏

（瀧野川町中里五九七番地）

土木建築請負業たる鈴木政之助氏は山形縣の人、明治十三年十二

月二日を以て西村山郡谷地町に生る。同廿六年三月小學校卒業と同時に仙臺市なる叔父鈴木房治方へ質屋營業見習をなし同三十年春苦學力行の志を決し仙臺新聞社配達勤務の傍ら千城義塾中學に入り、更に同三十三年四月私立養賢中學五年に編入され翌年三月卒業して上京、東京實用英語學會、東京物理學校等に學ぶ。同三十七年四月第一補充兵として歩兵第三十二聯隊に召集戰時部隊に編入されしも脚氣のため同年十月除隊となり、同十二月參謀本部陸地測量部修技所官費生となり電氣製版科にて測量製圖、電氣化學を專攻翌年十二月卒業し陸軍技手製圖科電氣製版掛主任兼工手見習生養成委員を命ぜらる。大正十一年十二月判任三級俸を給與せられ同時に依願免官となり、翌年瀧野川町に來住貸家業兼土木建築請負業を開始し又大成火災、海上保險田端代理店をも營みて今日に至る。此間氏は恩給を受くるは勿論日露、日獨兩戰役從軍記章を賜はり電氣版作業に發明せる功に依り表彰を受く。尙ほ公共心に厚き氏は曩に上中里町會副會長、町土木委員、平塚神社世話人、在鄕軍人會副班長、第五小學校後援會幹事に擧げられ現に中里貝塚町會長として部落發展に努力せり。

前三河島町會議員

鈴木勝藏氏

（三河島町町屋三七六番地）

消防警備の事に當りてより三十有餘年、功勞偉大なる人として令名高き鈴木勝藏氏は、明治十一年四月を以て故吉五郎氏の長男に生る。同家は町屋の舊家素封にして夙に土地發展のために、土地を開放して移住者の便を圖り德望の家として知らる。氏は廿歲時代より消防事業に從ひ、先年警視廳より其勤續功勞者として表彰せられ、今尙ほ八萬町民の生命財產保護の任に在り、大正十四年五月多數有志の擁立の下に町會議員に當選、出納檢査委員、衞生委員を兼ねて能く働き能く盡して町民の負託を完ふせり。此の外氏は素蓋嗚雄神社氏子總代、町方面委員町內自治會幹部として竭す所多大なり。

尙長男は巢鴨中學校四年に通學中なり。

日暮里尋常高等小學校長

鈴木芳通氏

（府下長崎町西原三八一三番地）

府下屈指の大學級を抱擁し四十三名の職員を有する小學校々長となり、玲瓏なる人格を以て校の內外に接觸し、校是校風の美を斯界に高揭しつゝある吾が鈴木芳通校長も亦得難き教育家といふ可し。

氏は福島縣の人、明治十六年五月三日を以て岩瀨郡白方村守屋に生れ、明治三十年四月栃木縣立中學に入學し後茨城縣水戸中學に轉じ同三十五年三月二十六日卒業、同三十六年栃木縣小學校教員講習科に入學し、翌年三月修了と同時に栃木縣芳賀郡市塙尋常高等小學校訓導を拜命し、同年同郡茂木尋常高等小學校に轉じ、同四十年四月二十八日退職して同年六月同縣須賀川町立女子技藝學校助教諭に進み、大正四年九月二十九日東京府へ出向、同年十月十六日西巢鴨町時習尋常高等小學校訓導として赴任、同七年三月三十日日暮里第四尋常小學校訓導兼校長に榮轉し、同十一年四月二十四日日暮里補習學校助教諭兼校長となり大正十二年四月一日を以て日暮里尋常高等小學校と改名され氏は依然として校長の榮職に在つて、令名嘖々たり。

山陽は言へり、家康の天下を取る大阪に在らずして關ヶ原にあり、關ヶ原にあらずして小牧にありと。吾が鈴木半之丞氏の今日の大成も亦日露戰爭直後君が自轉車の發達を看破したる時に因由すと謂ふべし。

日暮里町會議員

鈴木半之丞氏

（日暮里町日暮里五七六番地　電話下谷七〇三一番）

氏は明治十七年七月十二日を以て栃木縣下都賀郡間々田町に生れ、五歲の時兩親に伴はれて上京、下谷區竹町十二番地に於て饅飩製造の業を開く、曩に日露の役起るや氏は徵されて第十一師團に屬し軍に從て勳功を奏し明治三十九年凱旋と共に勳八等を授けらる。後四十三年氏の二十四歲の時自轉車業の將來有望なるを達觀して製造の業を興す、業況極めて順調なるの時彼の大震災に遭遇し、捲土重來の意氣を以て現住地に移り工場を設け粒々辛苦遂に今日の隆運を挽回す。之れ氏が才氣縱橫、而かも堅忍不拔の奮鬪的努力の果實と言ふべし。氏は政治に趣味を有し殊に獨特の雄辯は既に定評あり、彼の業界に即せる自轉車稅撤廢運動には熱舌を以て急先鋒たりき。昭和四年には普選第一次の名譽ある町議に當選し東三隔離病院組合會議員、土木委員、產業調査委員等に擧げられ熱心之に從ふの外、平和會幹事長たること五年現に顧問にして、又交和會常任幹事、日暮里栃木縣人會相談役たり。氏は閑日月を得て狩獵を嗜み、又釣碁將棋に無聊を行る。

今や氏の自轉車稅撤廢運動は着々効奏し年々府會に於て低減されつゝあるは喜ぶべし。

田端橋本屋店主

鈴木康之氏

（瀧野川町田端三丁目二〇五六番地　電話下谷七四〇九番）

田端環狀線山谷入口に直面し十數間の宏き間口を有し、酒類、薪炭、食糧品、雜貨に至るまで富豐に仕入れ、顧客織るが如き盛況を極め常に潤澤として奮鬪しつゝある鈴木康之氏は、幼名を兼五郎と呼び、土地の舊家喜三郎氏の長男に明治卅三年十一月廿七日を以て生る。嚴父は界隈切つての仁俠家として知られ、農業の傍ら酒舖を創めたるに濫觴せるなり。當主廿歲の時父君に遙去され家職を繼承するや、專ら商業に力を注ぎて信用を博し、今や田端、尾久界隈唯一の大商店たる隆運を招來するに至る。氏も父君の如く資性恬淡快活、仁俠に富み顧客に懇切至らざるなく、從て益々繁榮に赴きつゝあるが、氏は商業の傍ら町內田端山谷町會副會長として克く働き能く盡し一般より敬慕されつゝあり。家庭には女子夫人とに二男あり。夫人は埼玉縣の素封家に生れ、父君又區議村議として廿五年間も公職に在りし功勞者なり。又康之氏は五男弟あり長姉は尾久町議鈴木安五郎氏に、次姉は尾久軍人分會副長鈴木仙三郎氏に嫁ぎ、次弟福次郎氏は巢鴨商業學校五年に在學而も特待生の俊才にて次妹は本鄕實科女學校に通學中なり氏の如き孝悌にして實業に熱心なる當代稀に見る青年紳商と云ふべし。

將來瀧野川町の新發展地としては、田端環狀線道路を中心とする一帶にして、完成の區劃整理地域には小學校の新設、衞生警備の充實等氏の努力に待つもの多し。

篆刻師石榮堂主　**鈴木如眠氏**

（巣鴨町二ノ六番地）

曾ては北米に渡りて研學し、現下政治を好愛して政界刷新運動に牛耳を執り、鄙々の聲名を馳せ、家に在りては篆刻家として隆々の家運を築ける人、是れを鈴木如眠氏となす。

氏は下野の人、明治二十三年一月を以て栃木縣下都賀郡大宮村に生る。鄉愛を出づるや大志を懷いて横濱に出で、明治四十三年私立井上英華學館（商業學校）を卒業す。是れより先、同四十年歐米遊學を志し、沖人夫となりてサイベリヤ號に乘込み、密航を企てしも桑港にて發見され志を果たさゞりしが、後横濱山の手領事マーテン氏に雇はれ、勞働に從事して北米に航し、滯在二ケ年に及ぶ。其後大正二年巣鴨町の現地に篆刻業石榮堂を開業し以て今日の隆昌を致せり。氏は町内の重鎭となり多年自治公共に盡し、信望頗る厚く現に家屋税調査委員たるの外、巣鴨二丁目睦會顧問、東京印刻業組合常任幹事、東印火災相互救濟會理事、立憲民政黨巣鴨支部常任幹事、京北栃木縣人會巣鴨支部長等として活躍す。家族六名、讀書、清元、政治勞働運動に趣味を有す。

瀧野川町會議員　**鈴木常吉氏**

（瀧野川町瀧野川三〇二番地）

瀧野川町會議員中溫厚篤實而かも意思極めて强固、公正を履んで一歩も譲らず眞に町民本位の典型として欽慕さるゝ鈴木常吉氏は、明治八年八月七日を以て土地の素封斉吉氏の長男として生る。氏は十二歳の時慈母さだ子氏の長逝に會ひ、後數年にして嚴父隱居され、年少早くも家督を相續して農事に精勵したるも、近年土地の發展と共に之を廢し今は地主として專ら公共自治のために貢獻しつゝあり。昭和四年五月氏は衆望を擔ふて町會議員に擧げられ、土木委員府方面委員の要職を兼ねる外、町内團體大原睦會に在つては前に會長現に其顧問たり、氏は亦敬神崇祖の念厚く村社八幡神社氏子總代たる外各神社佛閣の世話人として盡力する所多し。

家屋調査第二次員　**須中泰助氏**

（瀧野川町西ヶ原二三八番地　電話王子八一四番）

時に壇上に政治を談じて舌端火を吐き、時に俳壇に文墨風流の人となり、又全國に裝飾の業を以て聘せらる。吾が須中泰助氏の如きは多趣多角、多才多能の人と謂ふべし。

氏は瀧野川町の人、明治二十五年七月西ヶ原二三八番地兼太郎氏の次男に生る。瀧野川尋常高等小學校を經て築地工手學校に入り機械科を卒業す。其後嚴父の家業たる建築裝飾絲門請負の業に從ひ、其技術を實地に研究し遂に父君の業を繼で今日の隆盛を招致するに至る。父君は本邦に於けるアーチの元祖にして朝鮮臺灣北海道迄も招聘せられたる人、氏も亦全國に足跡を印す。氏は公共精神に富み町正會常議員相談役に擧げられ、嘗ては消防委員、土木委員に推され昭和五年には家屋税調査員に當選し更に第二次調査員に擧げらる。又政治を愛好し中村繼男代議士の股肱たり。こう子夫人との間に長男壽一氏あり趣味として俳句をよくし寫眞旅行を好む。句ありて『歌澤の歌の途切れや蟲の聲』。嶺水。

又同町民政派團體公民倶樂部の重鎭として活躍せり。

菅井醫院主　**菅井正脩氏**

（日暮里町谷中本二八番地　電話下谷三七六七番）

大正七年以來既に十三年間日暮里町谷中本に醫院を開き、外科、婦人科に獨特の技術を有して患家の信頼最も厚き刀圭家に菅井正脩氏あり。

氏は宮城縣の人、明治十九年三月二十一日を以て陸前名取郡中田村四郎丸九十三番地に生る。夙に仁術家たらんと志し、大正三年三月東京市本鄉區千駄木町私立日本醫學校を卒業し、同年醫術開業試驗に及第したる俊才たり。同三年十月東京帝國大學醫學部近藤外科に入りて特に外科の蘊奥を究め、更に大正四年二月より同七年三月まで滿三ケ年間、本鄉區日本醫學專門學校附屬病院外科教室にて幾多の患者につき實地研究に沒頭し大に熟達し、同年三月現住所に開業今日に至る。尙同氏は昭和二年十一月鐵道省の囑託醫に推擧せられ、又北豐島郡産婆會顧問に推さる以て氏の外科婦人科に堪能なる を證すべし。同醫院は益々發展し現在帝大出身醫學士三名を傳聘し、外科、婦人科、花柳病科を專門に擔任懇切に診療に應ず。氏は園藝、將棋を好み斯道の雄者たり。

日暮里町の公衆衛生は氏の如き眞の仁術家ありて益々改善せられ町民の保健衛生は氏によりて向上せん。

王子町會議員　**鈴木仙八氏**

（王子町王子九四番地）

現代民衆娯樂の第一、映畫說明界中の權威として城北の天地に鳴り、社會教化のために天才的技倆を發揮し、一面公共人として清新の所論を町會に吐露しつゝある鈴木仙八氏は、明治三十一年を以て王子町豐島築地の草分けを以て知らる鈴木八五郎氏の三男に生る。嚴君は夙に土地發展の爲に盡す事多く公共自治の功勞者たりしなり氏は豐川學校を經て王子尋常高等小學校を出で、獨學研鑽大に勉むる所あり、二十二歳の時早くも活動寫眞の將來社會教育上重要なる地歩に立つべきを看取して其說明者を志願し、淺草遊樂館を初め各館に在つて技を磨き、王子萬歳館の設立せらるゝや氏は迎へられて主任辯士となり、常に民樂の人氣の焦點となり、同館今日の隆盛の基を拓けり。氏は說明壇上必ずや社會教化の眼目に立脚し、社會教育家たるの責務を忘れず、思想の善導、國民精神の振興に邁進して意義ある天職に盡しつゝあり、氏の抱負、氏の信條を知れる民衆は春秋に富むその前途に囑目して已まず、昭和三年三月には王子町會議員に推擧せられしが、同點者あり年少のため遂に漏れ係爭中長山氏の補缺として當選大衆の味方として活躍しつゝあり。

瀧野川町會議員　**須藤新三郎氏**

（瀧野川町瀧野川一九四九番地　電話小石川六九三三番）

町村事業中の大事業たる教育の完備を唯一の眼目とし、其多年の

コ-37777
二

經驗と新しき研究とを以て教育第一主義に立脚して、滝野川町政に參與しつゝある須藤新三郎氏は、東京府の人、明治十三年十月廿五日を以て生る。氏は夙に育英家たらんと志し、久しく府下の教育界に在つて令名高き人格者たりき、曩に氏が教壇を去らんとするや、子弟は宛も眞の父母と別るゝが如く追慕して已まず、十數年前氏の訓董を受けたる子女の今尚ほ氏の德を仰いで訪ひ慕ふと謂ふ。醵然教鞭を捨てたる氏は『子寶倶樂部』の名の下に運動靴の製造を創め、兒童の體育保健に一新紀元を劃すに至る。爾來氏の體驗と造詣とにより幾多の新工夫新意匠を加へて獨特の運動靴たらしめしより、商盛日に月に隆昌に赴き、氏は同業組合よりも發明新智の士として組合長に推擧せらるゝこと既に三期に亘る。以て其の斯界の偉材たるを窺ふ可し。昭和四年五月には滝野川濟美會並に土地有力者の推薦により町議に當選、學務委員の要職を兼ね社會事業調査員をも勤め、同議員中の人格議見の人として推重せらる。尚氏はお伽諸演の大家として、諸方の招聘に應じて自ら私費を投じ全國足跡の至らざる所なしと。町内會濟美會に前會長、現理事として貢献する所多し。

赤塚村長　鈴木義顯氏

（赤塚村下赤塚二二九七番地）

北豐島西部の重鎭として地方自治の元老たる鈴木由太郎氏は、明治二十一年赤塚村役場に入りて村政に携はり、同二十五年には收入役の要職に擧げられ、在職二期に及び同三十二年には輿望を擔ふて村長に當選し在職二期に亘り更に郡會議員に擧げられて郡治に盡すこと多年、此の間村議學務委員を兼ねて小學校の新築、村役場の移轉、産業交通の改善發達に努力し、功績頗る多く、官は日露戰役後勳八等青色桐葉章を授けて其功を賞せる等眞に畢生の心血を赤塚村の發展向上に注げり。現村長たる鈴木義顯氏は實に此の公共の權化とも言ふべき由太郎氏の嫡男たり。同家は土地の素封舊家にして農を業とし、氏は中等の學を卒へ家業に精勵の傍ら多年青年團長として其の指導啓發の任に當り、昨年の春前村長の長逝するや氏は衆望を負ふて後任村長に擧げられ、豐島病院組合會議員、學務委員等の重職を兼ねるの外、村消防第三部長の職にも在りて嚴君に讓らざる努力を村治に致し命名嘖々たり。

昭和六年三月十日　印刷
昭和六年三月十五日　發行

北豐島總覽（定價）
上製　金拾圓
並製　金八圓

著作權發行兼印刷人　北村龍
印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所　東京府瀧野川町上中里四〇六番地
大正毎日新聞社内
北豐島總覽社
電話王子八〇一番
振替東京六一六九七番

昭和五年度創刊版　不許複製